松島町文化財調査報告書第１集

西の浜貝塚

2008年（平成20年）3月

松島町教育委員会

序　　文

本遺物は昭和３７年５月の「新産業都市建設促進法」公布により新産都市に仙台湾臨海地域が指定されるに伴い、西の浜貝塚の一帯も宅地ブームで分割売買され住宅の建設が始まったことから宮城県の「遺跡緊急調査対策委員会」でその変貌が問題となりました。

本書は宅地造成工事により破壊される遺跡の記録保存を図るための調査が文化庁の指示により昭和４１年７月宮城県教育委員会によって実施された発掘調査の調査報告書であります。

これらの調査された遺物や資料が未処理のままであったものを当時発掘をおこなった後藤勝彦氏に平成２年より時間をかけて遺物の修復や資料の整理を依頼し調査報告書として取りまとめたものとなっております。

また、宮城県及び近隣の二市三町と共同となる世界遺産登録へ向けた動きの中で、西の浜貝塚はその構成資産の中核となるものであり、本町ではこの機会を契機に歴史的文化財の保存・活用の取り組みへの機運が高まりつつあります。

本書が広く町民や県民の皆様、また各地の研究者の方々に活用され、地域の歴史資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、遺跡の保存にご理解、ご支援いただいた方々と発掘調査に携わった関係機関の皆様に対し厚く御礼申し上げます。

平成２０年３月

松島町教育委員会

教育長　米川　稔

目　　次

1 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

2 調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

3 貝塚の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

4 調査区の堆積について・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
（1）Aトレンチ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
（2）Bトレンチ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
（3）C・Dトレンチ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

5 出土遺物について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
（1）土 製 品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
（2）石 製 品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79
（3）骨角製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
（4）貝 製 品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
（5）自然遺物について・・・・・・・・・・・・・・・・ 98

6 出土遺物の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 103
（1）前期初頭の土器群について・・・・・・・・・・・ 103
（2）縄文中期の土器群について・・・・・・・・・・・ 105
（3）大木10式以降の土器群・・・・・・・・・・・・ 108
（4）土製品について・・・・・・・・・・・・・・・・ 110
（5）石製品について・・・・・・・・・・・・・・・・ 110
（6）骨角製品について・・・・・・・・・・・・・・・ 110
（7）貝製品について・・・・・・・・・・・・・・・・ 111
（8）自然遺物について・・・・・・・・・・・・・・・ 111

7 ま と め・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 113

8 終わりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 114

9 観 察 表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 116

10 写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 148

宮城県松島町西の浜貝塚調査報告(昭和41年度)

＝陸前地方縄文文化の編年学的研究＝

後　藤　勝　彦

1 はじめに

昭和３７年５月１０日法律第１１７号によって、「新産業都市建設促進法（以下新産都市という。）」が制定され、仙台湾地区が指定された。それに伴って、開発計画に対処するため、計画予定地内の遺跡の保存のために、県が遺跡緊急調査対策委員会を組織した。その委員の一人として参画する。指定地区の遺跡の保存状態が報告され、開発により遺跡の一部が、破壊の恐れのある遺跡として、松島町西の浜貝塚と亘理町三十三間堂遺跡の２箇所が取り上げられ、昭和４１年度の緊急調査として実施されることになった。

貝塚の現状は、昭和３８・３９年の宅地開発、建築ブームに乗って、貝塚の台地上が分割され、宅地として売買されて、舌状台地の先端部には住宅が建築されて、大きく変貌してしまった。その後、土地所有者の茂泉清一氏から、土砂流失防止のための土留め工事の実施と会社の保養所建設の動きを知り、また、桔梗茂子氏から小中学生の盗掘により、崖の崩れの処置をしたいという申し出もあった。こういう意味で緊急調査として、遺跡の現状を記録するための調査が、加藤孝・後藤に委託された。

塩釜市史編纂事業にからんで、昭和２６年から松島湾内遺跡の調査が開始された。塩釜市一本松貝塚・同横穴、桂島貝塚、表杉ノ入貝塚・埼山囲洞窟、鳴瀬町宮戸台囲貝塚が調査される。特に、昭和３０年から宮戸島遺跡調査会と発展して、継続的に宮戸島の遺跡調査が、約１０年間実施される。

当時、陸前地方の後期縄文土器の編年が空白で、関東の後期縄文土器の編年形式を基本に、土器編年を考えていた時代である。宮戸台囲貝塚の出土遺物が、層位的に分類され、しかも、それぞれ関東の後期縄文土器形式に比定され、併行関係にあることが明らかにされ、当貝塚の出土土器を基に、宮戸Ⅰ（ａ・ｂ），宮戸Ⅱ（ａ・ｂ）、宮戸Ⅲ（ａ・ｂ）の編年学的形式序列を明らかにした。このように宮戸編年の研究が進行するのである。そして、宮戸編年の検討のために新に選ばれたのが、松島町西の浜貝塚である。

当貝塚は、昭和３３年１１月に試掘調査が実施されて、昭和３４・３５年の両年にわたり調査が開始される。昭和３４年はＡ区、Ｎ区、Ｒ区の３箇所、昭和３５年にはＳ区が調査されて、台地東斜面、南西斜面及び南東部の平坦部が調査され、その結果、縄文時代後期中葉から晩期中葉の遺物を多数採集した(加藤 1959･1960)。 特記すべきは、台地東側の南東部から東北地方最初の奈良・平安期の製塩遺跡が発見されたことである(加藤 1983)。また、昭和４１年７月から８月の初めにかけて、新産都市調査の前に宮城教育大学を中心に調査がある。調査区は東斜面のＮ区近くで、半分以上がＮ区とダブって調査がなされたようである。小破片の土器が多数である。しかし、特に、棒状の刺突具が多数採集されている(鶴丸 1967)。

新産都市調査以前の西の浜貝塚の成果については、平成元年３月の『松島町史資料編Ⅰ考古資料』に記載してある(松島 1989)。残念なことは、Ｒトレンチの遺物に、一番整理の基本である出土地点の記名のない遺物が多数存在したために、立派な土器群が存在しても出土層位が不明なため、層位的整理が出来なかった。したがって、編纂者として悩んだ末に、Ｒ・Ｎ・Ｓトレンチについて、編纂時の明確な編年型式で遺物を羅列しただけに止まったことである。

宮城教育大学に保管してある遺物について、平教授も亡くなり、大塚学長の任期も終わる

ので、大学で調査した遺物以外は、該当する市町村に返還して欲しいとの指示があり、鳴瀬・松島・七ヶ浜・塩釜にそれぞれ展示活用を要望して返還された。この時に西の浜貝塚の遺物が返還された。その後、昭和３４年調査のＡ地区の遺物が、貝塚の管理棟から松島一小の整理室に運び込まれ。その頃、宮城歴史教育研究会が、会長大塚先生の米寿記念論文集の刊行を企画した。著者は時間の関係や仕事量などもあって、悩んだすえ学長に関係深い昭和３４年のＡ地区の製塩土器を整理して、論文集にと考え、原稿締切を延長願って、論文集にまに合せた。この整理の結果、Ａ地区の製塩土器には、縄文晩期大洞ＣＩ期のものと、奈良から平安時代の二時期の製塩土器の存在が確認された。また、奈良・平安時代の製塩遺構（製塩炉）が発見されており、東北地方最初の発見でもあった。残念なことに、製塩土器の発展が尖底から始まり、小形平底から大形の平底、特に、厚手土器でバケツ状の器形へという発展論理に事実誤認があったことも明らかになった。しかも、今まで不明であった古墳時代の遺物が明らかとなったことである(鬮藤彫 2001)。

西の浜貝塚は、縄文前期初頭から中期、後期、晩期、そして、弥生、古墳、奈良平安の古代、中世まで長期にわたり、生活の拠点として使用されたことが立証され、当貝塚の重要性が再確認されたのである。

このように、精力的に松島湾貝塚の調査研究に従事し、しかも、西の浜貝塚の過去の調査に精通していたことが、加藤・後藤への調査委託になったと考えている。しかも、著者は、この調査は複数年の調査と考えていたが、体調を崩し、２年目は加藤中心の調査となり、相当量の遺物を抱え込むのである。それに、南境貝塚の緊急調査もあり、３年に７回の調査があって、大量の遺物で泥沼の生活となる。教員との二足草鞋で整理が遅々として進展しなかった。

その後、身分上の変化があり、文化財保護課、東北歴史資料館（多賀城跡調査研究所兼任）、学校管理者として、また、行政担当、最後にまた、学校管理者と流転する。この間は遺物の整理は不可能であった。やっと、定年退職によって、それも松島町の好意によって遺物の保管、整理場所の確保があり、愛子に保管していた遺物数千箱を松島に移動して、やっと本格的な整理が始まるのは平成２年からである。以来、昭和４１年の調査の西の浜貝塚の整理が完了し、報告書作成になったのである。

この遺物整理の過程でも、遺物に出土記名のない土器が、Ｂトレンチに多い。調査の立派な壁面図があり、層位が記入されているが、遺物が見当らない層も存在し、どこかに遺物が残っているのではと考えられるが、筆者の手元にはない。

2　調査の経過　（図１）

どういう経過であったか今は明らかでないが、昭和４１年８月４日から７日まで、宮城教育大学日本史研究会によって、松島町教育委員会の調査として発掘がなされている。指導者加藤孝である。目的は貝塚上が宅地化による貝塚の保護と編年研究である。筆者はこの調査に参加していない。このために、新産都市関係の宮城県の調査は、大学の調査の後になった理由が明らかになった。

調査担当者	日本考古学協会員	宮城学院女子大学助教授	加藤　孝
	同　上	宮城県塩釜女子高等学校教諭	後藤　勝彦
調査補助者	伊具郡大内小学校教諭		斎藤　良治
	東北大学付属小学校教諭		槙　要照
	宮城郡七ケ浜中学校教諭		丹治　英一
	宮城県塩釜女子高等学校		社会部員

以上のような調査体制を編成し、調査期間は昭和４１年８月１２日から８月２６日まで１５日間実施した。

予算は発掘調査費　　県支出金　２９０、０００円

　　測量調査費　　〃　　１００、０００円

調査は調査範囲が広いため、今年度だけでなく、継続調査を念頭において実施した。

初年度は東斜面と併行して幅２ｍ、南北３０ｍのトレンチを設定した。本来は斜面に直行した調査区が、層位を確認するのに有効である。複数年調査を考えた調査であったため、難しい調査区の設定となった。結局、筆者が体調を崩し、昭和４２年に２つの大規模調査を抱えることになったので、２年目は加藤孝氏中心の調査となる。そのために、層位の確認等整理に負担がかかることになる。

南北３０ｍのＡトレンチは、南から２ｍ幅で１～１５に区分し、３グリット単位に調査を実施した。１～３、４～６、７～９、１０～１２、１３～１５である。４～６の５・６は調査期間の関係で、調査を取り止めたグリットである。地表面はやや北から南に傾斜、貝層も同じように南に傾斜していた。しかも、貝層は東側に急傾斜している。後に、１１グリットから東に約６ｍのＢトレンチを設定して、堆積関係を検討。また、同じ位置から、西側に２ｍ幅で、１６ｍのＣトレンチ、４グリットから、同じく１６ｍのＤトレンチを設定し、しかも、Ｃ・Ｄ間を幅５ｍの全面剥離を実施し、焼土、埋葬人骨１体（晩期大洞Ａ式）と堆積貝層の先端部が検出され、Ｄトレンチの近い部分で貝層堆積層が２ｍほど切れることがわかり、貝の廃棄は一様でないことも明らかになる。また、このＣ・Ｄ間には、Ａトレンチでは検出されない、晩期大洞Ａ式の多数の土器、人骨を含めて検出されたことは、新しい貝層の堆積層が存在することを示す。特に、１～４グリットの東西断面図に明らかである。

整理も３グリット単位に進めた。３グリット内でも堆積がグリット毎に複雑である。

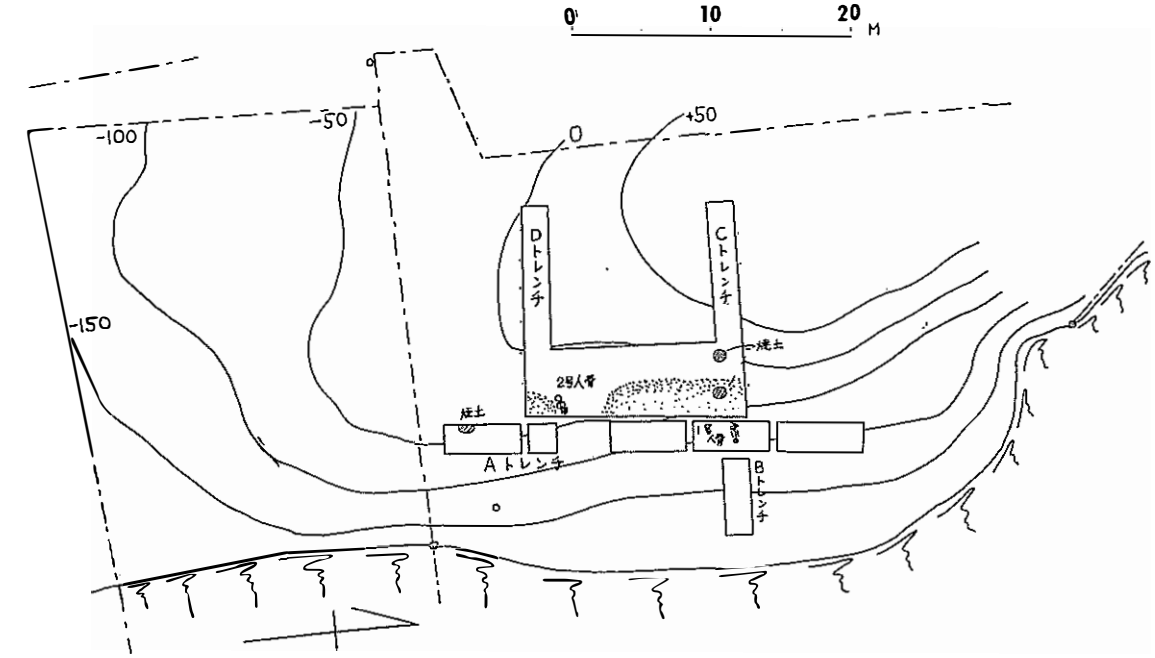


図１　発掘地域の平板実測図

3　貝塚の位置　（図２）

西の浜貝塚は日本三景の松島にあり、松島湾内三大貝塚の一つである。松島町の中心部には東北本線・仙石線の２本の鉄道がほぼ東西に近接して走る。貝塚は東北本線「松島駅」から東に、磯崎地区を通って約２㎞、仙石線「松島海岸駅」から、海岸を通って北東へ約２．５㎞の位置にある。仙石線「高城町駅」から、南海岸沿いに磯崎地区がある。この地区の北側を海岸沿いに、東に延びる標高約１０ｍの丘陵（舘ケ崎丘陵）があって、地区より東に５００ｍ、この丘陵から南に延びる分枝の舌状台地が海岸に迫っている。この一帯が貝塚となっている。

貝塚所在の台地は、西側は急傾斜になっており、南西側から南東部が緩やかな勾配になっている。台地の中心部で標高１１ｍである。貝塚はこの台地の１０ｍ以下に構成され、東と南西斜面に厚く貝層が堆積する。西斜面は急傾斜のため貝堆積なく、その崖下の標高１ｍ程度の山沿いに多少の貝殻と土器片が散布しており、一応環状貝塚ということが考えられる。

貝散布の範囲は東西130m南北200mに及んでいる。

生活拠点は時期によって移動した。東斜面の北から南への移動、東斜面の南東部に再度移動したようである。その後、弥生期から古墳・奈良平安時代には、南東部、南西部の低地が主な生活舞台になったようである。

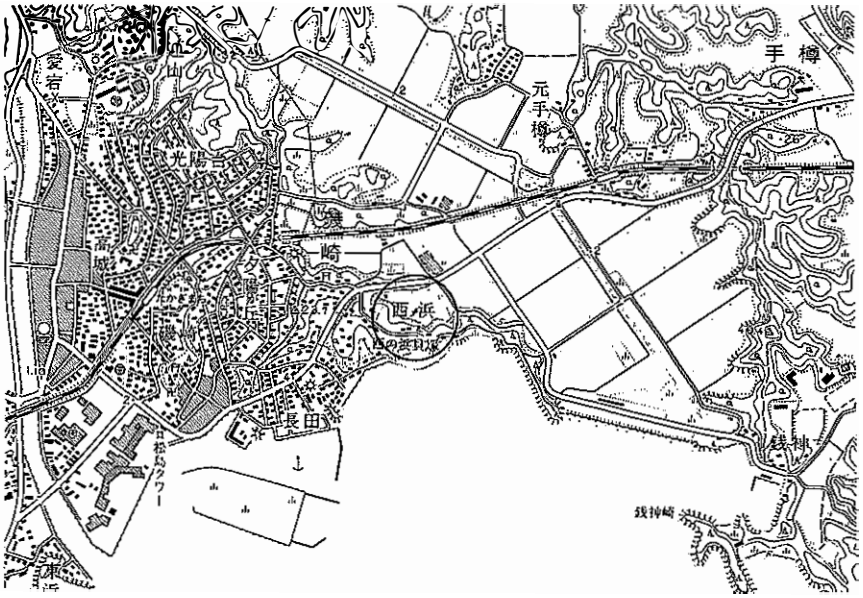


図 2　　貝塚位置図

4　調査区の堆積について

（1）　Ａトレンチ　（図３）

３グリットに区切って５地区に分けて調査し、整理も各３グリット単位に進めた。

１～３区
（第１区）

表土(黒)
混貝
１貝下
２貝
２混貝
土層(黒)

第１区の西壁では、第１貝層は混貝層で貝層はない。第２貝層である。Ａ１の東西断面図北壁には、第１貝層は北壁の西寄りから始まり、途中からである。東壁では、上部貝層（第１貝層）と下部に第２貝層がある。しかし、第２貝層はＡ３で消滅する。特に、Ａ３の東西断面図南壁には、第１貝層、その上部に別な貝層か、壁面東寄りに堆積、その上部にも薄い貝層が堆積する。調査時ではほどんと問題にされなっかた。要するに、更に第１貝層の上部の貝層は調査の対象から外されたといってよい。遺物も新しい土器群の出土がある。トレンチ西側に第１貝層がないため、この地区で層位の誤認がある。

４～６
（第２区）

混土
混貝
貝層

第２区５・６区は調査の関係で調査を実施しなかった。Ａ４区の西壁では、第２貝層が途中で消滅、北側は混貝状態となる。東壁でも同じような状態で、上層の第１貝層、間層を挟んで下部に

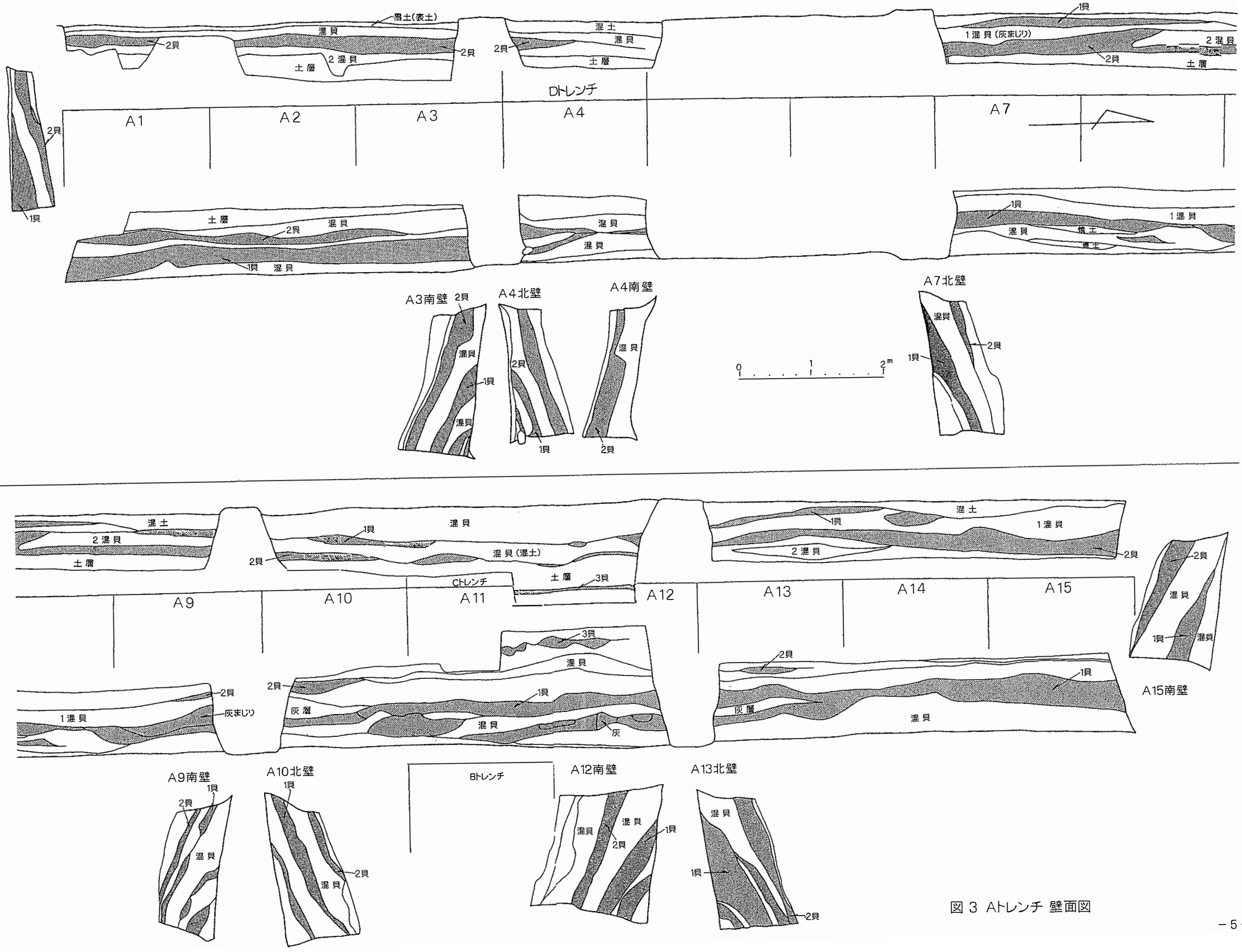

黒土(表土)
混貝
2貝
土層
2混貝
混土
1貝
1混貝(灰まじり)
Dトレンチ
A1
A2
A3
A4
A7
A3南壁
A4北壁
A4南壁
A7北壁
0 1 2m
A9
A10
A11
A12
A13
A14
A15
Cトレンチ
Bトレンチ
3貝
灰層
灰
灰まじり
A9南壁
A10北壁
A12南壁
A13北壁
A15南壁

図 3 Aトレンチ 壁面図

２混貝
土層

第２貝層が出現する。しかし、この貝層も壁途中で消滅し、混貝となる。Ａ４区の東西断面北壁に、東壁に表れない第１貝層とその上部の貝層が、壁面東寄りに出現する。第１区と同じように新しい遺物が出土している。層位の誤認がある。

７～９

（第３区）

混土(黒土)
混貝
１貝層
１貝層下
１混貝
１混貝下
２混土
２貝層上
２貝
２貝下
土層

第３区の西壁には、上部の薄い第１貝層があり、下に灰混じりの混貝層がある。西壁北側で第１貝層の下に混貝層が別に堆積する。第２貝層は北側で、第１貝層下の混貝層によって、分断されて薄く、土層に連なる。

東壁では上層に焼土層が堆積し、混貝層を挟んで短い貝層、焼土層が堆積する。この焼土層の性格を検証できなかった。この焼土層の下に、貝混入の多い第１貝層となる。南側で茶褐色層、北側で灰層混じり混貝層を挟み、下に厚い混貝層が堆積する。この混貝層のＡ９区の寄りに、僅かに第２貝層が顔を出しＡ１０区の第２貝層にあたり、混土貝層につながる。

Ａ７区の北壁東西断面図では、第１貝層は北壁の途中から、あらわれ、東に傾斜する。厚い混貝を挟んで、第２貝層は壁中間で消滅する。Ａ９区の南壁東西断面では、薄い第１・２貝層が、東に傾斜する。その上層に新しい薄い貝層が２枚、壁途中からあらわれ、東に堆積する。新しい土器群の検出がある。

１０～１２

（第４区）

黒土
混貝
貝層上
貝層
混貝(土)
２貝
土層上
３貝
土層

第４区の西壁では、厚い混貝層が堆積し、下に途中で層が途切れる、薄い第１貝層、続いて、混貝層を挿んで薄い第２貝層となる。Ａ１１～１２区を掘り込み、これも薄い第３貝層を検出する、縄文前期の層である。東壁は約７０cmの厚い混貝層となり、この混貝層に挟まれた状態の第１貝層となる。Ａ１１区から第１貝層が灰混じりの貝層の二重となる。Ａ１１区の第２貝層下の混土層から黒土層にかけて、第１号人骨の横臥屈葬の人骨が１体出土した。頭骨上部は失われていたが、縄文中期大木１０式の人骨である。

Ａ１０区の北壁東西断面では、第１貝層が東に傾斜、下層の第２貝層は壁面途中で消滅する。Ａ９南壁と同じく、第１貝層の上層に新しい貝層が東に傾斜し堆積する。Ａ１２区の東西断面でも、第１貝層は壁途中から始まる。第２貝層は東壁で混貝層が貝層として堆積する。

１３～１５

（第５区）

黒土
混貝
貝層
１混貝
２貝上
２貝
２混貝
土層

第５区の西壁では、混貝があって下に薄い第１貝層が途切れながら堆積。１混貝を挟んで、やや厚い第２貝層が堆積、Ａ１３区で薄い土層を挟んで、２混貝層が堆積する。東壁では４０cmを越える灰層を挟んだ、第１貝層が堆積し、下に薄い混貝、Ａ１３区の一部に第２貝層を確認した。特に、Ａ１２～１５区の西壁寄りに土器の堆積が多く、一括土器群の出土が夥しい。Ａ１３区の北壁東西断面では、厚い第１貝層が堆積し、下部に巻貝の多い第２貝層が堆積する。北壁の東寄りに新しい貝層が堆積する。Ａ１５区の南壁東西断面では、上部に第１貝層が壁途中から確認される。第２貝層は東に傾斜し壁端で薄い。

（2） Ｂトレンチ （図４）

東西丘陵斜面の堆積を検討するために、Ａ１１から東に幅２ｍを６ｍに延長し、西からＢⅠ～Ⅲ区を設定して調査を実施した。予想した通り深く、堆積もＡトレンチより複雑で、堆積層も多く、年代の新しい土器群が検出された。調査は斎藤良治氏を中心に進められる。

堆積は地表面も東に傾斜、表土があってＢⅢ区の東端に、第１混土層下に薄い第１貝層が堆積し、貝層を挟んだ約３０㎝程の第２混土層、続いて、砂層の薄い第１土層を挟んで、おなじように、貝層を挟んだ約３０㎝の第３混土層があって、ＢⅡ～Ⅲ区の端までの、薄い第２貝層となる。その下部は、約８０㎝程の砂を含んだ第２土層とＢⅠで黒土の第４混土層があって、名称が付いていないが、約２０㎝程の土混じりの貝層と第３貝層とでも呼ぶか薄い貝層が堆積して、下部の第３土層に続く。貝層は東に傾斜し、ＢⅢ区の東壁では北側に傾斜する。Ａトレンチでの第２貝層・第１貝層は途中消滅し、ＢトレンチではＡトレンチの最上層に、新しい短い貝層が検出された。この貝層はＢトレンチで名称がないが、第３貝層とでも呼ぶべき貝層として、ＢⅠ～Ⅱ区に連なって消滅する。名称がないため遺物の取り上げがない。一部の第３土層の遺物を除いて、大部分は第４混土層より上層の遺物である。特に、注目されたのは、出土地区層位不明の土器の多いことである。

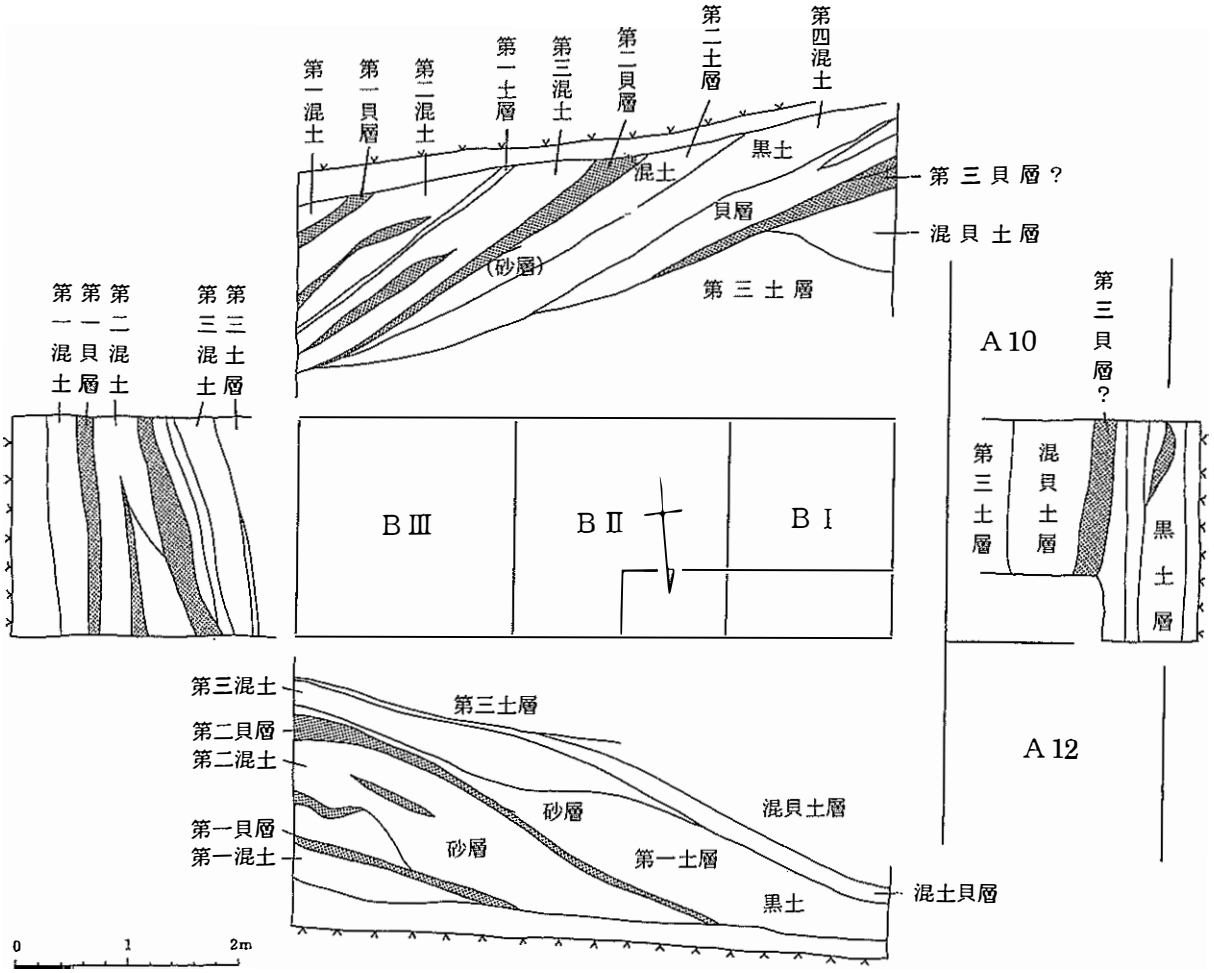


図 4 Ｂトレンチ壁面図

（3） Ｃ・Ｄトレンチ　（図１参照）

Ａトレンチの西側の丘陵上面の様相を検討するために、Ａ１１区から西に２ｍ幅の１６ｍ(8区)を延長して、Ｃトレンチとした。続いて、Ａ４から同じように、Ｃトレンチと並行させて、１６ｍのＤトレンチを設定して調査を拡大した。

住居跡や住居面の確認を目的としたものであったが、Ｃトレンチで焼土跡が２箇所検出されただけで、Ａトレンチから西方は、１５㎝程で凝灰岩地盤に達し、成果がなかった。昭和４２年の第２次調査でも、同じような状態であって、石組炉を発見したが、住居プランは不明である。

最終にはＣ・ＤトレンチのＡトレンチ寄りを、幅約５ｍを全面剥離して連絡した。その結果、貝塚の西側周辺を検出することが出来た。また、Ｄトレンチ寄りで、貝層が一部途切れこの部分から、頭位西南西の縄文晩期末の仰臥屈葬人骨一体が出土した。腕を胸で組み、その部分から装身具の小玉、２個が出土している。

この地域の２号人骨周辺から、Ｃ区拡張に、縄文晩期の大洞Ａ・Ｃ・Ｂ式の土器群が多数出土している。

5　出土遺物について

調査概報(後藤勝彦 1967)にも示したが、土製品、石製品、骨角製品、貝製品等多数出土したが、特に、多いのは、土製品の縄文土器である。各文化期の編年学的研究を調査の柱とした。Ａトレンチでは、大きく第１貝層（上部貝層）、第２貝層（下部貝層）と一部であるがＡ１１～１２区で、下部貝層の下に薄い第３貝層を検出した。それぞれ、時期の差異を認めることが出来た。

調査の経過でも述べたが、Ａトレンチの設定の計画は、複数年を考えた調査区であった。２ｍ幅と斜面並行の調査区の難しい調査は、その欠陥が調査段階から表れ、貝層の上下関係の確認不備と貝の破棄が一様でないことの認識の欠如があり、東西断面図の壁途中から表れた、第１貝層上の薄い、短い貝層等を無視し遺物の収納がないのである。整理の段階で苦慮した。第２貝層周辺の大量の一括遺物の堆積にまどわされ、振り回されていたことになる。調査体制の不備も一つの要因である。

(1)土製品

①　縄文土器

［1］　Ａ１１区の第３貝層出土の土器は、禾本科植物を胎土に混入した繊維土器で、縄文前期の土器群である。この一群は、調査区内では、Ａ１１区の第３貝層が主体の層である。しかし、調査区全域から出土した量も多い。（図５～図８）

縄文施文の特徴によって幾つかに分類される。

１　ＲＬの斜行縄文で、段落にループの末端が施文される一群である。

口縁部がやや外反する器形で口唇土面が整形される。裏面は擦痕程度である。１は１１区第３貝層出土で、口唇部土面に連続刺突がなされ、凹凸がある。縄文施文段落が７段確認され本貝塚としては、大形破片である。２は口端部に連続刻目がなされたものである。（図５）

２　斜行縄文施文で段落に結束痕のある一群。

口縁部やや外反、口唇土面が整形され、１類と同じく土面に連続刺突がなされ、凹凸がある。口端に刻目状のものもある。１７・１９の様に複節縄文施文の資料も存在する。裏面は無文か擦痕程度である。２５の様に付加条施文のものもある。（図６）

３　羽状縄文施文で結束痕（非結束）のある一群。
口縁部やや外反する器形で、口唇部土面整形され、土面に連続刺突、口端に刻目状の刺突の施文されたものがある。裏面は無文・擦痕程度である。　（図７）

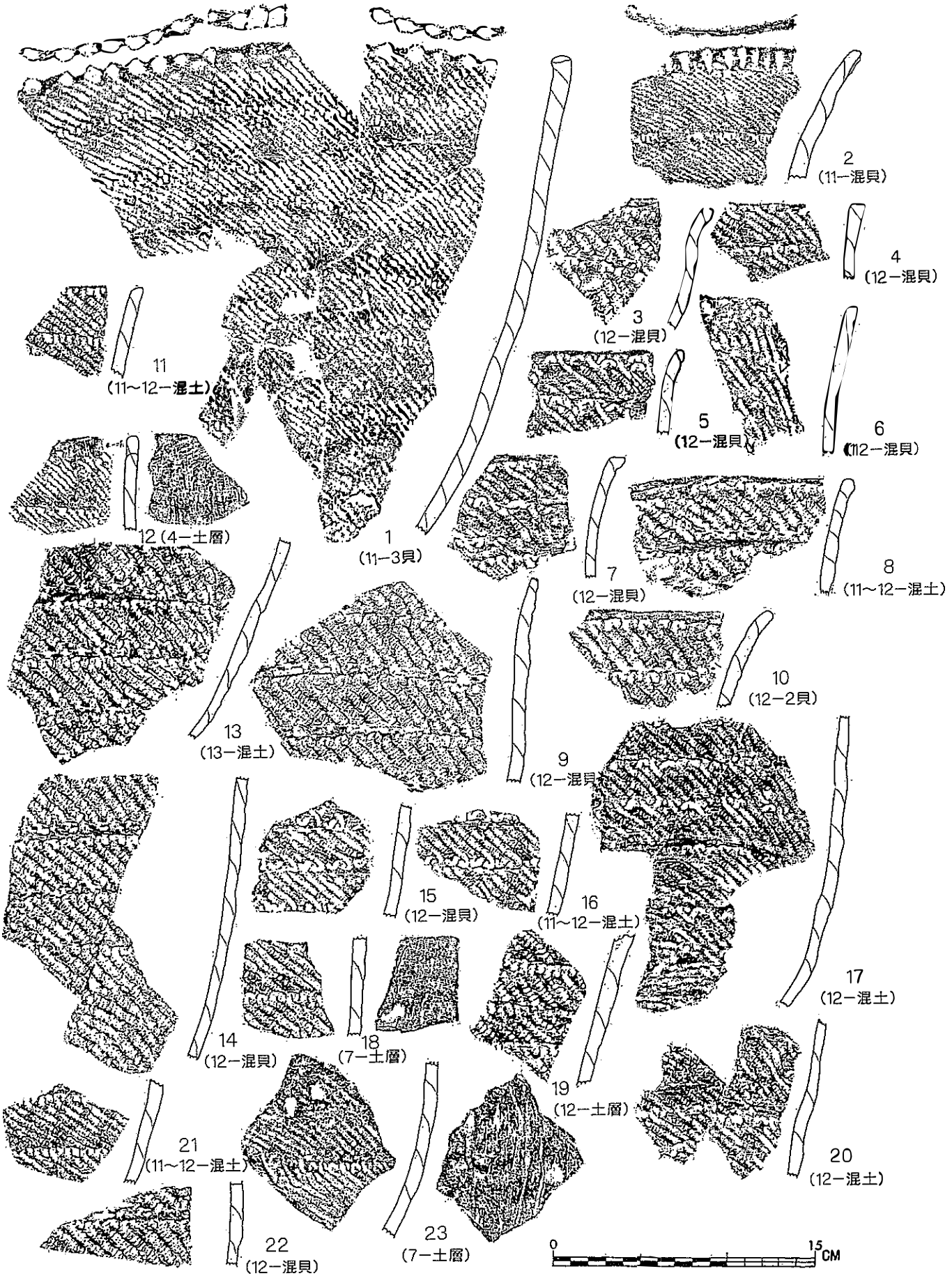
４　綾絡文・撚糸圧痕施文の一群。
出土量は多くはない。ヨコ・ナナメ方向に施文されたものがある。２５はヨコ方向に撚糸圧痕の施文されたものである。　（図７下段）

５　ループ文末端施文の一群。
口縁部外反する器形が多い。ループ末端施文も施文工具が幾つか存在する。ある幅の広い施文と、狭い施文である。口端の整形されるもの、土面に刺突のされたものがある。裏面は無文。擦痕・指頭整形痕程度である。　（図８）

６　組紐文施文の一群。
口縁やや外反、口端・土面に刻目状刺突のなされたもの、土面整形のものがある。裏面は無文程度である。　（図８中段）

７　撚糸の網目状施文の一群。
資料は僅かである。裏面は他類と同じく、無文・擦痕程度である。しかし、この一群は時期がやや下るものとも考えられる。　（図８下段）
繊維土器は各層から出土しているが、特に、土層出土が多い。

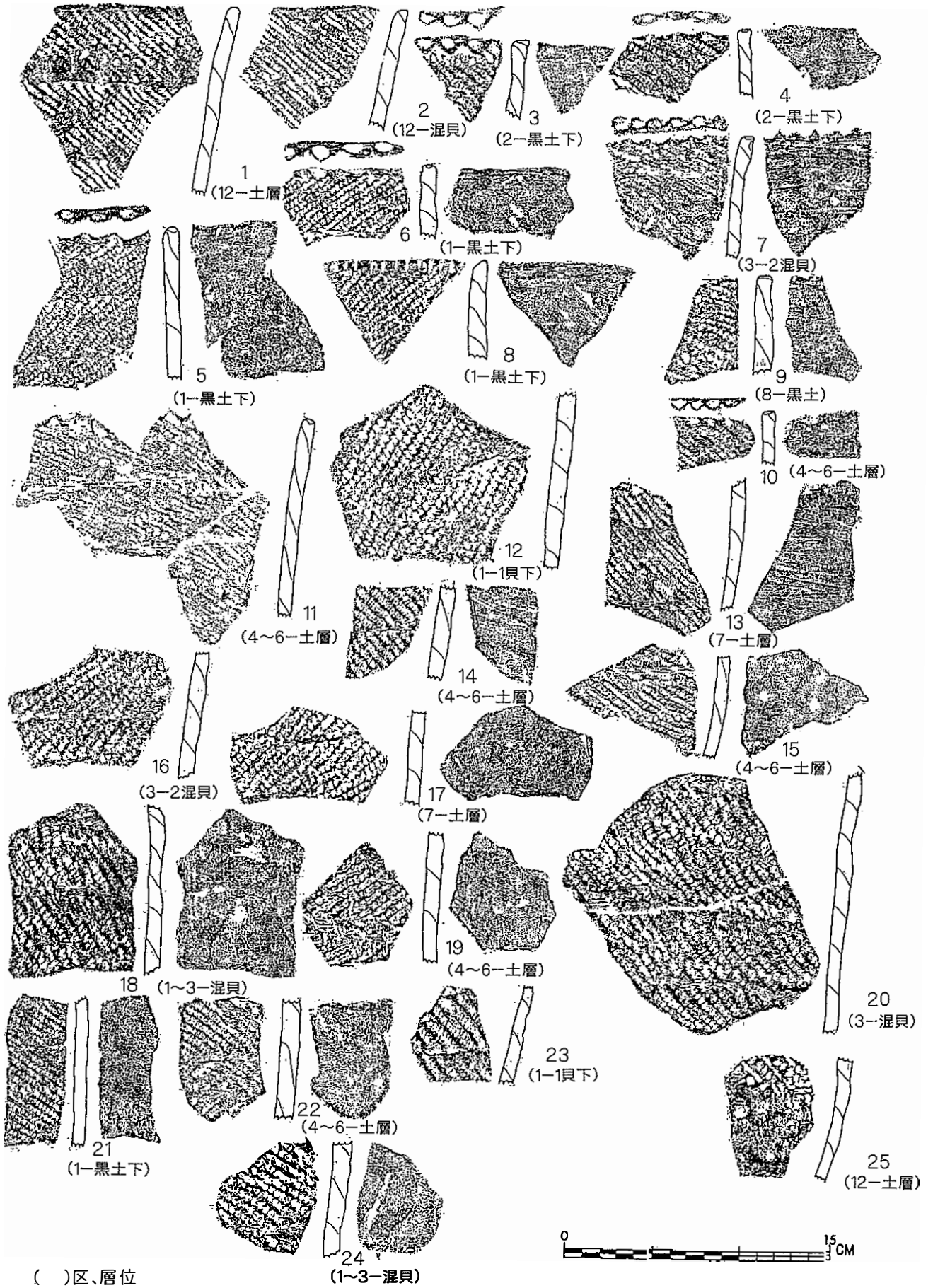
［２］　Ａトレンチは３グリット単位に調査を実施した。グリット毎に遺物の出土状況が異なり、層の堆積も変化があり、しかも、斜面に並行した調査区の設定といった困難な方法のため、新しい層位や消滅した層位の見落とし等があり、３グリット単位の１～５区に分けて、出土土器を考える。　非常に困難な調査方法のため、遺物整理段階から困難を極めた。そのため、問題があるがあえて、各区毎の［土器出土模試図］を作成、また、明らかな層位誤認については、訂正を実施したところがある。


1
(11−3貝)
2
(11−混貝)
3
(12−混貝)
4
(12−混貝)
5
(12−混貝)
6
(12−混貝)
7
(12−混貝)
8
(11〜12−混土)
9
(12−混貝)
10
(12−2貝)
11
(11〜12−混土)
12 (4−土層)
13
(13−混土)
14
(12−混貝)
15
(12−混貝)
16
(11〜12−混土)
17
(12−混土)
18
(7−土層)
19
(12−土層)
20
(12−混土)
21
(11〜12−混土)
22
(12−混貝)
23
(7−土層)
0
15CM

( )区、層位

斜行

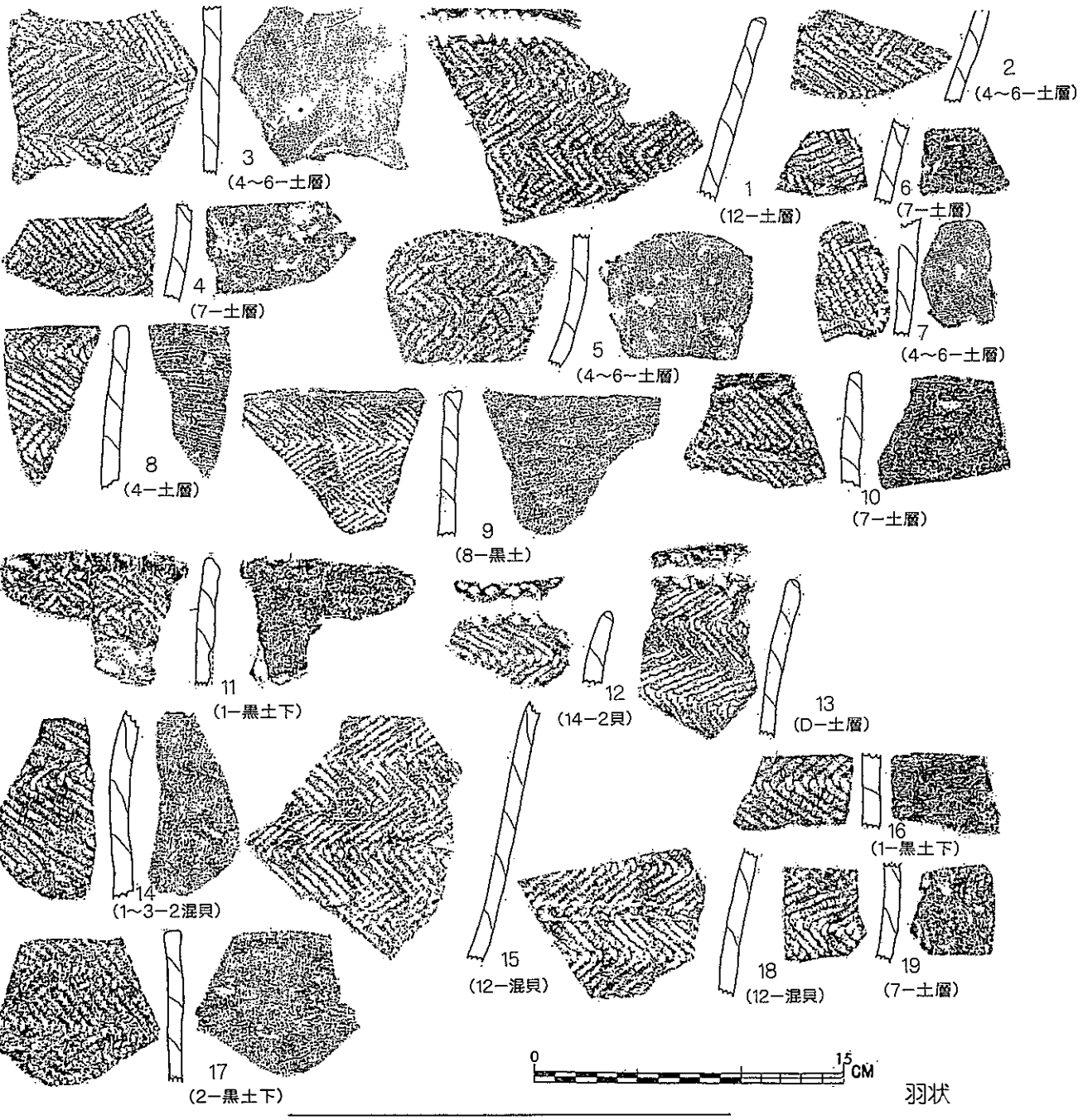
図 5


1
(12−土層)
2
(12−混貝)
3
(2−黒土下)
4
(2−黒土下)
5
(1−黒土下)
6
(1−黒土下)
7
(3−2混貝)
8
(1−黒土下)
9
(8−黒土)
10
(4〜6−土層)
11
(4〜6−土層)
12
(1−1貝下)
13
(7−土層)
14
(4〜6−土層)
15
(4〜6−土層)
16
(3−2混貝)
17
(7−土層)
18
(1〜3−混貝)
19
(4〜6−土層)
20
(3−混貝)
21
(1−黒土下)
22
(4〜6−土層)
23
(1−1貝下)
24
(1〜3−混貝)
25
(12−土層)
0
15
CM

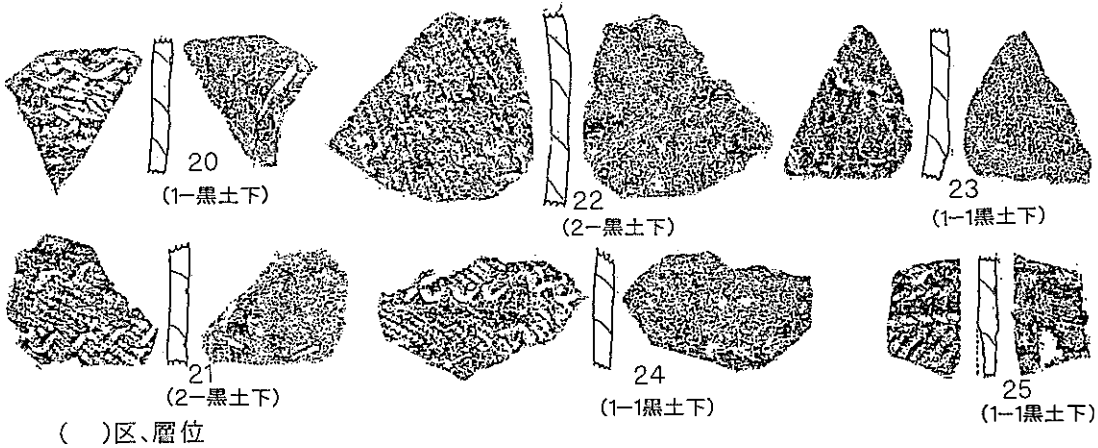
( )区、層位

斜行

図 6



羽状



(　)区、層位

綾絡
撚系

図 7

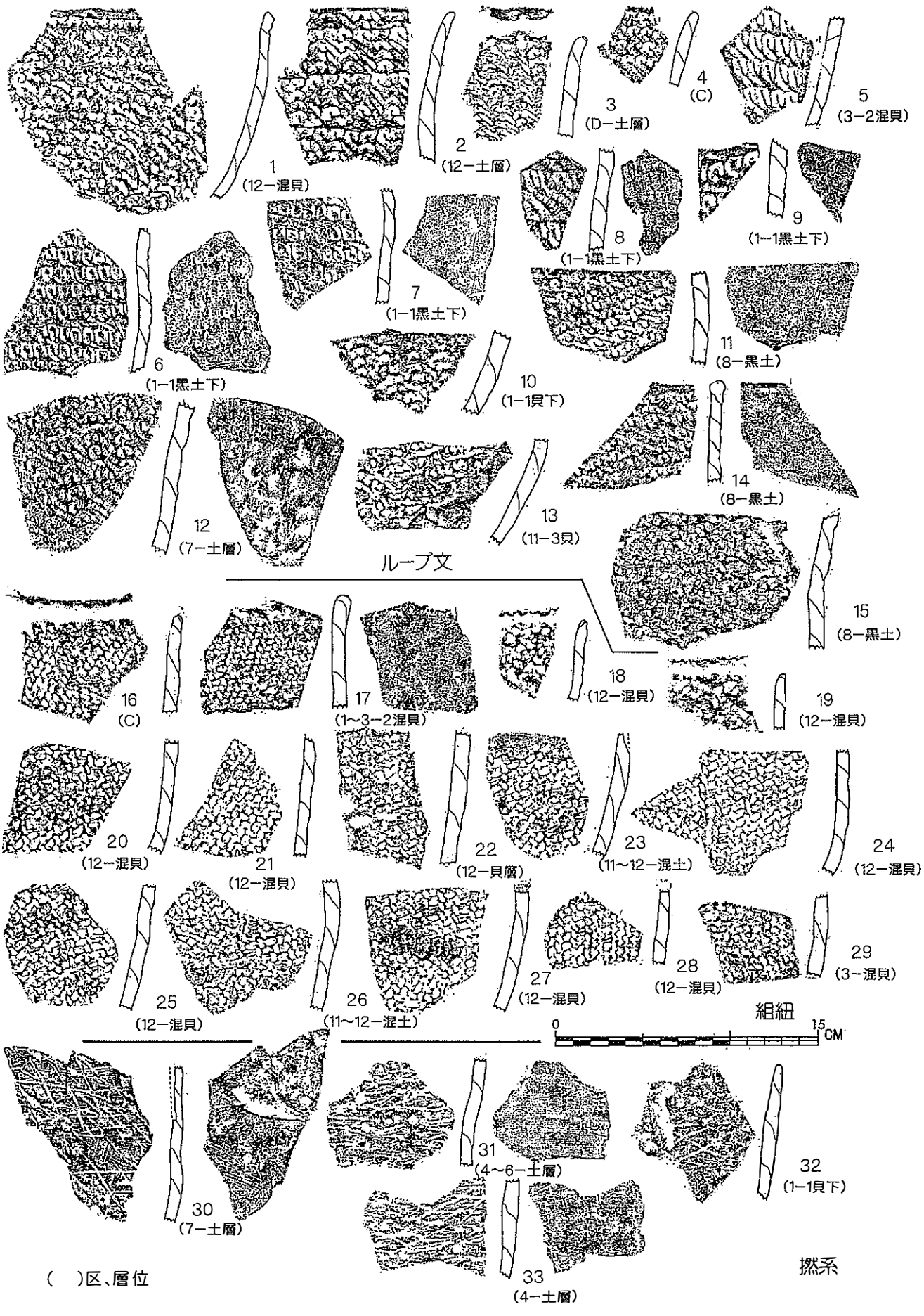

1 (12−混貝)
2 (12−土層)
3 (D−土層)
4 (C)
5 (3−2混貝)
6 (1−1黒土下)
7 (1−1黒土下)
8 (1−1黒土下)
9 (1−1黒土下)
10 (1−1貝下)
11 (8−黒土)
12 (7−土層)
13 (11−3貝)
14 (8−黒土)
ループ文
15 (8−黒土)
16 (C)
17 (1〜3−2混貝)
18 (12−混貝)
19 (12−混貝)
20 (12−混貝)
21 (12−混貝)
22 (12−貝層)
23 (11〜12−混土)
24 (12−混貝)
25 (12−混貝)
26 (11〜12−混土)
27 (12−混貝)
28 (12−混貝)
29 (3−混貝)
組紐
0
15CM
30 (7−土層)
31 (4〜6−土層)
32 (1−1貝下)
33 (4−土層)
( )区、層位
撚系

図 8

第１区（１～３）　（図９(模式図)・１０～１４）

第１区は出土土器が多くない。ただ、西の浜貝塚調査としては、新しい遺物の出土に驚いた区域である。１～４区の最上層の黒土(表土)から、図１１の１～４のように、口縁部周辺に沈線文で、しかも工字文の施文のもの、また、外反した器形で口縁下部に沈線、無文帯のもの、両方とも裏面口端部に沈線をめぐらした土器群が出土していることである。晩期大洞Ａ式に相当する。このことは、Ａトレンチの西側に設定したＣ・Ｄトレンチと、その拡張部の調査を実施して、Ｄ１区北側に仰臥屈葬人骨の検出があり、晩期大洞Ａ式期のもので、Ｄ１からＣの拡張部にかけて晩期大洞Ａ式土器の出土多いことから、想定していたことである。

この第１区から第２区は、「4 調査区の堆積」で説明した通り、トレンチ西壁には上部貝層の第１貝層はなく、混貝から下部貝層の第２貝層からである。しかも、東壁の第１貝層は１区の北壁・南壁の東西壁面図にも明かなように、北・南壁共に、第１貝層は壁面東寄りから出現する。そのために、層位の誤認がある。１貝層下・２貝の記名はそれを示している。地形を観察すると、南側に全体的に傾斜し、トレンチに西側の削平が考えられる。図１０の復元図１～３は、１貝・２貝でなく、少なくとも第２貝層より上部の混貝層となる。同じく、図１１・１２の拓本図でも同じことが言えるのである。

したがって、図９に示した「第１区土器出土模式図」のように、混貝層には各段階の土器が混在することになる。左上段は南境貝塚調査でも問題になった、北東北の十腰内式系の影響のある土器群、未名命の型式、かつて後藤が「南境式」と呼んだもので、関東での「堀ノ内２式」に並行するもの、上段右から２番目は、宮戸Ⅱ式と沈線系の宮戸Ｉｂ式より新しいもの、上段右側は下段真ん中と同じで、２刻目連鎖文で隆線文の大木１０式に近いもので区分される。下段左は宮戸Ｉｂ式併行のもので各種の土器群が堆積する。

第２貝層から２混貝層は、中期大木１０式の土器群である。

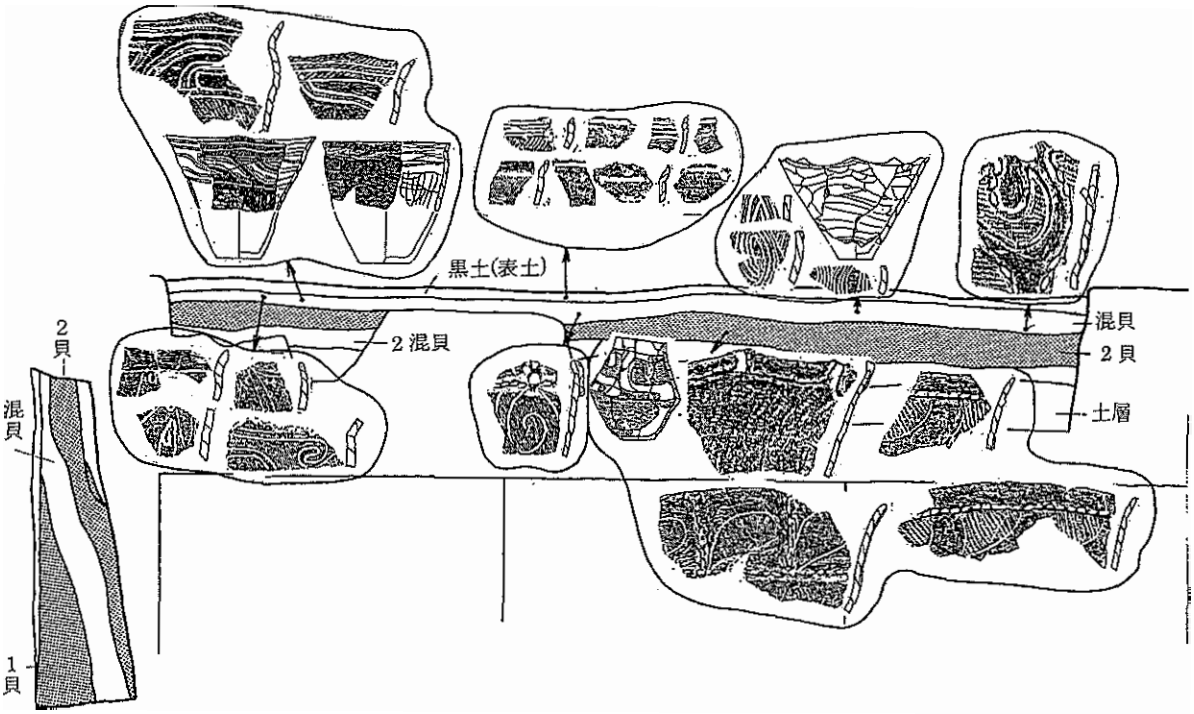
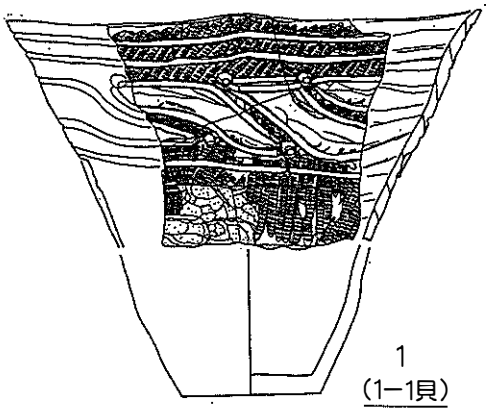
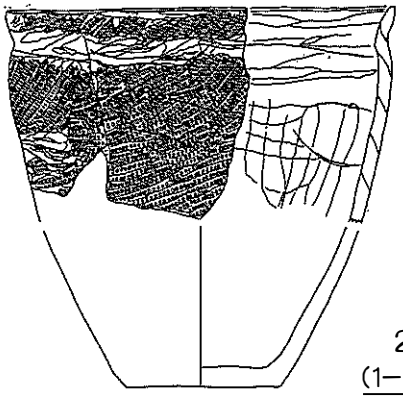


図 9　第１区土器出土模式図

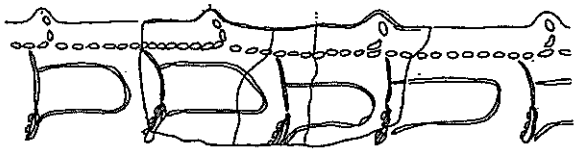
( )区、層位、( )修正

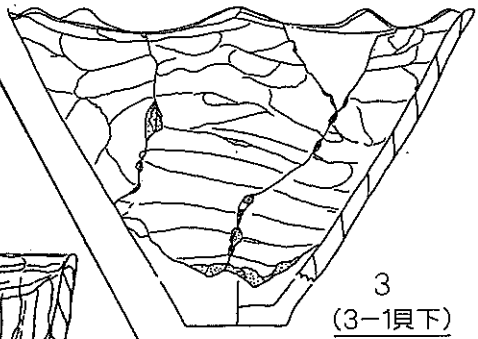


1
(1−1貝)

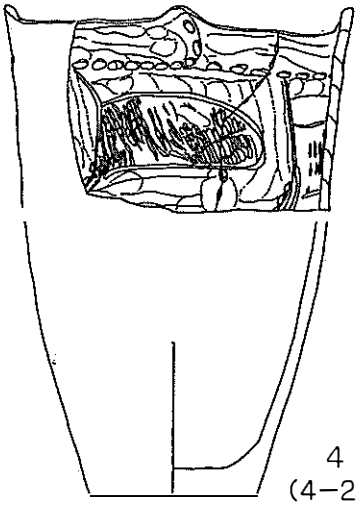


2
(1−2貝)

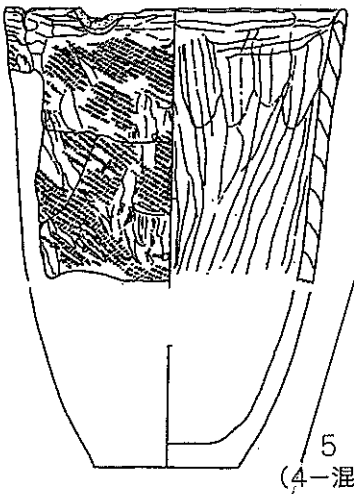




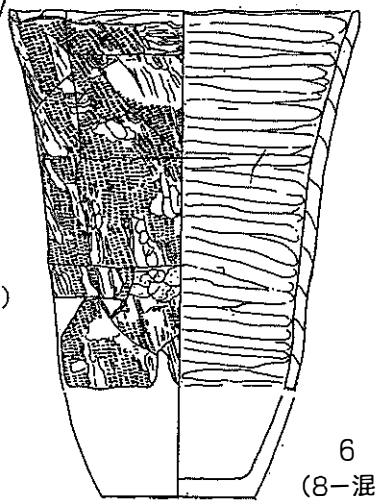
3
(3−1貝下)



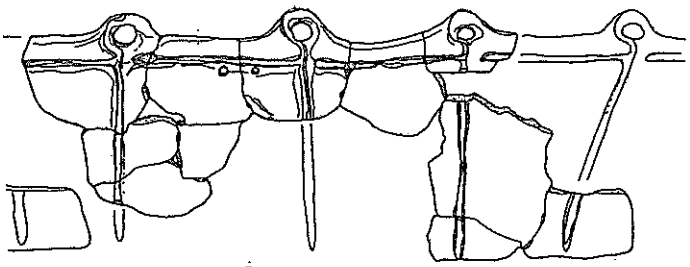
4
(4−2貝)

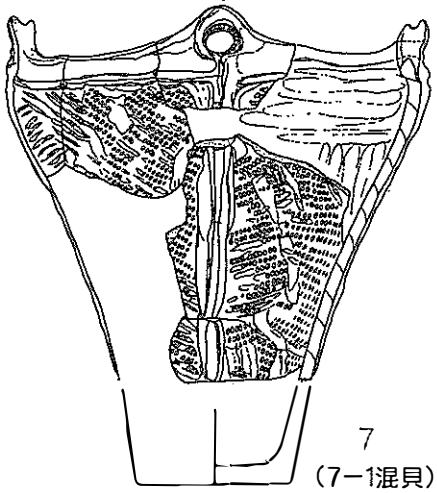


5
(4−混貝)

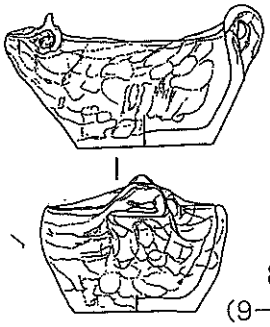


6
(8−混貝)

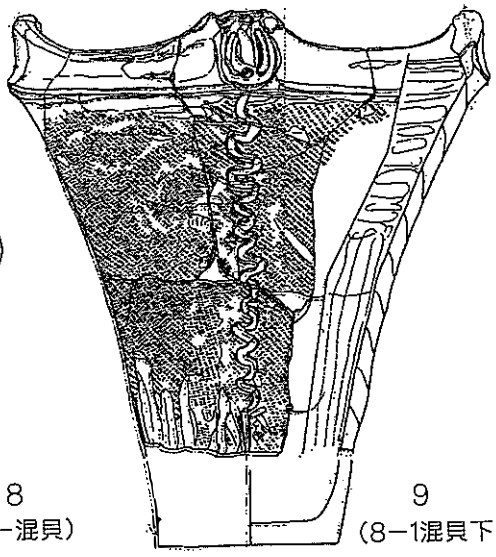




7
(7−1混貝)



8
(9−混貝)



9
(8−1混貝下)

図 10

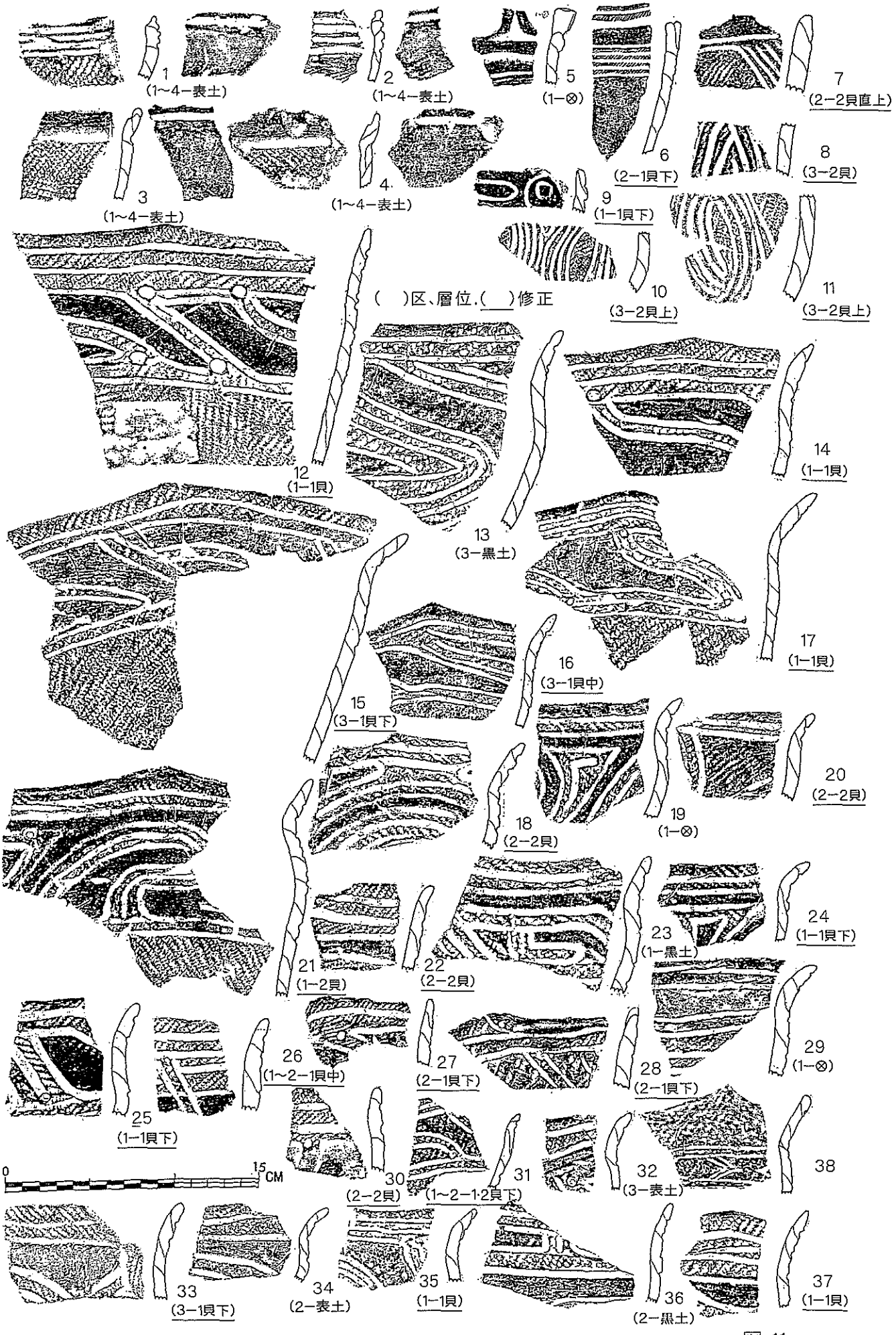
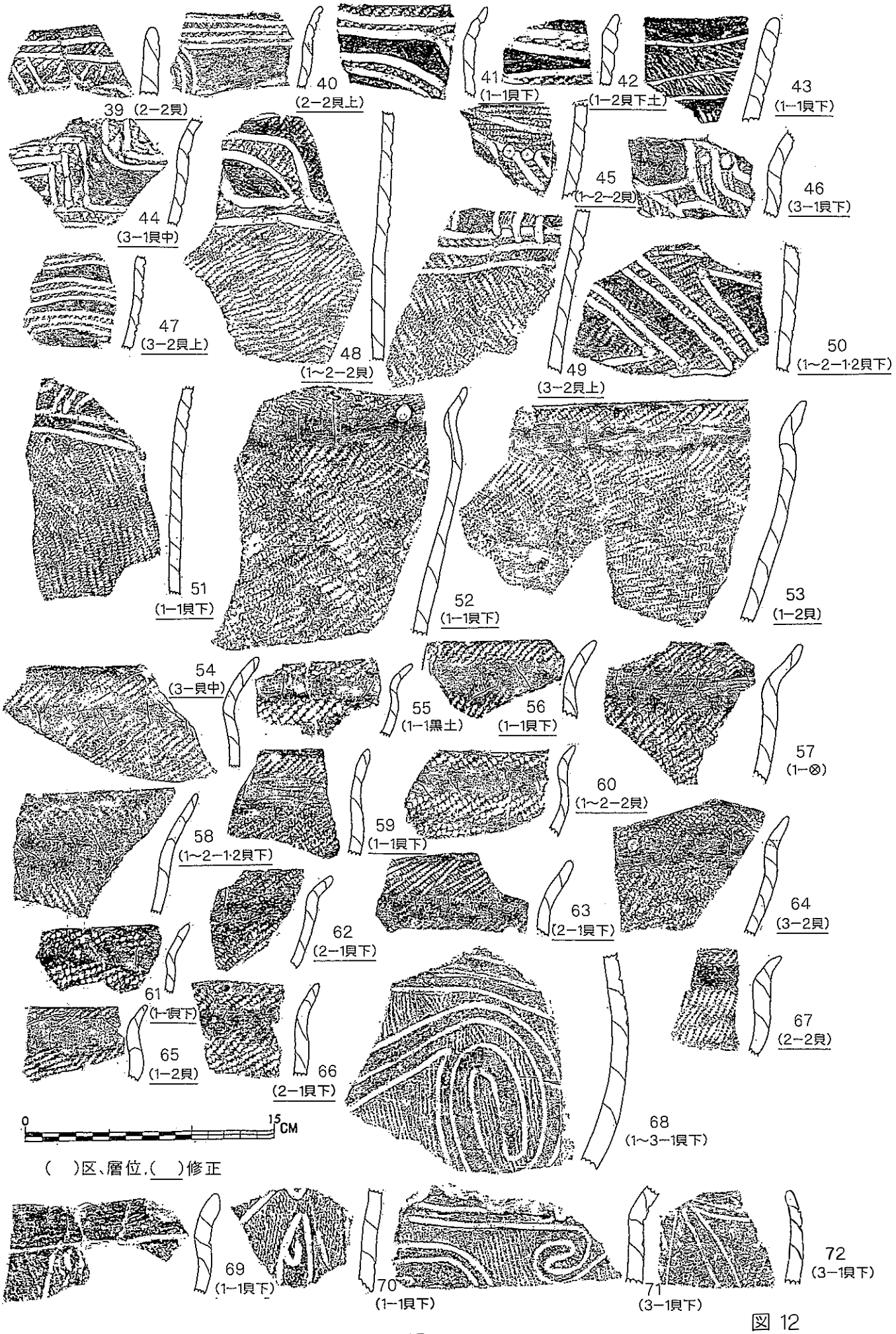
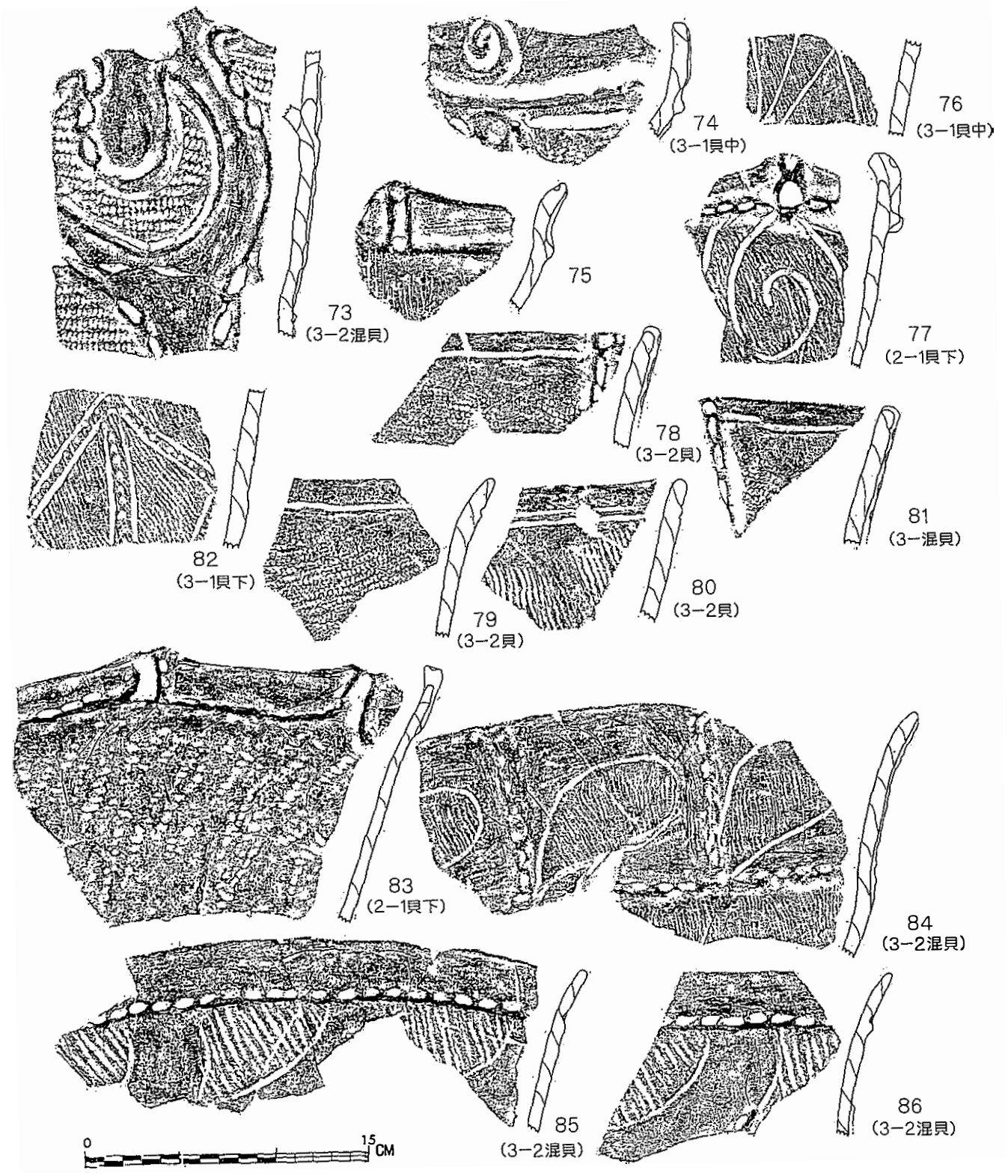

1 (1~4−表土)
2 (1~4−表土)
3 (1~4−表土)
4 (1~4−表土)
5 (1−⊗)
6 (2−1貝下)
7 (2−2貝直上)
8 (3−2貝)
9 (1−1貝下)
10 (3−2貝上)
11 (3−2貝上)
( )区、層位、( )修正
12 (1−1貝)
13 (3−黒土)
14 (1−1貝)
15 (3−1貝下)
16 (3−1貝中)
17 (1−1貝)
18 (2−2貝)
19 (1−⊗)
20 (2−2貝)
21 (1−2貝)
22 (2−2貝)
23 (1−黒土)
24 (1−1貝下)
25 (1−1貝下)
26 (1~2−1貝中)
27 (2−1貝下)
28 (2−1貝下)
29 (1−⊗)
30 (2−2貝)
31 (1~2−1·2貝下)
32 (3−表土)
38
33 (3−1貝下)
34 (2−表土)
35 (1−1貝)
36 (2−黒土)
37 (1−1貝)
0
15 CM

図 11


39 (2−2貝)
40 (2−2貝上)
41 (1−1貝下)
42 (1−2貝下土)
43 (1−1貝下)
44 (3−1貝中)
45 (1〜2−2貝)
46 (3−1貝下)
47 (3−2貝上)
48 (1〜2−2貝)
49 (3−2貝上)
50 (1〜2−1·2貝下)
51 (1−1貝下)
52 (1−1貝下)
53 (1−2貝)
54 (3−貝中)
55 (1−1黒土)
56 (1−1貝下)
57 (1−⊗)
58 (1〜2−1·2貝下)
59 (1−1貝下)
60 (1〜2−2貝)
61 (1−1貝下)
62 (2−1貝下)
63 (2−1貝下)
64 (3−2貝)
65 (1−2貝)
66 (2−1貝下)
67 (2−2貝)
68 (1〜3−1貝下)
0
15CM
69 (1−1貝下)
70 (1−1貝下)
71 (3−1貝下)
72 (3−1貝下)

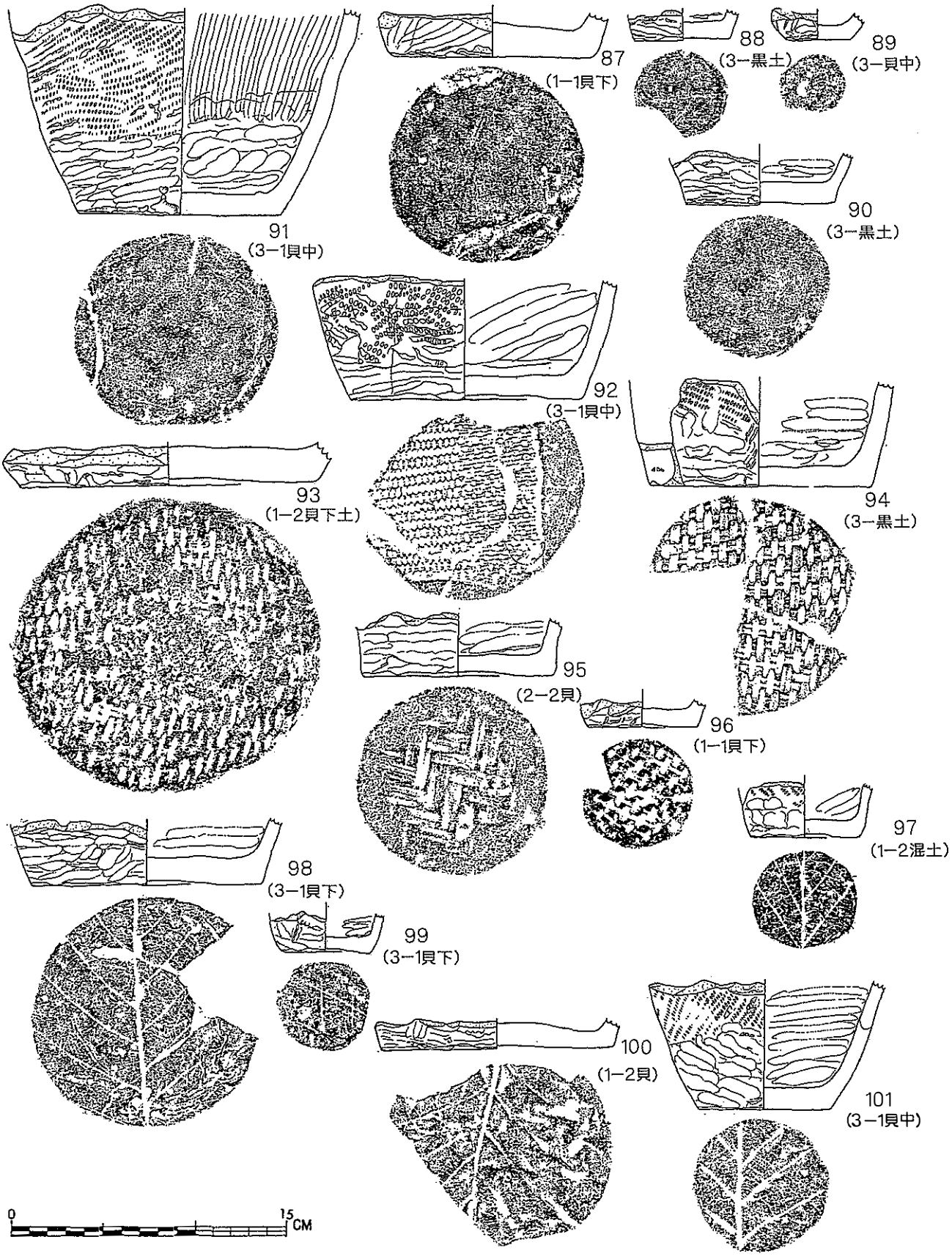
( )区、層位、( )修正

図 12


73
(3−2混貝)
74
(3−1貝中)
75
76
(3−1貝中)
77
(2−1貝下)
78
(3−2貝)
79
(3−2貝)
80
(3−2貝)
81
(3−混貝)
82
(3−1貝下)
83
(2−1貝下)
84
(3−2混貝)
85
(3−2混貝)
86
(3−2混貝)
0
15CM

(　)区、層位

図 13


87
(1−1貝下)
88
(3−黒土)
89
(3−貝中)
90
(3−黒土)
91
(3−1貝中)
92
(3−1貝中)
93
(1−2貝下土)
94
(3−黒土)
95
(2−2貝)
96
(1−1貝下)
97
(1−2混土)
98
(3−1貝下)
99
(3−1貝下)
100
(1−2貝)
101
(3−1貝中)
0
15 CM

(　)区、層位

図 14

第２区（４）　（図１０・１５(断図)・１６）

第１区から第２区は、第５区の遺物収納に振り回され、調査終了時期に調査に入り、最終的には第２区５～６区は、調査未了となった地区である。

第１区と同じように、第１貝層はなく、第２貝層上の混貝層に、各段階の遺物が混在する。図１５の「第２区土器出土模式図」の上段左は、宮戸Ｉｂ式併行の土器群、上段右は帯縄文の入組文と頚部無文の土器群で未命名のもの。下段右は二個の連鎖刻目施文とボタン状凹部施文であり、中期大木１０式に近いものである。第２貝層は中期大木１０式の層である。第１貝層は東西壁面図では、西壁からほぼ１ｍ東寄りから出現している。また、第２貝層は西壁の真ん中で消滅する。

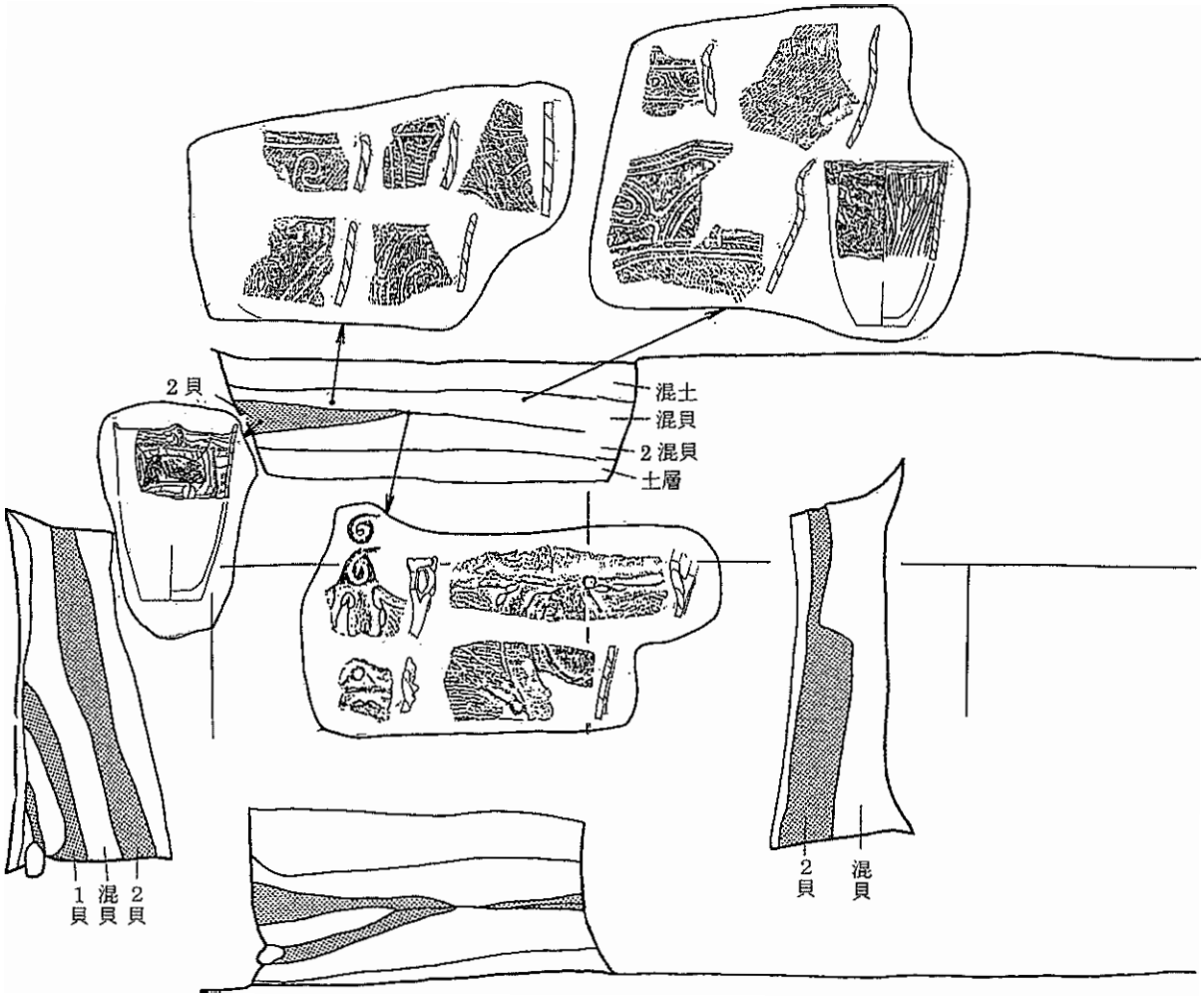
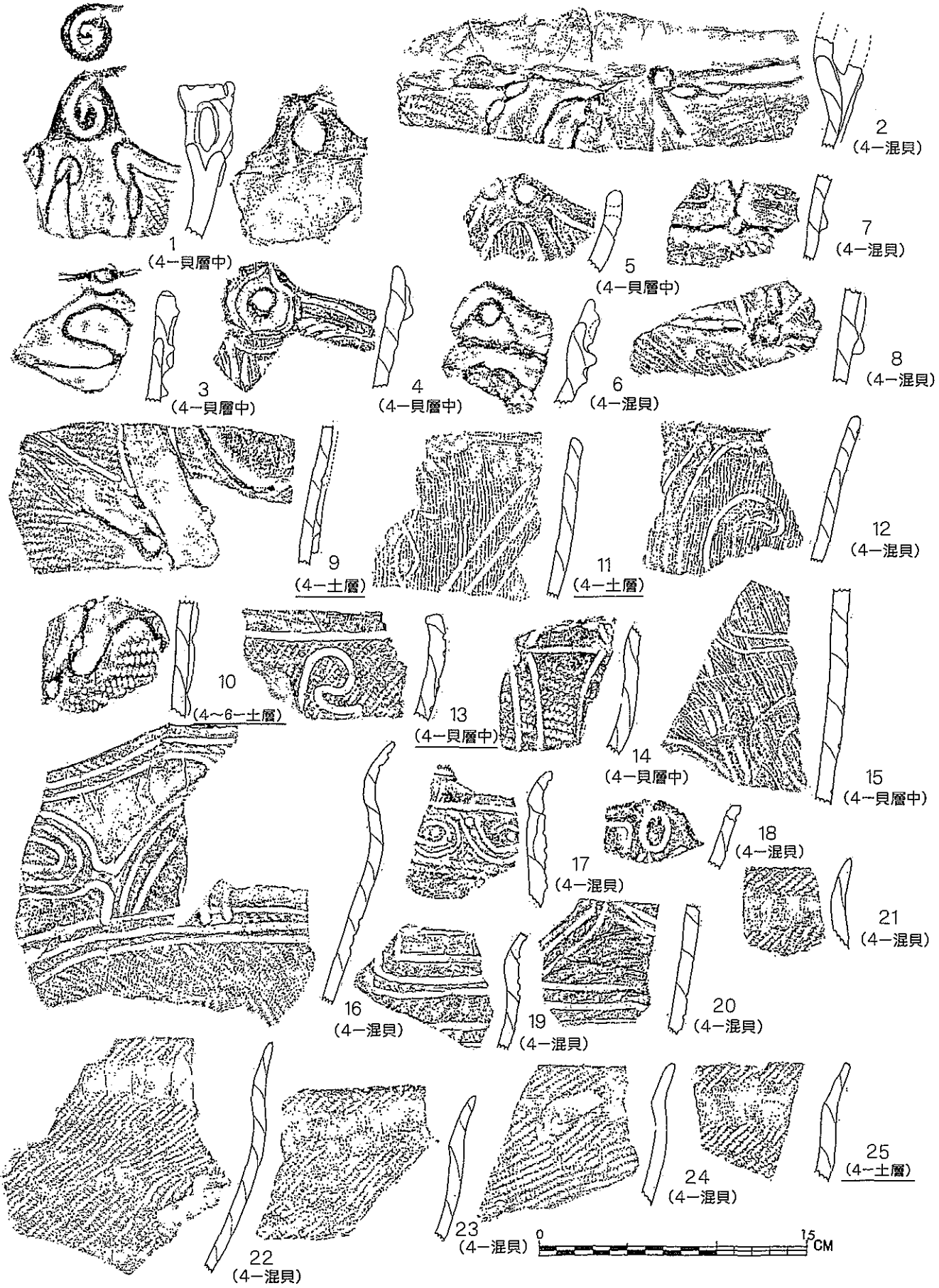


図15　第２区土器出土模式図


1
(4−貝層中)
2
(4−混貝)
3
(4−貝層中)
4
(4−貝層中)
5
(4−貝層中)
6
(4−混貝)
7
(4−混貝)
8
(4−混貝)
9
(4−土層)
10
(4〜6−土層)
11
(4−土層)
12
(4−混貝)
13
(4−貝層中)
14
(4−貝層中)
15
(4−貝層中)
16
(4−混貝)
17
(4−混貝)
18
(4−混貝)
19
(4−混貝)
20
(4−混貝)
21
(4−混貝)
22
(4−混貝)
23
(4−混貝)
24
(4−混貝)
25
(4−土層)
0
1.5
CM

( )区、層位、( )修正

図 16

第３区（７～９）　（図１０・１７(模式図)、１８～２１）

第３区から西壁に第１貝層が堆積する。図１０の７・９は、口縁逆く字状に内折し、口縁無文で頸部隆帯をめぐらして区画し、環状突起下に隆帯やジクザク沈線文が施文されたもので、図１９の１３～１６、１８～２１の拓図と同じで、第１貝層から１混貝層を含めた層の遺物群である。

また、図１９の１～１２は、２個連鎖刻目とボタン状凹部突起の施文した一群であり、図１７「第３区土器出土模式図」の下段右を含めて、中期大木１０式に近いか、図１９の３・４・９・１０のように、ボタン凹部突起と下部の沈線と磨消から、大木１０式から新しい様相として分離されそうでもある。

下部貝層の第２貝層中心の出土遺物群は、図１７の下段左の一群、図１８の４～６の復元図は、４個の小突起を配置し、口縁無文で隆線・刺突隆起をめぐらして区画し、突起に鰭状に隆帯が延びる。突起下に逆Ｌ字状の磨消区画帯が、４区画が連なる。

図２０～２１は第２貝層中心の出土土器群で、口縁無文、下部に隆線・刺突隆線、刺突列で区画し、胴部にかけて逆Ｌ字の磨消区画が連なるものである。地文として縄文より、タテの撚糸文施文が多いのが注目される。

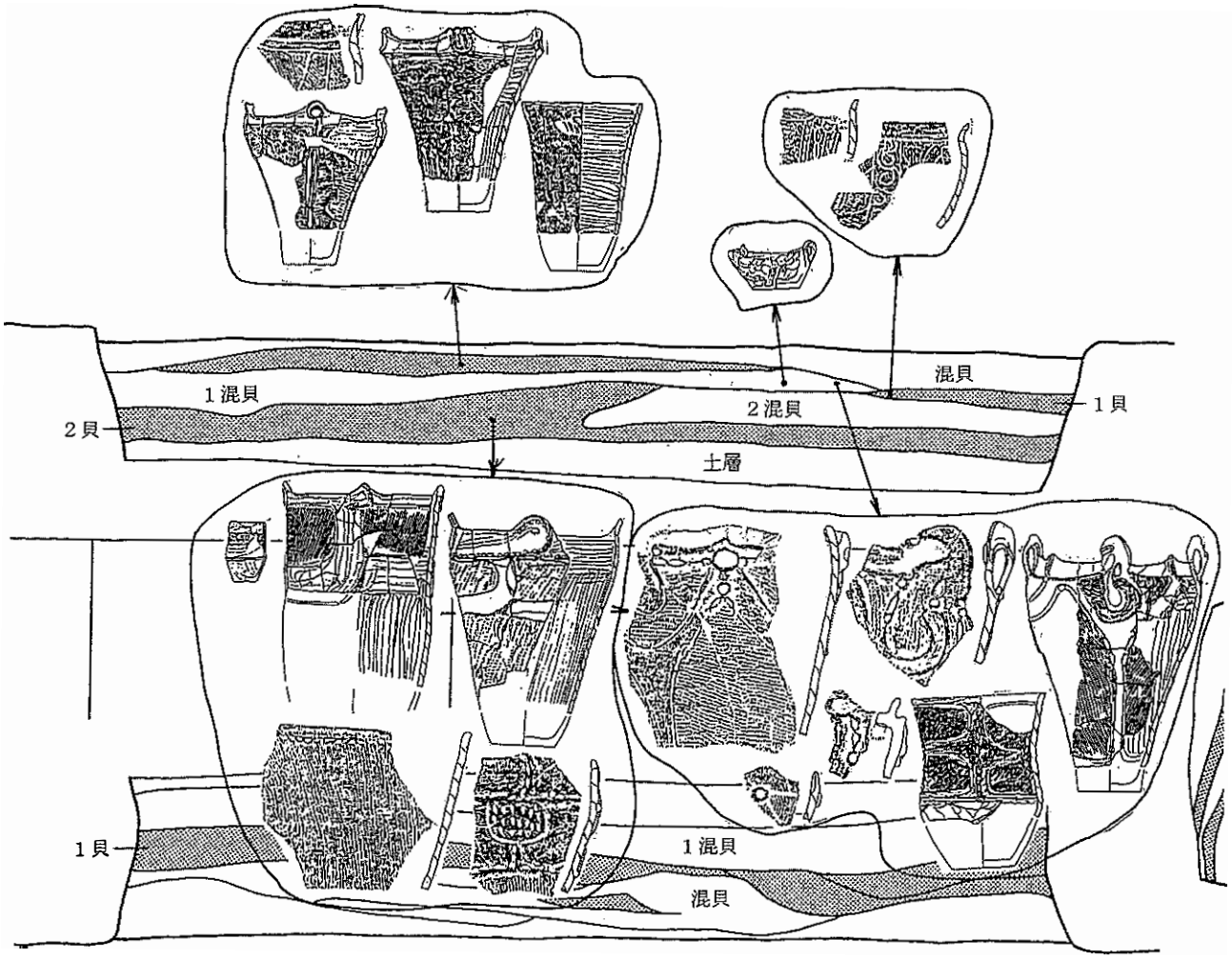
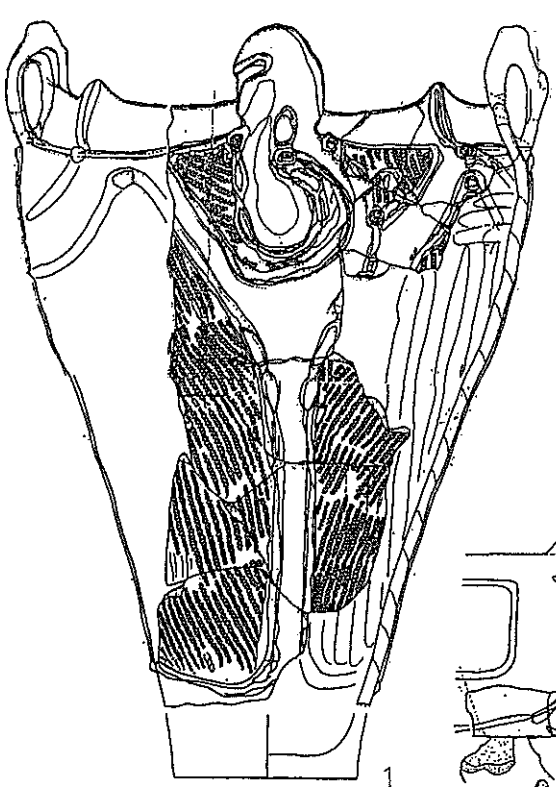
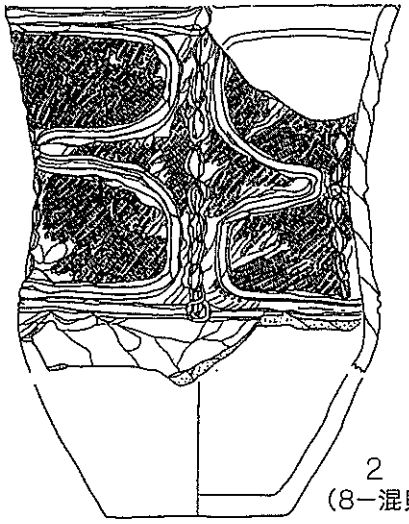


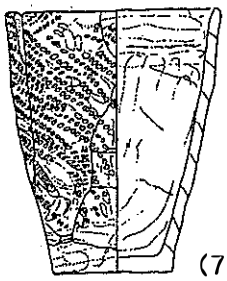
図17　第３区土器出土模式図



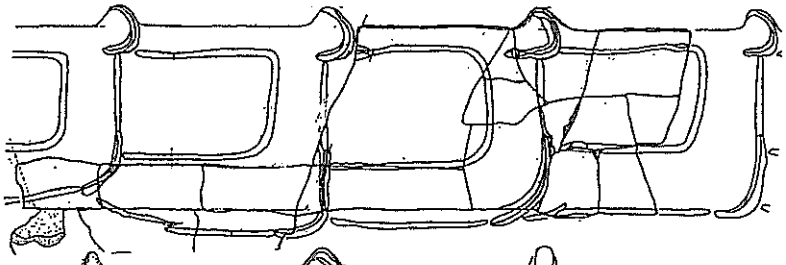
1
(9−1貝)



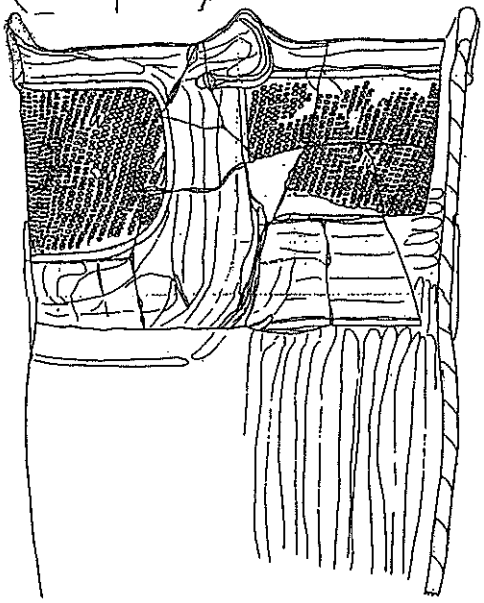
2
(8−混貝)



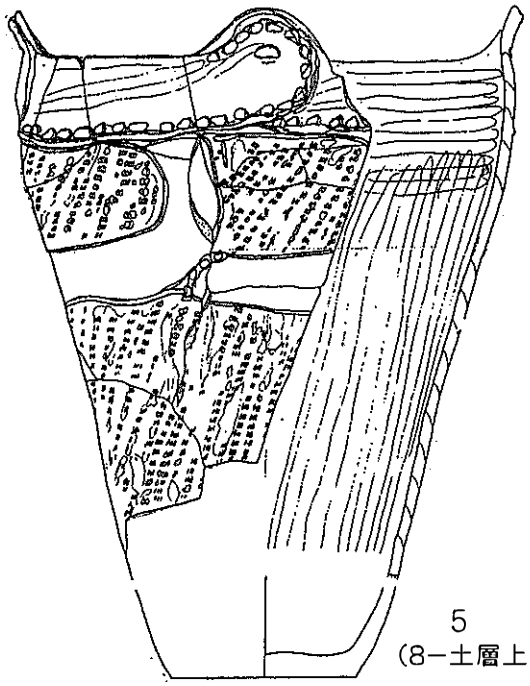
3
(7−混貝)



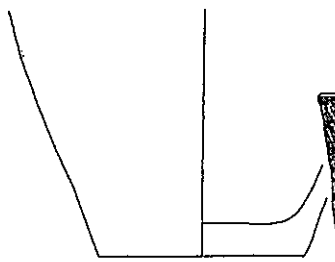
4
(7−混貝下)



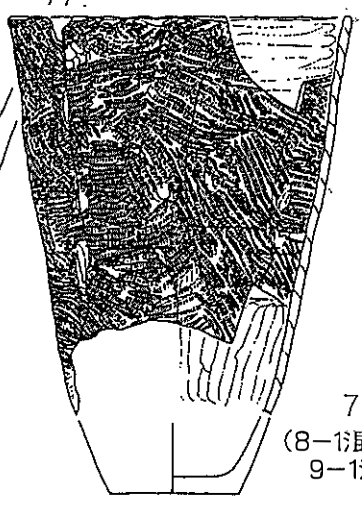
( )区、層位



5
(8−土層上)



6
(8−2貝下·2貝)



7
(8−1混貝·
9−1混貝上)

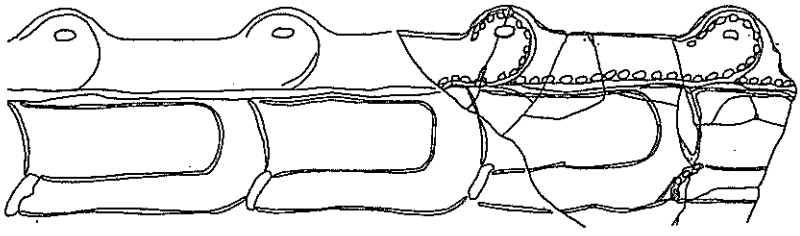
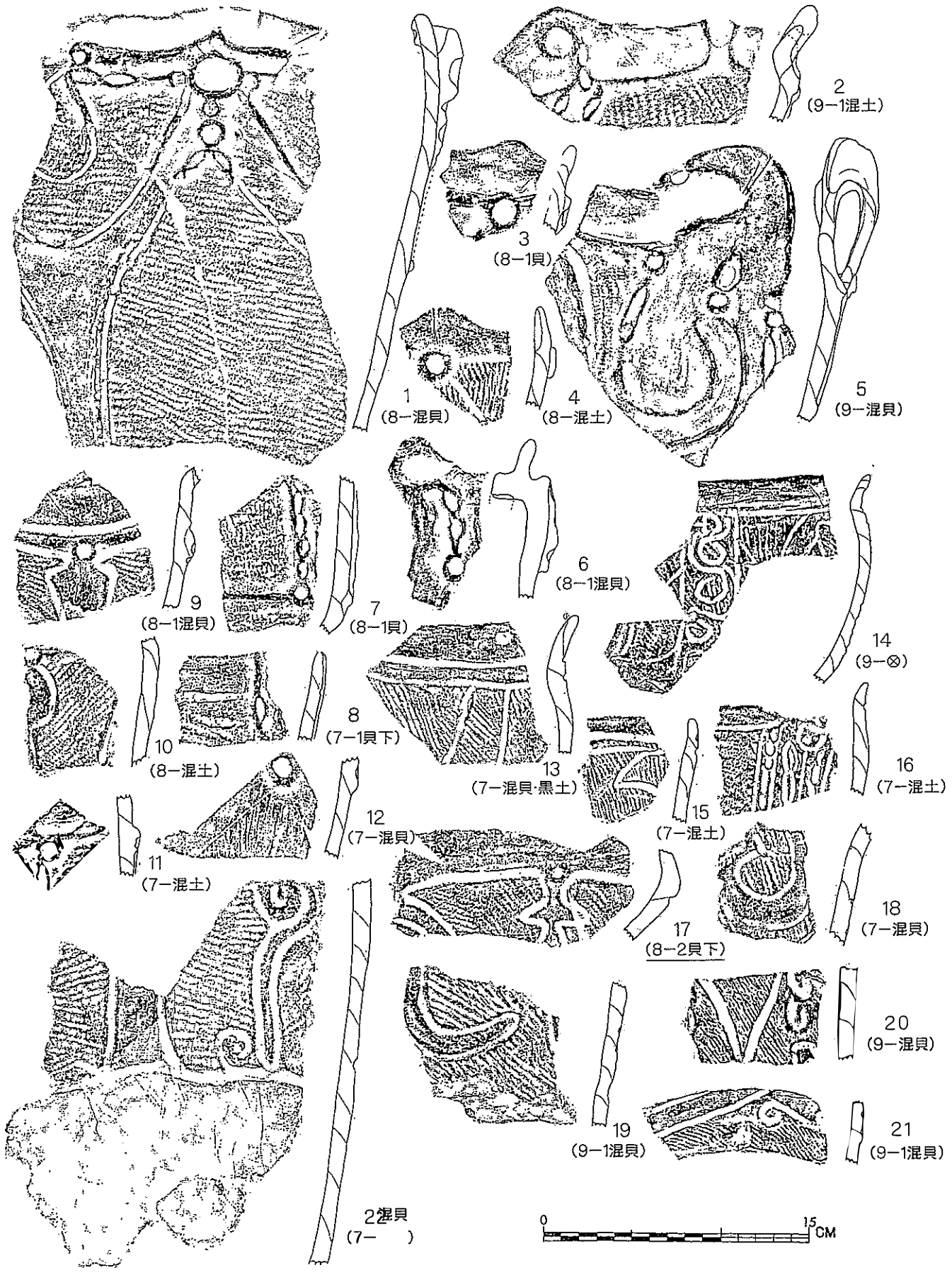
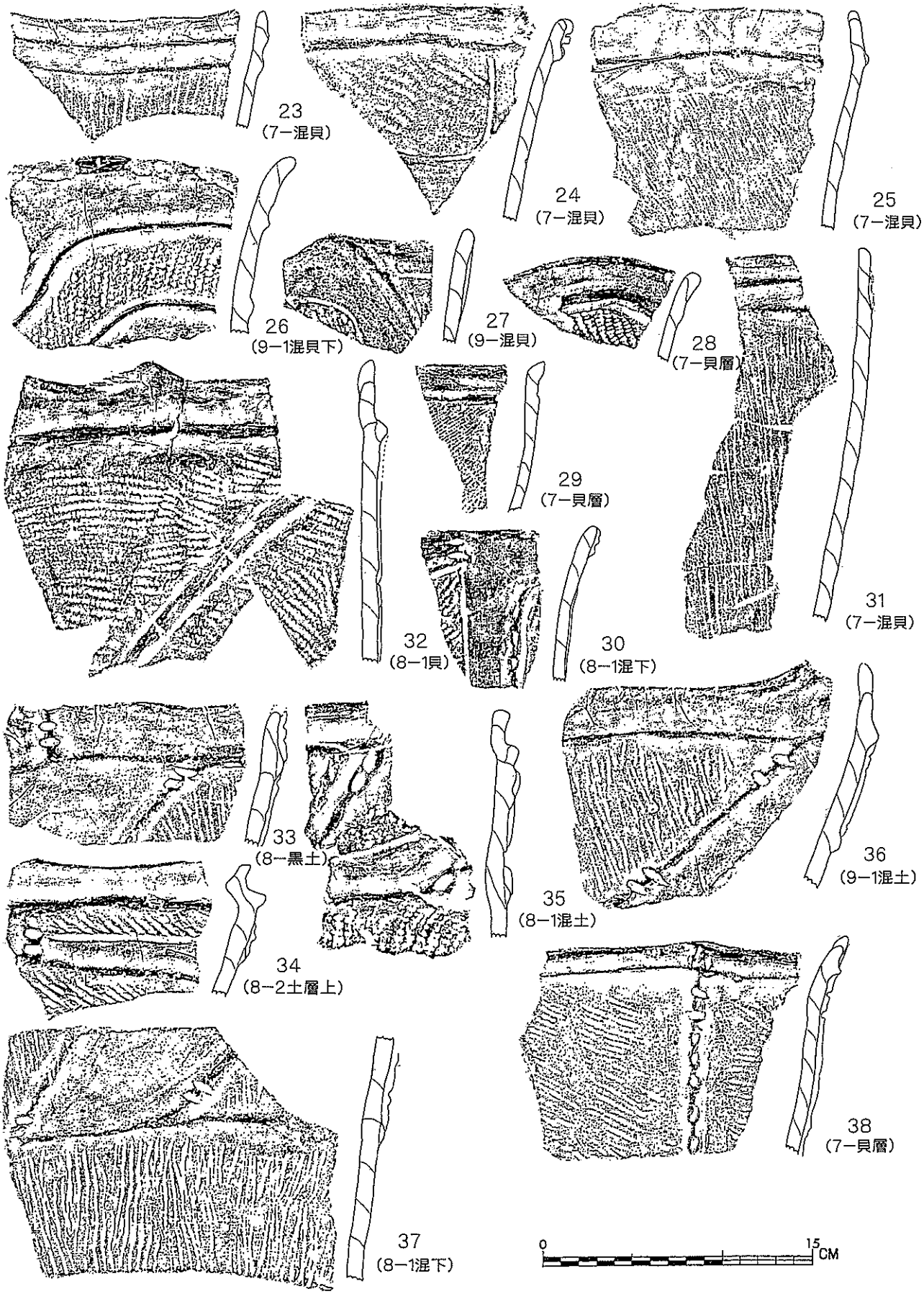


図 18


1
(8−1混貝)
2
(9−1混土)
3
(8−1貝)
4
(8−1混土)
5
(9−1混貝)
6
(8−1混貝)
7
(8−1貝)
8
(7−1貝下)
9
(8−1混貝)
10
(8−1混土)
11
(7−1混土)
12
(7−1混貝)
13
(7−1混貝・黒土)
14
(9−⊗)
15
(7−1混土)
16
(7−1混土)
17
(8−2貝下)
18
(7−1混貝)
19
(9−1混貝)
20
(9−1混貝)
21
(9−1混貝)
22
(7−　)混貝
0
15CM

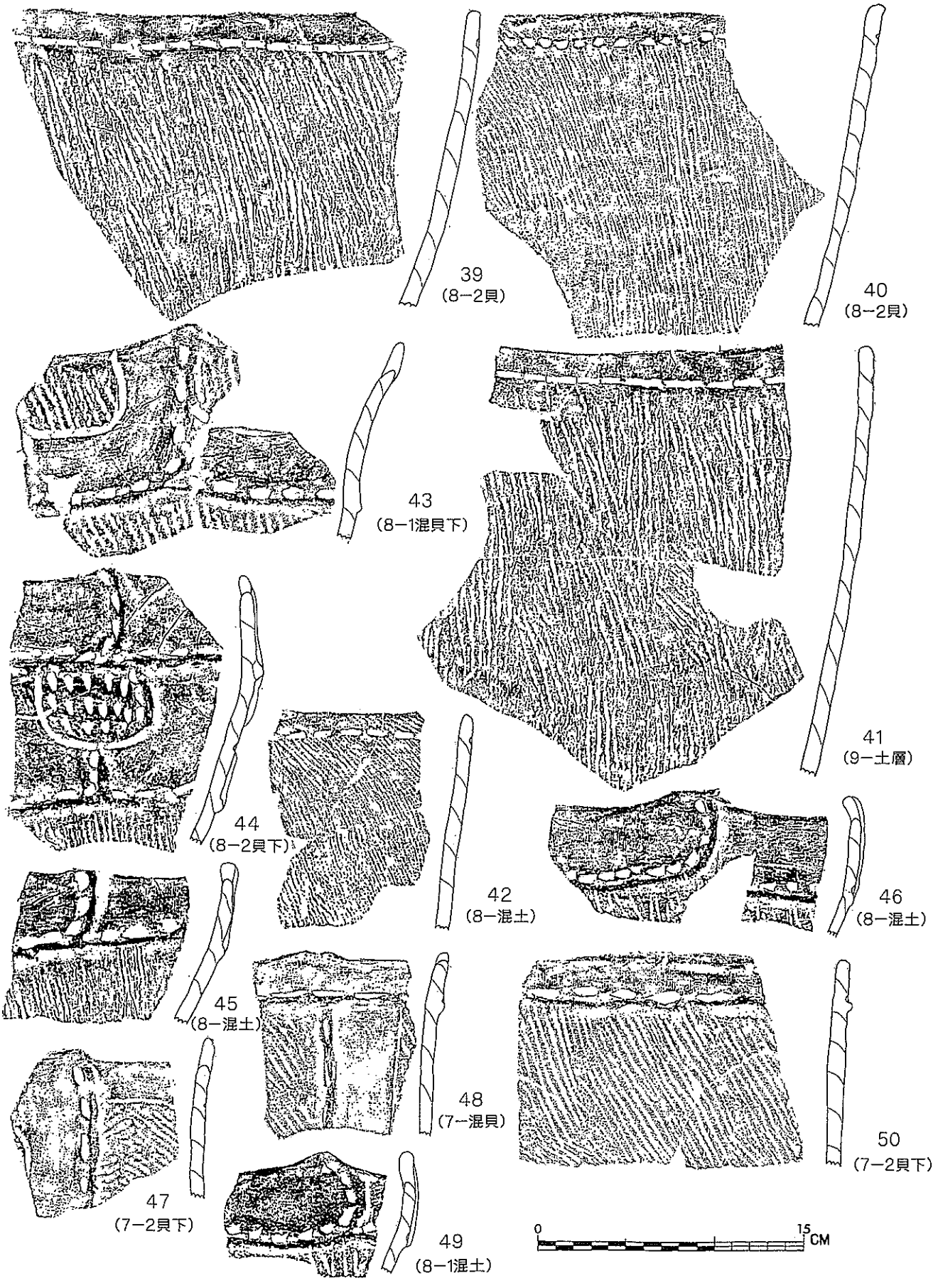
(　)区、層位、(　)修正

図 19


23
(7−混貝)
24
(7−混貝)
25
(7−混貝)
26
(9−1混貝下)
27
(9−混貝)
28
(7−貝層)
29
(7−貝層)
31
(7−混貝)
32
(8−1貝)
30
(8−1混下)
33
(8−黒土)
35
(8−1混土)
36
(9−1混土)
34
(8−2土層上)
38
(7−貝層)
37
(8−1混下)
0
15
CM

(　)区、層位、(　)修正

図 20


39
(8−2貝)
40
(8−2貝)
43
(8−1混貝下)
41
(9−土層)
44
(8−2貝下)
42
(8−混土)
46
(8−混土)
45
(8−混土)
48
(7−混貝)
50
(7−2貝下)
47
(7−2貝下)
49
(8−1混土)
0
15CM

(　)区、層位

図 21

第４区（１０～１２）　（図２２(模式図)、２３～３１）

第４区は第１貝層、第２貝層共に、薄く途切れながら連なる。第３貝層も薄い。遺物は特に第２貝層がトレンチ西側の１２区に堆積が厚く、一括遺物の出土が多い。

第１貝層の出土遺物群は、図２２の「第４区土器出土模式図」上段左側、倒卵形文様、ジクザクの下垂文、鍵状の懸垂文で、宮戸Ⅰｂ式併行の土器群である。上段右側は隆線が多用され、２個の連鎖刻目施文、ボタン状凹部突起施文で、中期大木１０式に近いか、やや新らしく区分されるものである。第２貝層周辺の土器群は、図２３の８・９、図２４の１１・１２、図２５の１８のように、突起、環状突起を配し、口縁無文で頚部に刺突隆帯、沈線で区画し、突起下に逆Ｌ字状、Ｌ字状の磨消区画が連なるもので、胴部に刺突隆帯、沈線で区画する文様構成である。

簡略化したものとして、口縁無文、沈線、点列で区画しただけのもの、口端整形だけのものも存在する。タテ撚糸文の施文が多い。

第３貝層周辺は、図２５の２１のように、斜行縄文で段落にループ文のある繊維土器である。主体は第３貝層であるが、土層出土が多いが、全層位から出土している。

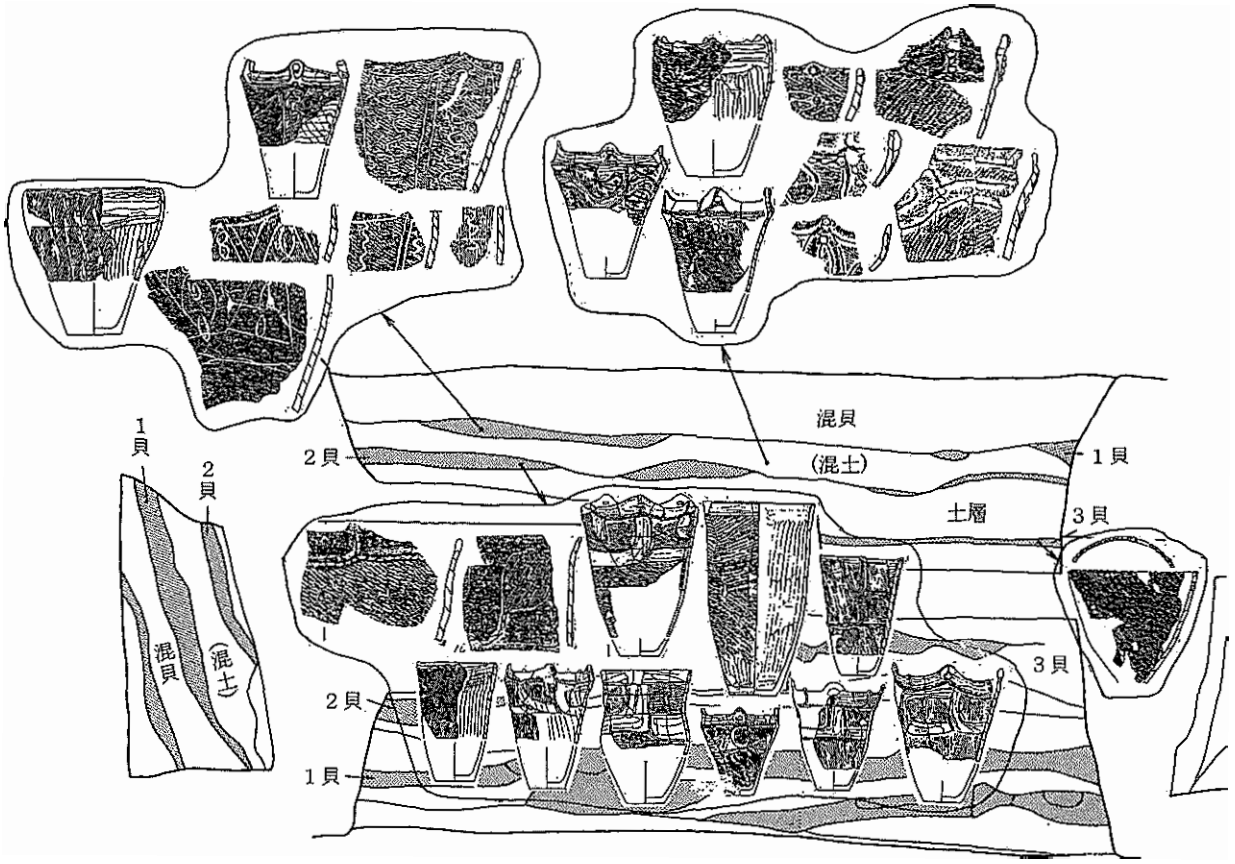


図２２　第４区土器出土模式図

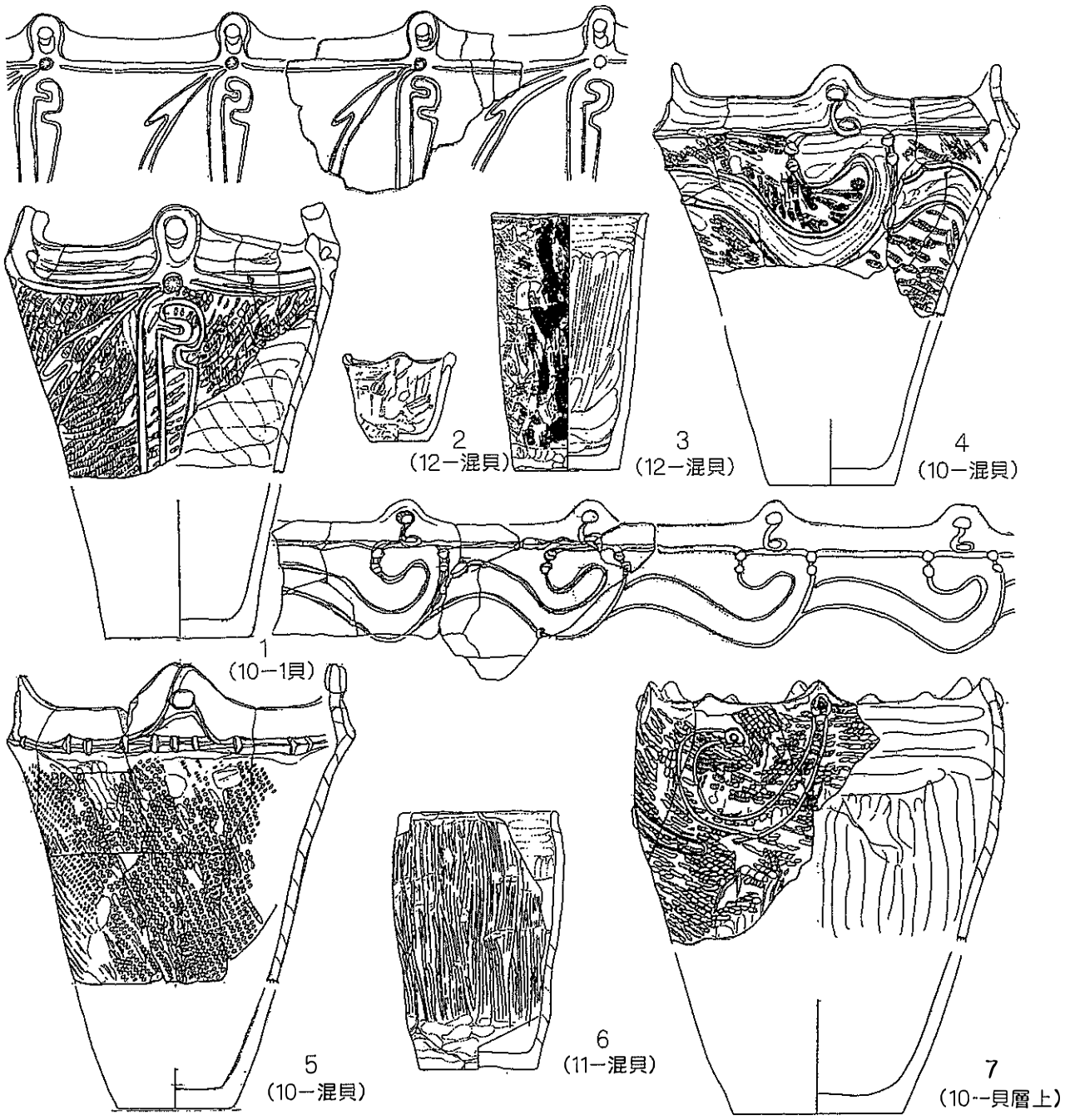
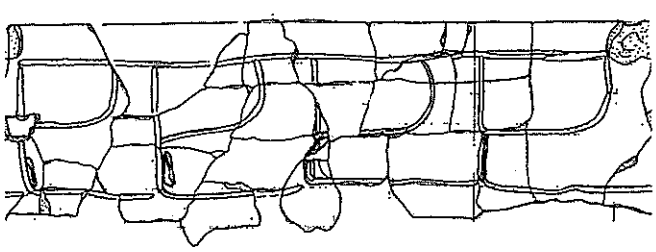
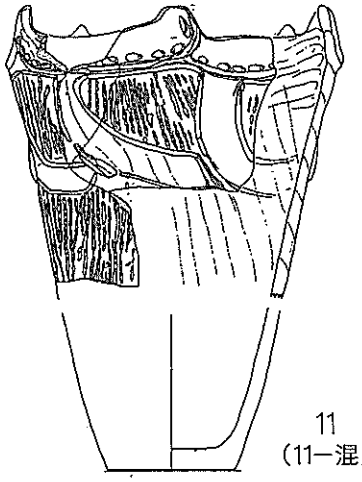
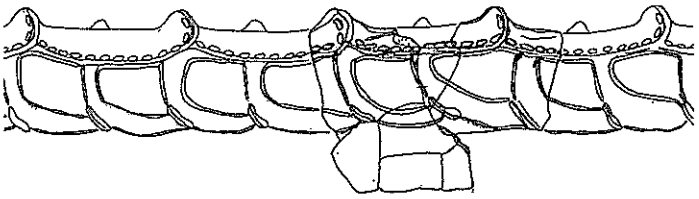

1
(10−1貝)
2
(12−混貝)
3
(12−混貝)
4
(10−混貝)
5
(10−混貝)
6
(11−混貝)
7
(10−貝層上)
( )区、層位
8
(11−混貝)
9
(12−混土)
10
(11−混貝)

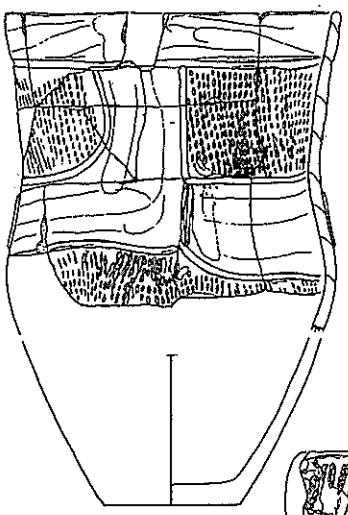
図 23



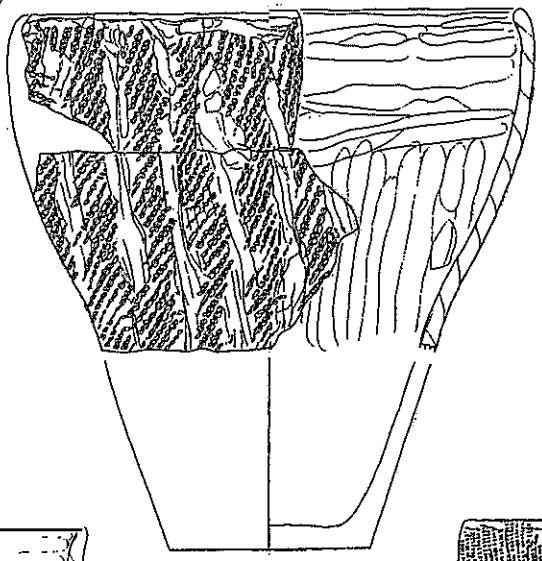


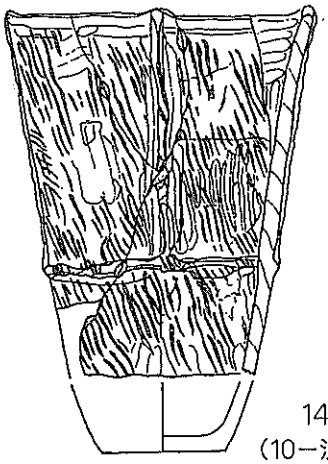
11
(11−混貝)





12
(12−混貝)

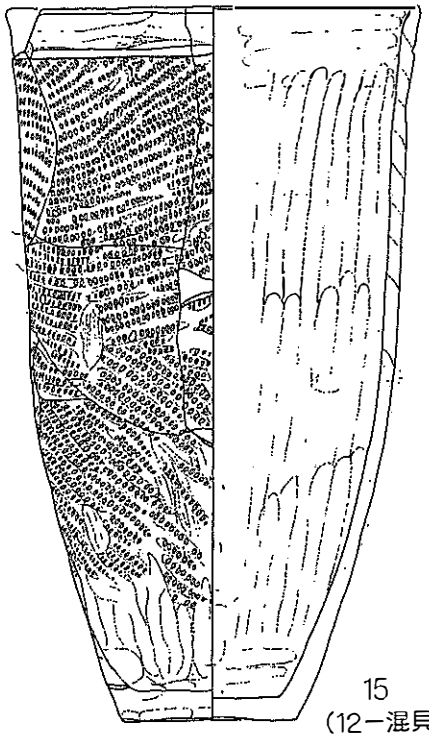




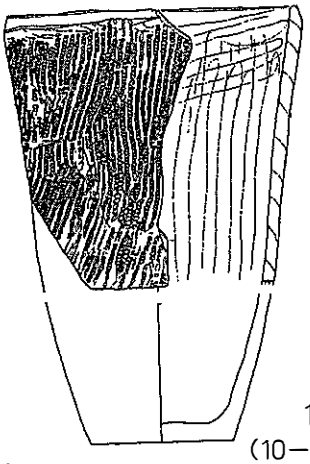
14
(10−混貝)

( )区、層位

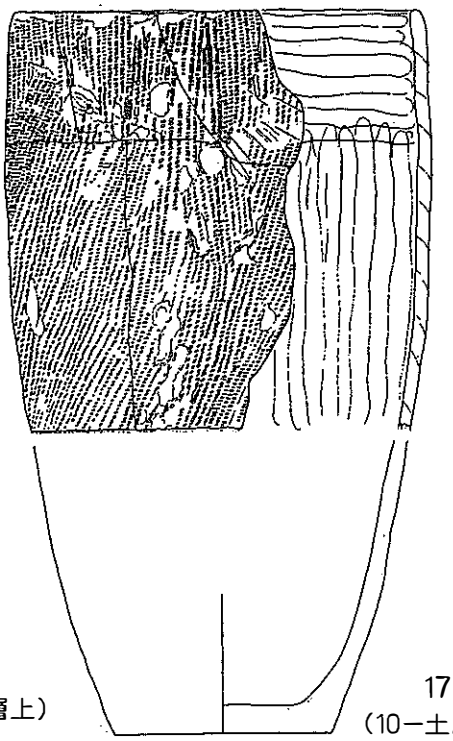
13
(11−貝層)



15
(12−混貝)

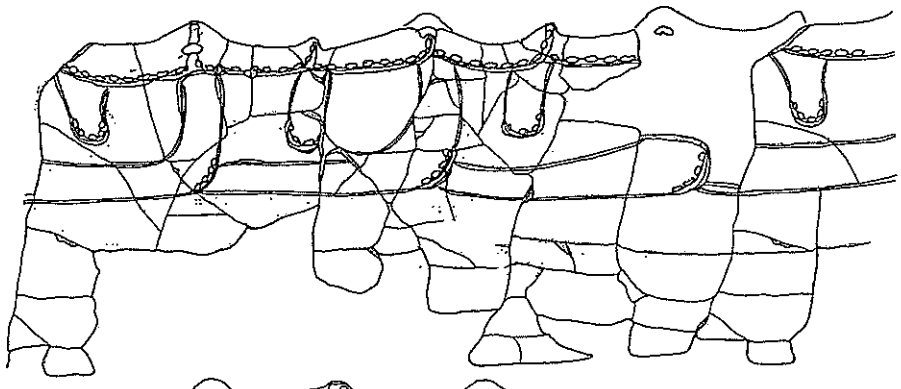


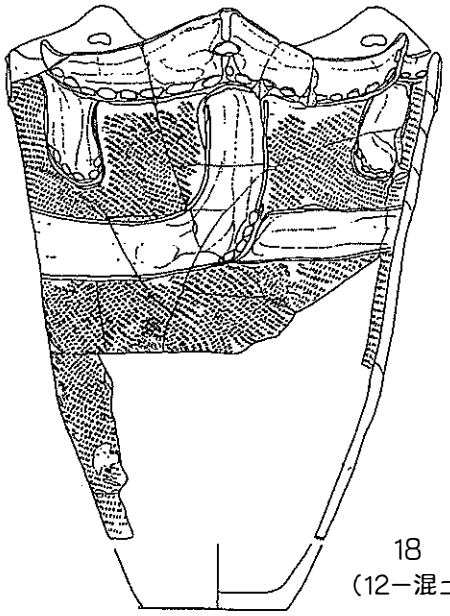
16
(10−土層上)



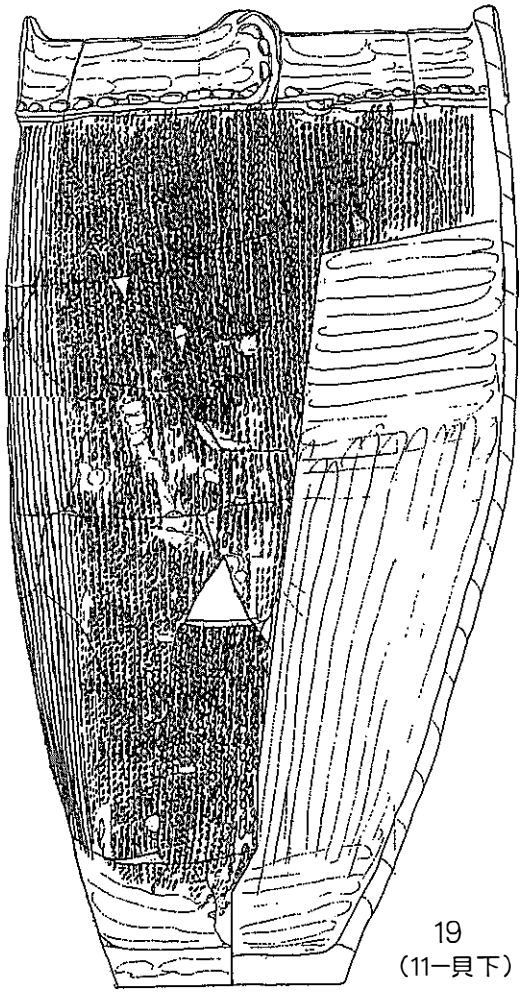
17
(10−土層上)

図 24

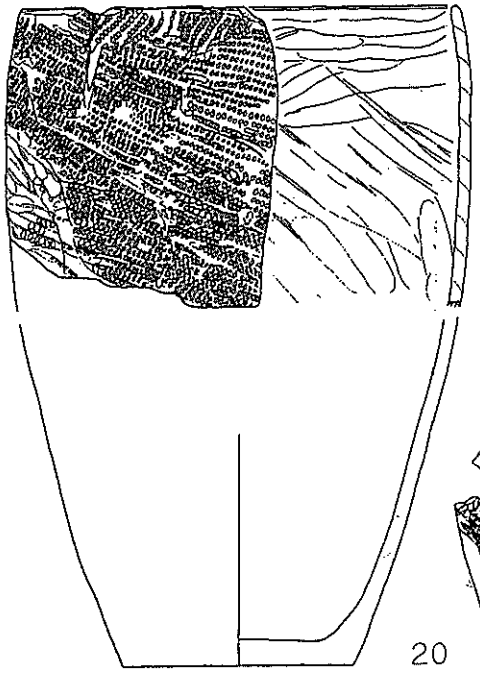




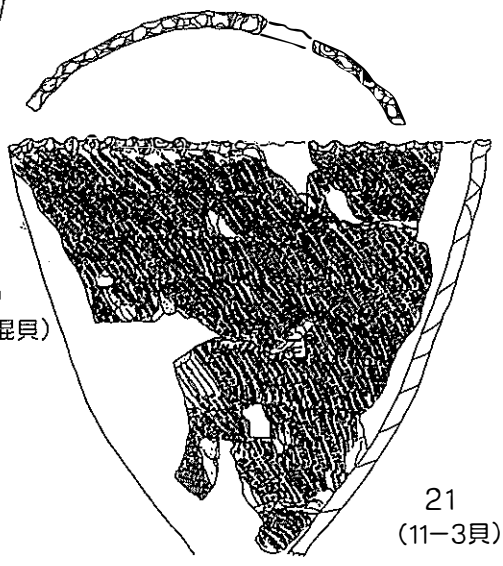
18
(12−混土)



19
(11−貝下)



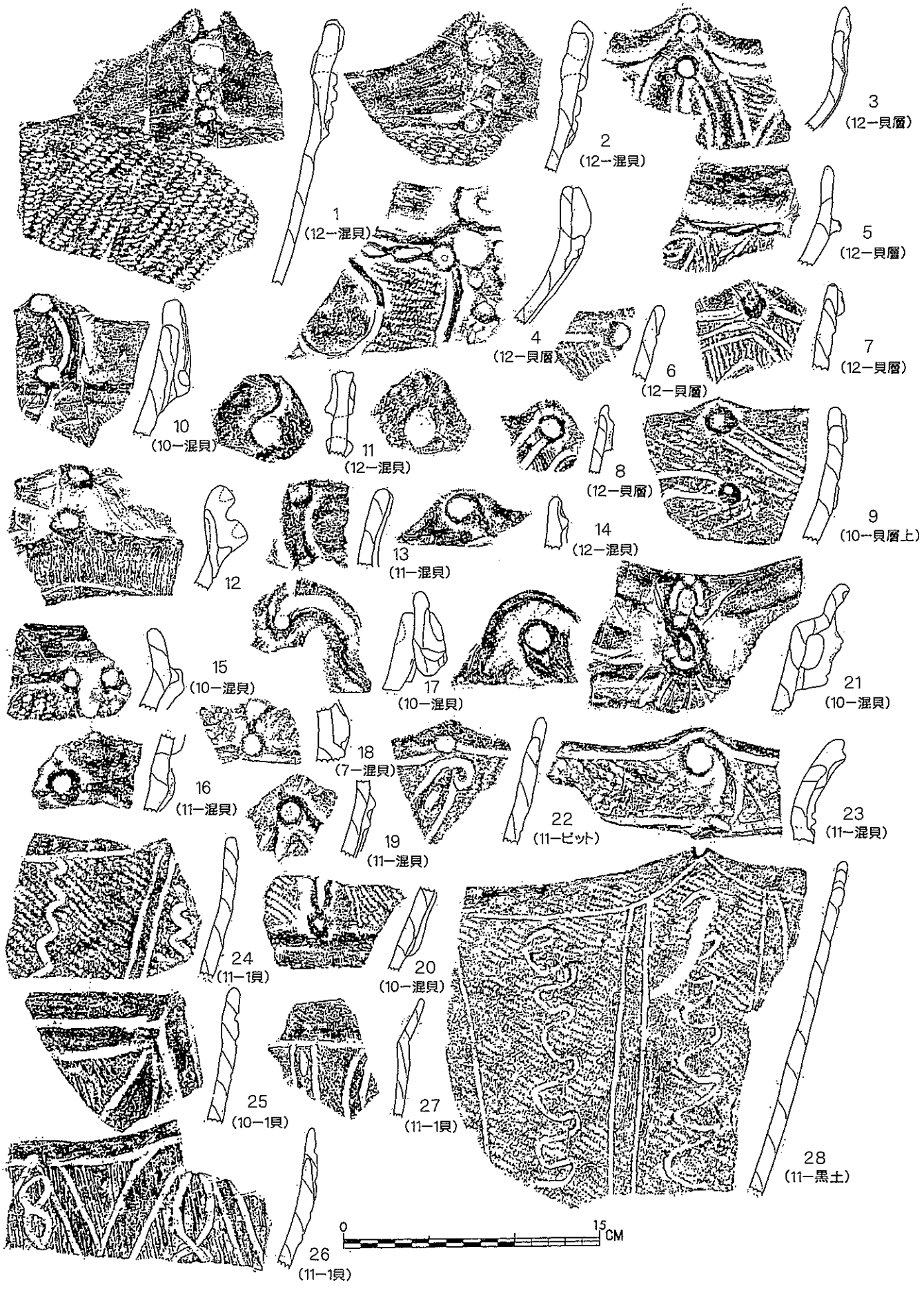
20
(10−混貝)



21
(11−3貝)

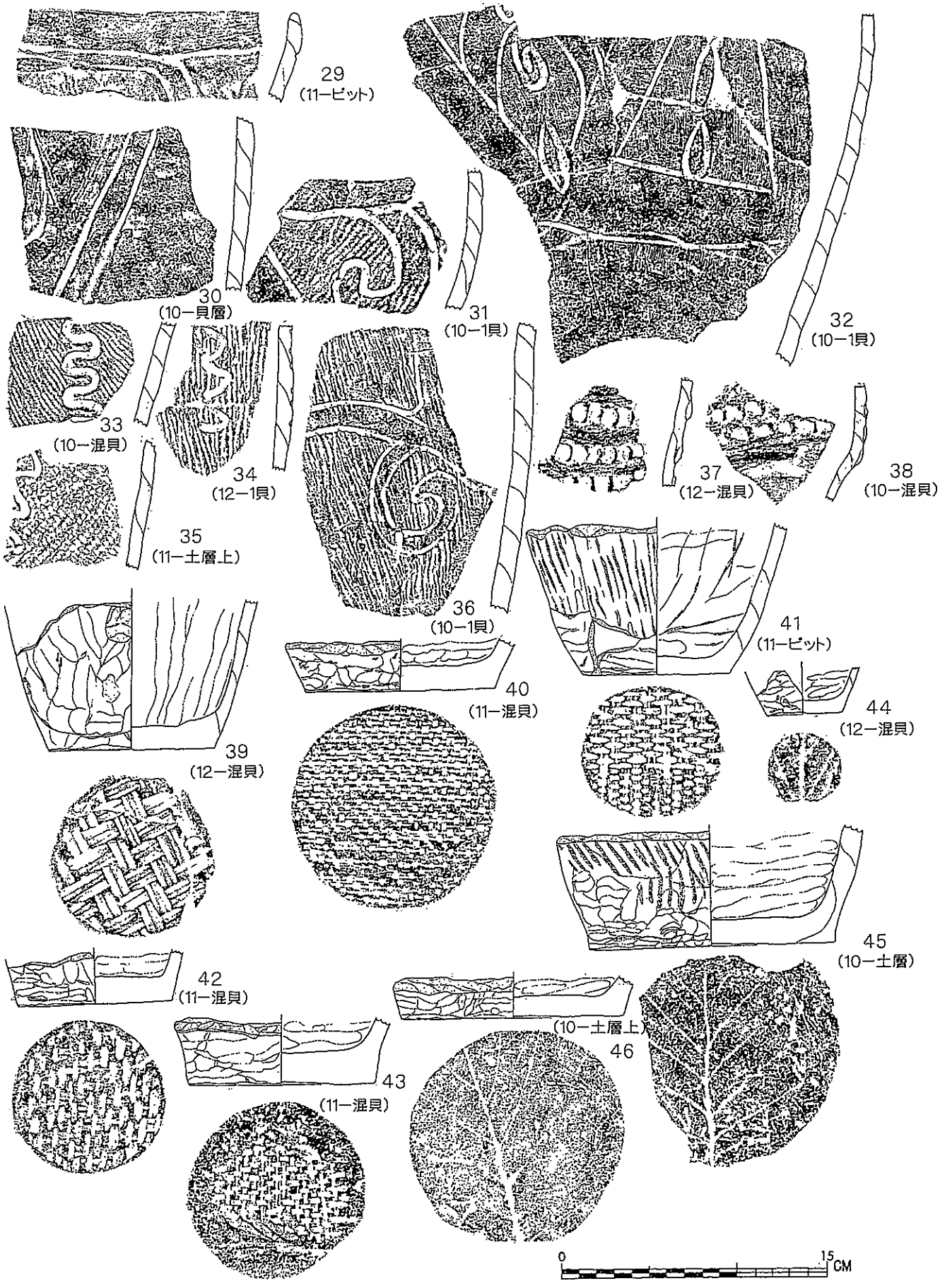
(　)区、層位

図 25


1 (12−混貝)
2 (12−混貝)
3 (12−貝層)
4 (12−貝層)
5 (12−貝層)
6 (12−貝層)
7 (12−貝層)
8 (12−貝層)
9 (10−貝層上)
10 (10−混貝)
11 (12−混貝)
12
13 (11−混貝)
14 (12−混貝)
15 (10−混貝)
16 (11−混貝)
17 (10−混貝)
18 (7−混貝)
19 (11−混貝)
20 (10−混貝)
21 (10−混貝)
22 (11−ピット)
23 (11−混貝)
24 (11−1貝)
25 (10−1貝)
26 (11−1貝)
27 (11−1貝)
28 (11−黒土)
0
15 CM

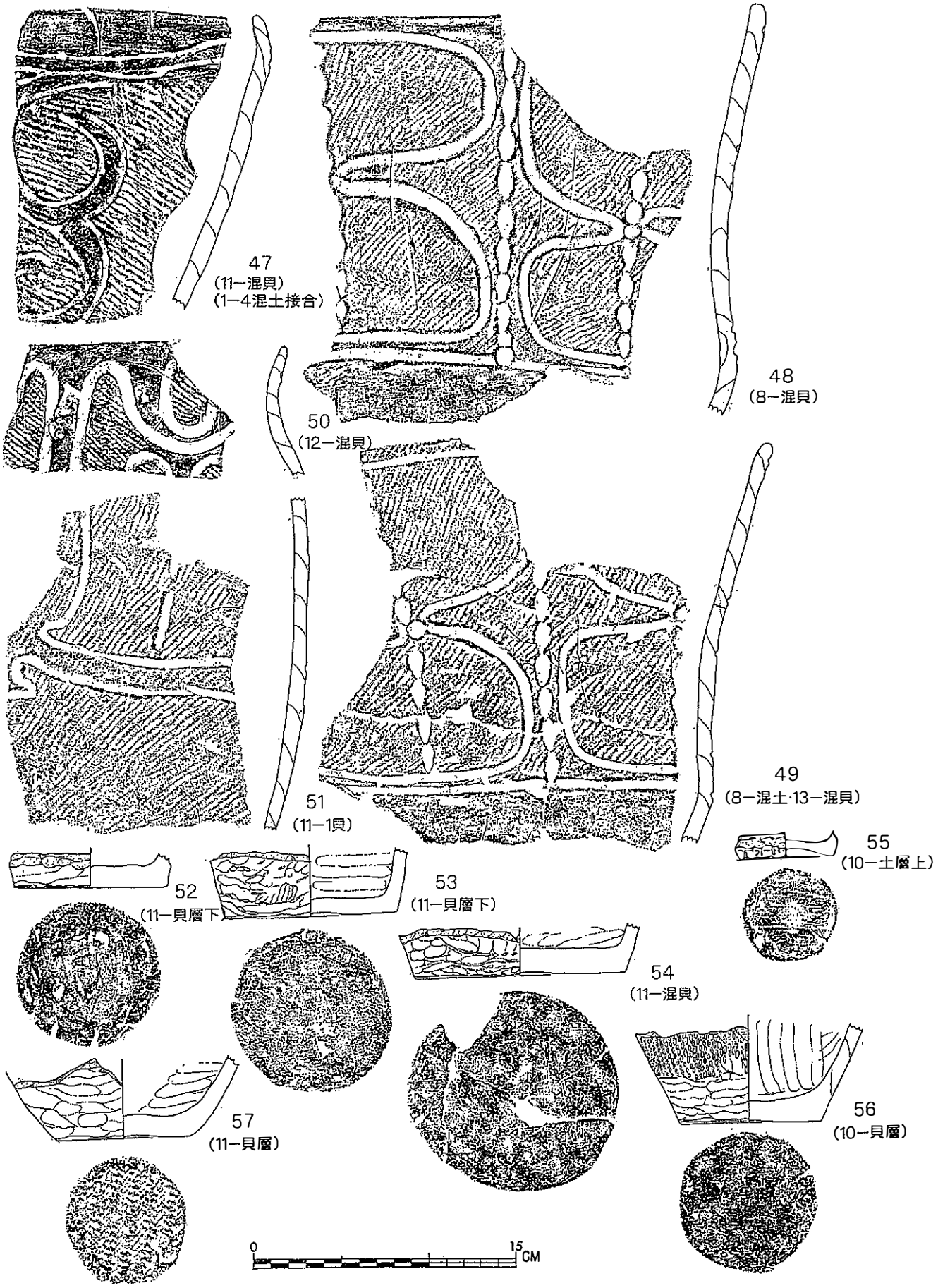
( )区、層位

図 26


29
(11−ピット)
30
(10−貝層)
31
(10−1貝)
32
(10−1貝)
33
(10−混貝)
34
(12−1貝)
35
(11−土層上)
36
(10−1貝)
37
(12−混貝)
38
(10−混貝)
39
(12−混貝)
40
(11−混貝)
41
(11−ピット)
42
(11−混貝)
43
(11−混貝)
44
(12−混貝)
45
(10−土層)
46
(10−土層上)
0
15
CM

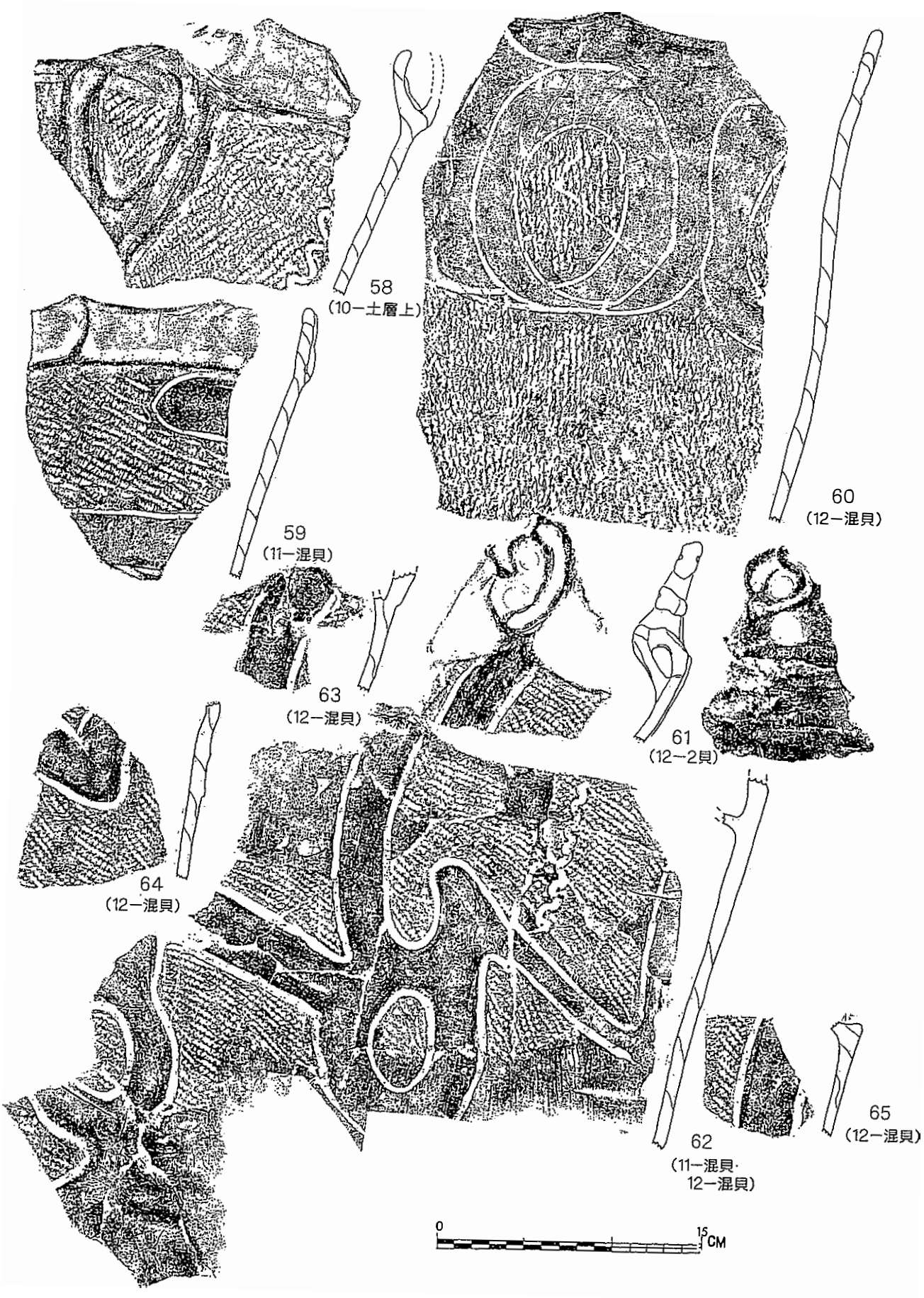
(　)区、層位

図 27


47
(11−混貝)
(1−4混土接合)
48
(8−混貝)
50
(12−混貝)
49
(8−混土·13−混貝)
51
(11−1貝)
55
(10−土層上)
52
(11−貝層下)
53
(11−貝層下)
54
(11−混貝)
56
(10−貝層)
57
(11−貝層)
0
15 CM

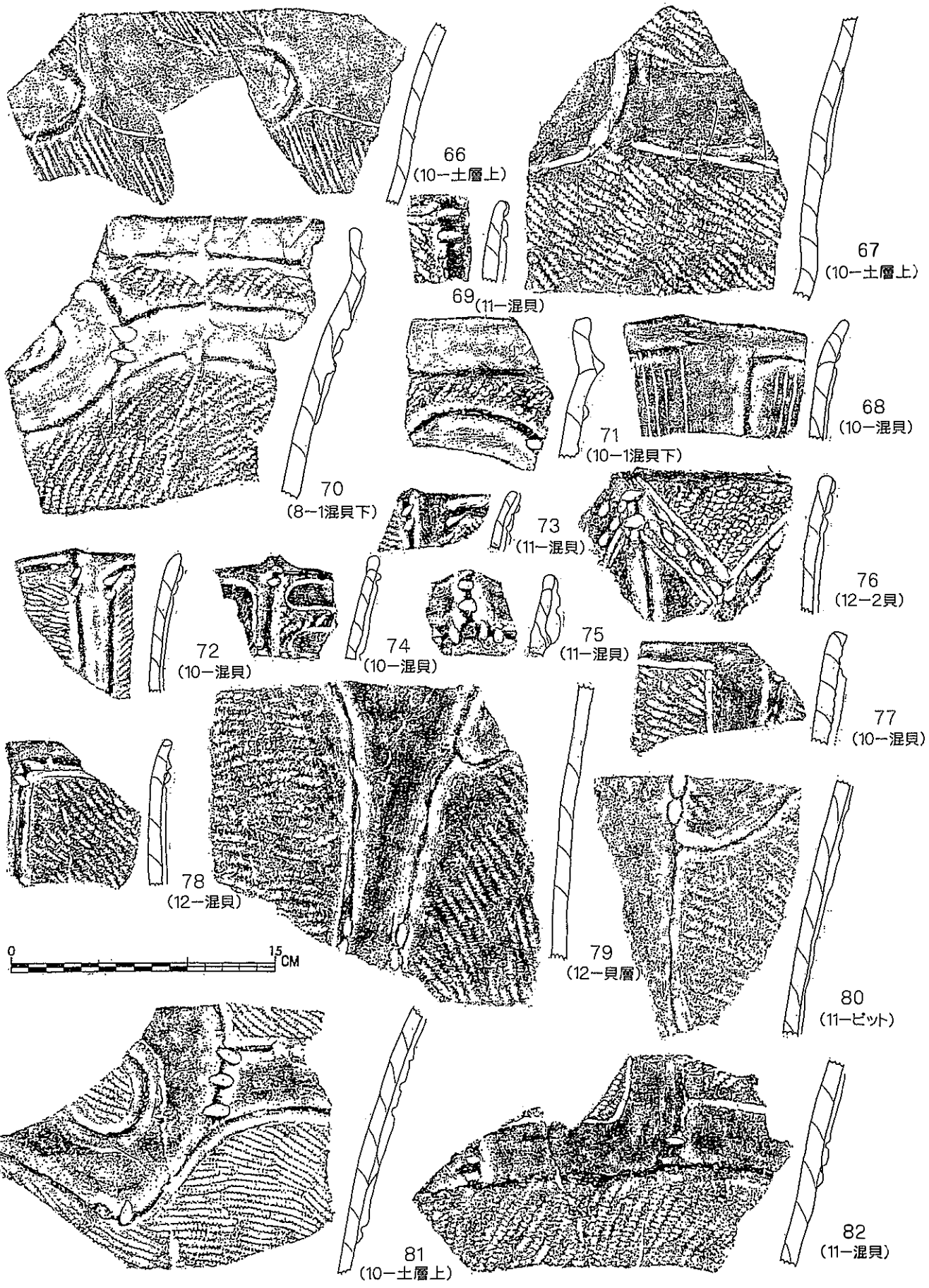
(　)区、層位

図 28


58
(10－土層上)
59
(11－混貝)
60
(12－混貝)
61
(12－2貝)
63
(12－混貝)
64
(12－混貝)
62
(11－混貝・
12－混貝)
65
(12－混貝)
0
15CM

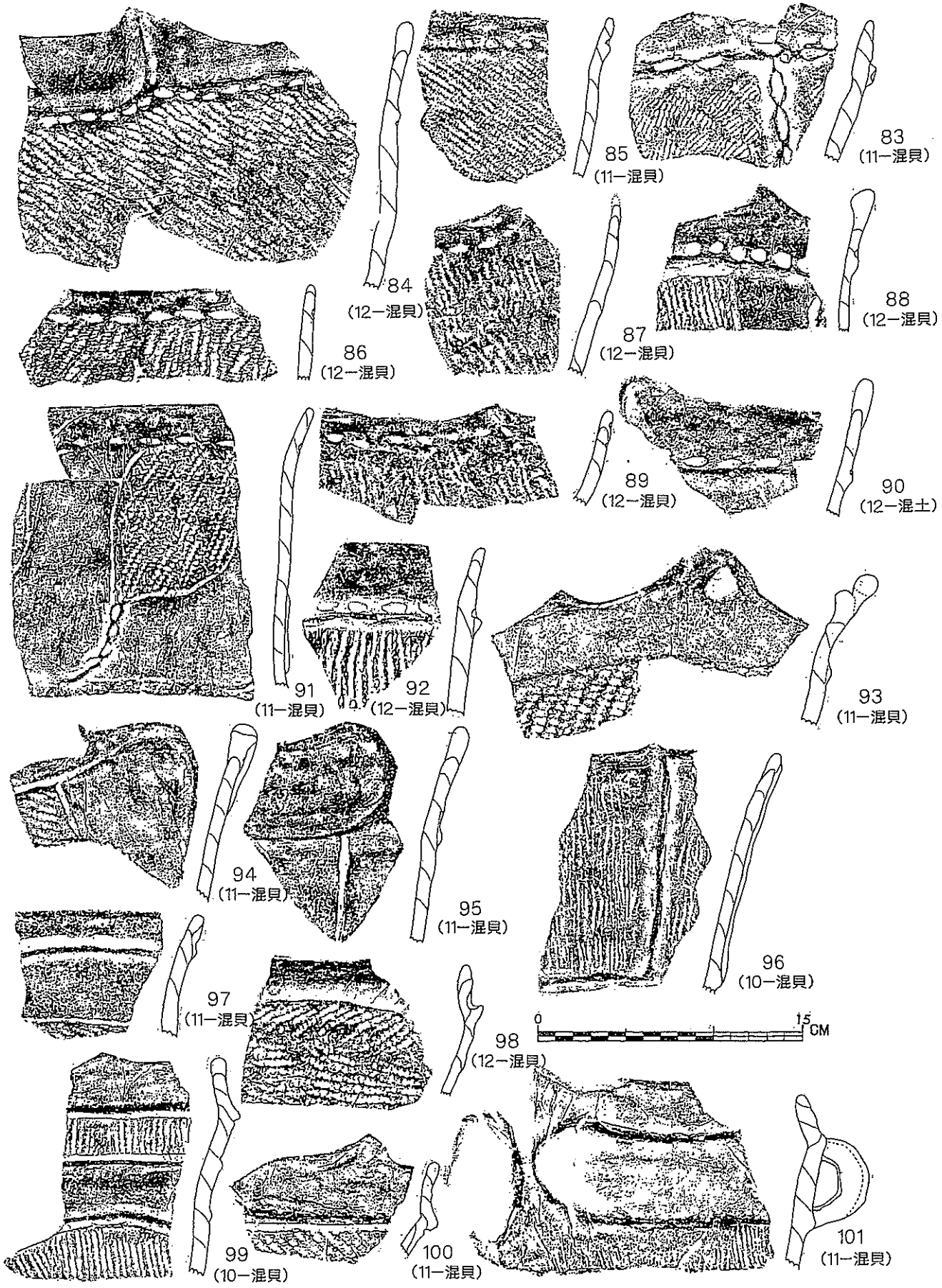
(　)区、層位

図 29


66
(10−土層上)
67
(10−土層上)
69
(11−混貝)
68
(10−混貝)
71
(10−1混貝下)
70
(8−1混貝下)
73
(11−混貝)
76
(12−2貝)
72
(10−混貝)
74
(10−混貝)
75
(11−混貝)
77
(10−混貝)
78
(12−混貝)
0
15CM
79
(12−貝層)
80
(11−ピット)
81
(10−土層上)
82
(11−混貝)

( )区、層位

図 30


83
(11−混貝)
84
(12−混貝)
85
(11−混貝)
86
(12−混貝)
87
(12−混貝)
88
(12−混貝)
89
(12−混貝)
90
(12−混土)
91
(11−混貝)
92
(12−混貝)
93
(11−混貝)
94
(11−混貝)
95
(11−混貝)
96
(10−混貝)
97
(11−混貝)
98
(12−混貝)
99
(10−混貝)
100
(11−混貝)
101
(11−混貝)
0
15 CM

(　)区、層位

図 31

第５区（１３～１５）　（図３２(模図）、３３～４０、４１～４８）

第５区の南側は南に傾斜し、第１貝層は１４区中頃で堆積は消滅する。第２貝層は北側に厚く堆積し、西の浜貝塚としては、遺物の包含も厚く、一括遺物の出土量も特に多い地区である。したがって、復元土器も図３３～４０まで約５０個を数える。

第５区は遺物の層位が明らかな地区である。図３２の「第５区土器出土模式図」に示した通り、上段左の土器群は、宮戸Ｉｂ式に併行する土器群で、復元土器では図３３の１と、拓図では図４１の資料がこれに当たる。環状突起を配し、口縁無文帯で下に沈線で区画する。口縁下に内部に連鎖沈線文を内蔵した、倒卵形沈線文がヨコに展開する文様帯を持つ、図４１の１～７がこれに相当する。出土層位は第１貝層が中心である。

上段右の土器群は、中期大木１０式に近いか、新しい要素として分離できる土器群と考えている。突起を配し、２個の連鎖刻目の施文の隆線、連鎖隆線のもの、ボタン状凹部突起の配された土器群である。ほぼ、１貝層の下部の１混貝層が出土層位に当たる。この土器群は、Ａトレンチの第１区から僅かであるが出土し、第５区に徐々に増加する。出土層位は概ね第２貝層上の混貝・１混貝である。

下段の土器群は、本貝塚の主体となる土器群である。深鉢形土器を基本として、量は少ないが浅鉢形・浅鉢注口（片口）土器、特記すべきは、整理中に初めて壷形土器の存在を知ったことである。それも広口壷形土器である。図３９の４８、図４０－４９～５４である。形態は頚部に把手を持たないもの、（図４０－４９～５２）頚部に橋状把手を持つもの、（図３９－４８、図４０－５３・５４）の２類型がある。把手を持つ類型は、大型壷形土器が多い。図４０の５４は、推定口径２３.４㎝、現在高３３.０㎝、最大胴径４３.２㎝であり、優に６０㎝を越えるものである。このように、貯蔵形態の壷形土器の出現に注目される。

下段土器群は第２貝層出土で基本的に深鉢土器群である。口縁直立かやや外反した器形で、口縁無文帯、頚部に沈線、隆帯、刺突列点の隆帯、刺突点列で区画がなされる。口縁部様態は、平縁、単純な突起、環状突起、橋状把手と様々である。突起の数も４個の偶数が一般的であるが、稀に図３９の４６のように、６個も存在する。また、図３６の２２は奇数個の５個もある。この突起に対して、鰭状の隆帯が延びる。ただし、環状突起・橋状把手の場合は、原則として隆帯は、突起・把手間に鰭状隆帯が付加される。

口縁区画した沈線、隆帯、刺突列点の隆帯下には、胴部に沈線、隆帯、刺突列点の隆帯で文様区画した間に、隆帯、沈線、鰭状隆帯を付加し、また、刺突痕を内蔵した文様区画を抱え込むように、磨消手法によって、逆Ｃ字、逆Ｌ字、Ｃ字（逆コ字）状の区画文様がヨコに連鎖する。この区画文様は突起数と同じで４個が普通であるが、図３４の１３は突起と環状突起数８個、磨消区画が８個である。図３５の１７は口縁やや内反した器形で、突起がないため基準がないが、復元図から９個の磨消区画が巡るようである。

また、図３８の４２には、波状口縁のもので、環状突起であるため突起間に、鰭状隆帯が付加されている。

胴部様態は口縁部から徐々にすぼまっていく形態(図３３-３～８)と胴部で膨らむ形態(図２４-１０、３、図３６-２３、２４、図３７-３０）、口縁から胴部下付近まで同じで、底部に近くなって急にすぼまる形態（図３６-２５）もある。

文様施文から観察して、口縁に列点だけ、隆帯だけのものが存在し、文様帯を構成する土器群から見ると簡略されたものと見られる。地文として縄文、撚糸文があるが、撚糸文施文が多い。

底部は平底で無文、網代文、葉文とあり、（図４７・４８）やや無文底が多いようである。

図３８の３９のように高台付きもある。

第４区１２から第５区にかけて遺物の堆積が多く、一括遺物が特に多い地区であることは、先に述べたが、この地区から大型土器の出土が目に付く。第４区出土の図２５の１９は口径３０.８㎝、底径１５.２㎝・器高６３.２㎝である。ほぼ口径に対し、器高は約２倍で長胴である。図３５の１７は完形品ではないが、ほぼ完形に近い。口径３０.０㎝、現高５７.４㎝であり、これも優に器高６０㎝を越す土器である。また、図４０の５４のような６０㎝を越す広口壷形土器を含め、超大形土器の存在をどう考えるか注目される。

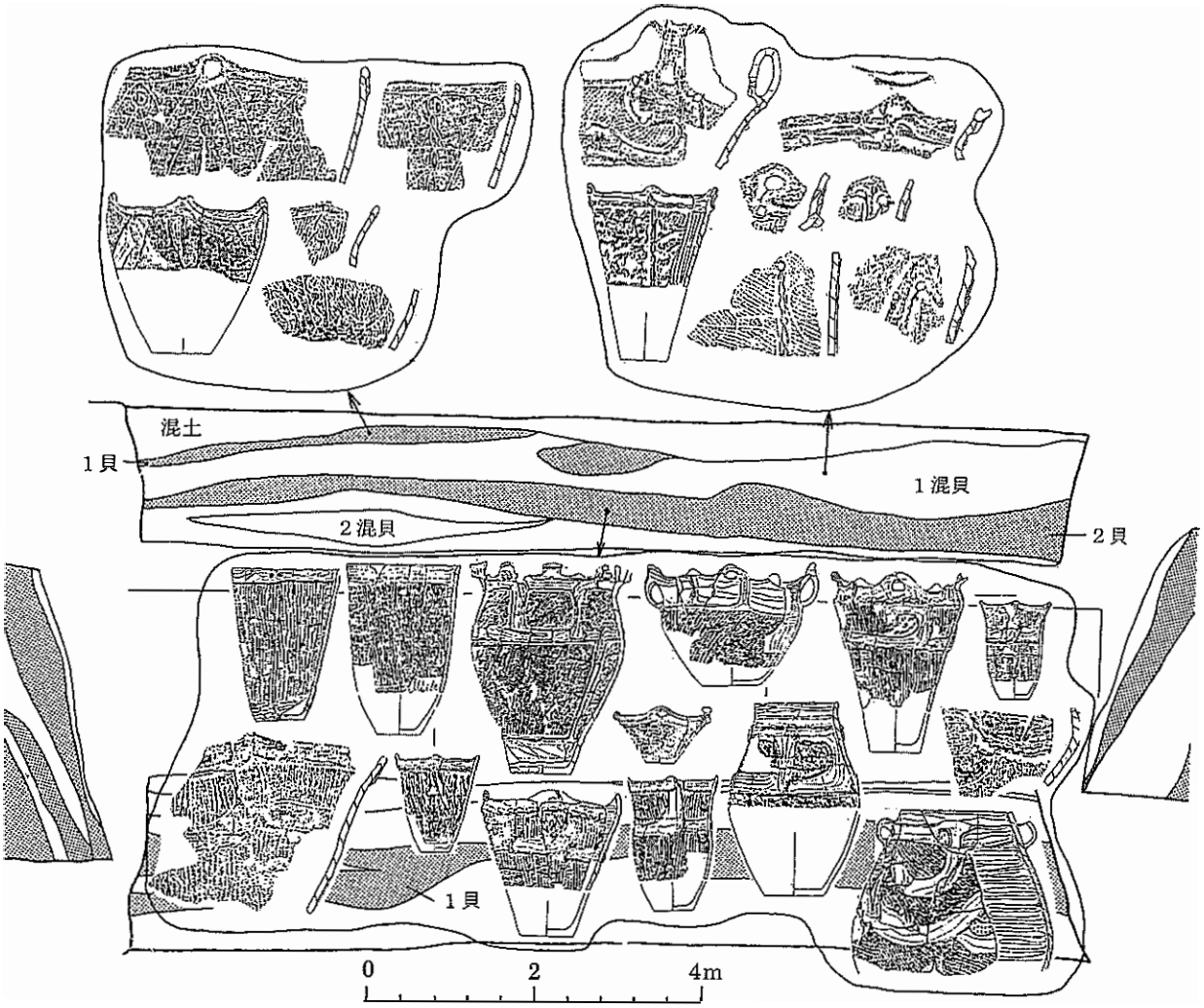
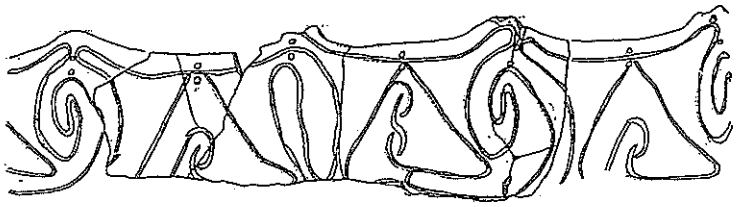
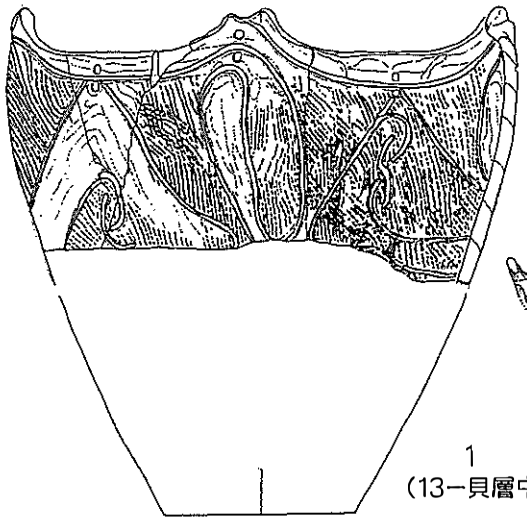
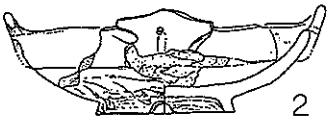


図３２　第５区土器出土模式図

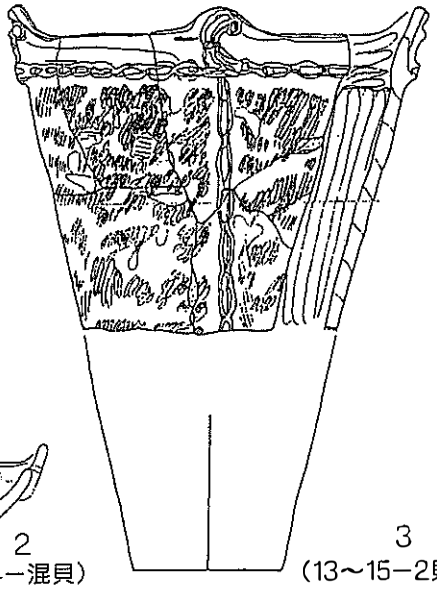




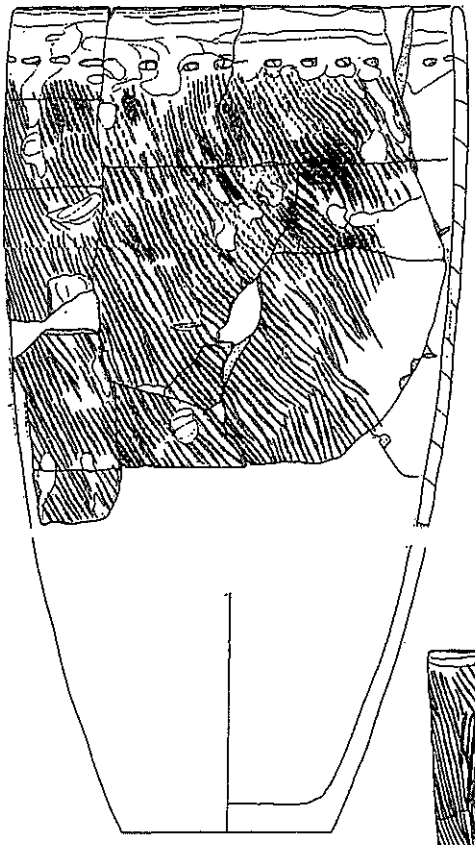
1
(13－貝層中)



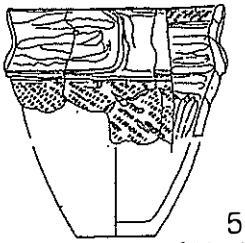
2
(14－混貝)



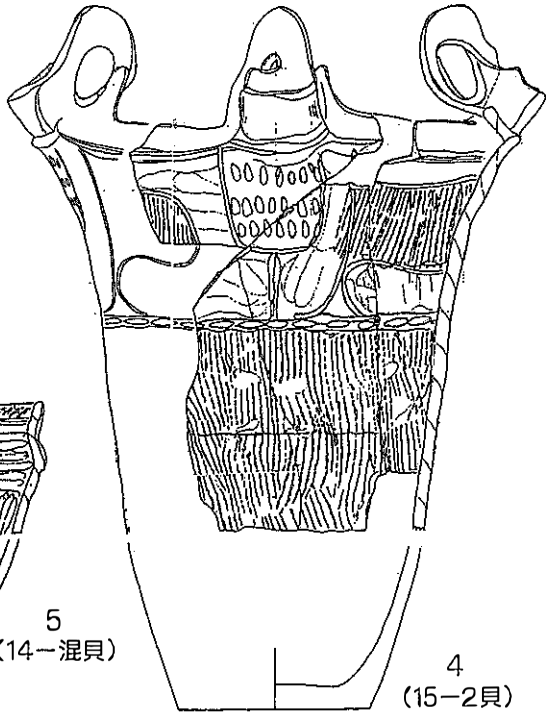
3
(13～15－2貝･混貝)



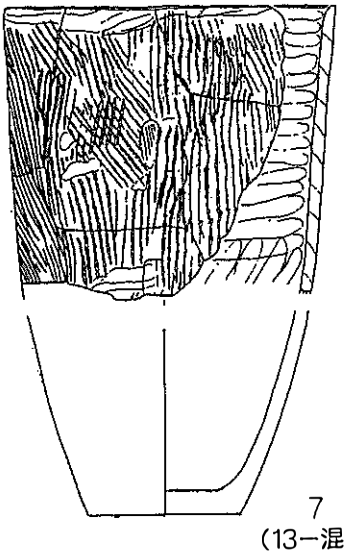
6
(15－混貝)



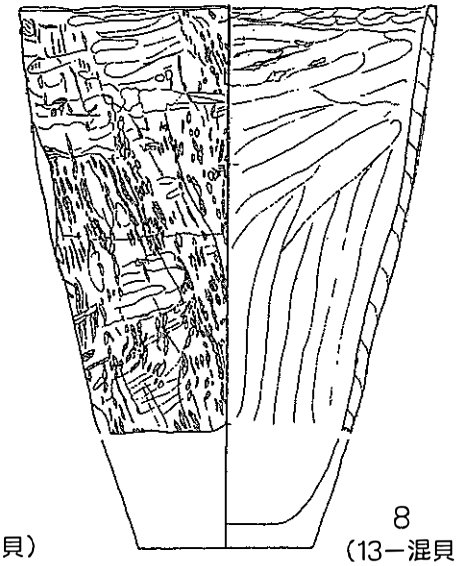
5
(14－混貝)



4
(15－2貝)



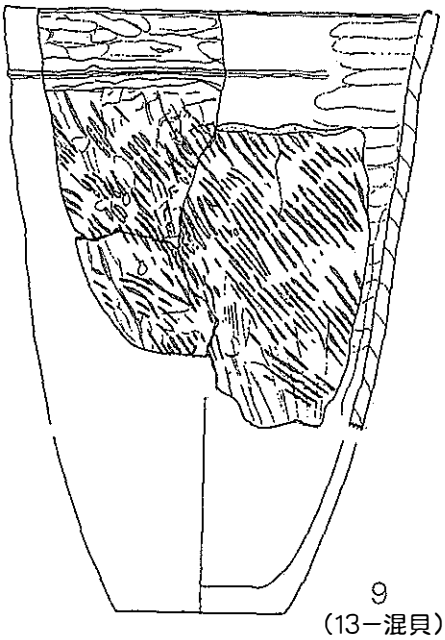
7
(13－混貝)



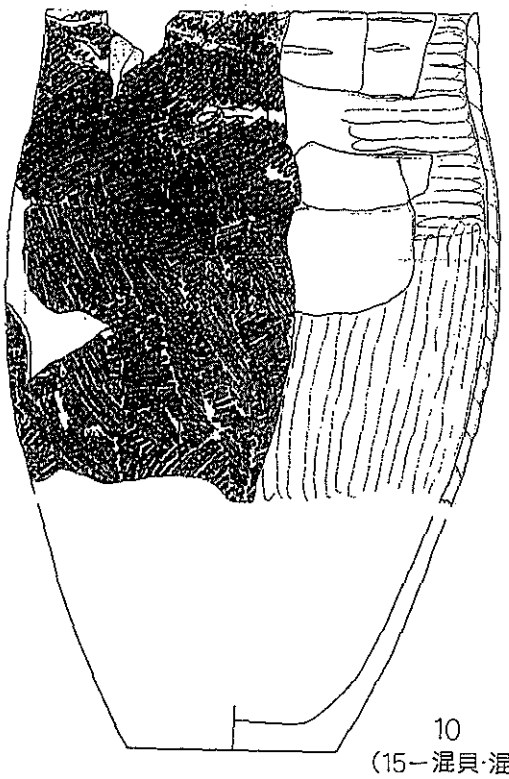
8
(13－混貝)

(　)区､層位

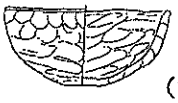
図 33



9
(13－混貝)

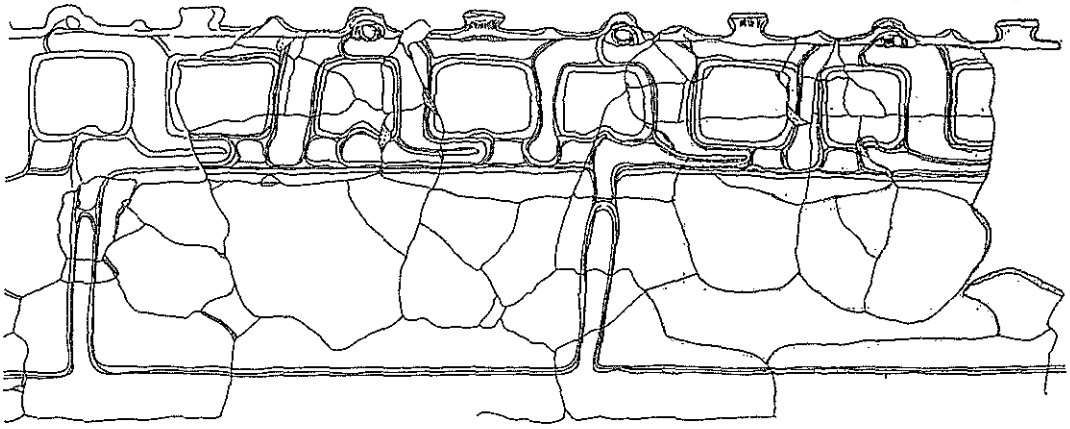


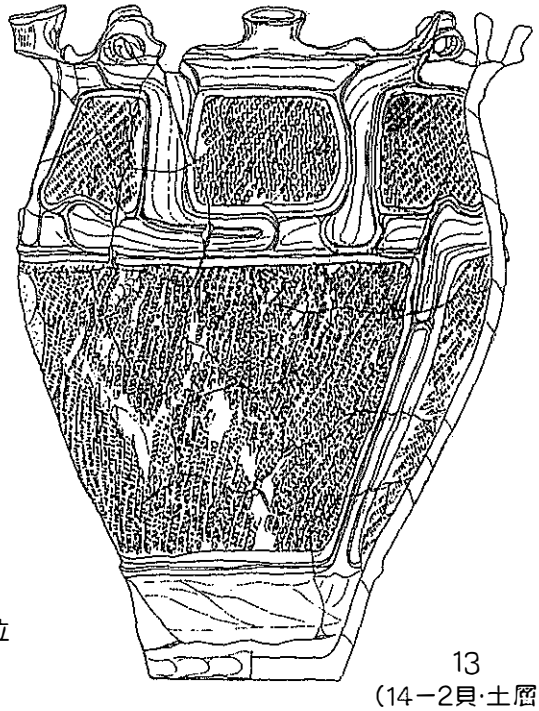
10
(15－混貝･混土)



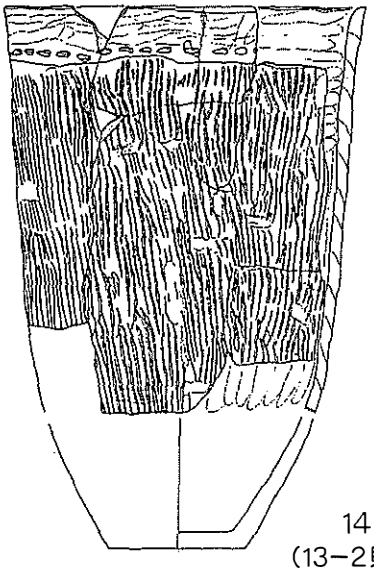
11
(15－2貝)

12
(14－2貝)





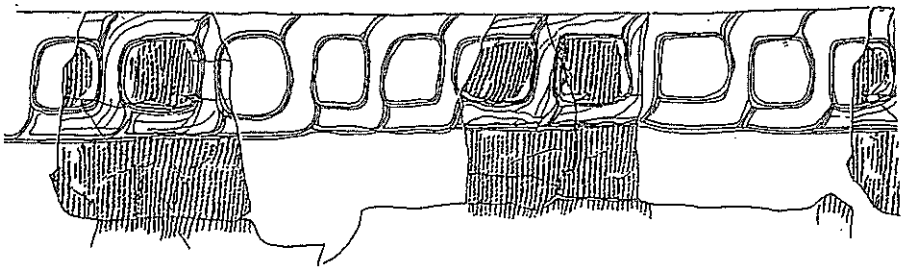
13
(14－2貝･土層)

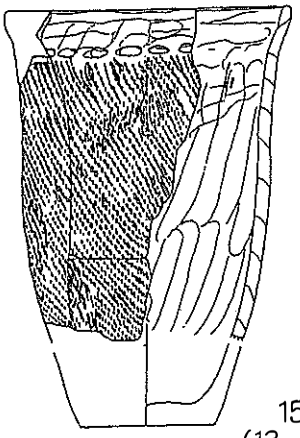


14
(13－2貝上)

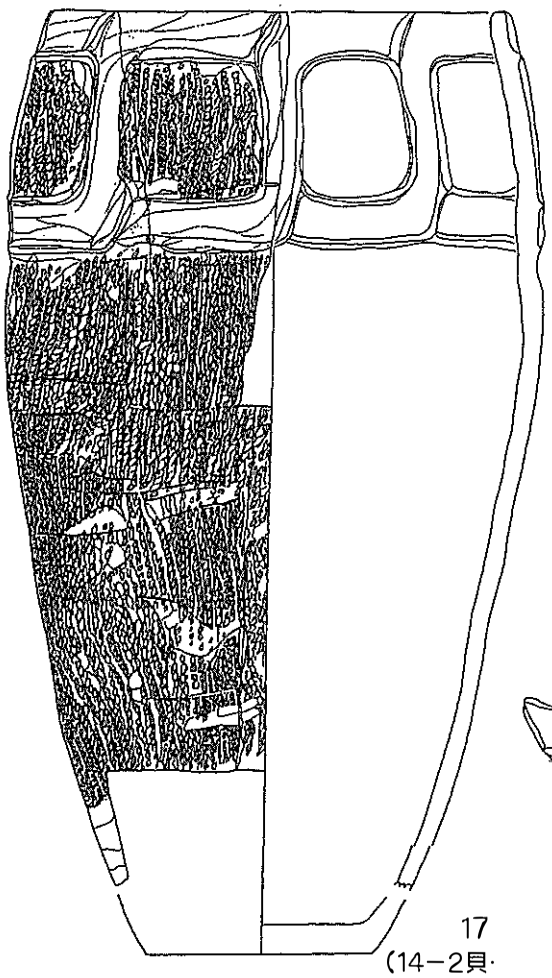
(　)区、層位

図 34

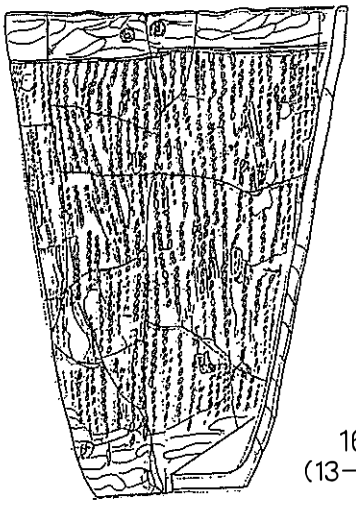




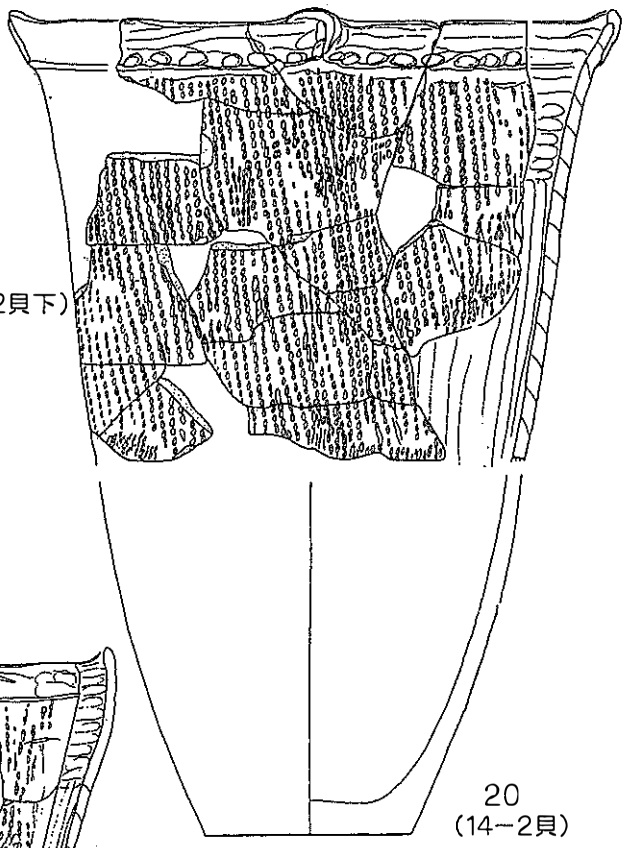
15
(13−2貝)



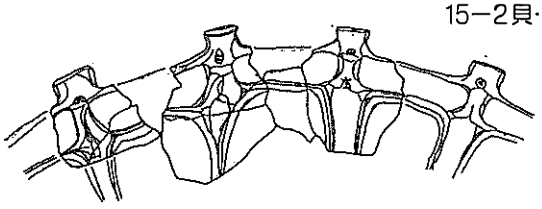
17
(14−2貝·
15−2貝·13−2貝下)

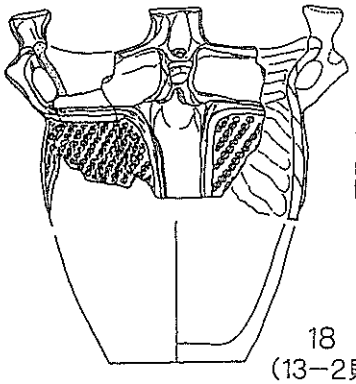


16
(13−2貝)

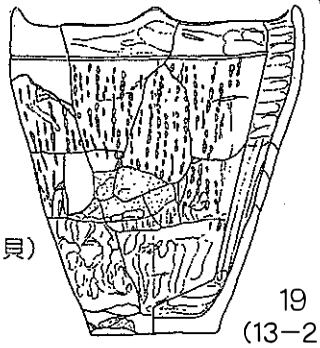


20
(14−2貝)





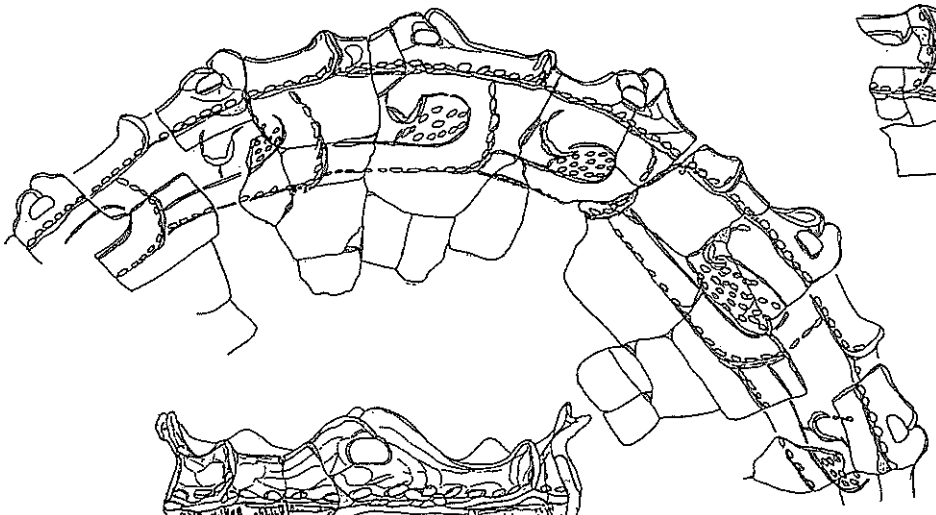
18
(13−2貝)

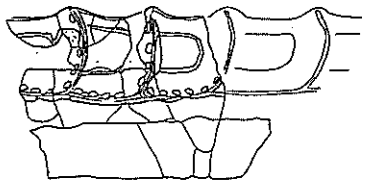


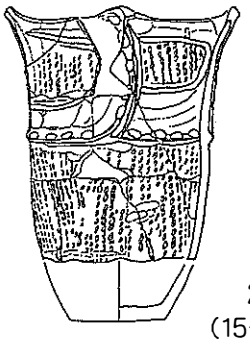
19
(13−2貝)

( )区、層位

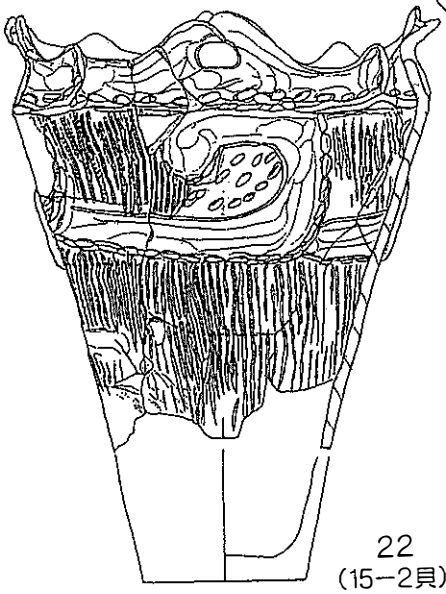
図 35



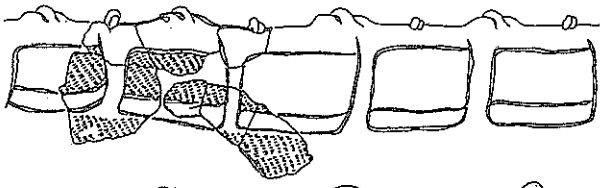


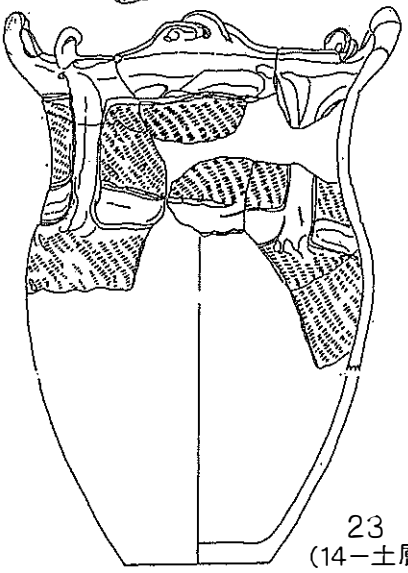


21
(15−2貝)

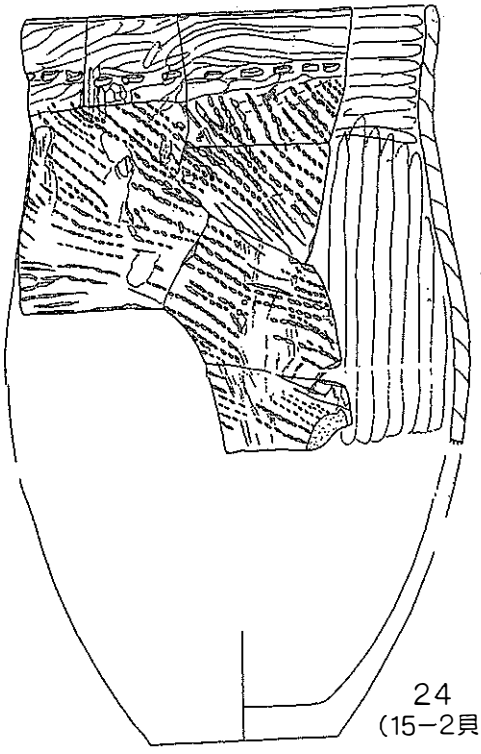


22
(15−2貝)

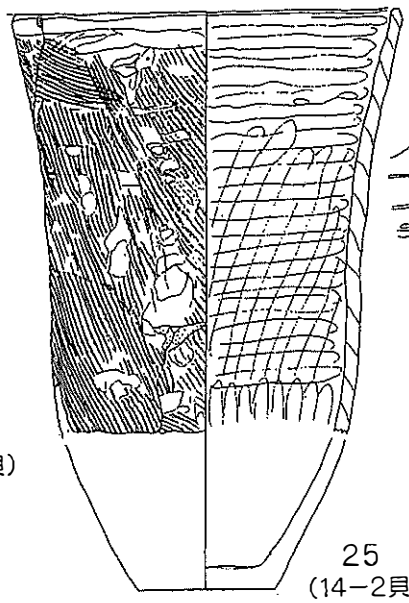




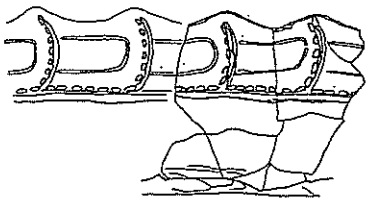
23
(14−土層)

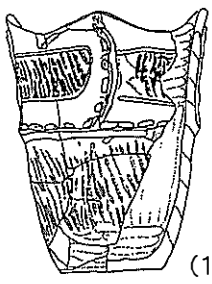


24
(15−2貝)



25
(14−2貝)

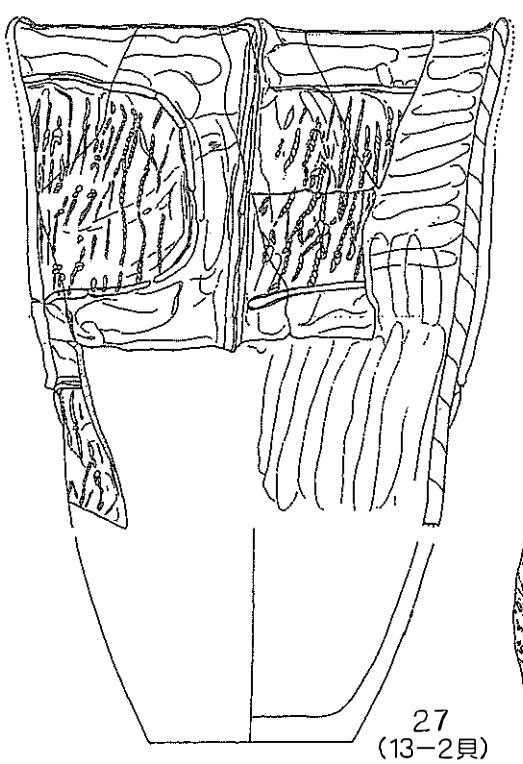




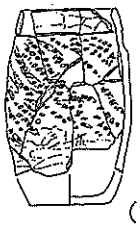
26
(15−2貝)

( )区、層位

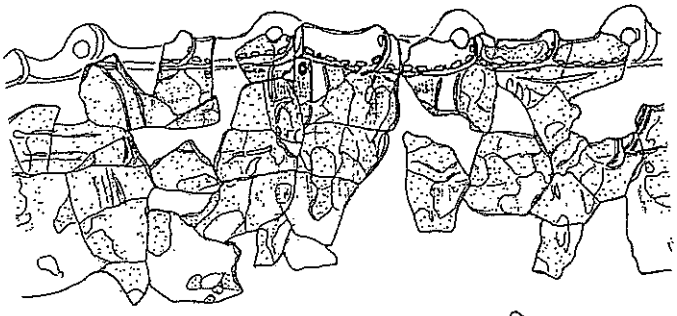
図 36

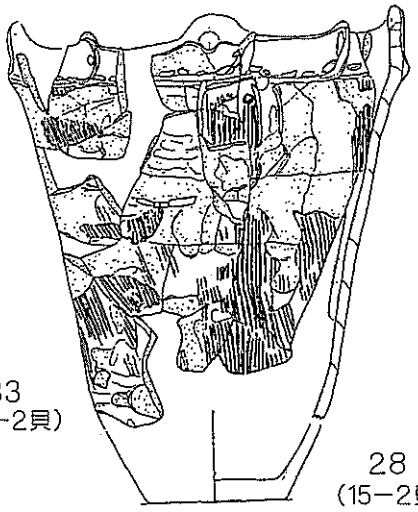


27
(13−2貝)

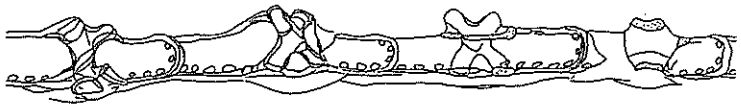


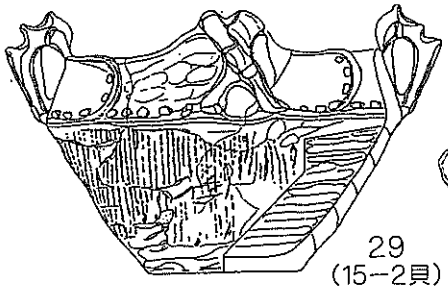
33
(15−2貝)



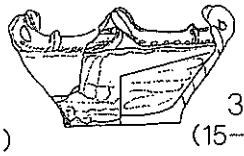


28
(15−2貝)

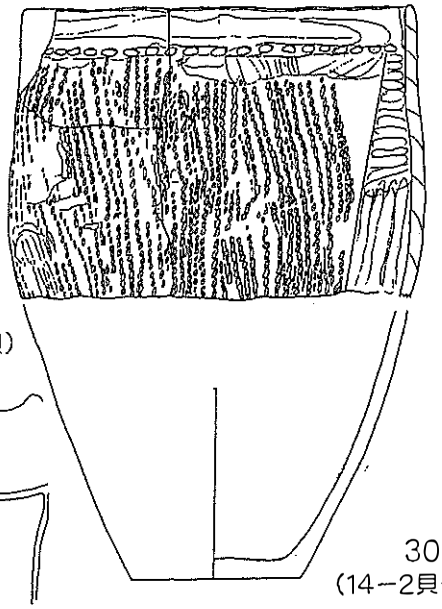




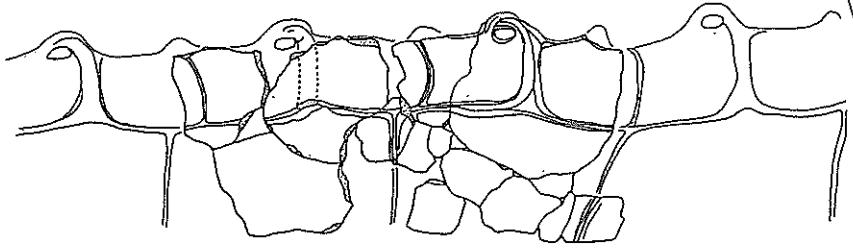
29
(15−2貝)

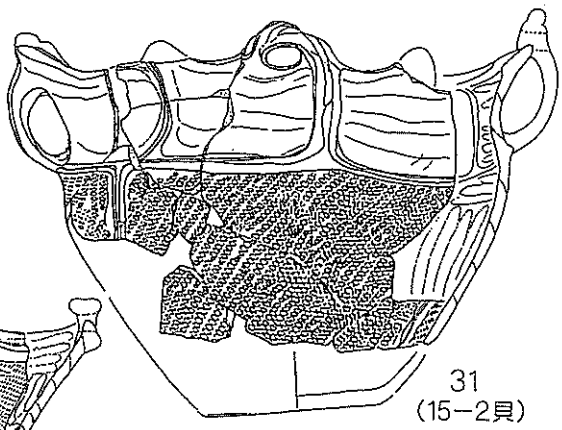


34
(15−2貝)

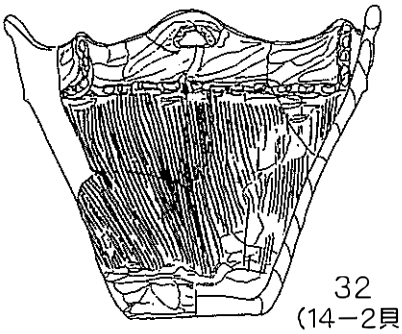


30
(14−2貝·13−土層)



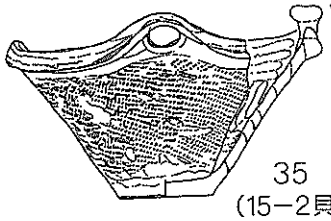


31
(15−2貝)



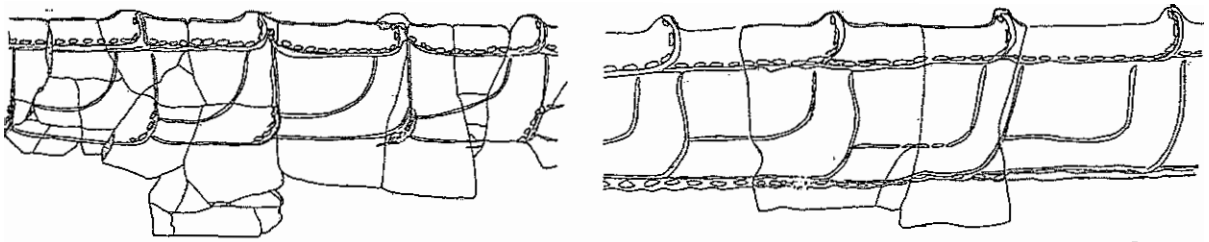
32
(14−2貝)

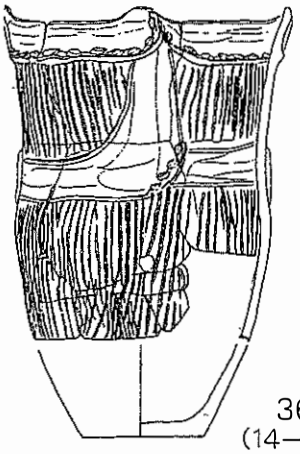
( )区、層位



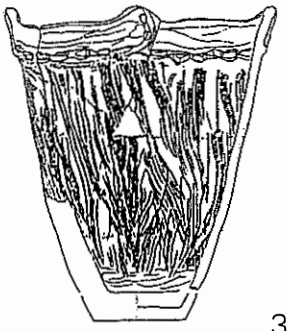
35
(15−2貝)

図 37

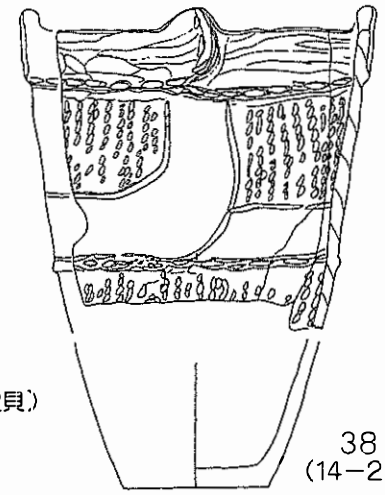




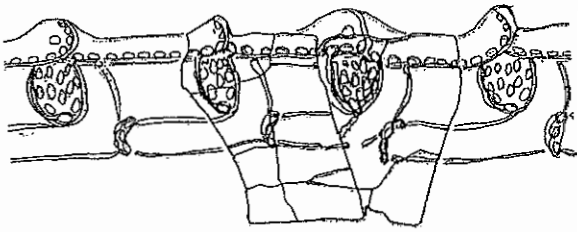
36
(14−2貝)

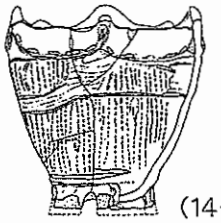


37
(13〜15−2貝)

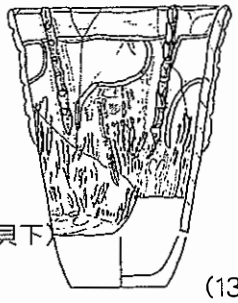


38
(14−2貝)

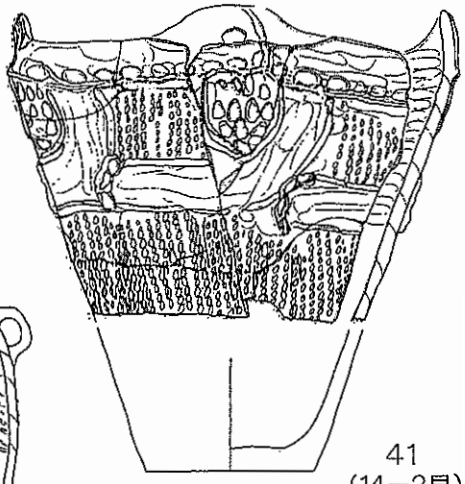




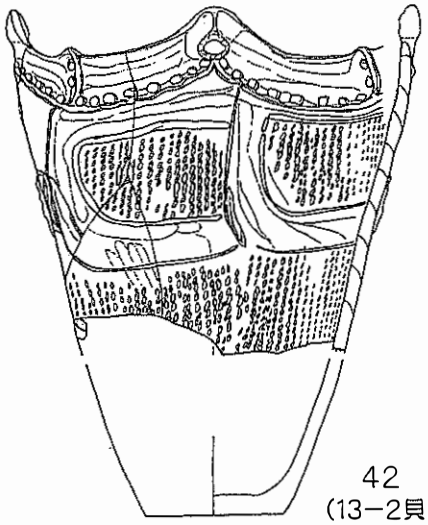
39
(14−2貝下)



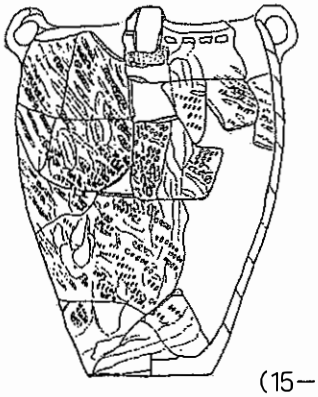
40
(13−2貝)



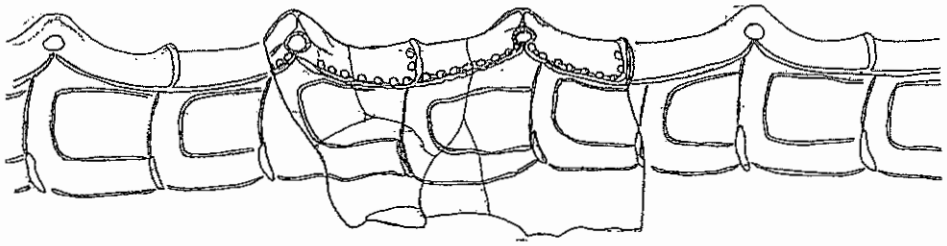
41
(14−2貝)



42
(13−2貝)

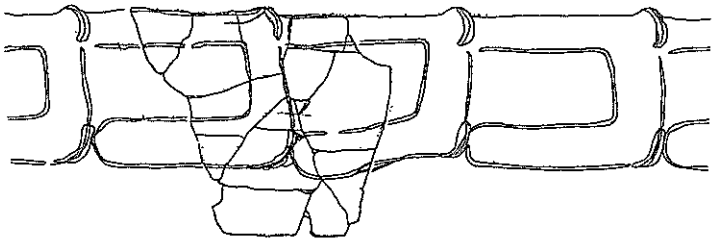


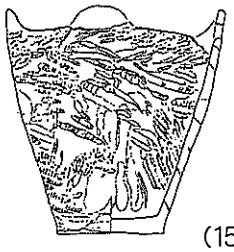
43
(15−2貝(混貝)



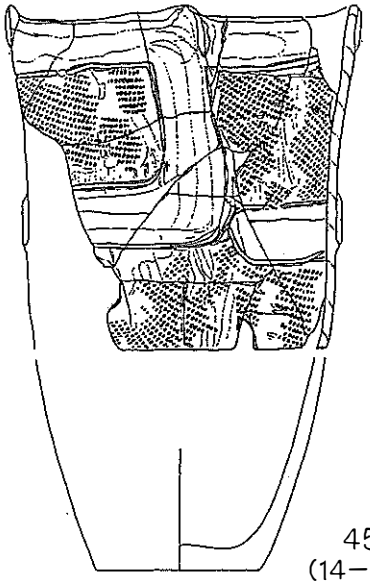
( )区、層位

図 38

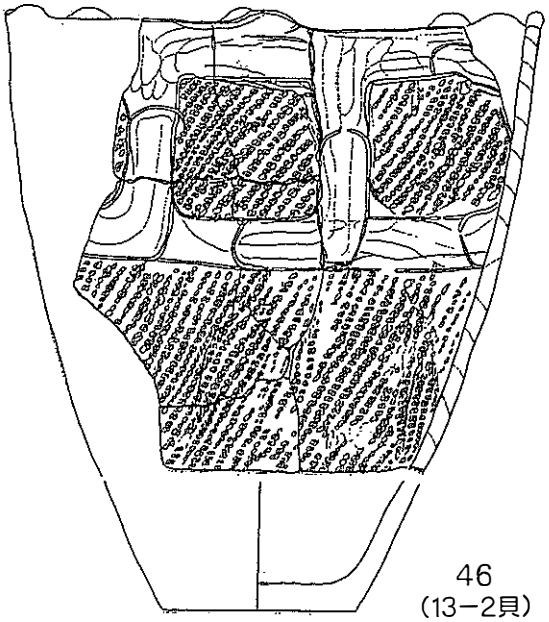




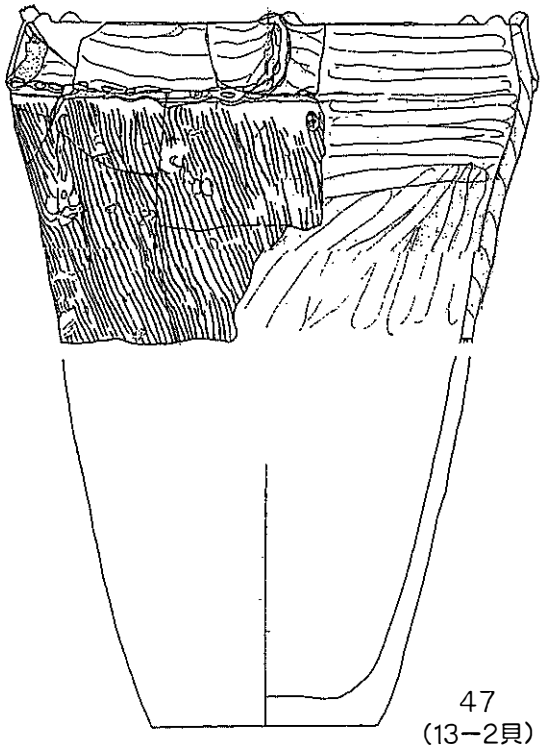
44
(15−2貝)



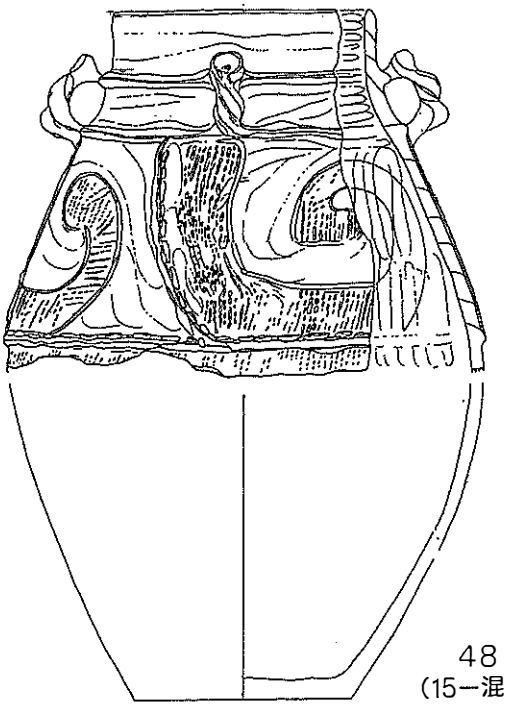
45
(14−2貝)



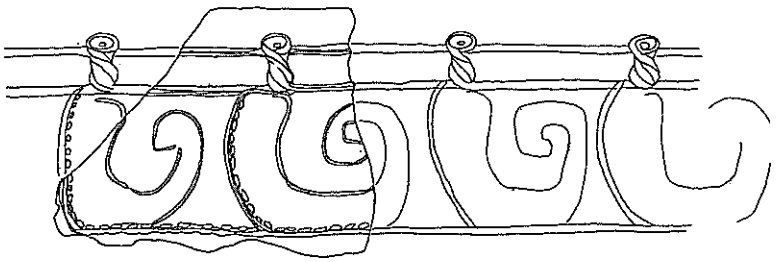
46
(13−2貝)



47
(13−2貝)



48
(15ー混貝)



(　)区、層位

図 39

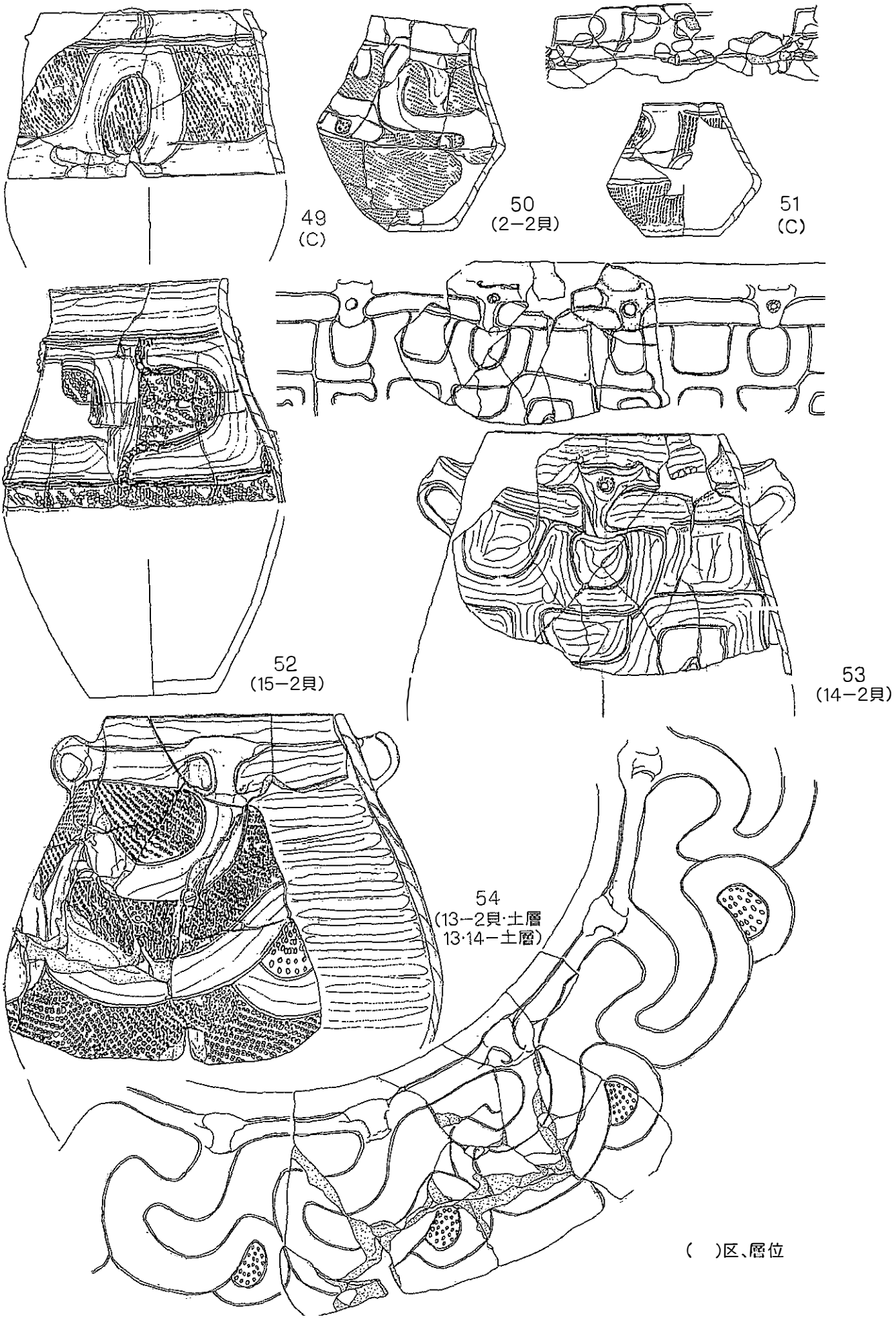


図 40

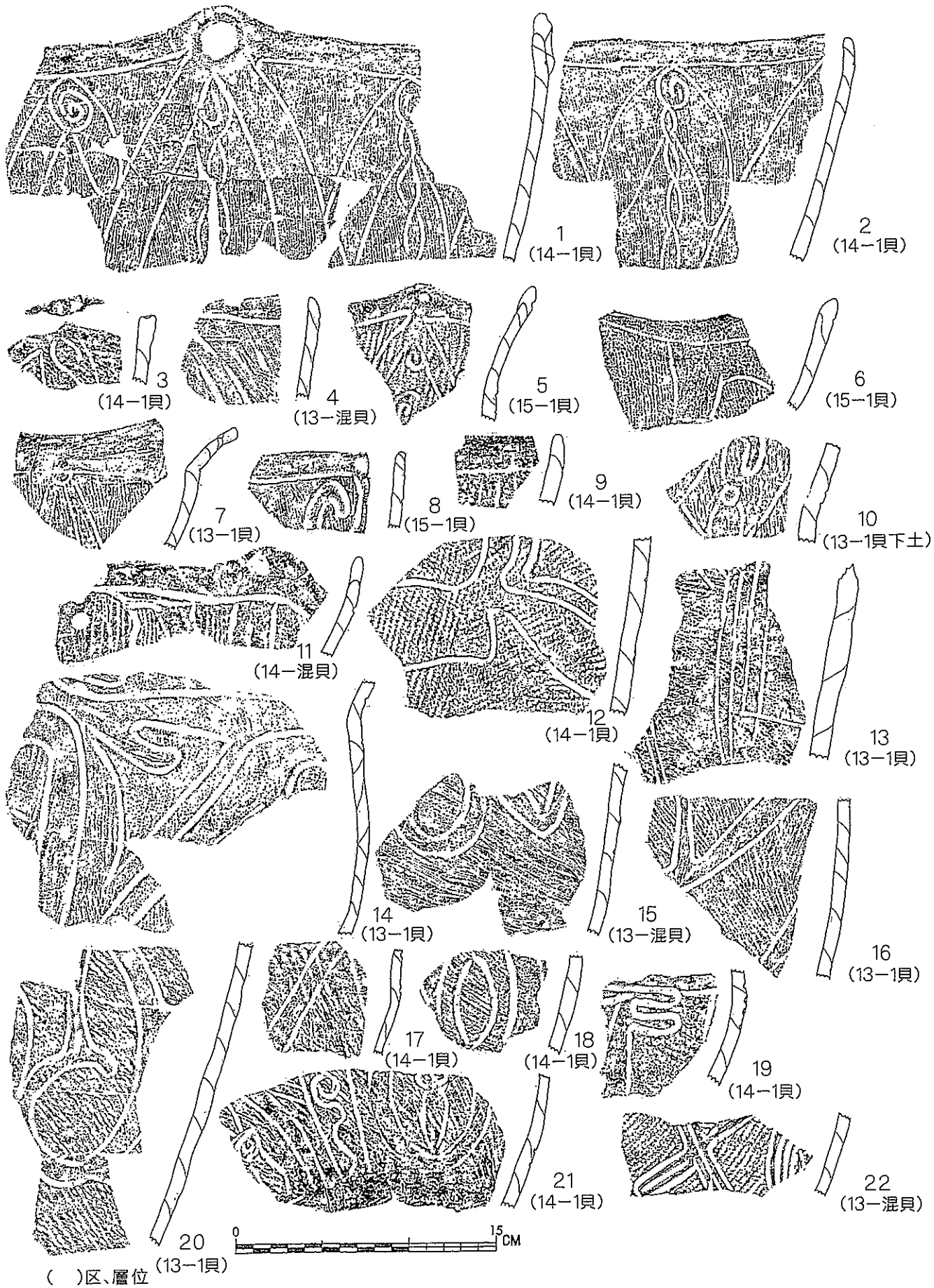
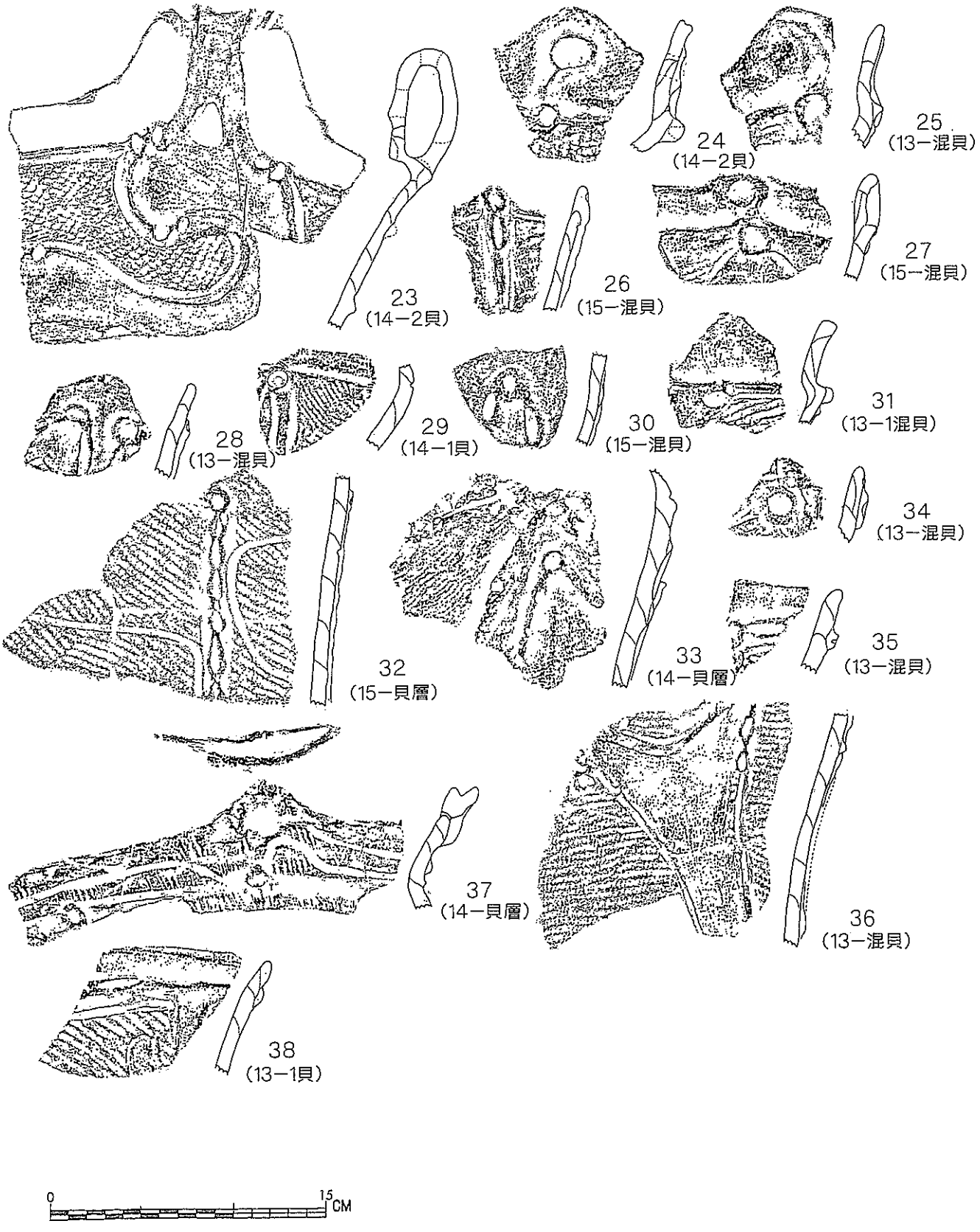
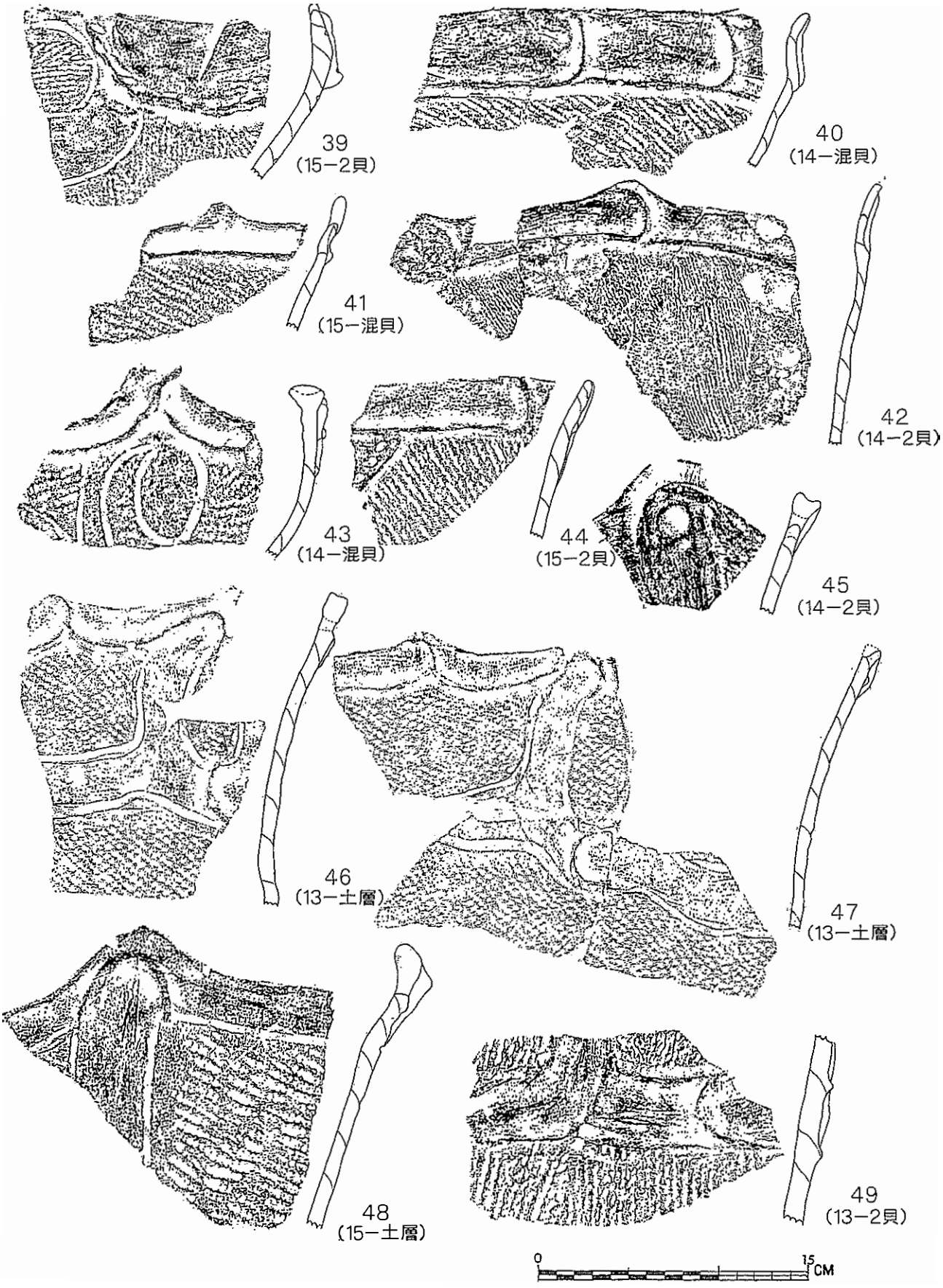

1
(14−1貝)
2
(14−1貝)
3
(14−1貝)
4
(13−混貝)
5
(15−1貝)
6
(15−1貝)
7
(13−1貝)
8
(15−1貝)
9
(14−1貝)
10
(13−1貝下土)
11
(14−混貝)
12
(14−1貝)
13
(13−1貝)
14
(13−1貝)
15
(13−混貝)
16
(13−1貝)
17
(14−1貝)
18
(14−1貝)
19
(14−1貝)
20
(13−1貝)
21
(14−1貝)
22
(13−混貝)
0
15CM
(　)区、層位

図 41


23
(14−2貝)
24
(14−2貝)
25
(13−混貝)
26
(15−混貝)
27
(15−混貝)
28
(13−混貝)
29
(14−1貝)
30
(15−混貝)
31
(13−1混貝)
32
(15−貝層)
33
(14−貝層)
34
(13−混貝)
35
(13−混貝)
36
(13−混貝)
37
(14−貝層)
38
(13−1貝)
0
15CM

(　)区、層位

図 42


39
(15−2貝)
40
(14−混貝)
41
(15−混貝)
42
(14−2貝)
43
(14−混貝)
44
(15−2貝)
45
(14−2貝)
46
(13−土層)
47
(13−土層)
48
(15−土層)
49
(13−2貝)
0
15
CM

(　)区、層位

図 43

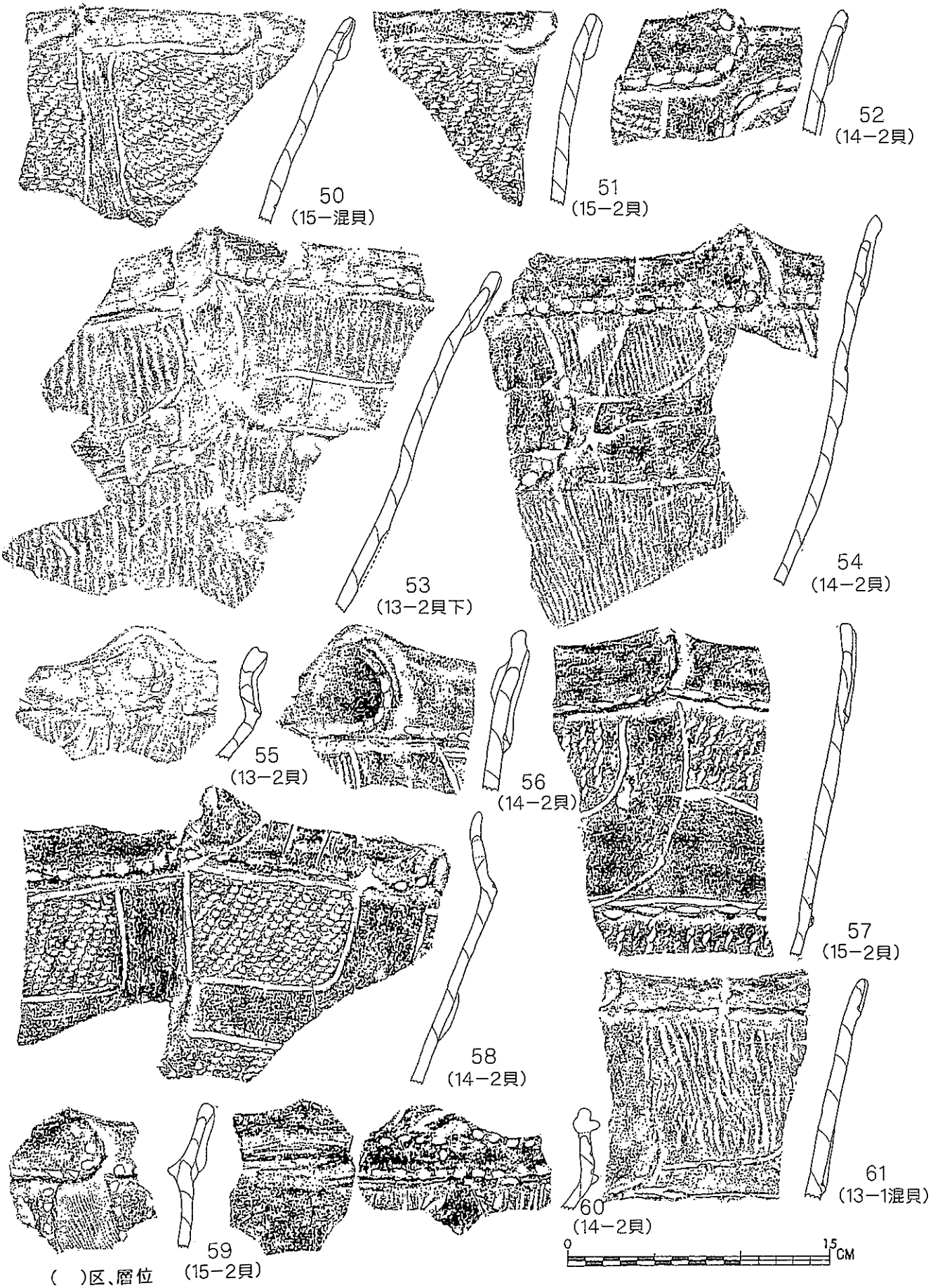
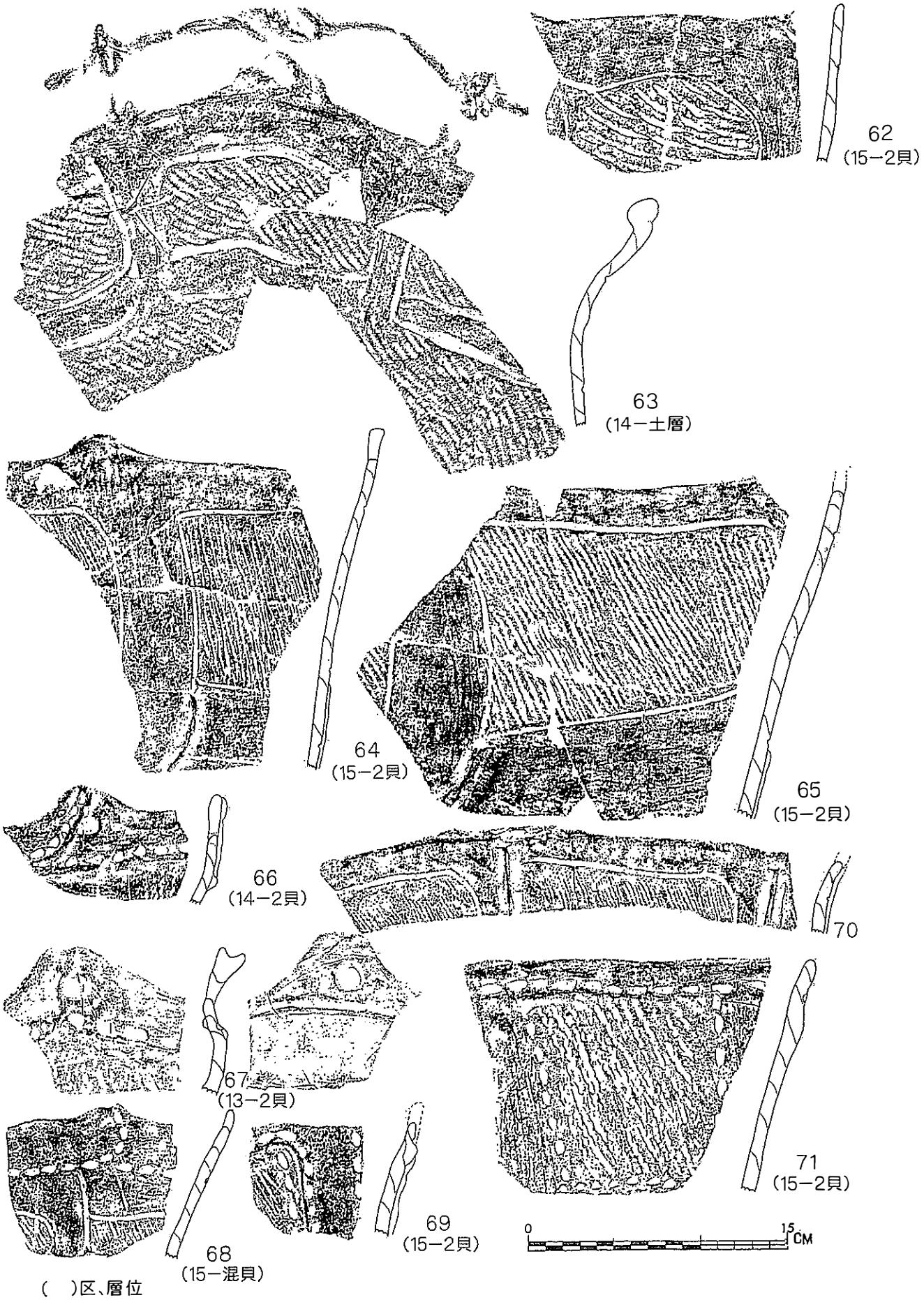
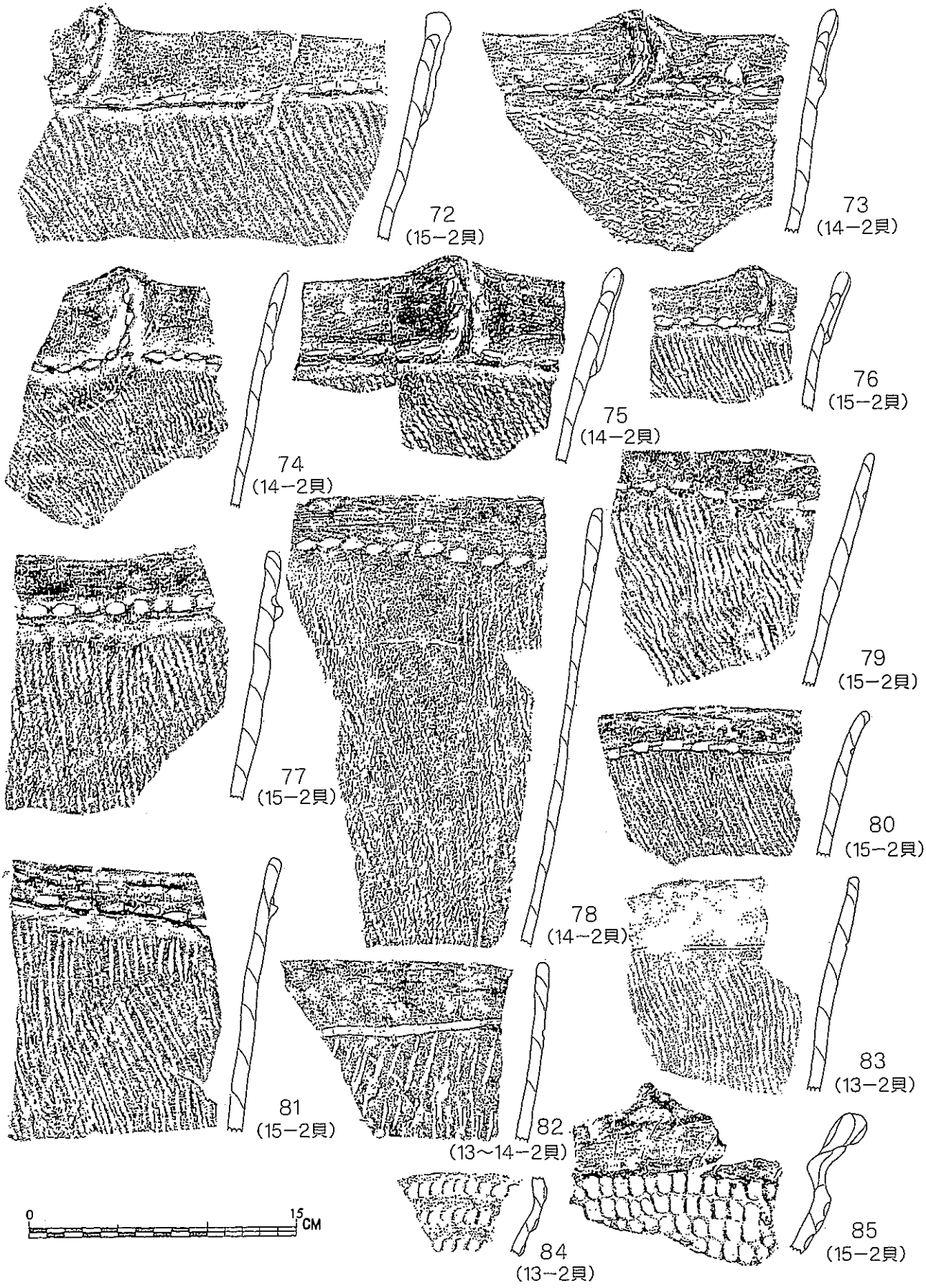

50
(15−混貝)
51
(15−2貝)
52
(14−2貝)
53
(13−2貝下)
54
(14−2貝)
55
(13−2貝)
56
(14−2貝)
57
(15−2貝)
58
(14−2貝)
59
(15−2貝)
60
(14−2貝)
61
(13−1混貝)
0
15CM
(　)区、層位

図 44


62
(15−2貝)
63
(14−土層)
64
(15−2貝)
65
(15−2貝)
66
(14−2貝)
70
67
(13−2貝)
71
(15−2貝)
69
(15−2貝)
68
(15−混貝)
0
15CM

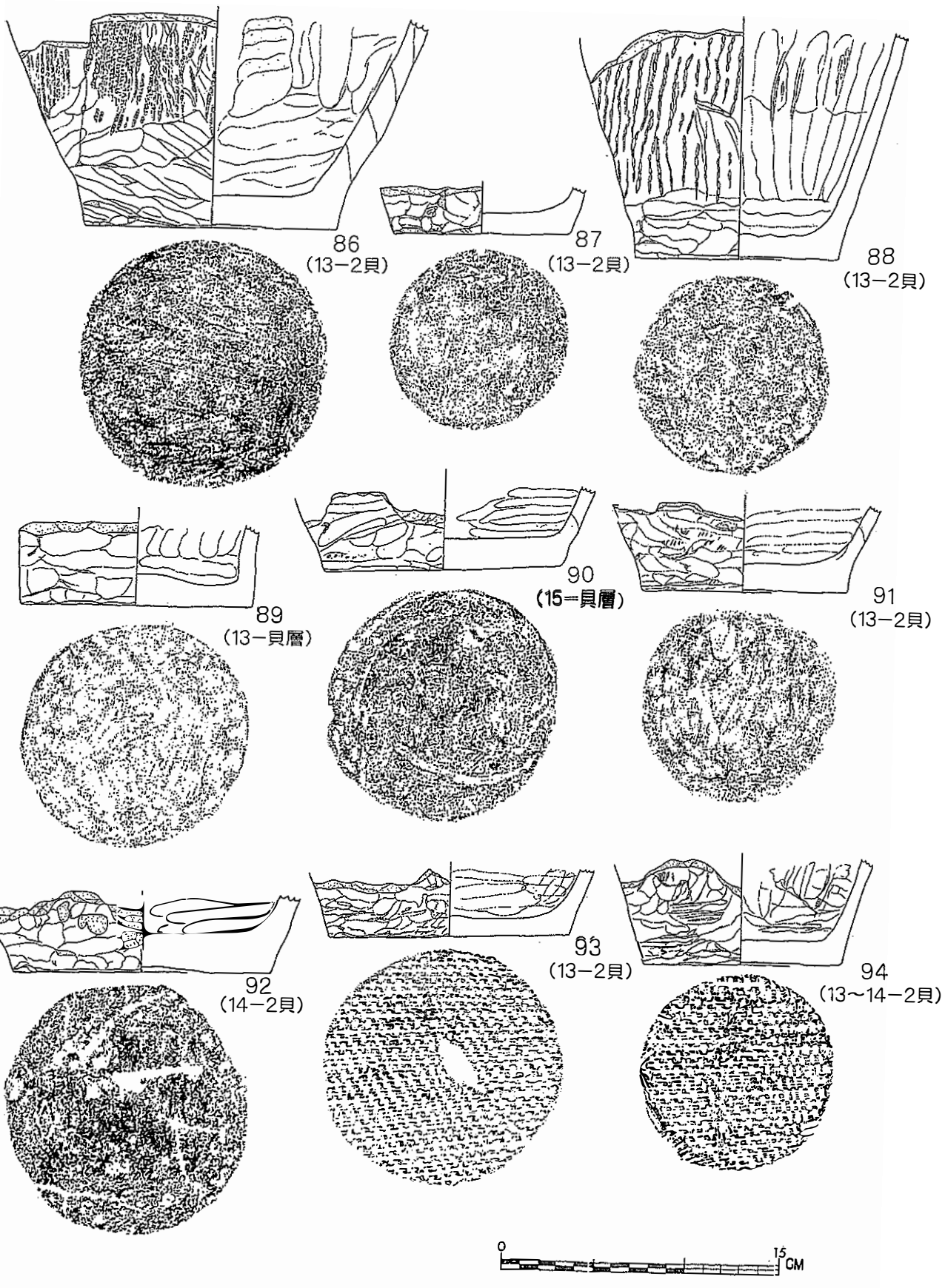
( )区、層位

図 45


72
(15−2貝)
73
(14−2貝)
74
(14−2貝)
75
(14−2貝)
76
(15−2貝)
77
(15−2貝)
78
(14−2貝)
79
(15−2貝)
80
(15−2貝)
81
(15−2貝)
82
(13〜14−2貝)
83
(13−2貝)
84
(13−2貝)
85
(15−2貝)
0
15CM

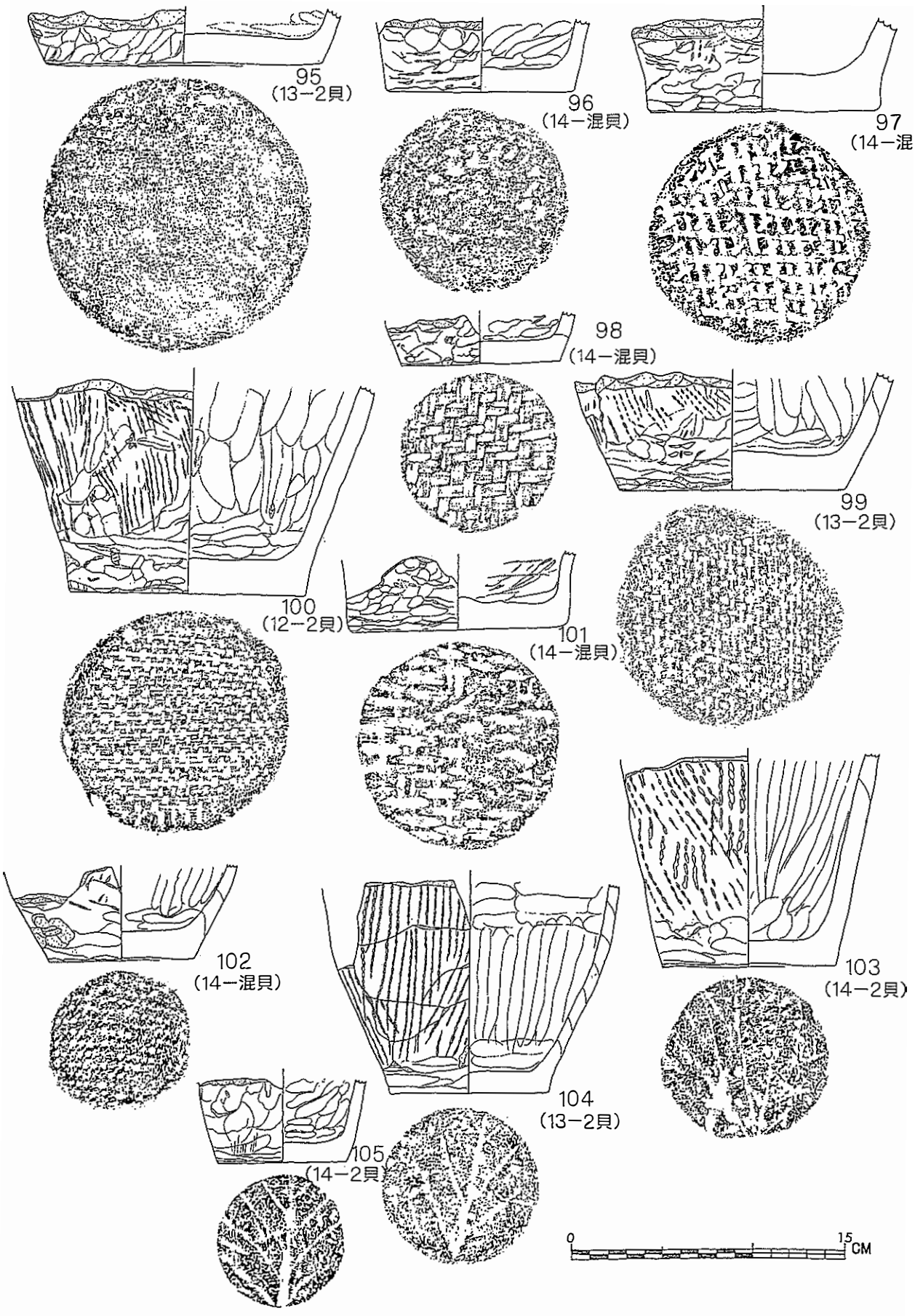
(　)区、層位

図 46


86
(13−2貝)
87
(13−2貝)
88
(13−2貝)
89
(13−貝層)
90
(15−貝層)
91
(13−2貝)
92
(14−2貝)
93
(13−2貝)
94
(13〜14−2貝)
0
15
CM

(　)区、層位

図 47


95
(13−2貝)
96
(14−混貝)
97
(14−混土)
98
(14−混貝)
99
(13−2貝)
100
(12−2貝)
101
(14−混貝)
102
(14−混貝)
103
(14−2貝)
104
(13−2貝)
105
(14−2貝)
0
15
CM

(　)区、層位

図 48

［３］　Ｂトレンチ　（図４９(模式図)、５０～５１、５２～６１）

出土土器で見る限り、１混、１貝層はトレンチの東端の上層であるために土器の出土はない。従って時期は不明である。図４９の「Ｂトレンチ土器出土模式図」で示した通り、上段左端は２混貝出土の土器群で、後期中葉の宮戸Ⅱｂ式に相当する。２混貝には途中から始まる貝層を内蔵している。このグループに大洞Ａ式の小形土器が混在する。２混貝本来の物なのか明らかでない。次は、図５０－３の１点だけの土器出土、３混貝である。この層にも途中から始まる貝層を内蔵する。厚い層であるが、土器出土はこれだけで石斧や叉状鹿角、骨刀、貝輪の出土があるだけで、時期は後期前葉の入組文系の土器群である。下段左は第２貝層出土の土器群で、後期中葉宮戸Ⅱａ式の仲間である。２貝もこの大形土器２点のみで、３混と同じく、他の遺物が数点出土しているだけである。

上段中央は、３区４混貝出土で、後期前葉の帯縄文の入組文系の土器群である。その右隣は２区４混貝出土の中央部の土器群と同じ時期の物である。右端中央は１区４混貝出土で同断のものである。上段中央右は２区２土層と２区４混貝出土でこれも入組文系に属する。上段右端は４混貝出土で、後期初頭の宮戸Ⅰｂ式よりやや新しい土器群である。

下段左を除いた下段の土器は、１～３区の４混貝層出土で、後期初頭宮戸Ⅰｂ式に相当する土器群であり、そうすると、４混貝層出土の土器は後期前葉から初頭まで、数段階の土器群を含むことになる。３混貝、２貝、２土層は出土土器が極端に少なく、しかも４混貝層に各種の土器が含まれるので、層位を決めるのに苦労した。そのために、「土器出土模式図」の作成となったのである。３土層という記名された土器群が存在する。３土層は最下層であり、これを認めると層位の逆転になるので注意が必要である(図５８参照)。地区層位不明の土器の多いことも問題がある調査である。(図59~61に層不明の土器)

Ｂトレンチの出土土器は、『西の浜貝塚』の概報作成の時に、摘み整理を実施しその後始末が不良であったと想像される。

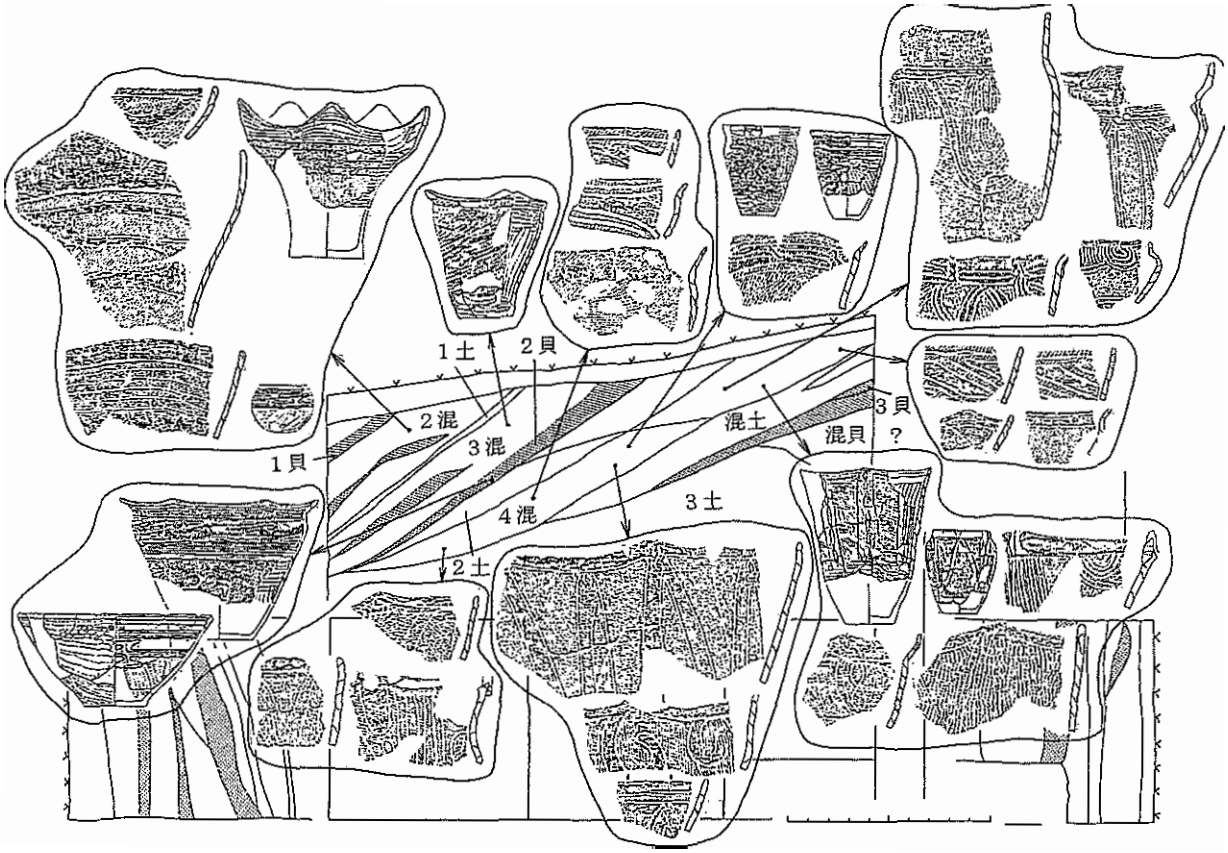
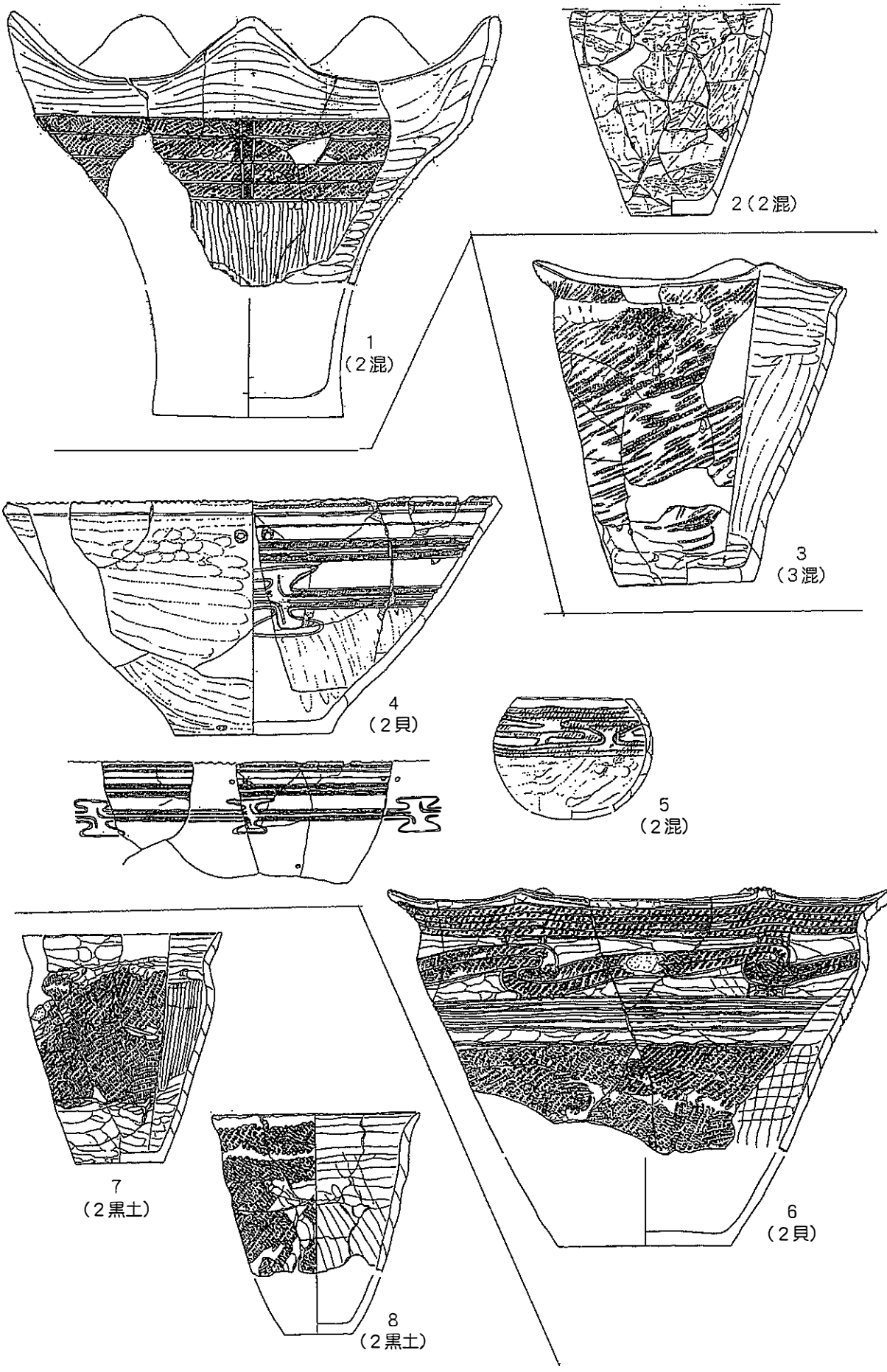


図４９　Ｂトレンチ土器出土模式図



（　）層位

図 50

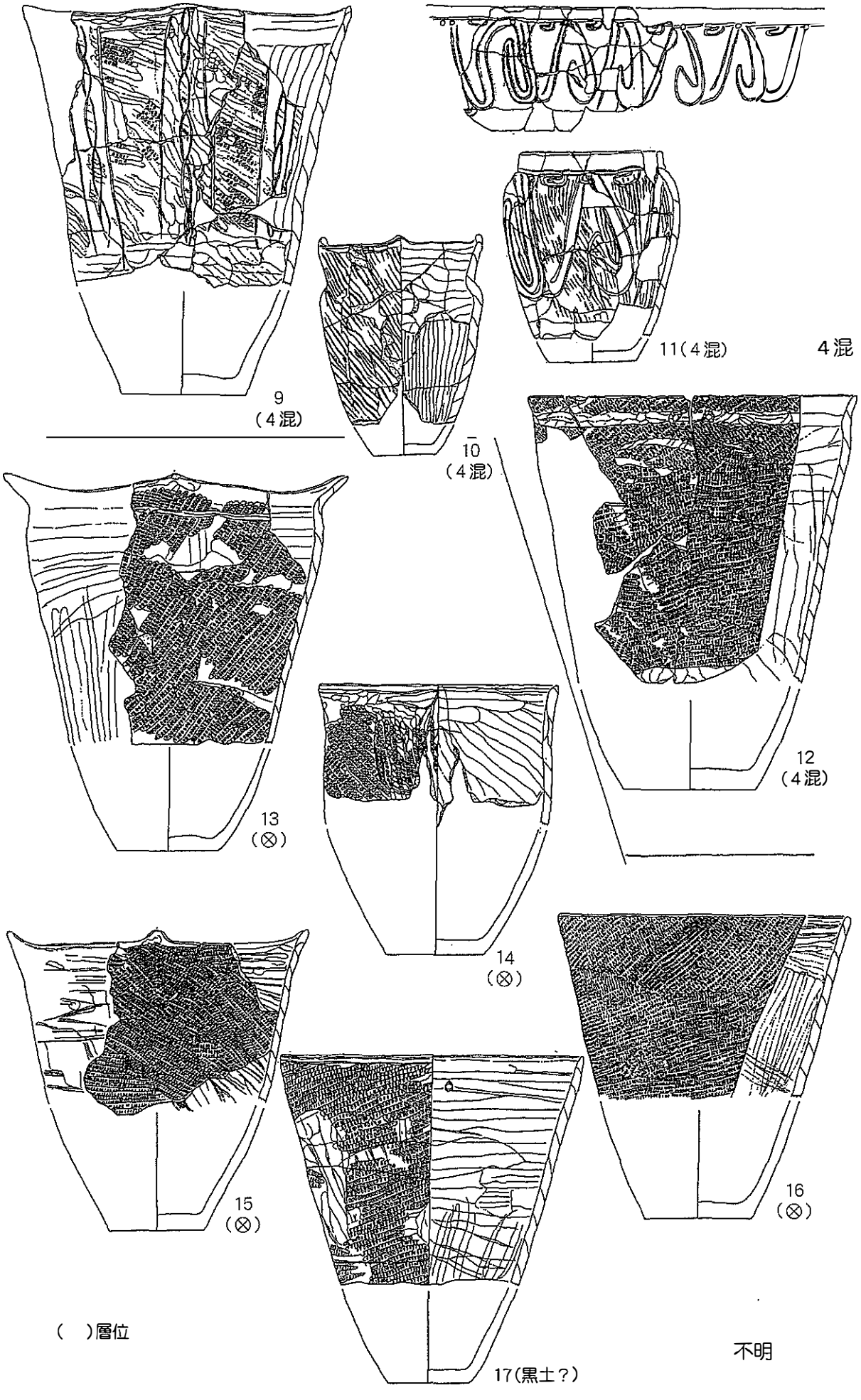
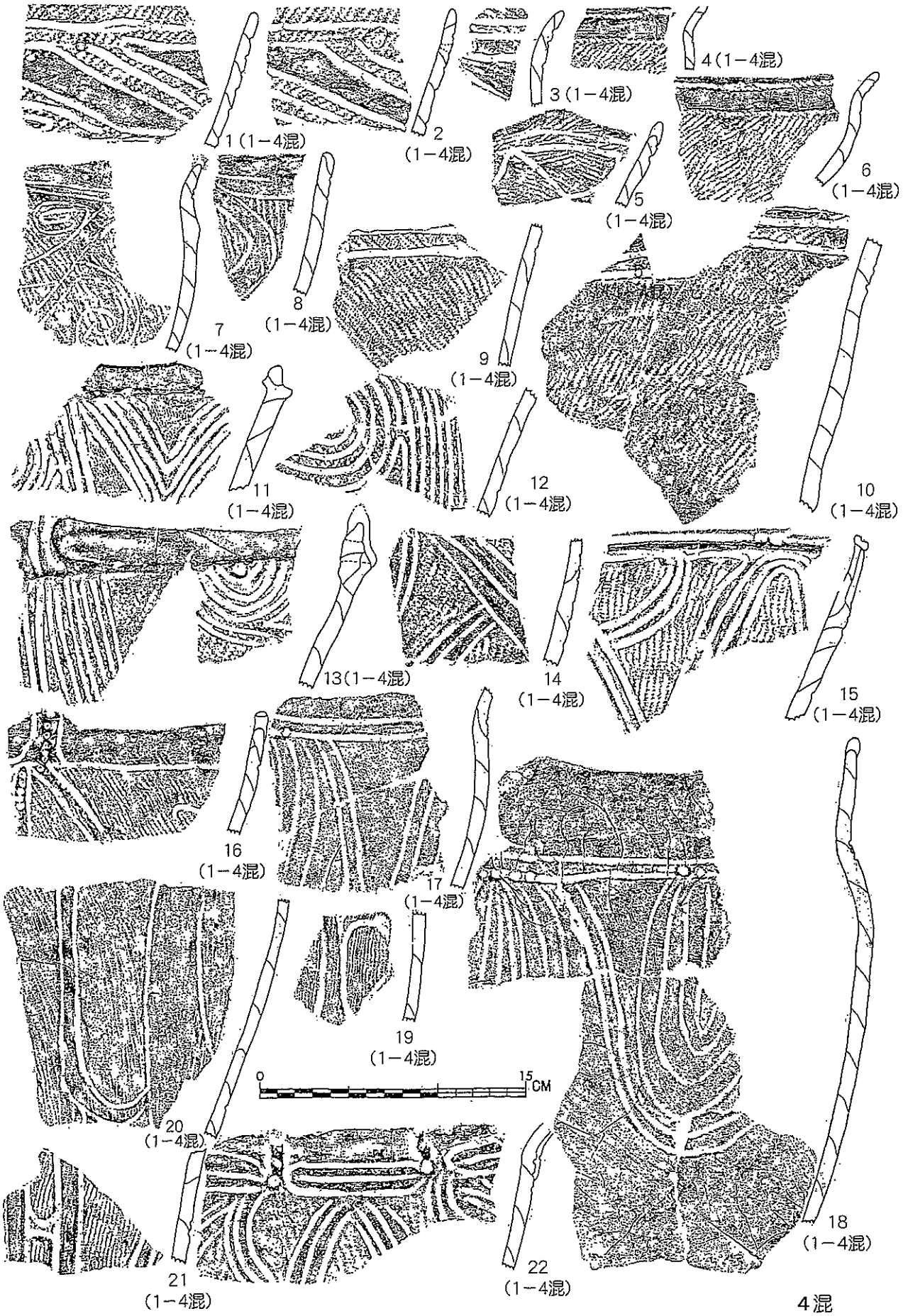
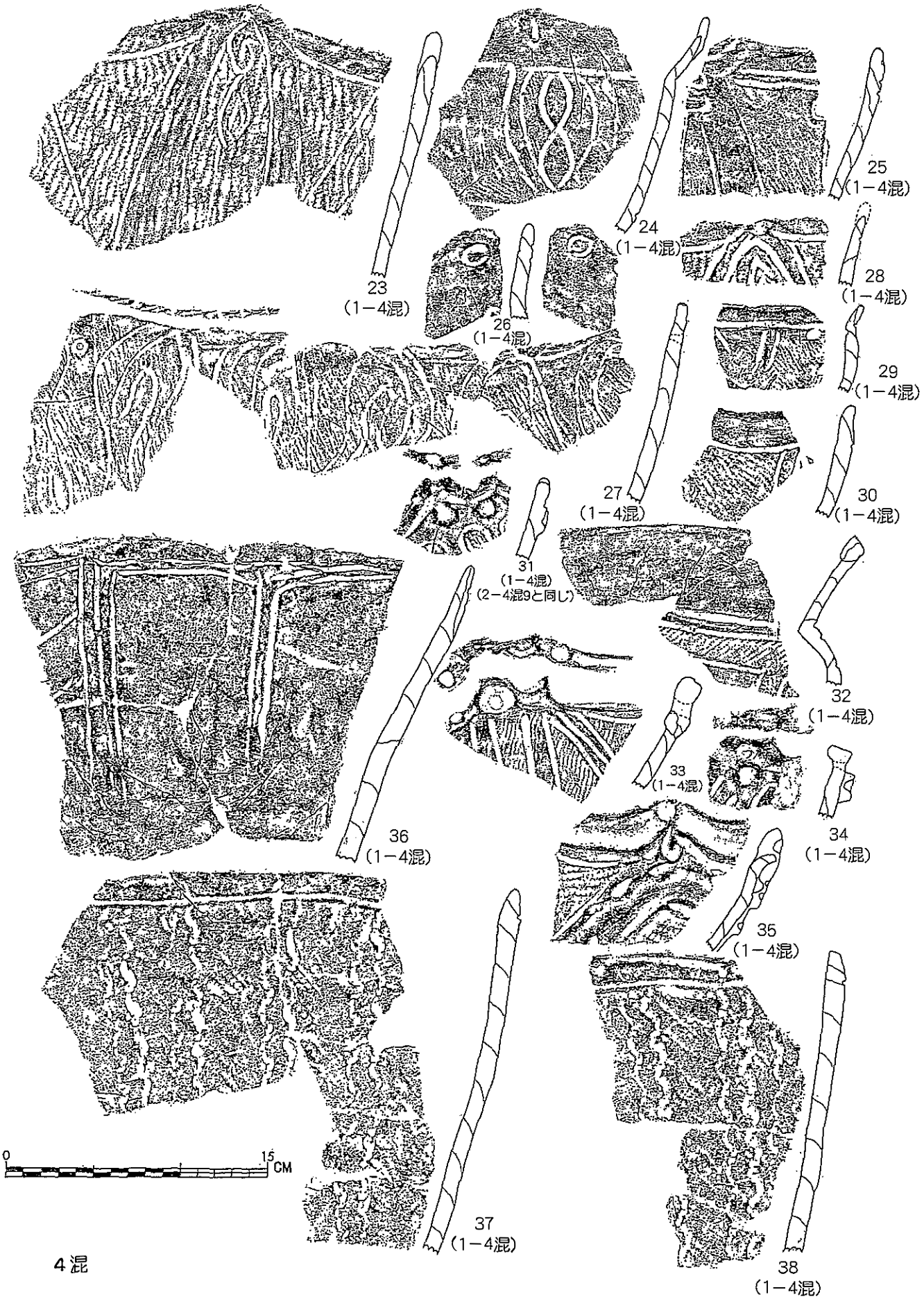


図 51


1 (1−4混)
2 (1−4混)
3 (1−4混)
4 (1−4混)
5 (1−4混)
6 (1−4混)
7 (1−4混)
8 (1−4混)
9 (1−4混)
10 (1−4混)
11 (1−4混)
12 (1−4混)
13 (1−4混)
14 (1−4混)
15 (1−4混)
16 (1−4混)
17 (1−4混)
18 (1−4混)
19 (1−4混)
20 (1−4混)
21 (1−4混)
22 (1−4混)
0
15CM
4混

( )区・層位

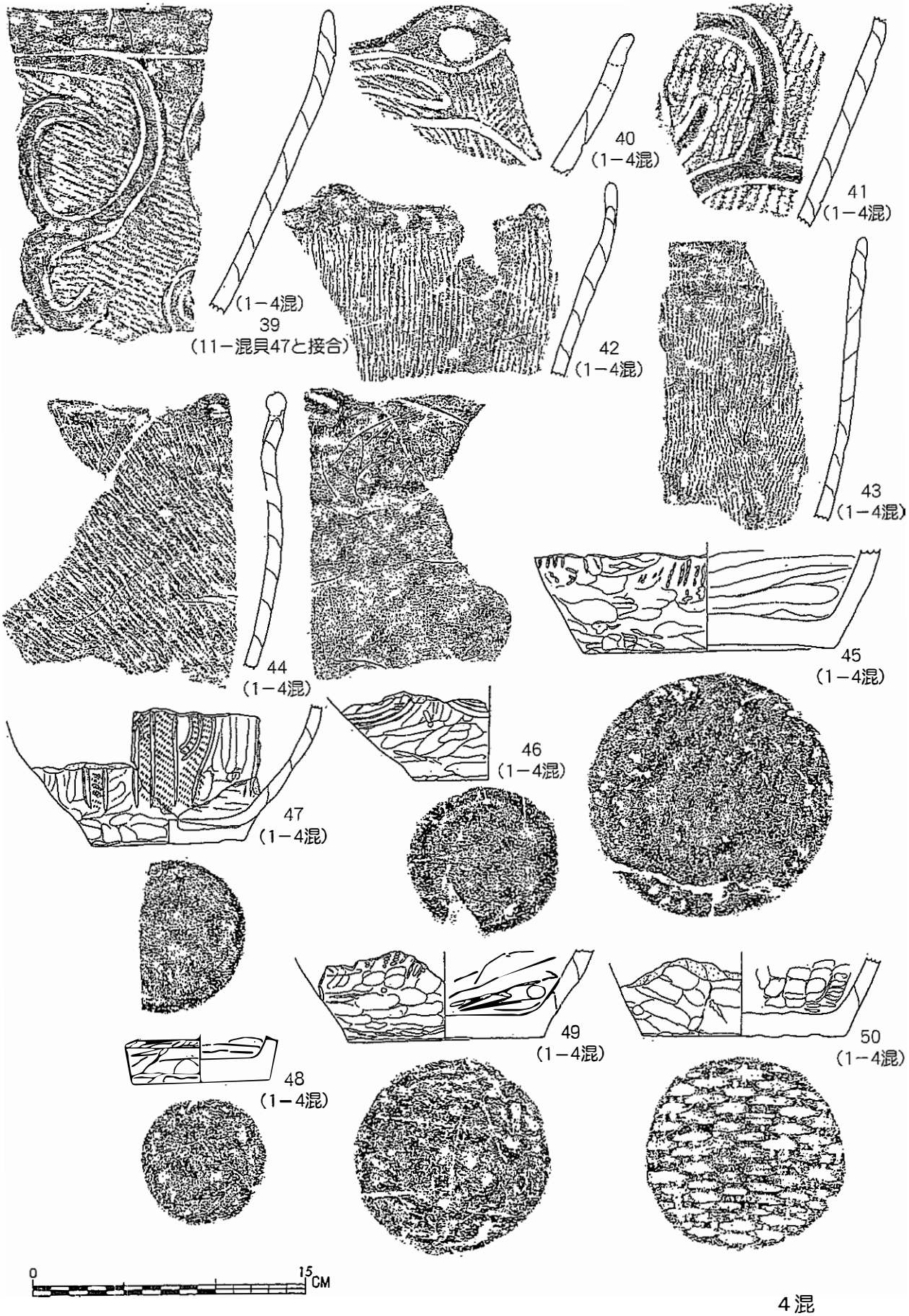
図 52


23
(1−4混)
24
(1−4混)
25
(1−4混)
26
(1−4混)
27
(1−4混)
28
(1−4混)
29
(1−4混)
30
(1−4混)
31
(1−4混)
(2−4混9と同じ)
32
(1−4混)
33
(1−4混)
34
(1−4混)
35
(1−4混)
36
(1−4混)
37
(1−4混)
38
(1−4混)
0
15
CM

4混

(　)区・層位

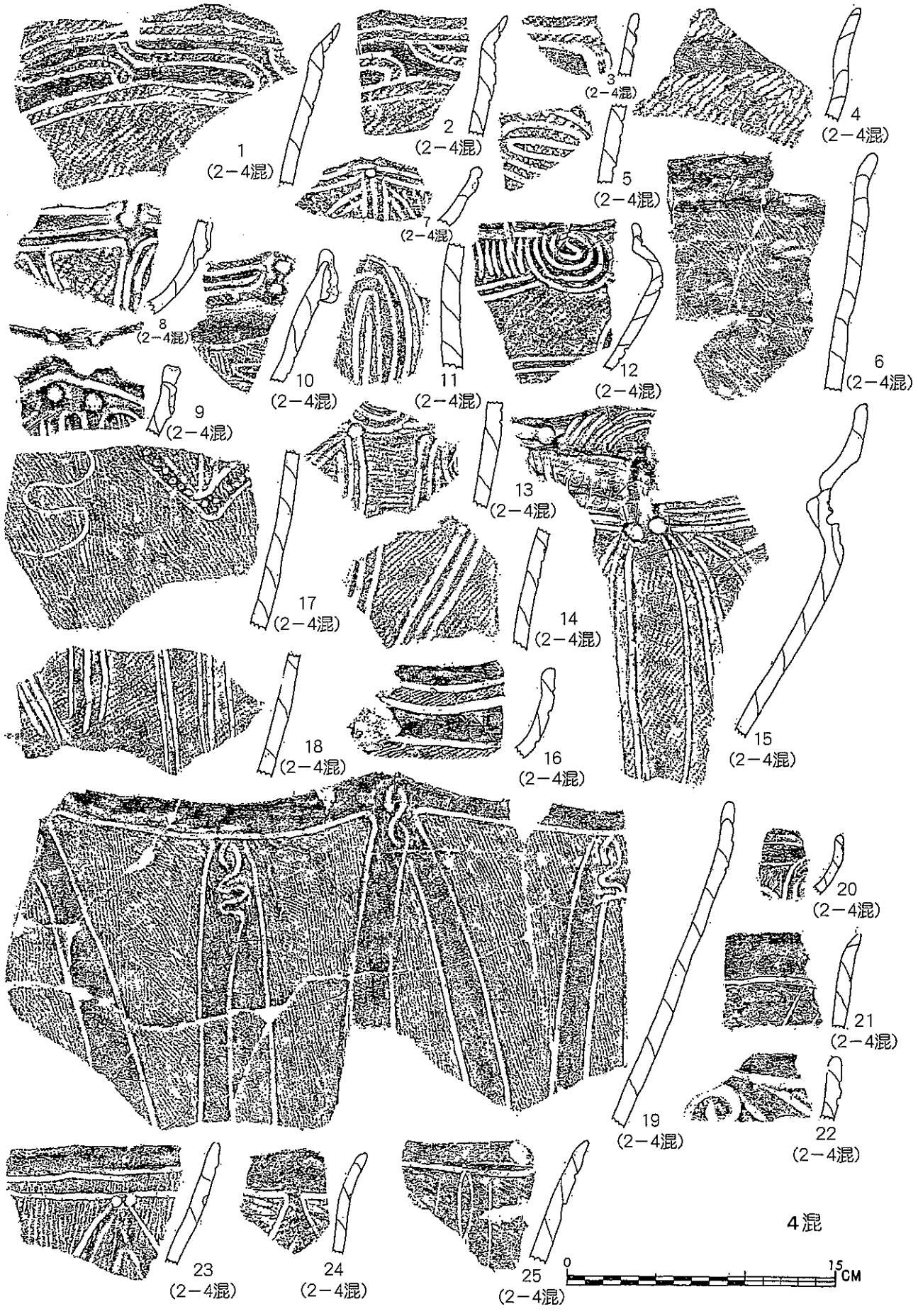
図 53


39
(1−4混)
(11−混貝47と接合)
40
(1−4混)
41
(1−4混)
42
(1−4混)
43
(1−4混)
44
(1−4混)
45
(1−4混)
46
(1−4混)
47
(1−4混)
48
(1−4混)
49
(1−4混)
50
(1−4混)
0
15CM

4混

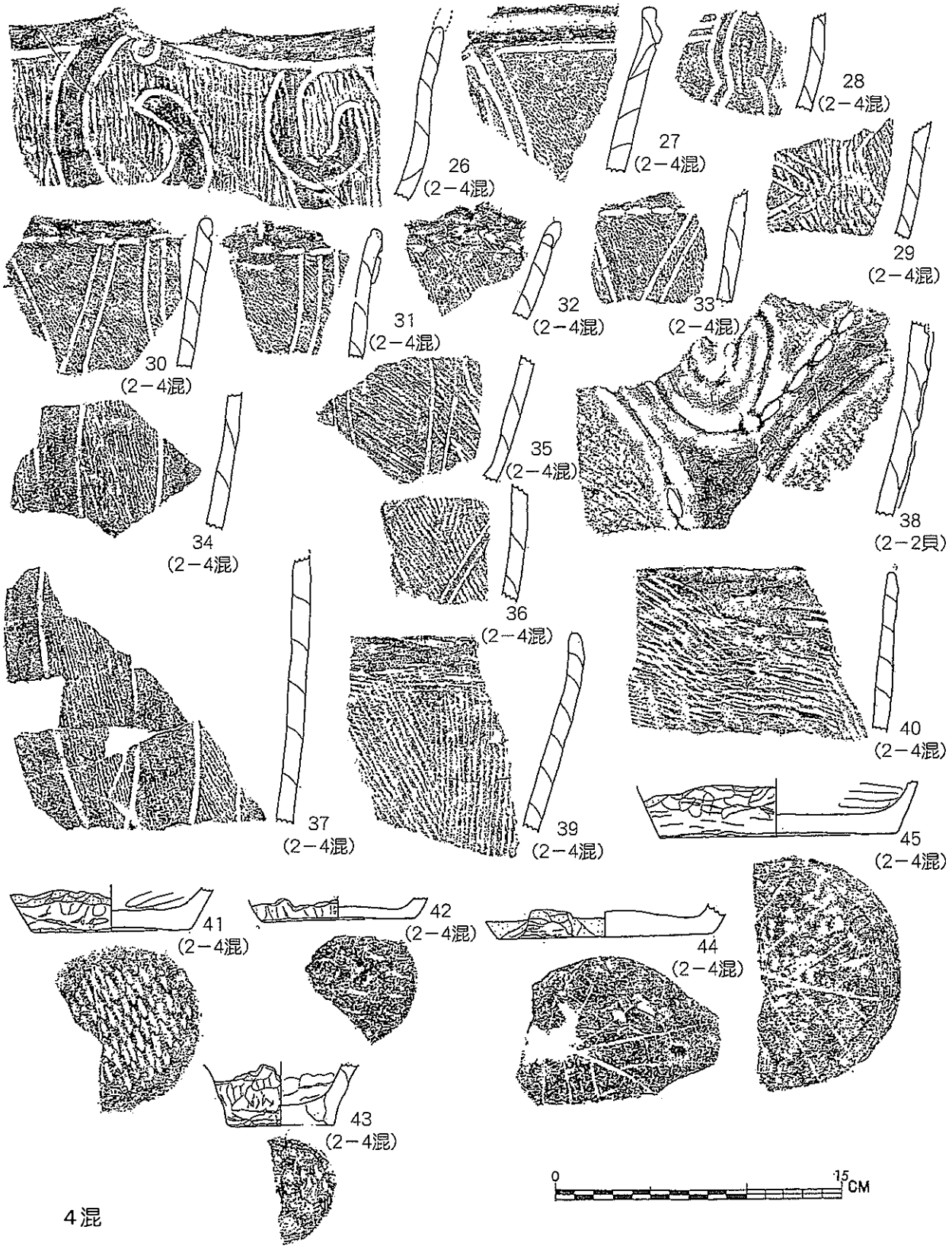
図 54

(　)区・層位


1 (2−4混)
2 (2−4混)
3 (2−4混)
4 (2−4混)
5 (2−4混)
6 (2−4混)
7 (2−4混)
8 (2−4混)
9 (2−4混)
10 (2−4混)
11 (2−4混)
12 (2−4混)
13 (2−4混)
14 (2−4混)
15 (2−4混)
16 (2−4混)
17 (2−4混)
18 (2−4混)
19 (2−4混)
20 (2−4混)
21 (2−4混)
22 (2−4混)
23 (2−4混)
24 (2−4混)
25 (2−4混)
4混
0
15CM

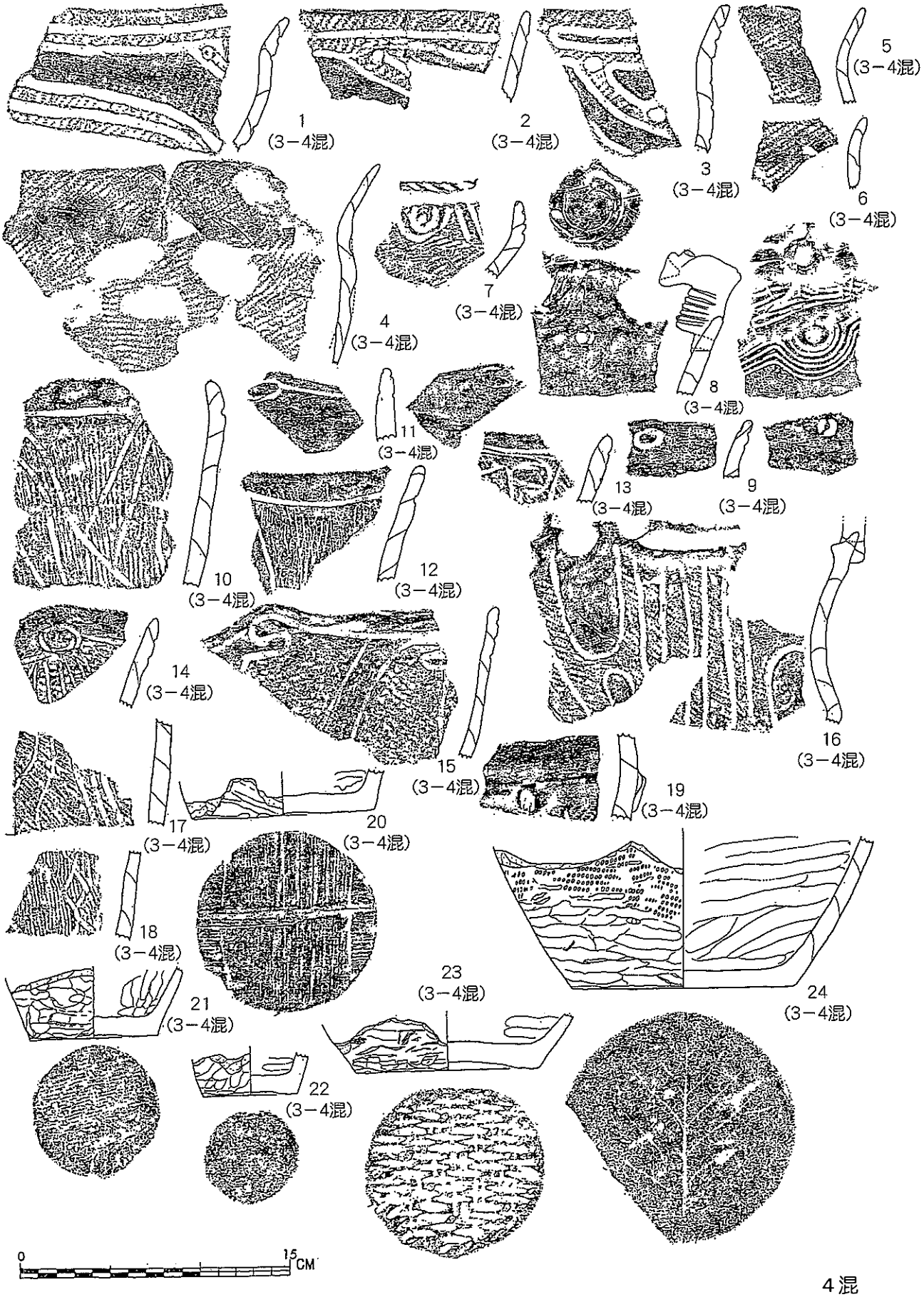
( )区・層位

図 55


26
(2－4混)
27
(2－4混)
28
(2－4混)
29
(2－4混)
30
(2－4混)
31
(2－4混)
32
(2－4混)
33
(2－4混)
34
(2－4混)
35
(2－4混)
36
(2－4混)
37
(2－4混)
38
(2－2貝)
39
(2－4混)
40
(2－4混)
41
(2－4混)
42
(2－4混)
43
(2－4混)
44
(2－4混)
45
(2－4混)
0
15CM
4混

( )区・層位

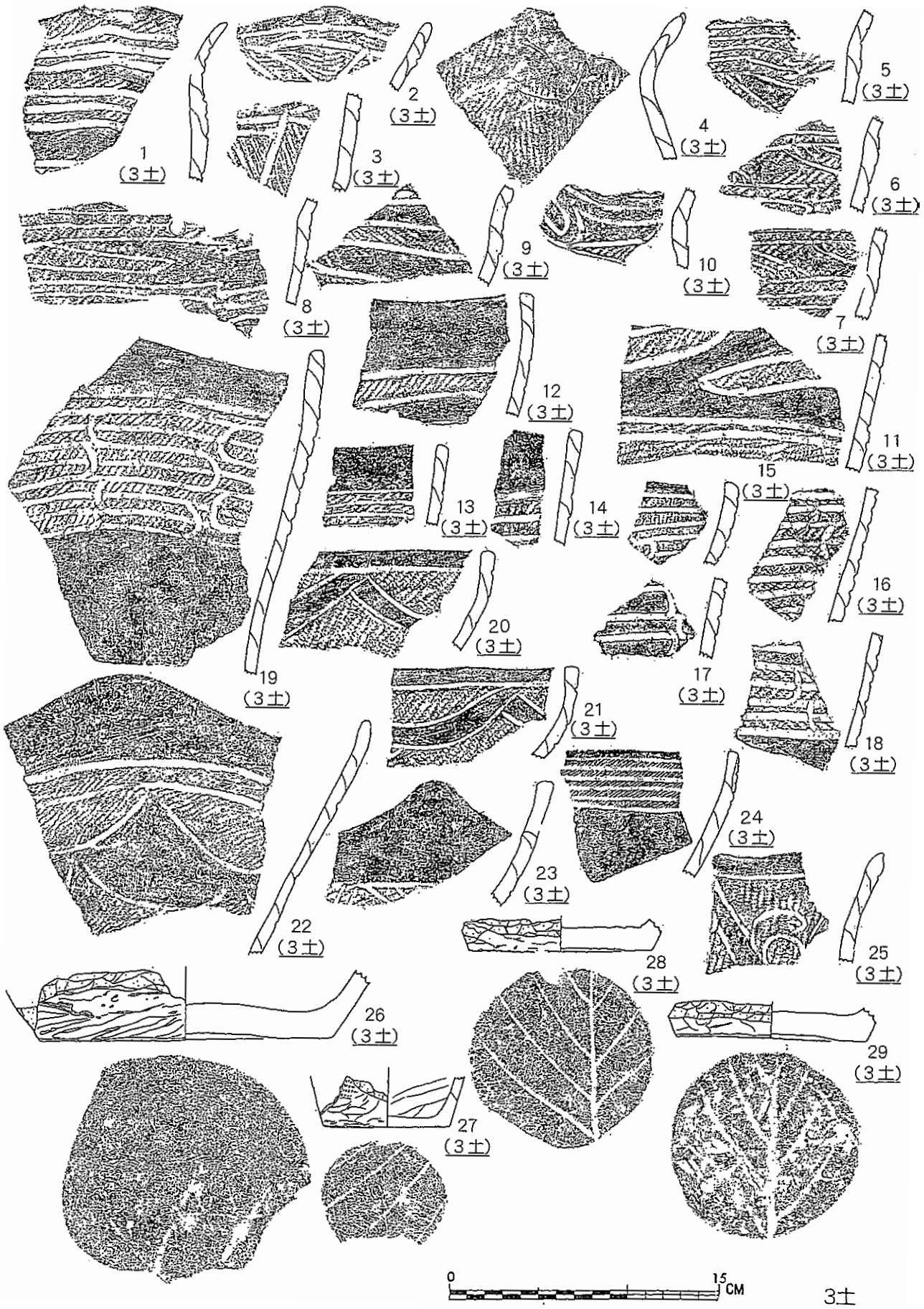
図 56


1
(3−4混)
2
(3−4混)
3
(3−4混)
5
(3−4混)
6
(3−4混)
4
(3−4混)
7
(3−4混)
8
(3−4混)
11
(3−4混)
13
(3−4混)
9
(3−4混)
10
(3−4混)
12
(3−4混)
14
(3−4混)
15
(3−4混)
16
(3−4混)
17
(3−4混)
20
(3−4混)
19
(3−4混)
18
(3−4混)
21
(3−4混)
23
(3−4混)
24
(3−4混)
22
(3−4混)
0
15CM

4混

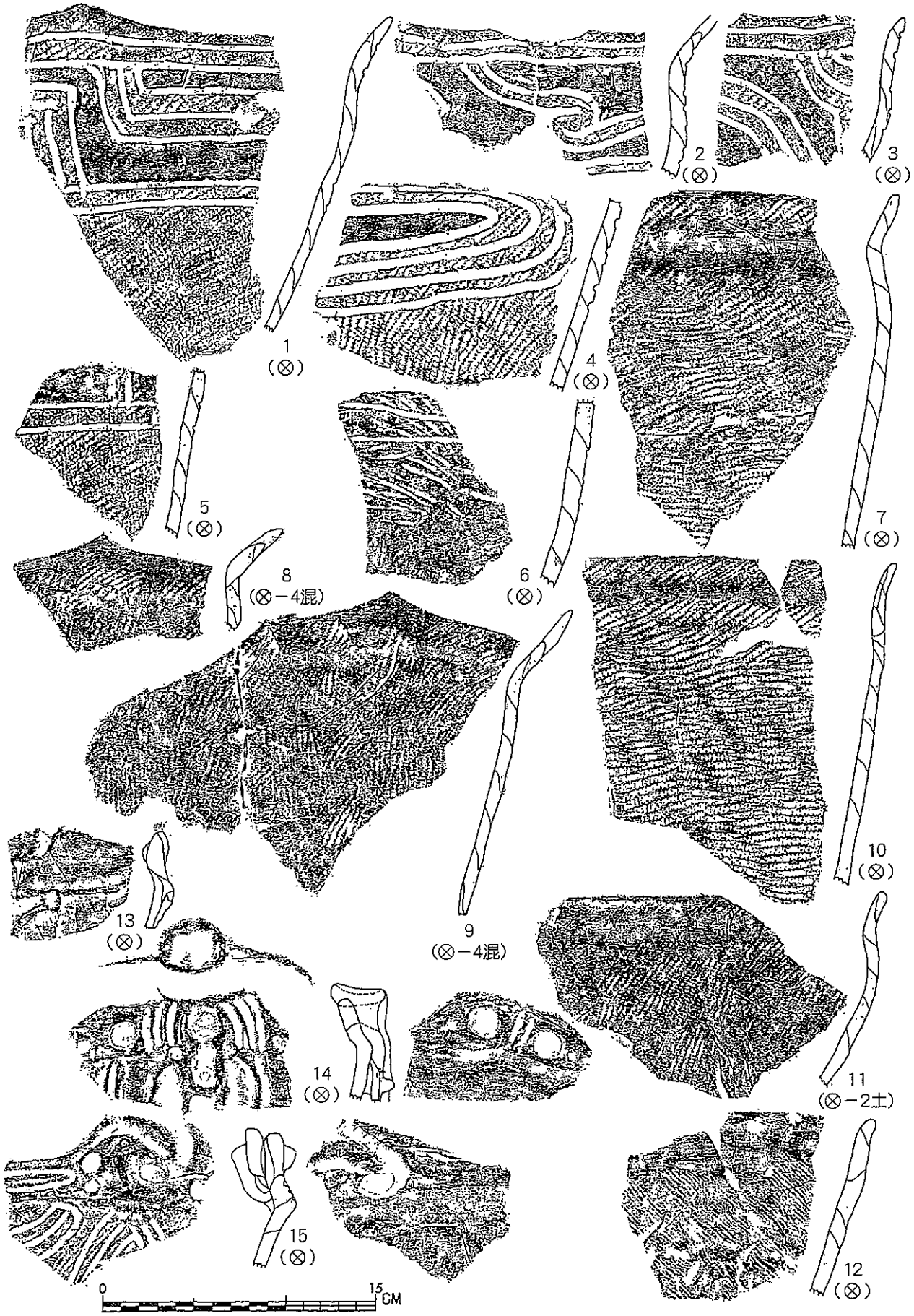
( )区・層位

図 57


1 (3土)
2 (3土)
3 (3土)
4 (3土)
5 (3土)
6 (3土)
7 (3土)
8 (3土)
9 (3土)
10 (3土)
11 (3土)
12 (3土)
13 (3土)
14 (3土)
15 (3土)
16 (3土)
17 (3土)
18 (3土)
19 (3土)
20 (3土)
21 (3土)
22 (3土)
23 (3土)
24 (3土)
25 (3土)
26 (3土)
27 (3土)
28 (3土)
29 (3土)
0
15 CM
3土

( )層位、( )修正

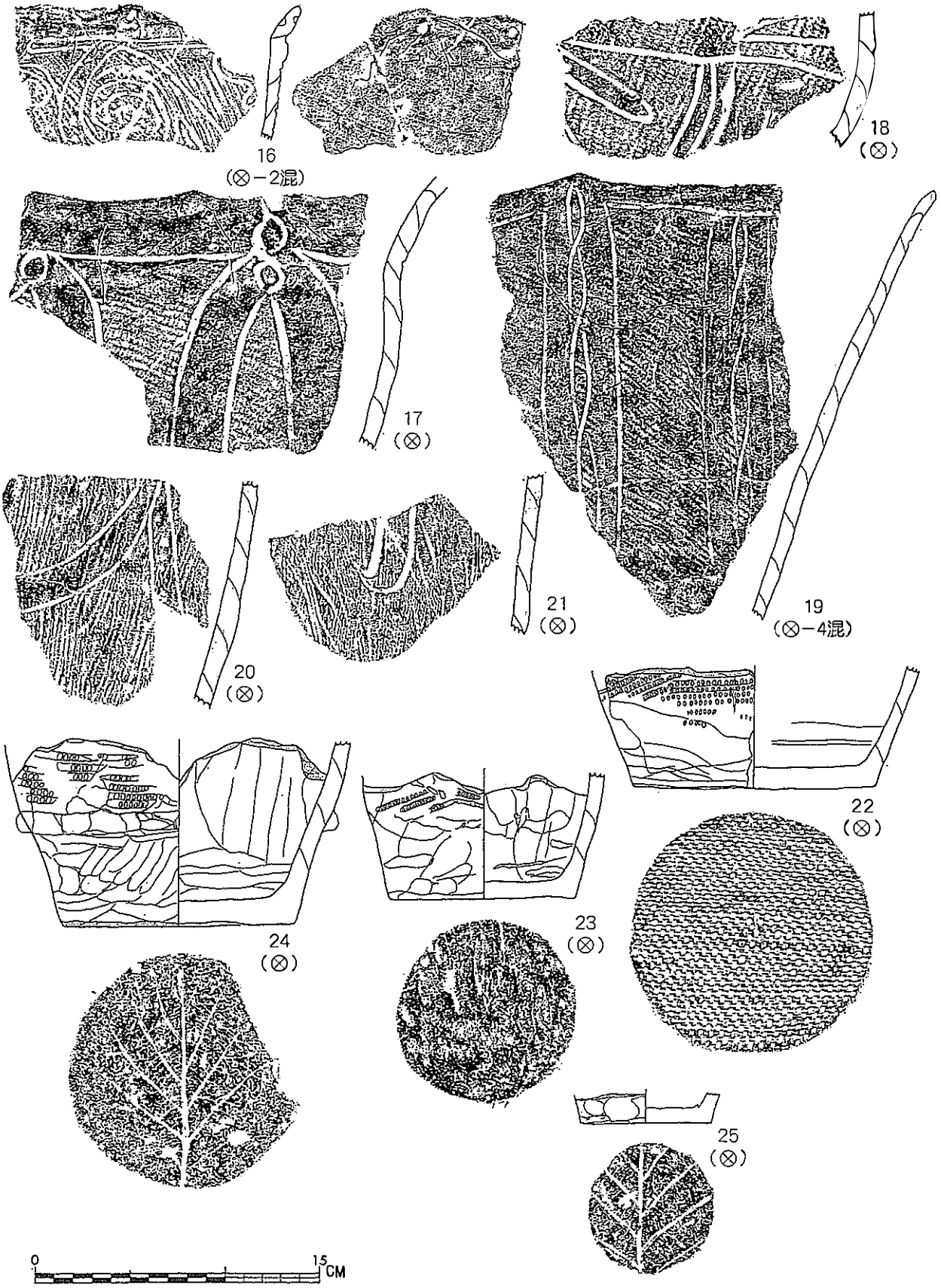
図 58



不明

( )区・層位

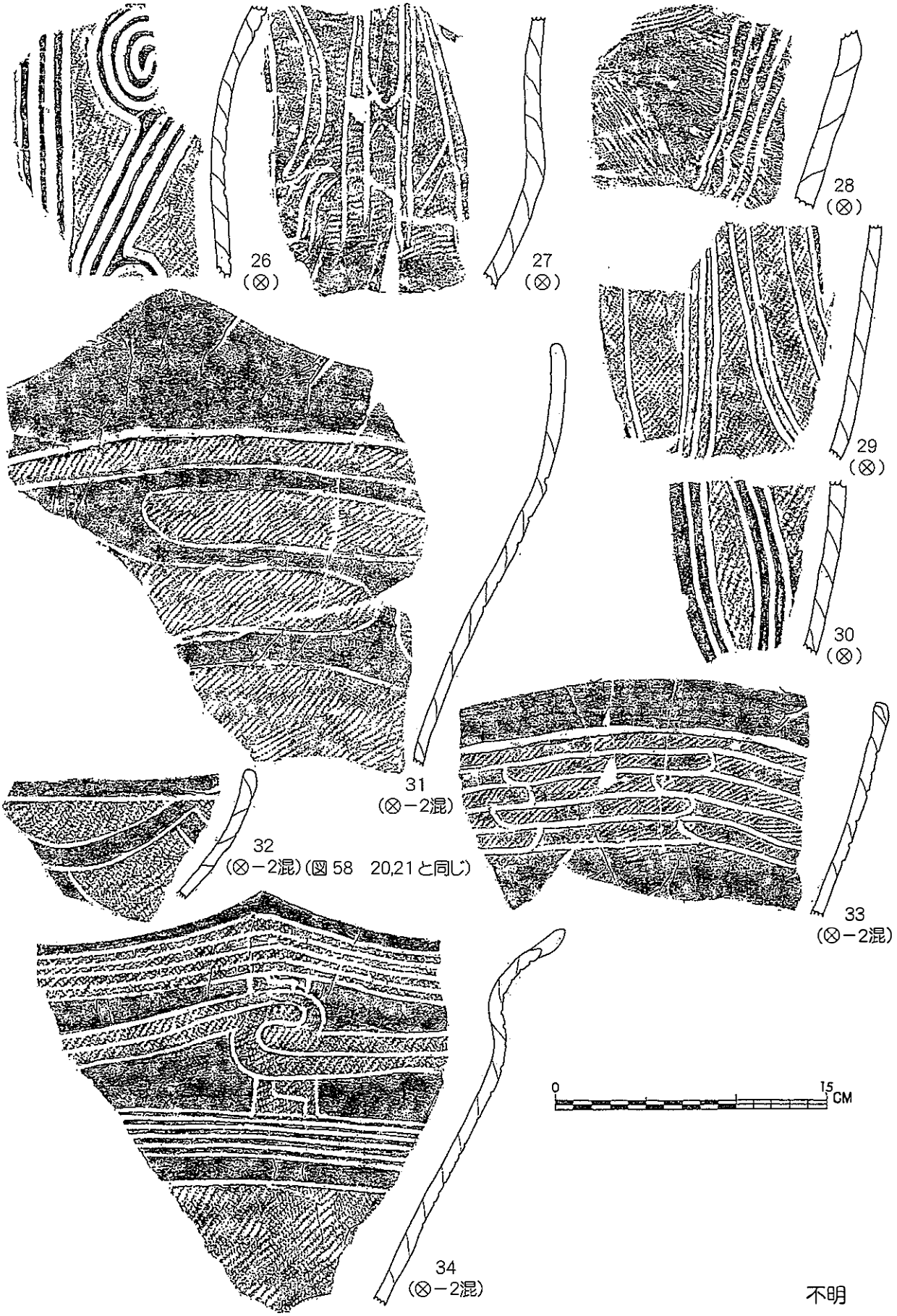
図 59



不明

( )区・層位

図 60



不明

(　)区・層位

図 61

［４］　Ｃ・Ｄ地区　（図６２(模式図)、６３～６７）

丘陵西側の検討を目的とした調査区であったが、成果がなかった。Ａトレンチ寄りに貝層貝塚周縁部を検出した。貝層薄く約１５㎝程で地山に達し、ほぼ西側２ｍ程で貝層が消滅する。最終的にＣ～Ｄ間、幅５ｍを全面剥離の調査を実施した。ＣＤ各区から遺物が出土したが、Ｃ拡張部からの出土が多く、特に、土器の出土の頻度が高い。浅い層であり層位的取り上げは不能であった。図６２「ＣＤトレンチ土器出土模式図」は層位的配置ではない。平面的状態で示したものである。

２号人骨周辺の図左側の土器群は晩期大洞Ａ式土器であり、Ａトレンチ１～４区表土の晩期大洞Ａ式土器に影響したもので、図６５のように出土が多い。中央の上段は出土量は少ないが、晩期大洞Ｃ式に相当する土器群で、Ａトレンチでは１５区に１点の出土が見られるだけである。中央下段は晩期大洞Ｂ式に相当する。図右側は中期大木１０式併行の土器群である。Ｃ拡張部周辺からＡトレンチの第２貝層が堆積の始まるようである。

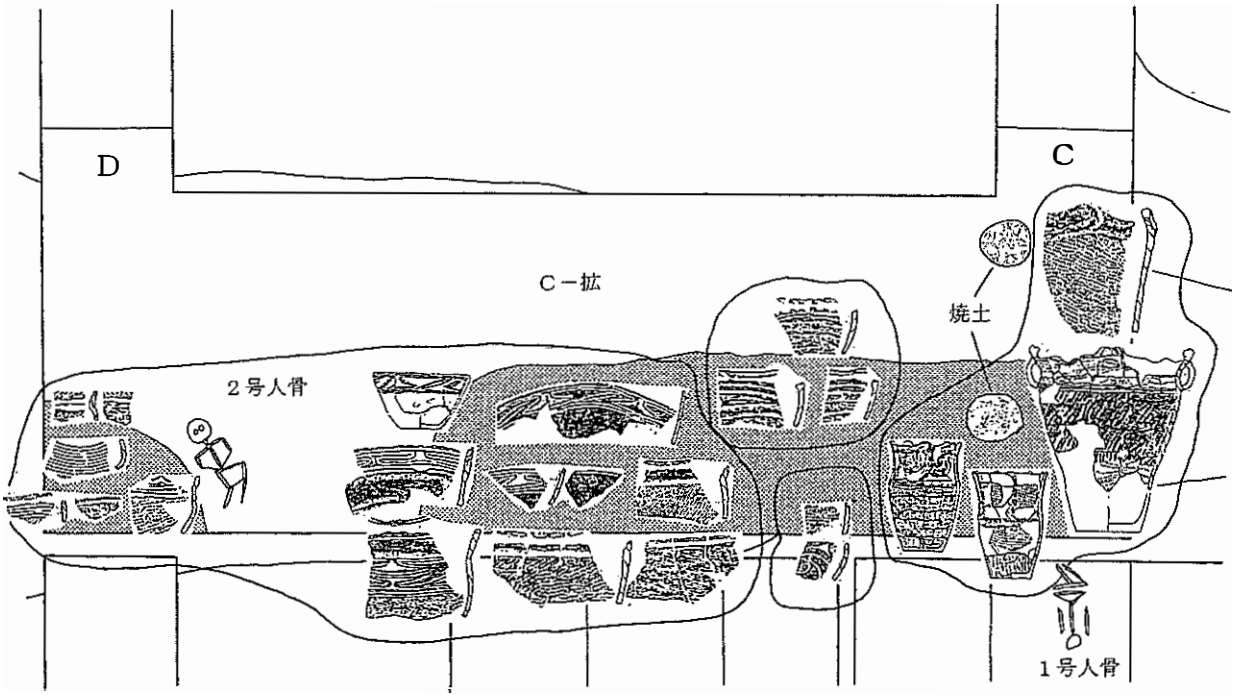
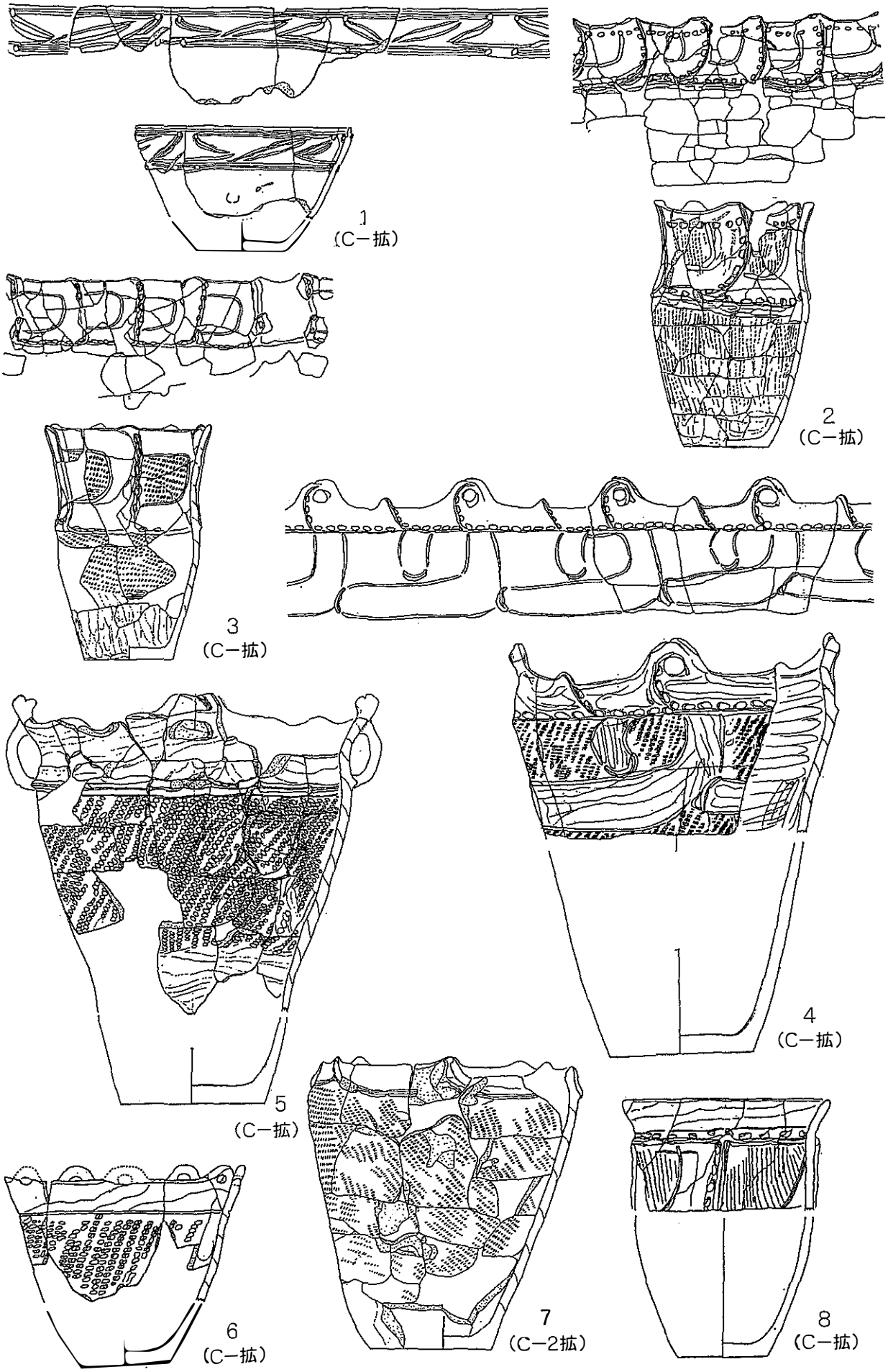
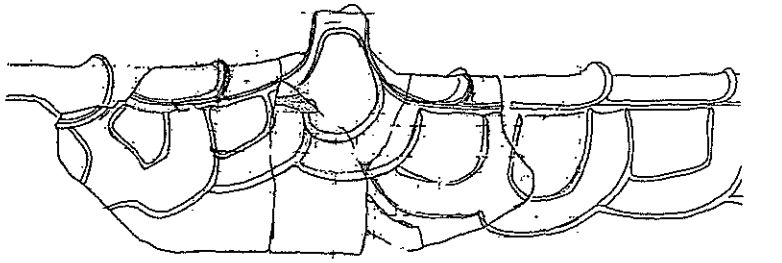


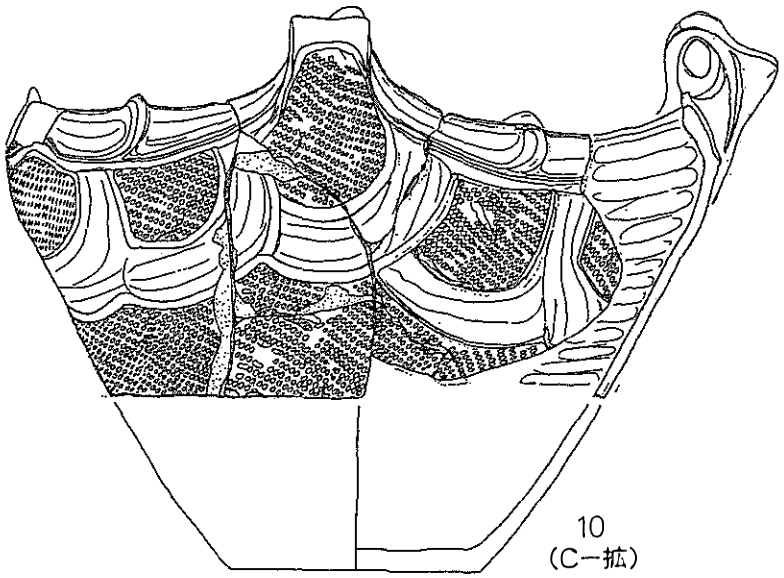
図６２　Ｃ・Ｄトレンチ土器出土模式図



(　)区･層位

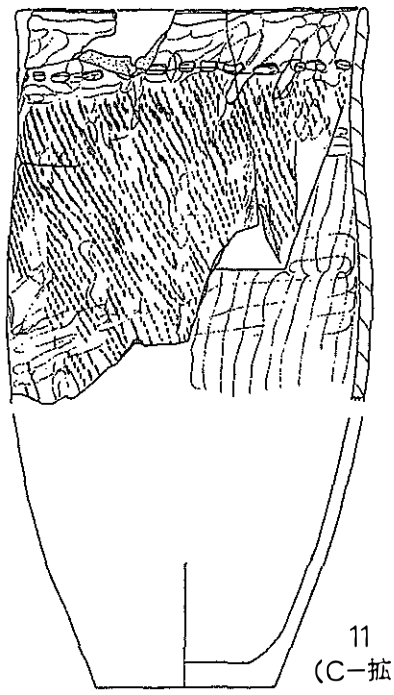
図 63



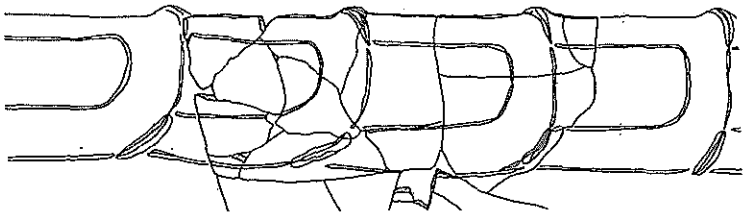


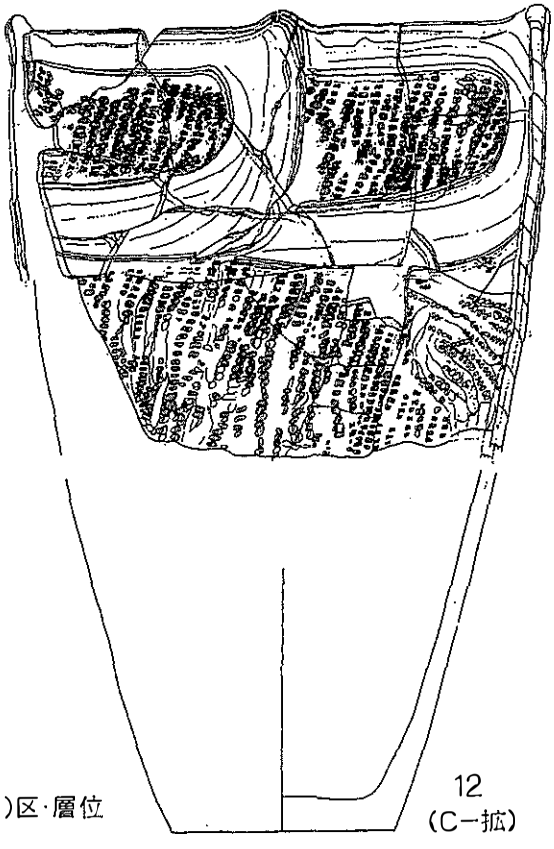
9
(C－拡)

10
(C－拡)

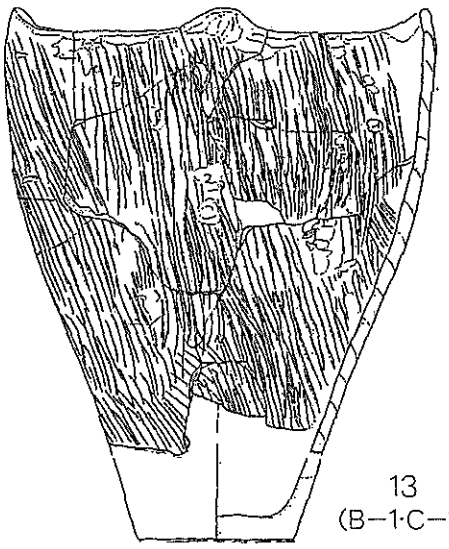


11
(C－拡)





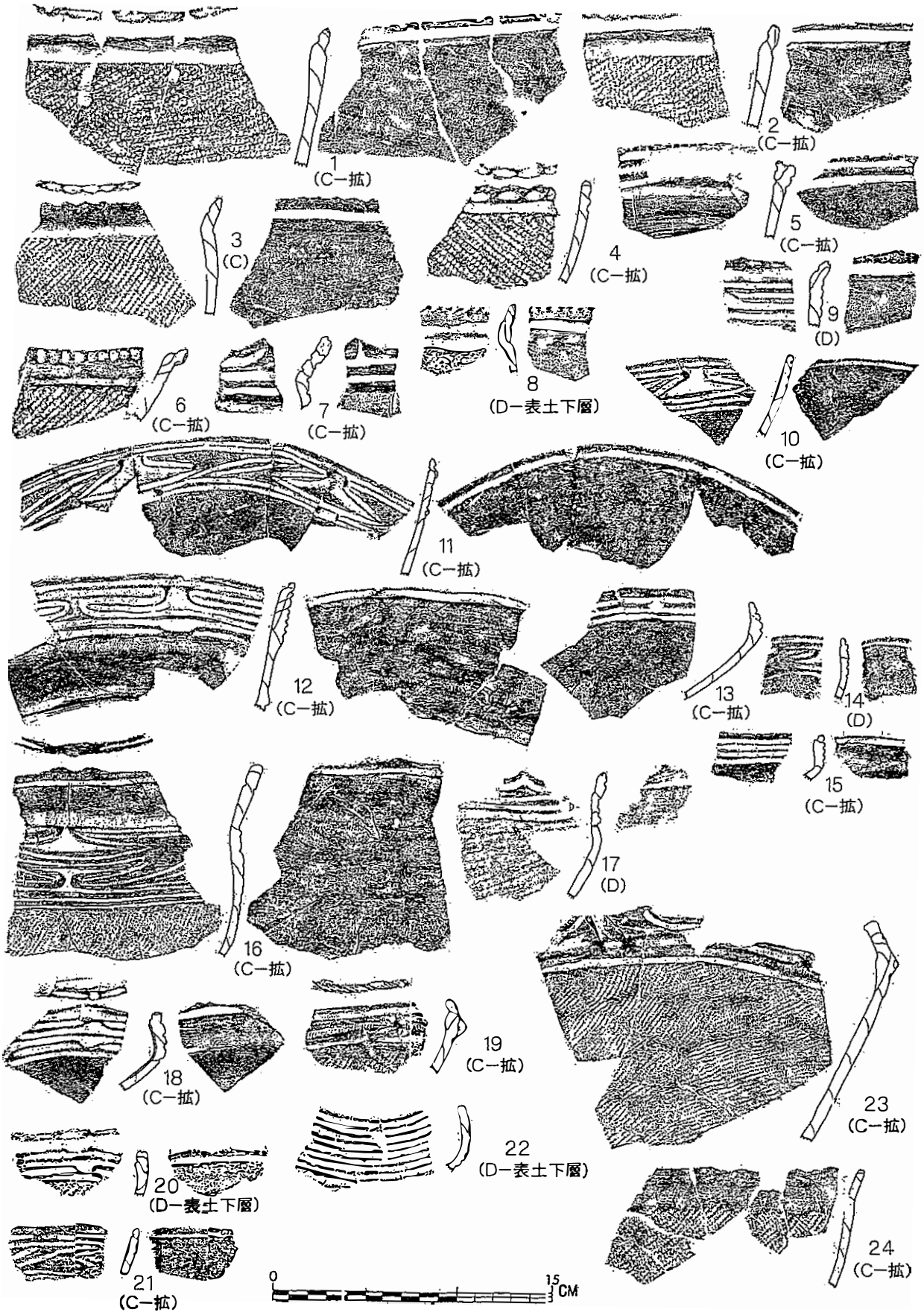
12
(C－拡)



13
(B－1·C－拡)

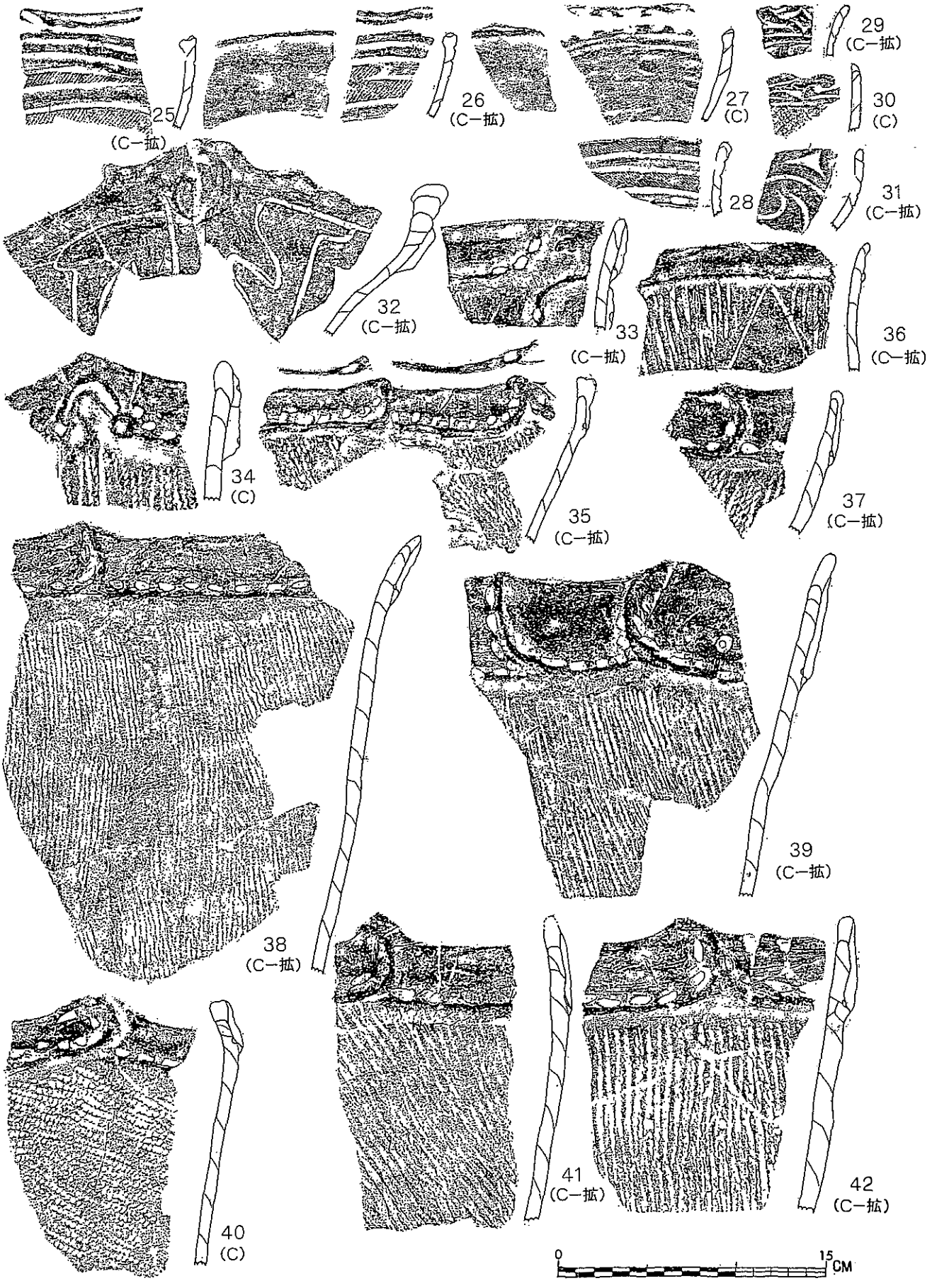
(　)区·層位

図 64


1
(C－拡)
2
(C－拡)
3
(C)
4
(C－拡)
5
(C－拡)
6
(C－拡)
7
(C－拡)
8
(D－表土下層)
9
(D)
10
(C－拡)
11
(C－拡)
12
(C－拡)
13
(C－拡)
14
(D)
15
(C－拡)
16
(C－拡)
17
(D)
18
(C－拡)
19
(C－拡)
20
(D－表土下層)
21
(C－拡)
22
(D－表土下層)
23
(C－拡)
24
(C－拡)
0
15 CM

(　)区·層位、

図 65


25
(C−拡)
26
(C−拡)
27
(C)
28
29
(C−拡)
30
(C)
31
(C−拡)
32
(C−拡)
33
(C−拡)
34
(C)
35
(C−拡)
36
(C−拡)
37
(C−拡)
38
(C−拡)
39
(C−拡)
40
(C)
41
(C−拡)
42
(C−拡)
0
15
CM

( )区·層位

図 66

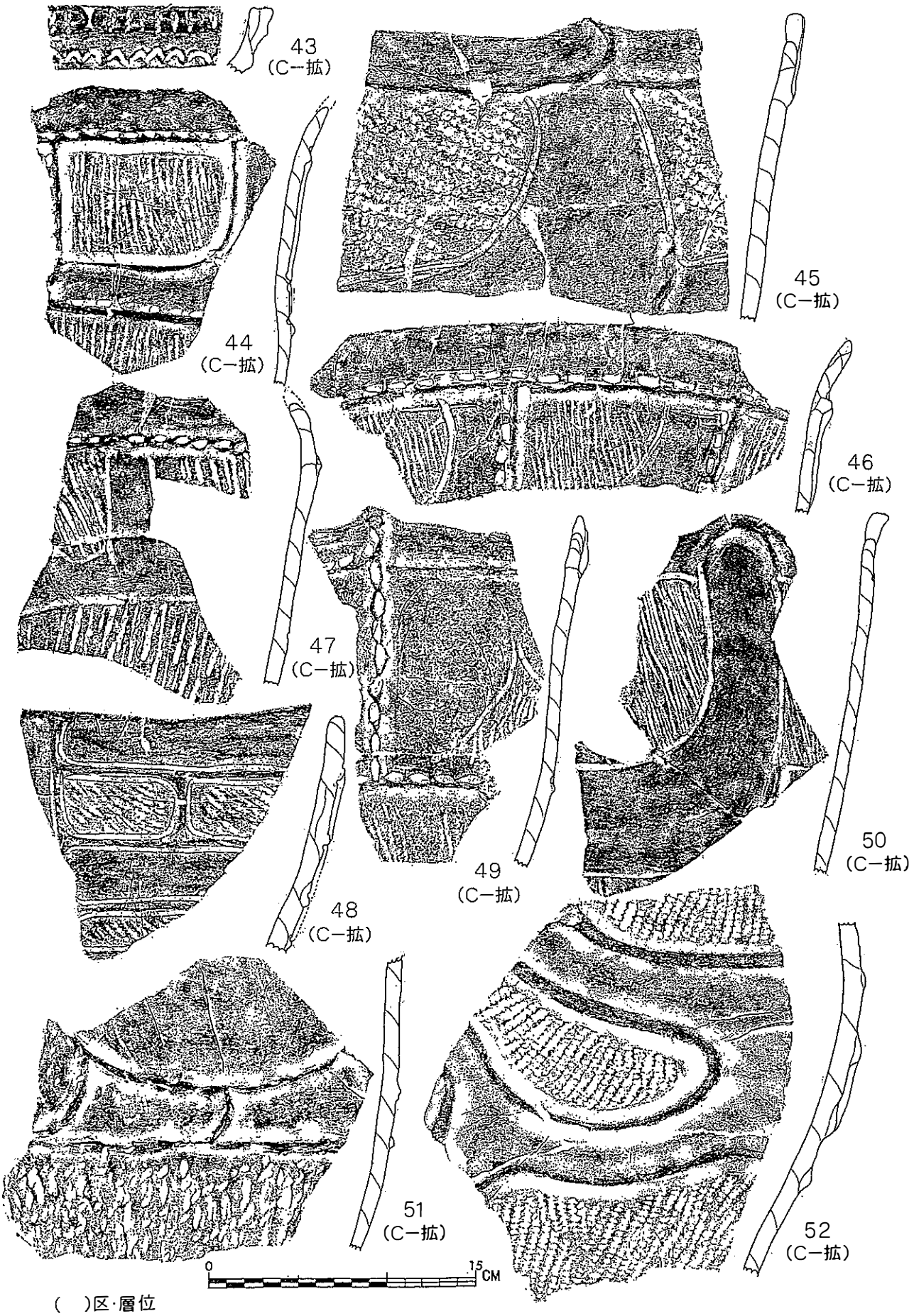


図 67

② 土偶等土製品 （図６８～７０）

（1） 不明土製品 1、円形で湾曲し対に２個の貫通孔があり、用途が不明である。長さ５.１３cm、幅５.０４cm、高さ１.１６cmである。(14-2貝) 2、円盤状で両側端に対に２個の貫通孔が穿かれたもの用途不明。長さ５.３cm、厚さ１.３～１.２cmである。(11-濶)

（2） 耳飾り 3、臼形耳飾りである。上面に中央の刺突を中心に、２列の刺突列が巡るもの、現存長さ２.３cm＋、現存幅３.７cm＋、高さ２.３cmである。(1-1貶→濶貝に修正)

（3） 土玉 4、上面中央に貫通孔、これを中心に細い綾絡状の刻線を９本。側面(ヨコ)のやや中央に刻線を巡らし、それに交差するように、細い綾絡刻線を上から下に巡らしたもの。長さ２.６cm＋、高さ２.４５cm.（欝）

（4） 小形土器 5、浅鉢台付で４足土器である。口縁部に工字文が施文、裏面口端寄りに１条の沈線が巡る。長さ７.９cm、幅５.７cm、高さ４.０cm (D)

（5） 粘土塊 6、粘土が焼成されたもの、不明品である。長さ６.３cm、幅３.９cm、厚さ１.９～１.１５cmである。(11-濶)

（6） 土偶 調査での出土は２点のみである。 7、頭部、両手、腕、左足欠損。体部中央にタテ刺突列、腹部張り出し妊娠状態を示す。裏面施文なし。長さ７.８cm、幅６.７cm、厚さ１.９cm。(B-Ⅲ-1濶) 8、上部、下部欠損、乳房を含み中央部のみ、中央に３列の刺突痕、裏に斜めに刺突痕あり。長さ４.８cm＋、幅４.４９cm、厚さ１.３。(3-貶)

（7） 土器片製円板状土製品 本貝塚出土総数１５８点であるが、図示した資料は４５点である。土器片の周囲を丁寧に打砕き、擦り込み整形したもので、基本的には円形であるが、図６９－９、１５、１６、図７０－３７、３９、４０、４１は楕円形に近いもの、図６９－４、１８、図７０－２７、２８、２９、４２、４４、４５は四辺形、図６９－１０、図７０－３０は台形に近いもの、図６９－６、１１、２３、２４、図７０－３２は三角形の形態も存在する。この用途は明らかでない。かっては上下に刻みのある類似の土器片があり、漁業用具と考えた時期もあったが、土弾のような用具か、それでも重量が１０ｇ前後の軽量では、武器としての効果があるのか、数量を数える時に使用したもの、玩具でないか等種々のアイデアが出されたが、今もって明らかでない。円形で直径ほぼ３～４cm中心、重量１５ｇ平均のものである。図示資料の明細は以下の表を参照。

番号	出土層位	タテcm	ヨコcm	重量g	特徴
1	A-2-貝直上	3.72	4.06	19	円形
2	〃-4-混	4.02	4.05	20	〃
3	〃-456-土	4.12	4.27	15	〃
4	〃-8-混貝	3.67	3.43	17	四辺形
5	〃-9-	3.74	4.18	19	円形
6	〃-9-混貝	4.7	5.27	30	三角形
7	〃-10-混貝	4.8	4.86	24	円形
8	〃-11-混貝	2.7	2.65	8	〃
9	〃-〃 -〃	3.71	4.6	19	楕円形
10	〃-〃 -貝層	2.89	3.02	10	台形
11	〃-12-貝層	3.24	3.2	13	三角形
12	〃-〃-混貝	4.36	4.36	21	円形
13	〃-13-貝層	3.78	5.16	21	楕円形
14	〃-〃-土層	3.6	3.38	10	円形
15	〃-〃-貝層	3.92	4.05	20	楕円形
16	〃-14-2貝	4.12	5.5	28	〃
17	C-拡	3.23	3.41	11	円形
18	〃-〃	4.09	4.46	22	四辺形
19	D-1-混貝	3.2	3,33	11	円形
20	〃- -土層	5.08	5.64	31	〃
21	〃-1-混貝	4.8	4.58	21	〃
22	〃	3.8	3.82	14	〃
23	B-Ⅱ-4混	3,94	4.5	16	三角形
24	B-Ⅱ-4混	4.29	3.8	17	三角形
25	〃- 表土	3.96	4.33	19	円形
26	〃-Ⅱ-4混	3.32	3.68	19	〃
27	A-4-土層	5.49	5.66	39	四辺形
28	〃-10-貝層	4.81	5.36	30	〃
29	〃-〃-土層上	5.13	6.12	38	〃
30	〃-11-混貝	4.82	3.78	22	台形
31	〃-〃-貝層中	6.48	6.1	50	円形(底部)
32	〃-12-貝層	3.24	3.2	13	三角形
33	〃-2-1貝下	5.27	4.94	31	円形(混貝)
34	C-拡	2.57	2.54	7	〃
35	A-7-2混土	3.4	3.22	9	〃
36	C-拡	4.3	4.29	19	〃
37	A-9-1混貝	4.0	5.05	32	楕円形
38	〃-13-混貝	3.39	3.71	12	台形
39	〃-10-混貝	3.66	4.68	19	楕円形
40	〃-11-混貝	4.07	3.31	12	〃
41	〃-12-混貝	4.98	4.2	30	〃
42	〃-14-混貝	3.6	4.05	14	円形
43	〃-〃-2貝	4.06	3.84	18	〃
44	〃-〃-混貝	5.1	4.93	40	四辺形
45	〃-〃-土層	4.72	4.72	39	〃

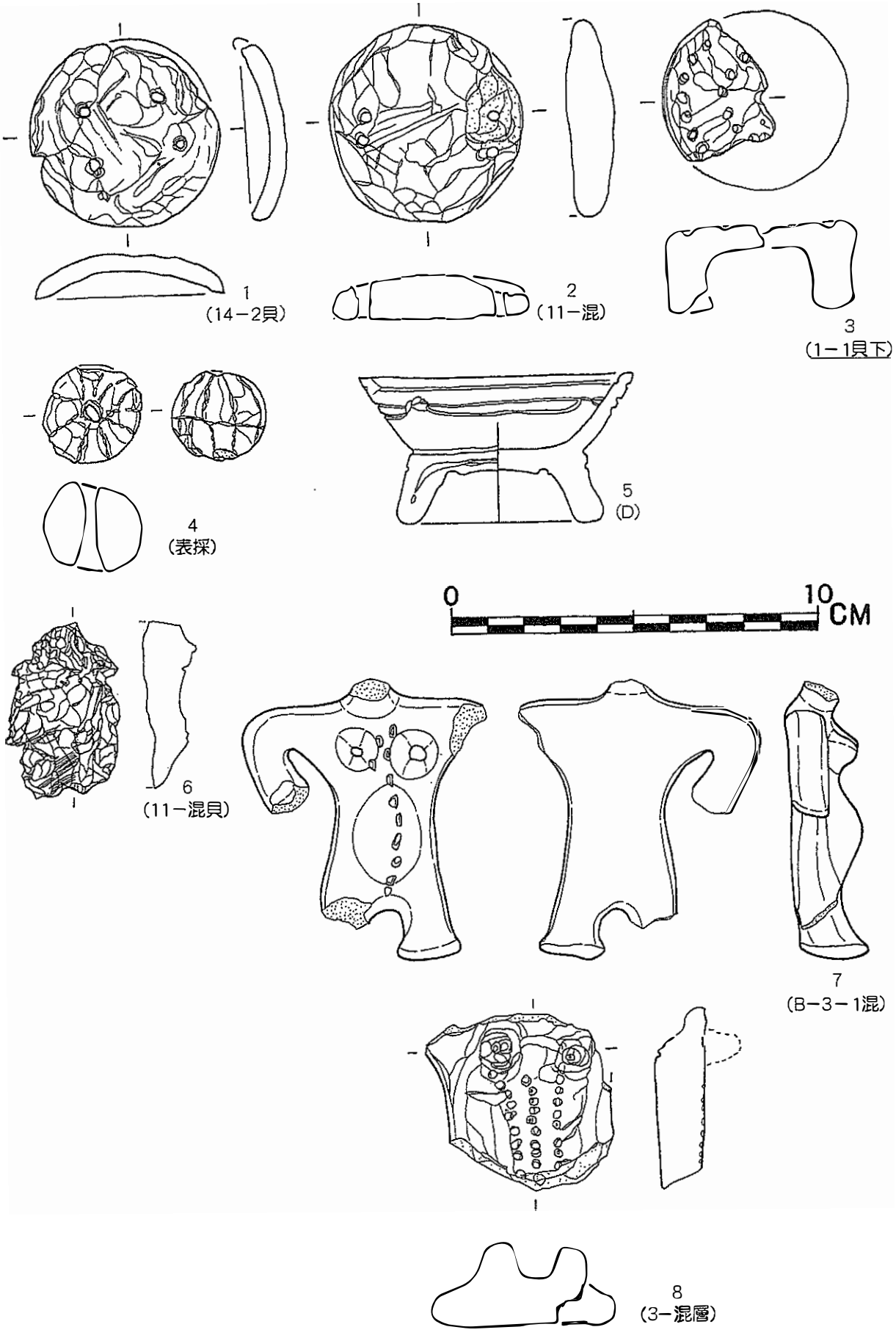
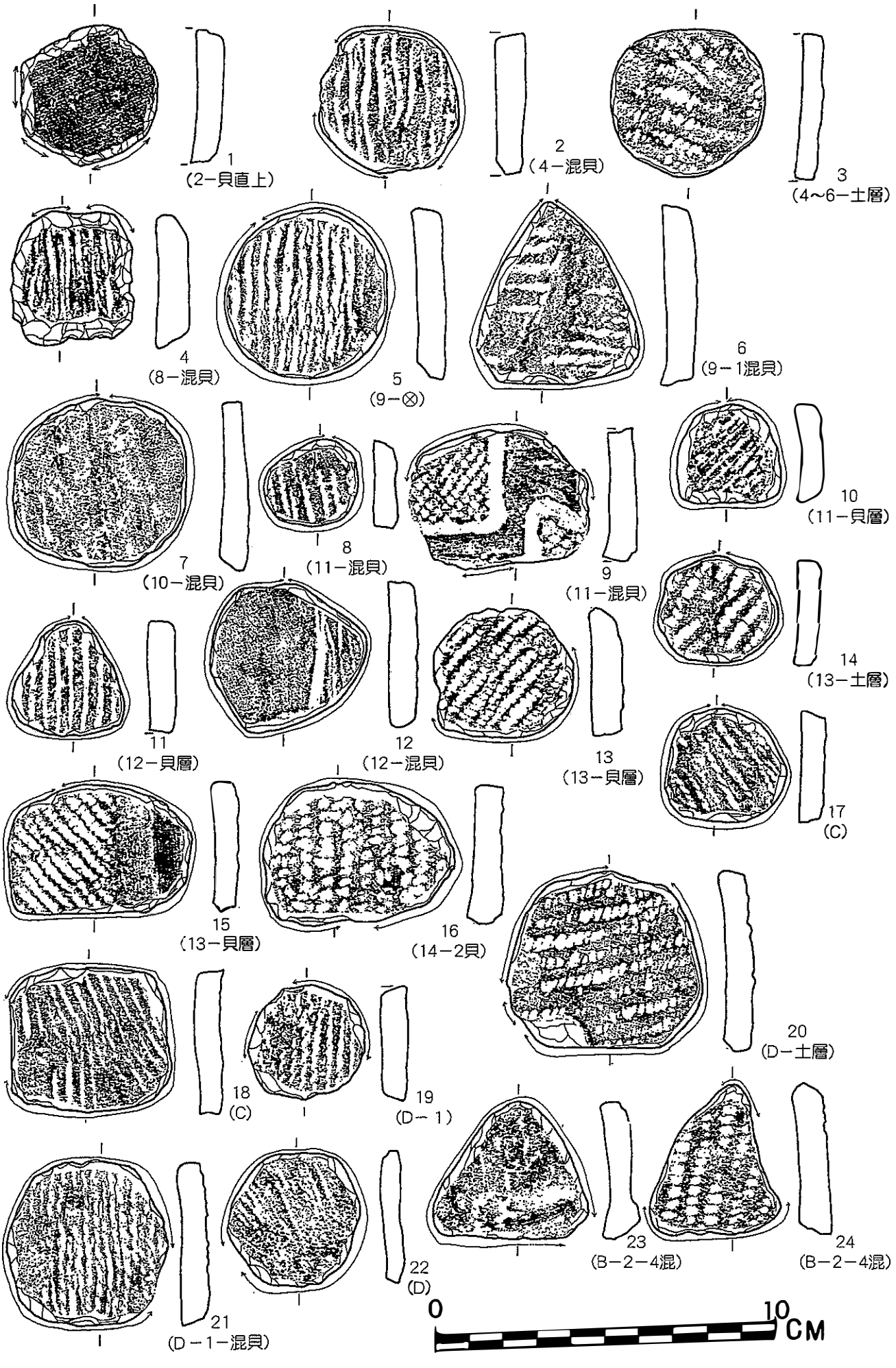
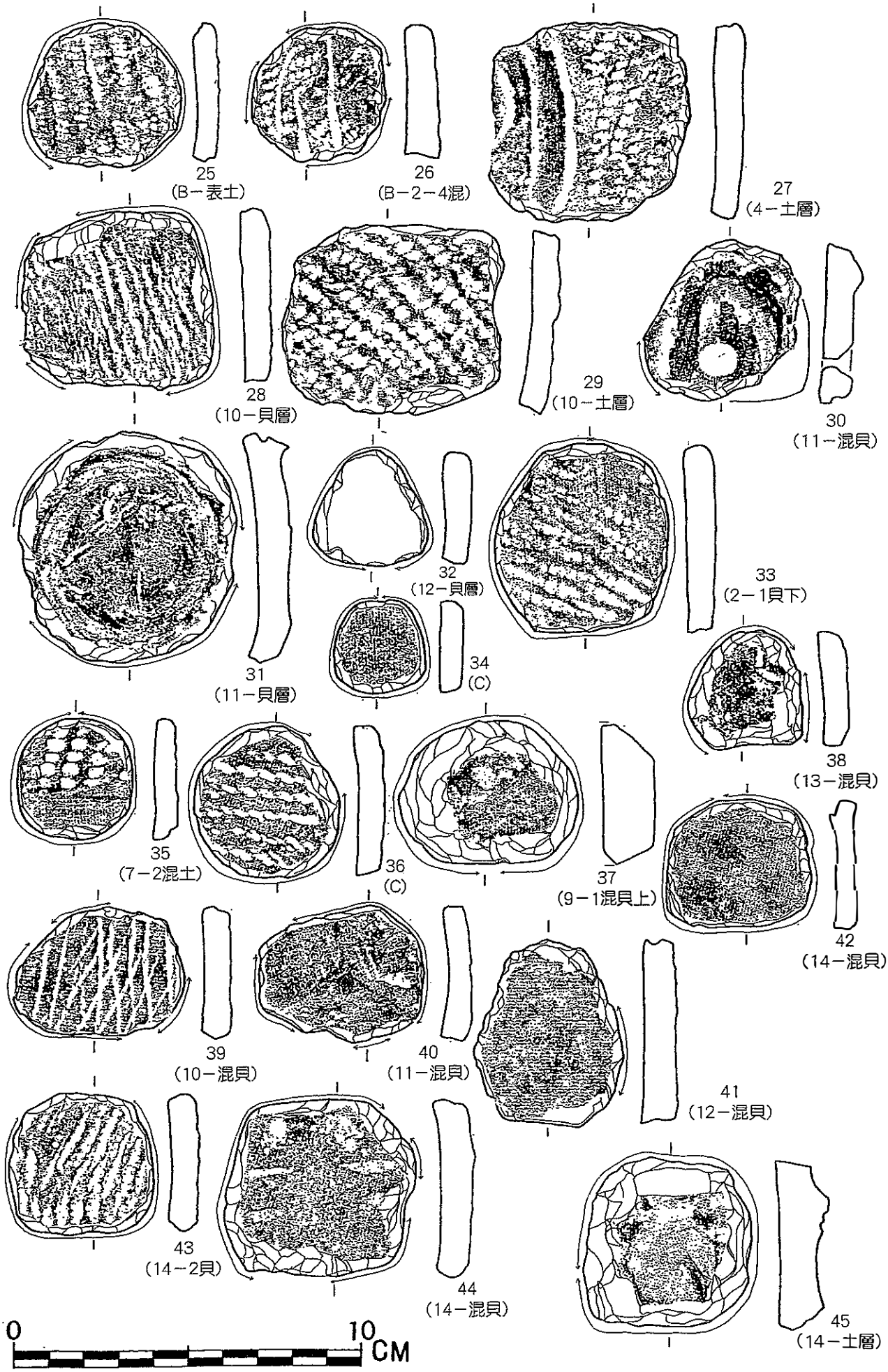


図 68


1
(2−貝直上)
2
(4−混貝)
3
(4〜6−土層)
4
(8−混貝)
5
(9−⊗)
6
(9−1混貝)
7
(10−混貝)
8
(11−混貝)
9
(11−混貝)
10
(11−貝層)
11
(12−貝層)
12
(12−混貝)
13
(13−貝層)
14
(13−土層)
15
(13−貝層)
16
(14−2貝)
17
(C)
18
(C)
19
(D−1)
20
(D−土層)
21
(D−1−混貝)
22
(D)
23
(B−2−4混)
24
(B−2−4混)
0
10
CM

( )区・層位

図 69


25
(B－表土)
26
(B－2－4混)
27
(4－土層)
28
(10－貝層)
29
(10－土層)
30
(11－混貝)
31
(11－貝層)
32
(12－貝層)
33
(2－1貝下)
34
(C)
35
(7－2混土)
36
(C)
37
(9－1混貝上)
38
(13－混貝)
39
(10－混貝)
40
(11－混貝)
41
(12－混貝)
42
(14－混貝)
43
(14－2貝)
44
(14－混貝)
45
(14－土層)
0
10 CM

(　)区・層位

図 70

（2） 石製品　（図７１～７６）

①剥片石器　◇図７１－１～４９は石鏃である。１～１９、２２は分類では、基部が凸状に茎を作り出す形態、２０～２１、２７は基部全体が棒状の形態、２３～２６は基部を丸くふくらませた形態、２８～３０は基部がほぼ平坦な形態、３１～４９は基部が抉られ凹状の形態のものである。縄文中期末から後期初頭に営まれた遺跡の数は多い。石鏃の形態分類を見ると、「中期末から後期初頭の遺跡は、石鏃形態的分類割合でＡ類（凹基）が圧倒的で５０％以上を占め、Ｂ・Ｃ・Ｄ類は遺跡によって多少の違いが見られるが、ほぼ同じよう傾向である」(後藤勝彦 1981)という。本貝塚はＡ類（凹基）とＤ類（凸基）に集中し割合は７７.５％を占める。特に、Ｃ・Ｄ地区、Ａトレンチ１～４区・Ｂトレンチ出土が多く、後・晩期の層に当たる。後期から凸基（Ｄ類）の頻度が多くなることを立証している。

◇４９は珪質頁岩系でなく、砂岩質のもので特殊な用途のものと考えられる。

◇図７１－５０～５６は石錐である。５０、５３は完全品である。石の錐で穴あけの道具である。

◇図７２－１～１１は石匙で、１～２は横型石匙、３～１１は縦型石匙である。

◇図７２－１２～１８は不定形石器類にあたる。

②棒状石器　◇図７３－１～１４は、石斧である。１、２、４はほぼ完形品、他は頭部や刃部欠損である。８は頭部に打痕あり、７は凹石状に転用した打痕のあるもの、４、１３は細身でノミ状の工具である。１３は擦切手法によって切り出された擦切石斧である。

◇図７３－１５、１６は石棒である。１５は頭部、１６は中間残で全体にヨコ整形痕のものである。

◇図７４－１７は砂岩質の砥石、中部に擦切れて穴の開いたもの、全体として船形底である。(縮尺2分の1)

◇図７４－１８、２０、２１は打石器である。１８は上・下部とも打痕で変形し、両面も打痕と擦痕がある。２０は凹石に転用されたもので、上・下部に打痕による変形、両面中央部に２個凹穴がある。２１も上・下部打痕、下部に焼跡、両面中央部黒色である。

◇図７４－１９は小形打石器で、繭形で上・下端に打痕、擦痕があって、変形している。小穴での擦用具と考えられる。

◇図７４－２２、図７５－２３～２９は礫石器である。円礫から小判形と各種が存在する。２２は２号人骨出土の近くから検出。２３は両平坦面に擦痕あり。２４も上部先端と両側面に打痕と擦痕がある。２５は長方形で両面平坦なもの。２６も両面に平坦部がある。２７は反対側が大きく欠損したものである。２８は小判形で下部欠損であるが両面に平坦部あり、上部両側面に打痕がある。２９は１号人骨東１ｍ出土、鎮石でないかと話題になったもの、小判形、両面平坦、両側面に加工整形がなされたもの。

◇図７５－３０～３６、図７６－３８～４３は、凝灰岩を使用した遺物類で、垂飾具、石の中央部に凹部を造り出した遺物、両面に不明の刻線が刻まれた遺物、凹石に転用したものなどがある。３０は片面中央部に舟底状の凹部のもの。３１は細長い形態で、上部に貫通孔があり、表面に刻線、擦痕がある。垂飾品と考えられる。３２も下部欠損しているが、垂飾品である。３３は上部欠損、凹石に転用されたもの、上面中央部に打痕による凹部がある。両面に整形痕がある。３４は下部欠損、特に左側面に約２㎜幅のノミ状の削痕がある。３５は下部欠損、下部に凹部、用途不明、未製品か。３６は３０と同じ中央部に舟底状の凹部のあるもの。図７６－３８～４０は平板状の不定形な凝灰岩に、不明の刻線の刻まれた遺物である。４１～４４は欠損部を持った、平板状のもので用途は明らかでないものである。

◇図７５－３７は第２号人骨の胸部から検出した小玉であり装身具である。

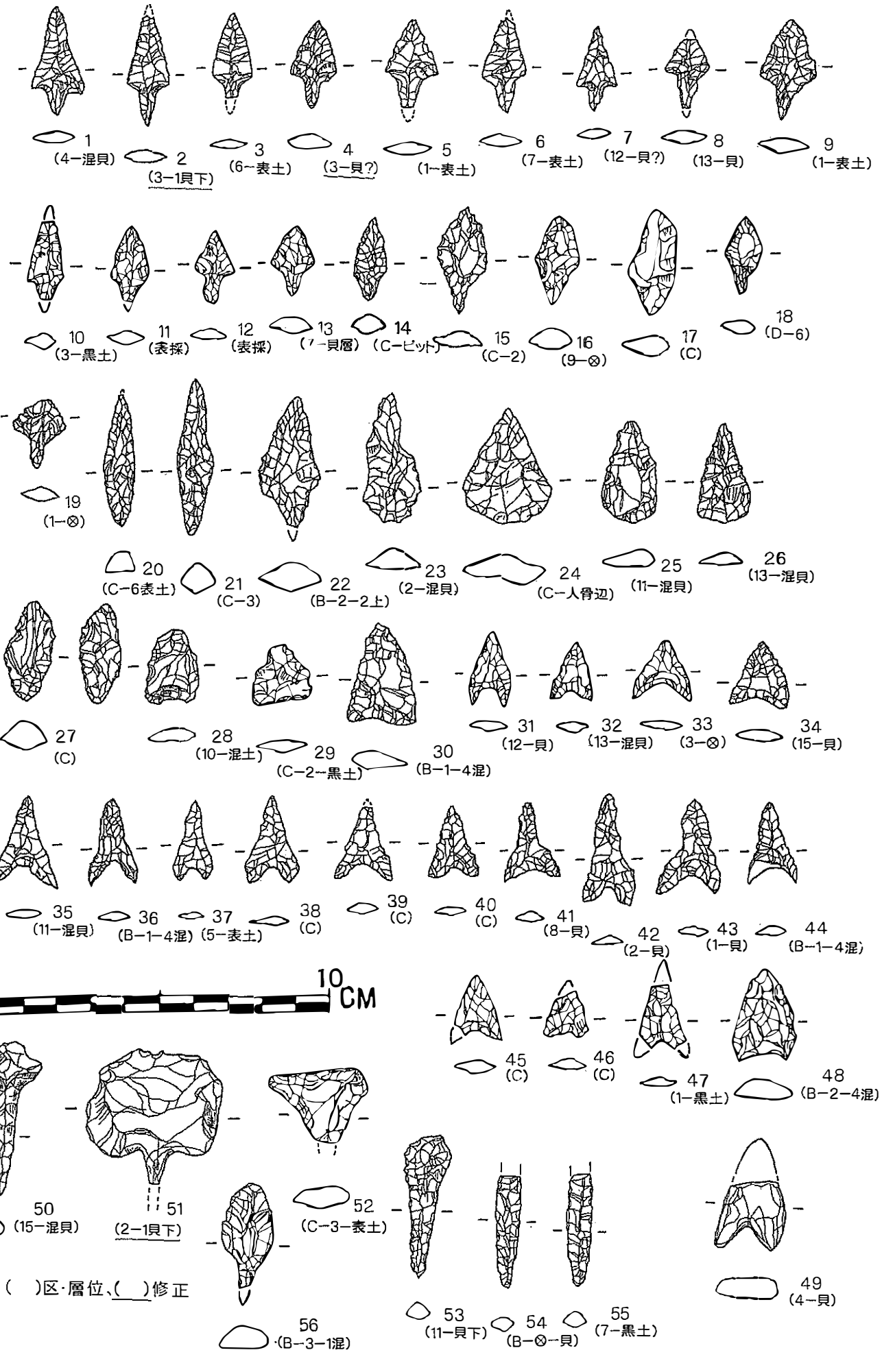
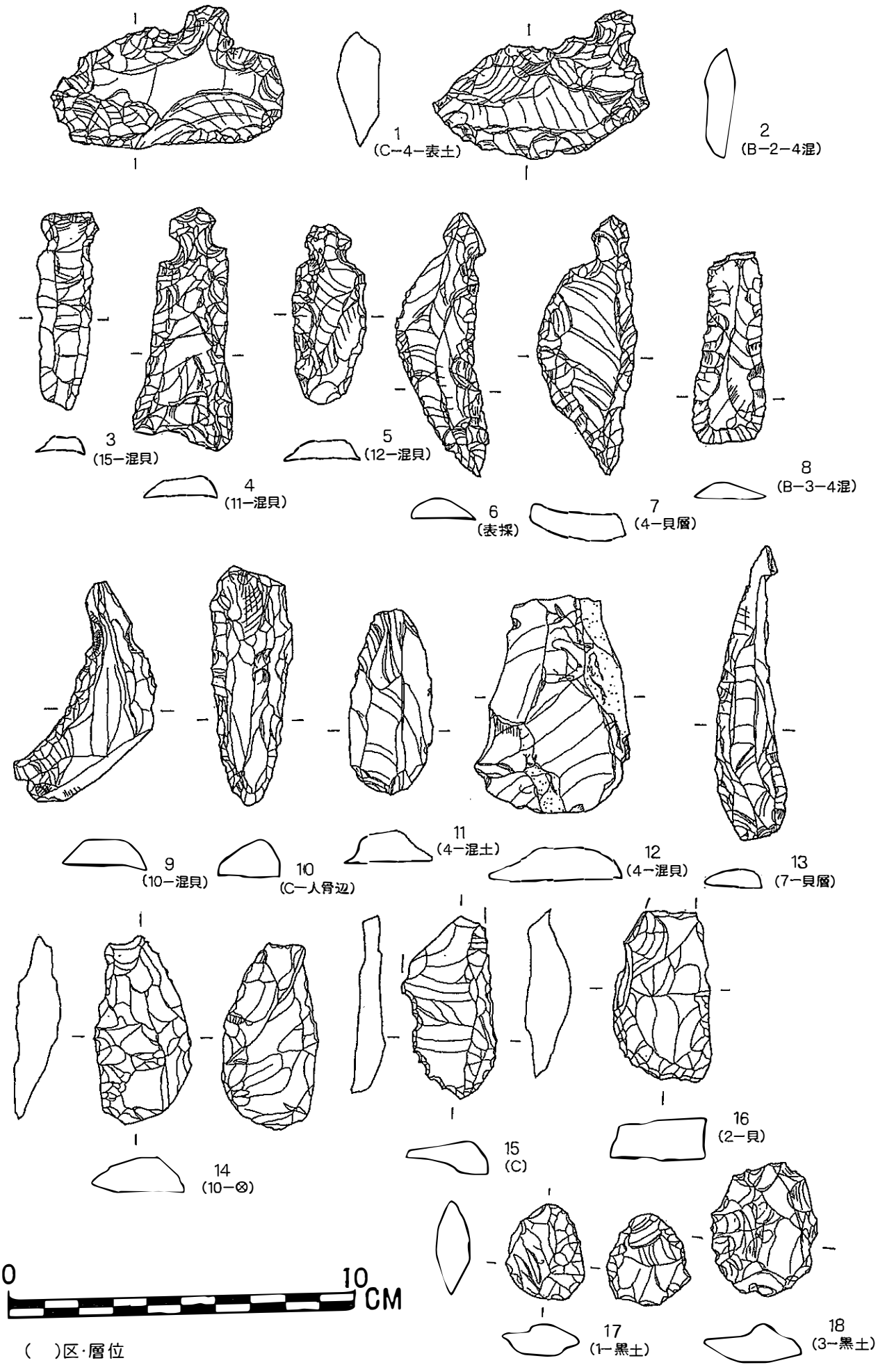

1 (4−混貝)
2 (3−1貝下)
3 (6−表土)
4 (3−貝?)
5 (1−表土)
6 (7−表土)
7 (12−貝?)
8 (13−貝)
9 (1−表土)
10 (3−黒土)
11 (表採)
12 (表採)
13 (7−貝層)
14 (C−ピット)
15 (C−2)
16 (9−⊗)
17 (C)
18 (D−6)
19 (1−⊗)
20 (C−6表土)
21 (C−3)
22 (B−2−2上)
23 (2−混貝)
24 (C−人骨辺)
25 (11−混貝)
26 (13−混貝)
27 (C)
28 (10−混土)
29 (C−2−黒土)
30 (B−1−4混)
31 (12−貝)
32 (13−混貝)
33 (3−⊗)
34 (15−貝)
35 (11−混貝)
36 (B−1−4混)
37 (5−表土)
38 (C)
39 (C)
40 (C)
41 (8−貝)
42 (2−貝)
43 (1−貝)
44 (B−1−4混)
0
10 CM
45 (C)
46 (C)
47 (1−黒土)
48 (B−2−4混)
49 (4−貝)
50 (15−混貝)
51 (2−1貝下)
52 (C−3−表土)
53 (11−貝下)
54 (B−⊗−貝)
55 (7−黒土)
56 (B−3−1混)
( )区・層位、( )修正

図 71


1
(C−4−表土)
2
(B−2−4混)
3
(15−混貝)
4
(11−混貝)
5
(12−混貝)
6
(表採)
7
(4−貝層)
8
(B−3−4混)
9
(10−混貝)
10
(C−人骨辺)
11
(4−混土)
12
(4−混貝)
13
(7−貝層)
14
(10−⊗)
15
(C)
16
(2−貝)
17
(1−黒土)
18
(3−黒土)
0
10CM

(　)区·層位

図 72

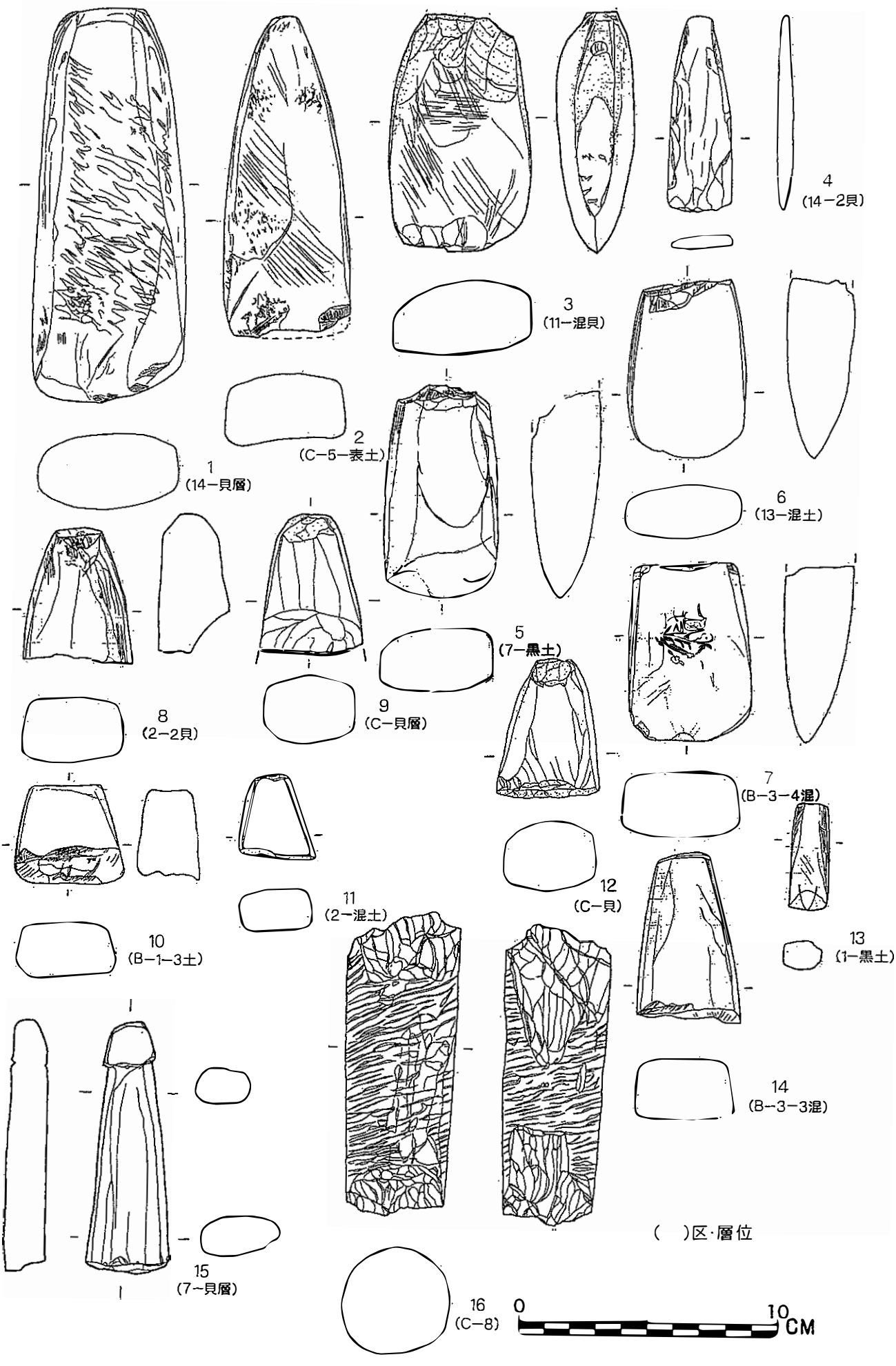

1
(14−貝層)
2
(C−5−表土)
3
(11−混貝)
4
(14−2貝)
5
(7−黒土)
6
(13−混土)
7
(B−3−4混)
8
(2−2貝)
9
(C−貝層)
10
(B−1−3土)
11
(2−混土)
12
(C−貝)
13
(1−黒土)
14
(B−3−3混)
15
(7−貝層)
16
(C−8)
( )区・層位
0
10 CM

図 73

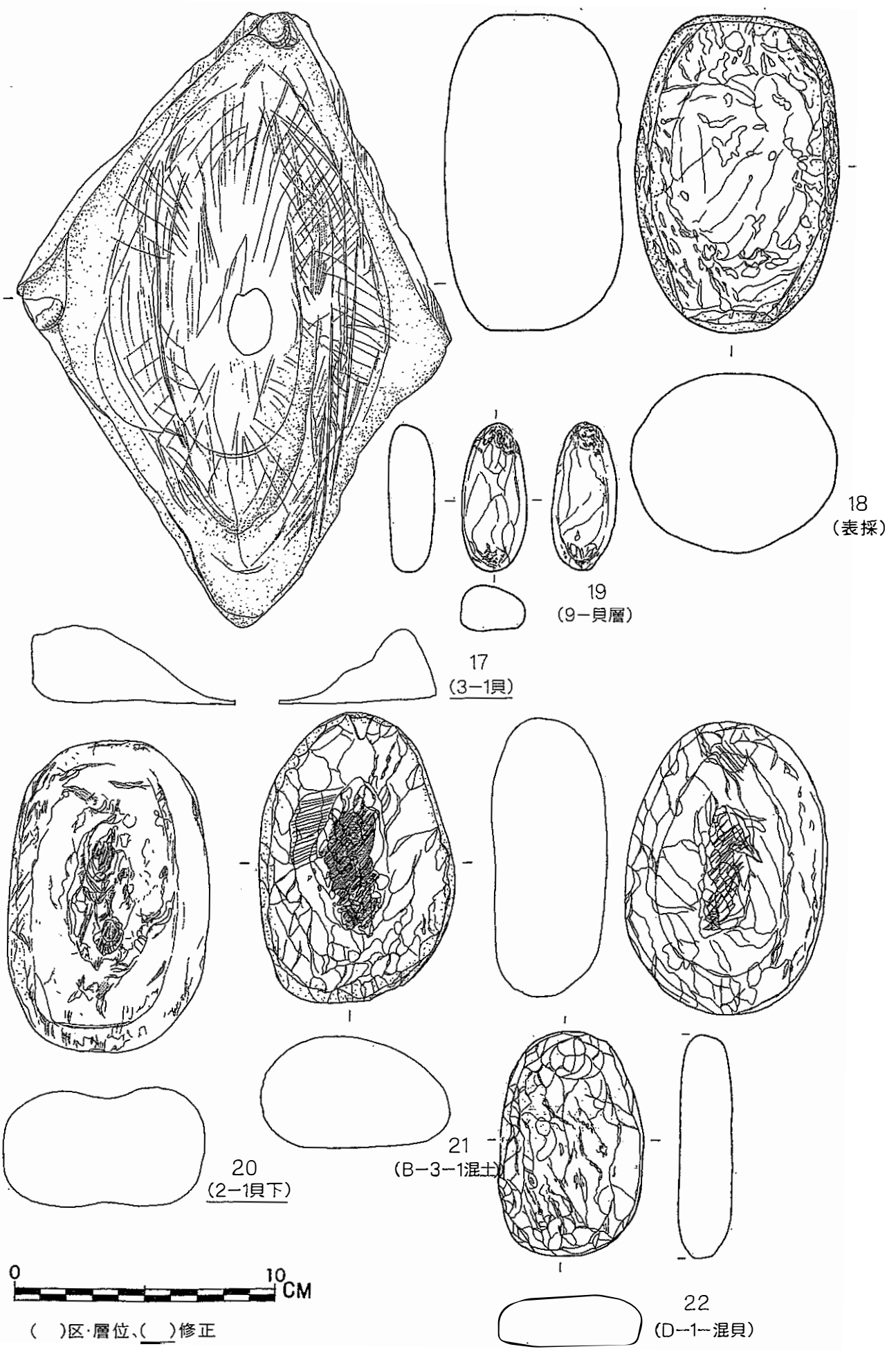


図 74

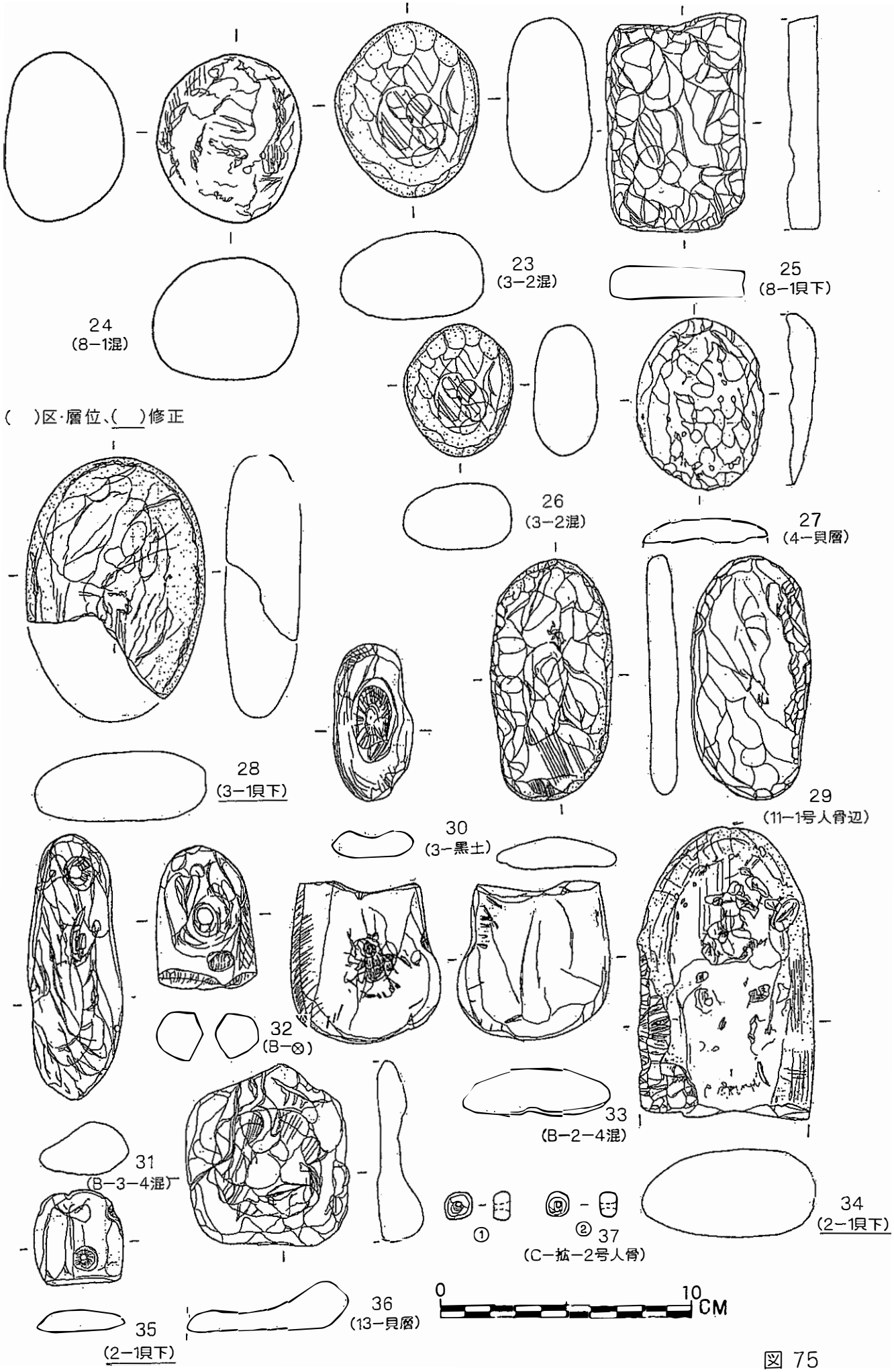
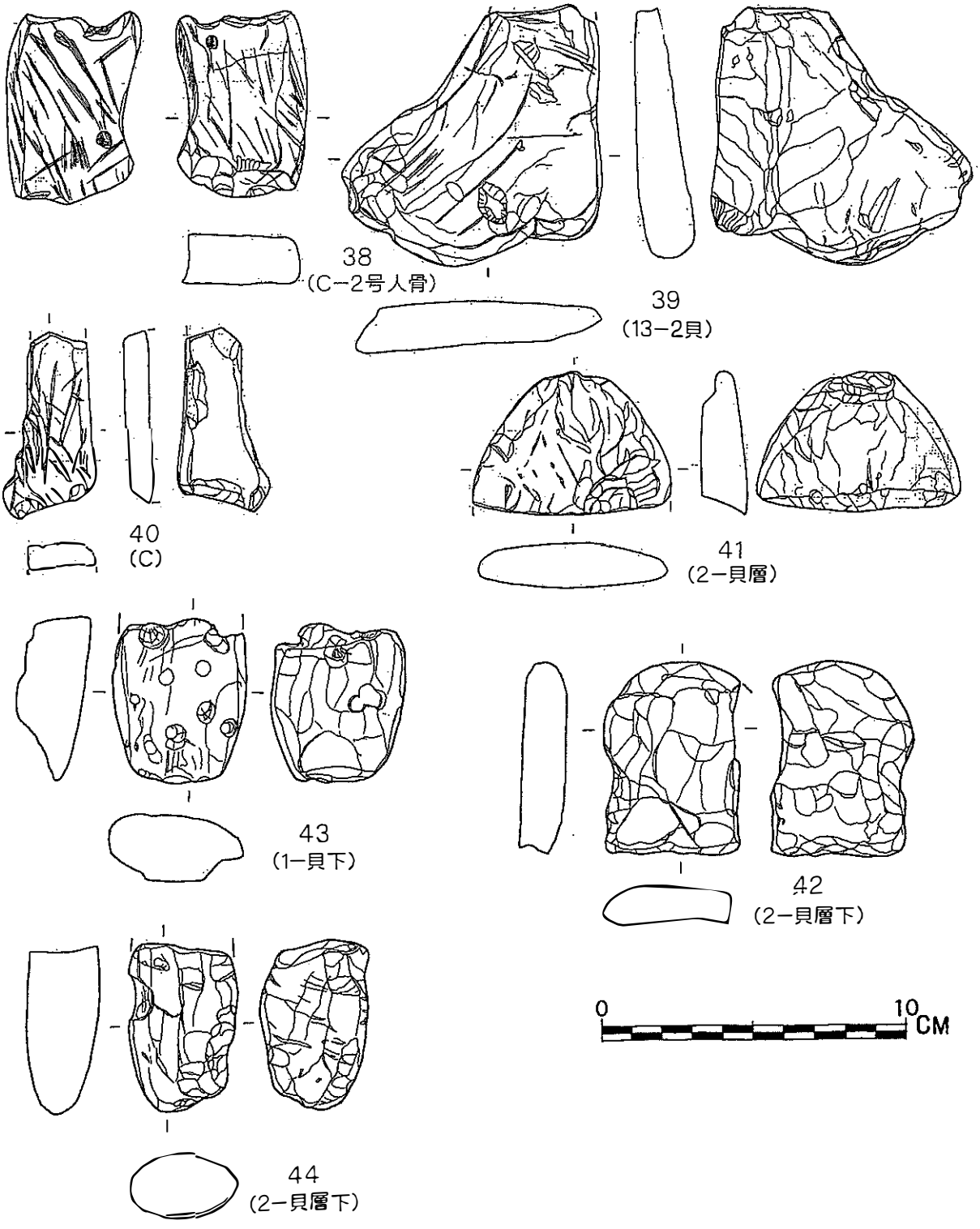

24
(8−1混)
23
(3−2混)
25
(8−1貝下)
( )区·層位、( )修正
26
(3−2混)
27
(4−貝層)
28
(3−1貝下)
29
(11−1号人骨辺)
30
(3−黒土)
32
(B−⊗)
33
(B−2−4混)
31
(B−3−4混)
34
(2−1貝下)
①
②
37
(C−拡−2号人骨)
36
(13−貝層)
35
(2−1貝下)
0
10
CM

図 75



(　)区･層位

図 76

（3） 骨角製品 （図７７～８４）

① 釣針 ◇図７７、７８－２８～３１は、釣針とその未製品である。釣針の全体を知ることの出来る資料は僅かである。１は特に大形の釣針で、外側に鉤が付いた唯一の完形品である。形態はチモトから太く、頑丈なＵ字状の形態、長さ約７cm、厚さ１cmを越えるもので、釣針でも延縄漁で大形魚を対象にした用具とも考えられる。時期はＢ－Ⅱ－２土であり後期と考えられる。この１に近いのが９であろう。曲がりの部分が欠けているが形態は、太くＵ字形と想定される。

小形の完形品は１２～１４である。内・外の鉤のない単純な形態で、曲がりはＶ字形である。大きさ４cm程である。曲がり欠損の釣針が多い。チモト、曲がりの欠損した遺物で、細身の８cm前後の大形釣針も、曲がりがＶ字状の形態が多く、１のＵ字状の形態と対象的である。

◇図７７－２４、２５は錨形釣針である。頭部に貫通孔があり、吊して使用する用具である。２４は錨の左側の欠損したもの。２５は錨形の変形で、片側だけのものである。

◇図７７－２６、２７は特殊な形態のもので、２６は鹿角の叉状の部分を利用したもので、丹念な整形がなされ、叉状下部の断面にＵ字状の溝が造り出され、叉状の基部部分に刻みを入れたもので、吊り上げる機能を持たせたものと考えられる。現存部約６cmで基部の厚み、約２cm程の大形のものである。２７は先端部が欠損して全体を知ることが出来ないが、頭部に釣針のチモトと同じ糸掛け状の施設が造り出され、下端は鹿角の反りを利用して反り曲がり、その裏側に紐止め状の造り出しがあり、これも吊り上げる機能を持ったものと考えた。長さ約１０cm程である。したがって、この２点共、物を吊り上げるものと考えた。

◇図７８－２８～３１は釣針の未製品である。鹿角を縦割りしたもの(図81-104､105)を板状に扁平にし、それに切り込みを入れて整形していく過程を知ることが出来る。

② 銛頭 ◇図７８－３２～４２は鹿角製銛であり離頭銛である。形態で分類されるが、ほぼ中央部に索孔(貫孔) を持つものである。３２～３４は名称が気になるが、古式離頭銛である。基部が開脚し中央部に索孔がある。３８、３９は前者からの発展形態と考えられる。開脚した一方の脚が消失して、逆刺の機能を果たす程度に退化し、一方の脚は丸味を帯びて軸となるものである。３５～３７、４０、４１は数個の逆刺を左右に配置し、基部が完全に軸となったもの、４０～４２はＢトレンチ出土で、時期は後期中葉前後である。４２は未製品であるが燕尾形銛であろう。

◇図７８－４３～５５、図８１－１０１は銛と考えられるもの、固定銛である。４３の屈折部にアスファルト付着、同じく４５の基部にアスファルトが付着しており、棒状に固定したことが明らかである。４６はアカエイの尾刺を利用したものである。４７～５５は上部欠損し、単なる刺突具かもしれない。

③ 骨鏃 ◇図７８－５６～６０である。刺突具の一種で、５６、５７は基部にアスファルトが付着したものである。

④ 棒状角器 ◇図７９－６１～７０である。鹿角を利用したもので、自然面を残し、裏側、側面を丹念に整形し、頭部は丸味を帯び、下部はやや角度を持たせて削り、やや細身となる。用途は明らかでない。

⑤ 骨針 ◇図７９－７１～７９である。素材が多様で、中手骨か中足骨を縦割りにして、

先端を鋭利に尖らせ刺突具としたもの、鹿角や鳥骨を利用したものもある。上部欠損したものが多く、また先端部の欠損もあり形態の知れる遺物は７１～７３、７８、７９程度である。

⑥　骨篦、骨匕　◇図７９－８０、図８０－８１～８３である。中手骨、中足骨を縦割りした素材を使用、完形品は８０で、他は先端部が欠損である。８３は細身である。

⑦　篦状骨器　◇図８０－８４～８７である。形態不定で篦状に薄く整形されたもの、用途は不明。◇図８１－９９は上に２個索孔があり、篦状で扁平である。鯨骨製。

⑧　装身具類　◇図８０－８８～９６、図８１－９７～９８。　形態は上部に索孔(貫通孔)を持つものである。素材は多様で、鹿角、鹿角の骨幹部、鳥骨、キツネの下顎骨、マフグ上顎骨等である。形態も多様である。８８、８９は上部に索孔があるが、細身であり下部欠損のため全様は不明であり、上部に索孔を持つ細身もあり、骨針かも知れない。９２は上部欠損、下部に螺旋状に文様が施文したもので、特殊なものである。

⑨　骨刀　◇図８１－１００は鯨骨製で、刀の様に反りがあり、手元はやや太く、上部に鉤状の造りがあり、裏側に凹部がある。長さ４２．２㎝と長いものである。Ｂ－Ⅲ－３混出土で、時期が後期である。

◇図８１－１０２～１０５、図８２－１０６～１２５は、鹿角の切断、縦割りのなされたもので、製品への過程を知ることができる。１０４、１０５は鹿角の半裁で、図７８－２８～３１のように扁平な資材にする、前段階のものである。１１８～１２３は上下を切断した素材を、縦に小割にしたものである。

◇図８３－１～１１、図８４－１２～１４は、スズキの鰓蓋骨である。１～７は左、８～１４は右である。この鰓蓋骨に刺突痕、噛み痕、押圧痕の有るものである。魚の刺突漁の痕跡かと考えたが、どうも犬の噛み痕が大部分のようである。３、４の押圧痕が刺突漁による痕跡と考えられる。

（４）　貝製品　（図８４～８６）

①　貝輪　◇図８４－１～５、６～９、図８５－１０～１８、図８６－１９～２６である、１～５はサルボウ製であり、以下はイタボカキ製である。特に、１０、１１、１２、１５、１９は完形品、それに近いものであるが、中央部の穴が小さいことから、未製品のようである。

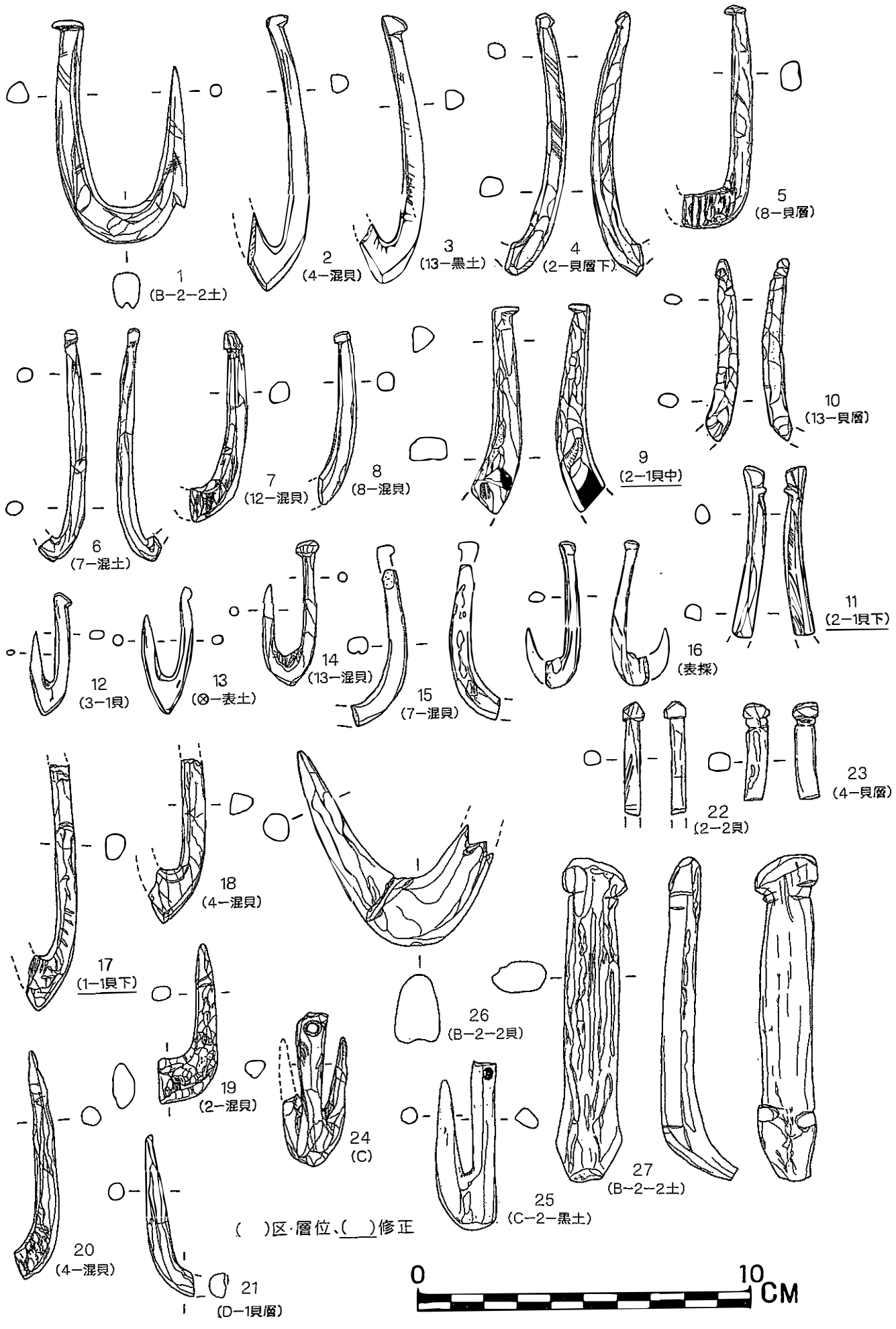

1
(B−2−2土)
2
(4−混貝)
3
(13−黒土)
4
(2−貝層下)
5
(8−貝層)
6
(7−混土)
7
(12−混貝)
8
(8−混貝)
9
(2−1貝中)
10
(13−貝層)
11
(2−1貝下)
12
(3−1貝)
13
(⊗−表土)
14
(13−混貝)
15
(7−混貝)
16
(表採)
17
(1−1貝下)
18
(4−混貝)
19
(2−混貝)
20
(4−混貝)
21
(D−1貝層)
22
(2−2貝)
23
(4−貝層)
24
(C)
25
(C−2−黒土)
26
(B−2−2貝)
27
(B−2−2土)
( )区・層位、( )修正
0
10
CM

図 77

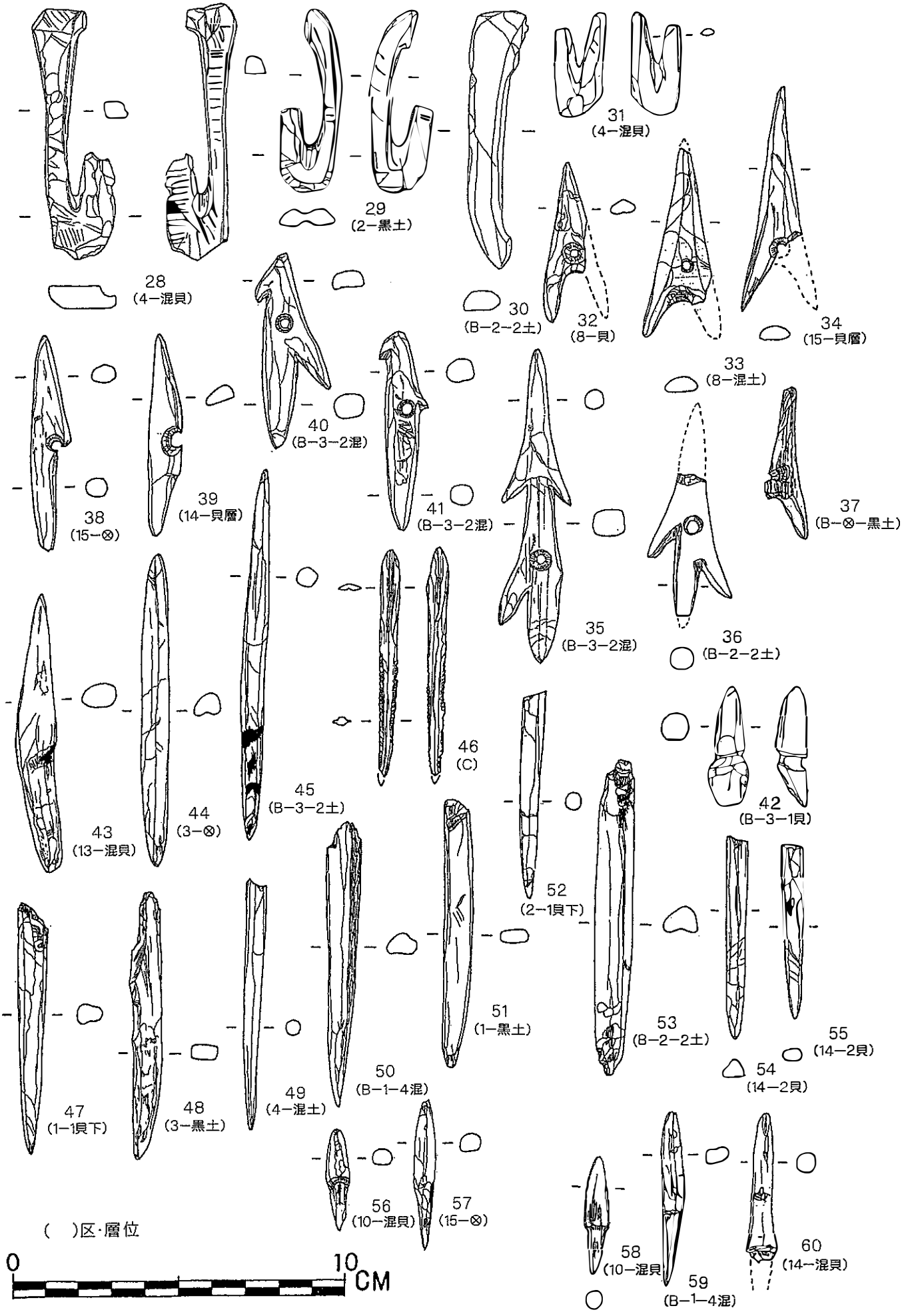
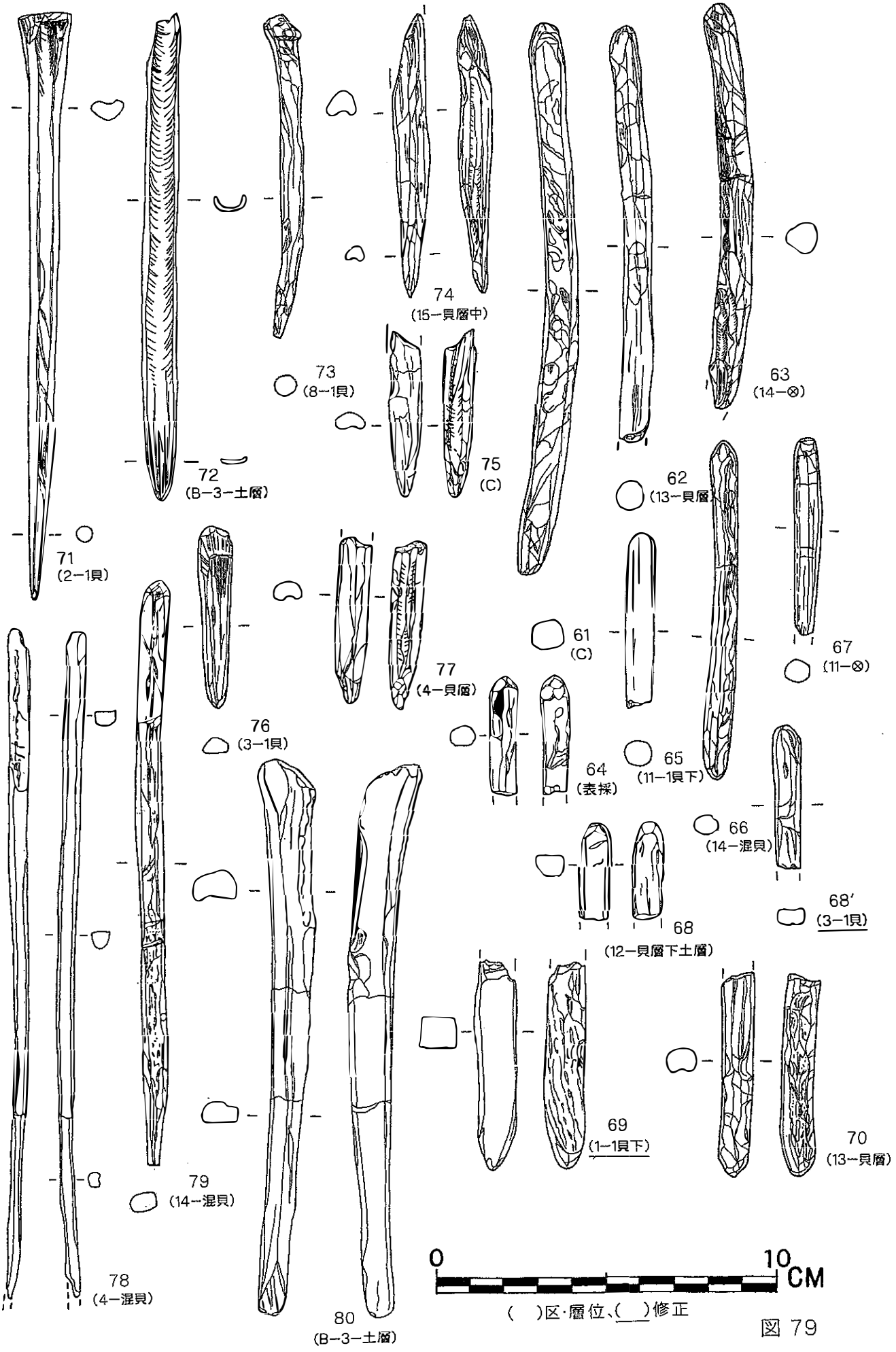

28
(4−混貝)
29
(2−黒土)
30
(B−2−2土)
31
(4−混貝)
32
(8−貝)
33
(8−混土)
34
(15−貝層)
35
(B−3−2混)
36
(B−2−2土)
37
(B−⊗−黒土)
38
(15−⊗)
39
(14−貝層)
40
(B−3−2混)
41
(B−3−2混)
42
(B−3−1貝)
43
(13−混貝)
44
(3−⊗)
45
(B−3−2土)
46
(C)
47
(1−1貝下)
48
(3−黒土)
49
(4−混土)
50
(B−1−4混)
51
(1−黒土)
52
(2−1貝下)
53
(B−2−2土)
54
(14−2貝)
55
(14−2貝)
56
(10−混貝)
57
(15−⊗)
58
(10−混貝)
59
(B−1−4混)
60
(14−混貝)
( )区·層位
0
10 CM

図 78


71
(2−1貝)
72
(B−3−土層)
73
(8−1貝)
74
(15−貝層中)
75
(C)
63
(14−⊗)
62
(13−貝層)
61
(C)
67
(11−⊗)
77
(4−貝層)
76
(3−1貝)
64
(表採)
65
(11−1貝下)
66
(14−混貝)
68′
(3−1貝)
68
(12−貝層下土層)
69
(1−1貝下)
70
(13−貝層)
79
(14−混貝)
78
(4−混貝)
80
(B−3−土層)
0
10 CM

( )区·層位、( )修正

図 79

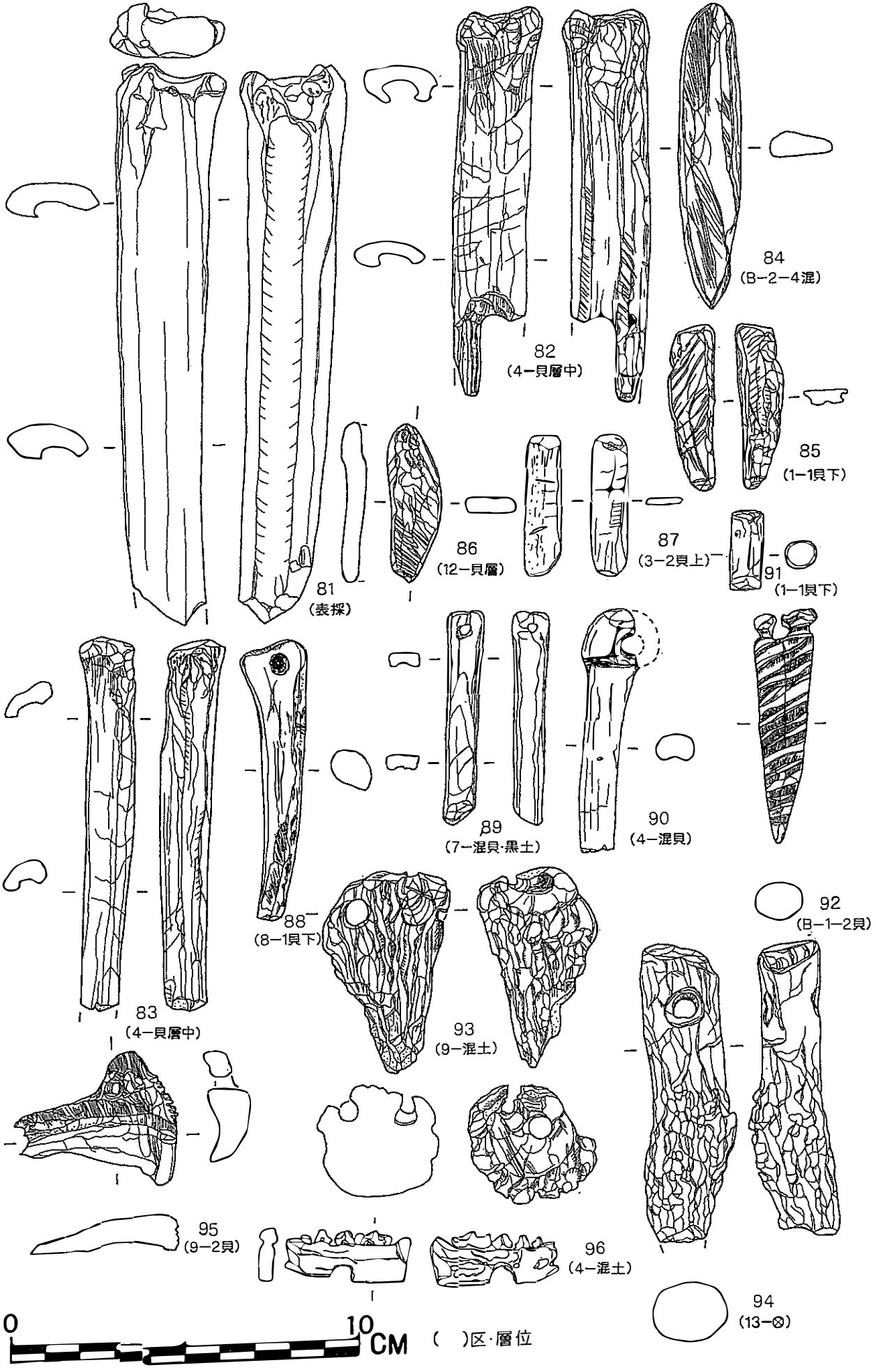
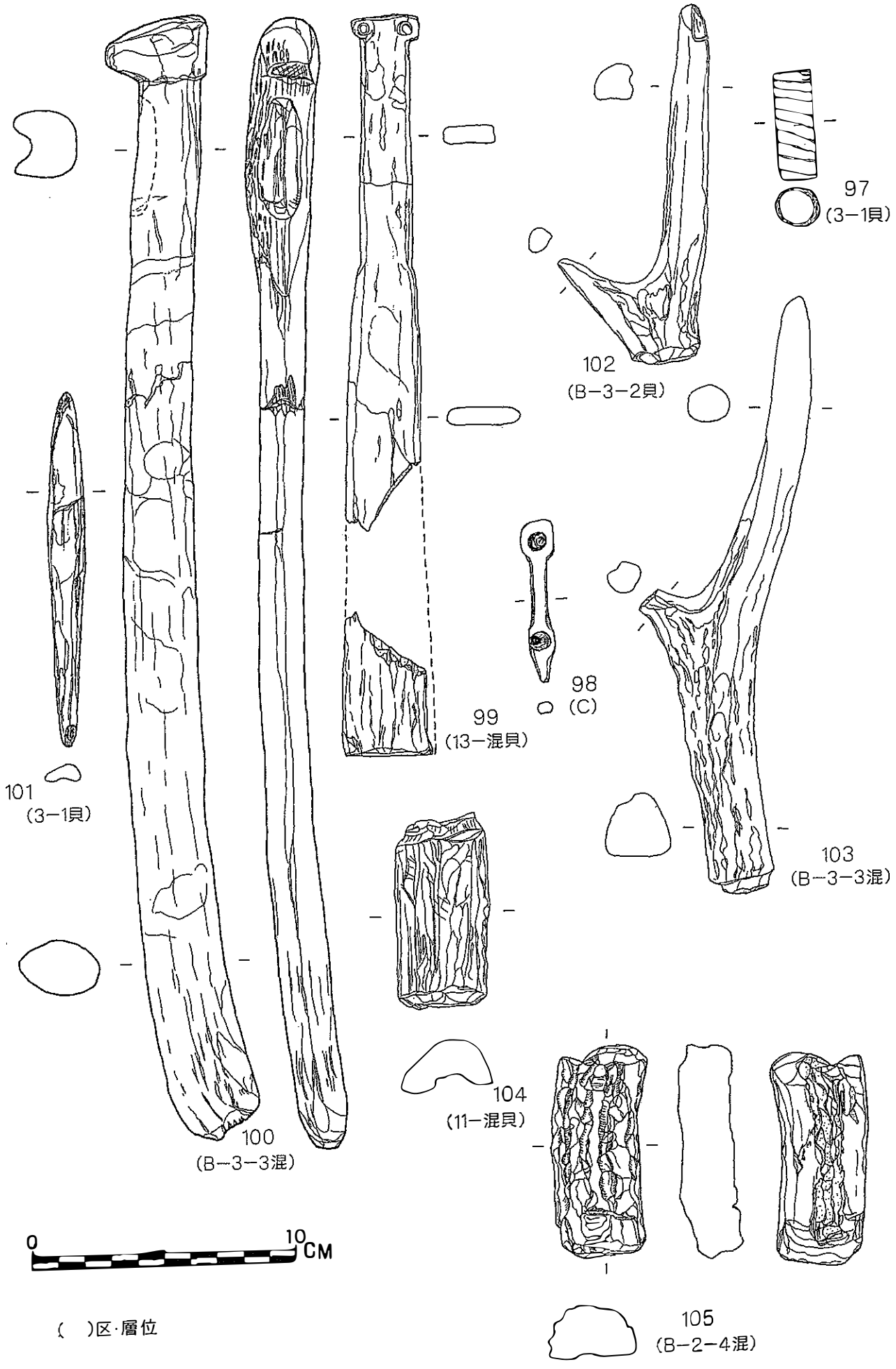
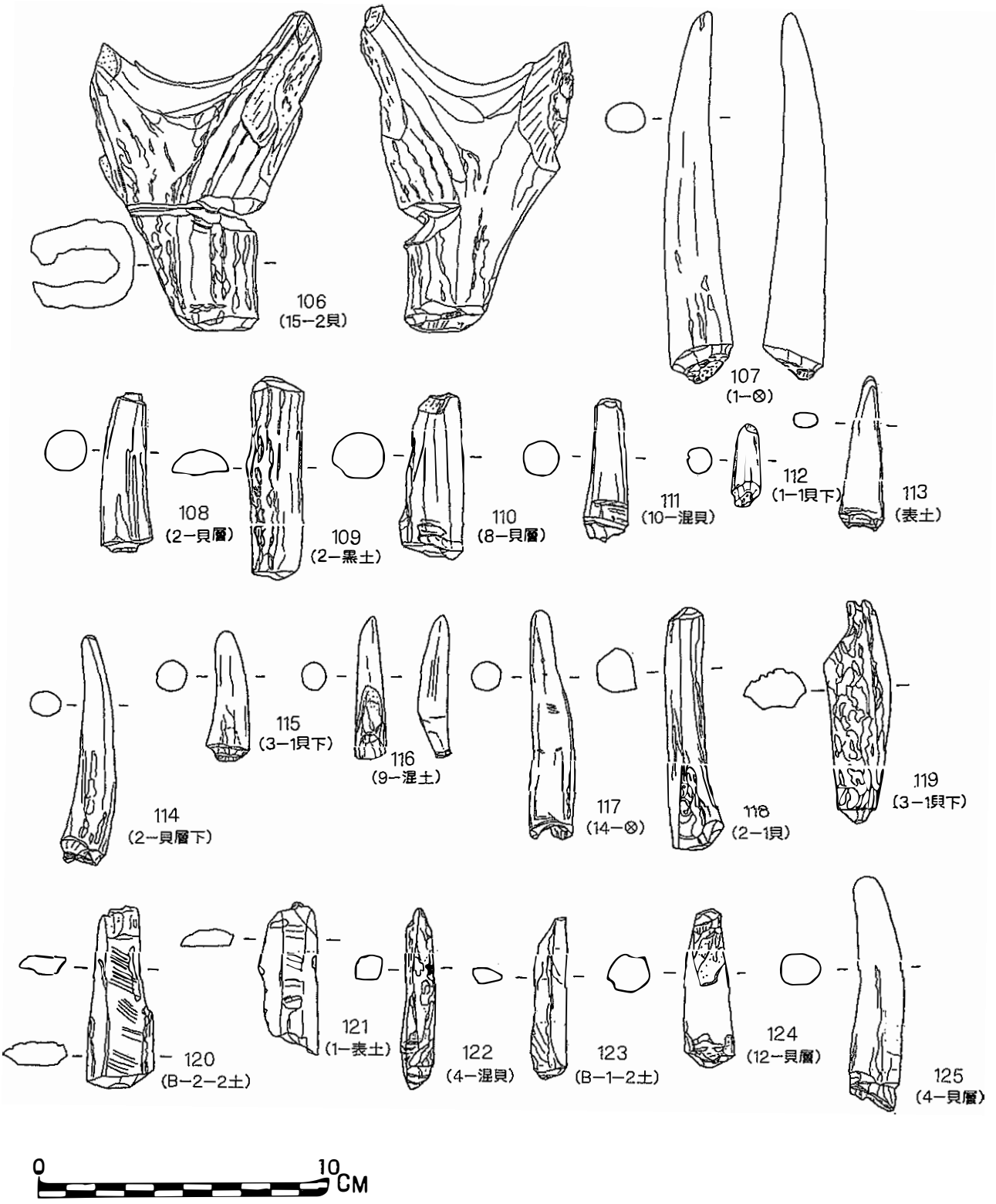

81
(表採)
82
(4−貝層中)
84
(B−2−4混)
85
(1−1貝下)
86
(12−貝層)
87
(3−2貝上)
91
(1−1貝下)
83
(4−貝層中)
88
(8−1貝下)
89
(7−混貝・黒土)
90
(4−混貝)
92
(B−1−2貝)
93
(9−混土)
95
(9−2貝)
96
(4−混土)
94
(13−⊗)
0
10CM
( )区・層位

図 80


97
(3−1貝)
102
(B−3−2貝)
101
(3−1貝)
99
(13−混貝)
98
(C)
103
(B−3−3混)
100
(B−3−3混)
104
(11−混貝)
105
(B−2−4混)
0
10
CM

( )区·層位

図 81


106
(15−2貝)
107
(1−⊗)
108
(2−貝層)
109
(2−黒土)
110
(8−貝層)
111
(10−混貝)
112
(1−1貝下)
113
(表土)
114
(2−貝層下)
115
(3−1貝下)
116
(9−混土)
117
(14−⊗)
118
(2−1貝)
119
(3−1貝下)
120
(B−2−2土)
121
(1−表土)
122
(4−混貝)
123
(B−1−2土)
124
(12−貝層)
125
(4−貝層)
0
10CM

(　)区·層位

図 82

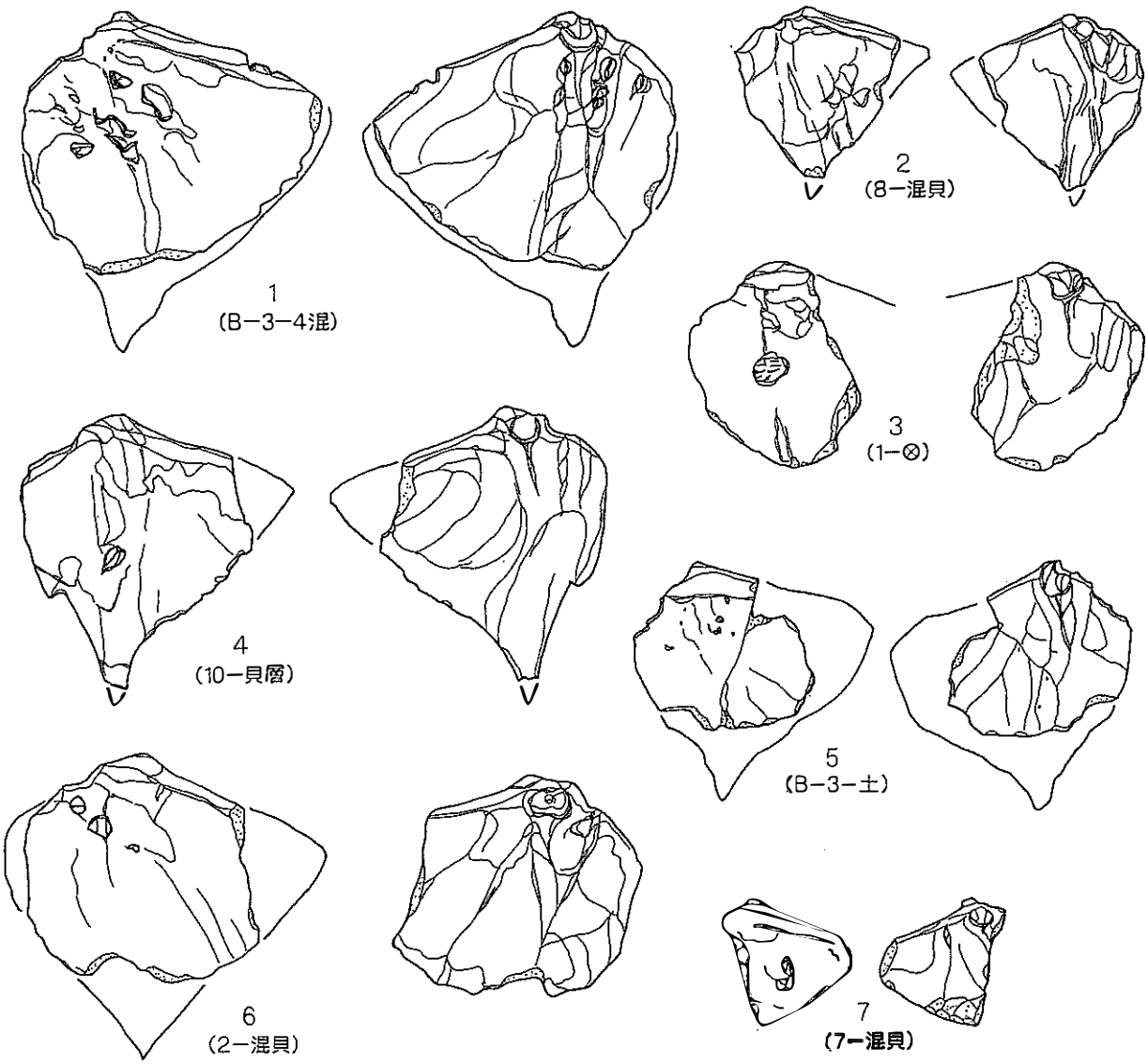

1
(B−3−4混)
2
(8−混貝)
3
(1−⊗)
4
(10−貝層)
5
(B−3−土)
6
(2−混貝)
7
(7−混貝)
0
10CM
8
(D)
9
(表採)
10
(B−3−4混)
11
(2−⊗)
(　)区·層位

図 83

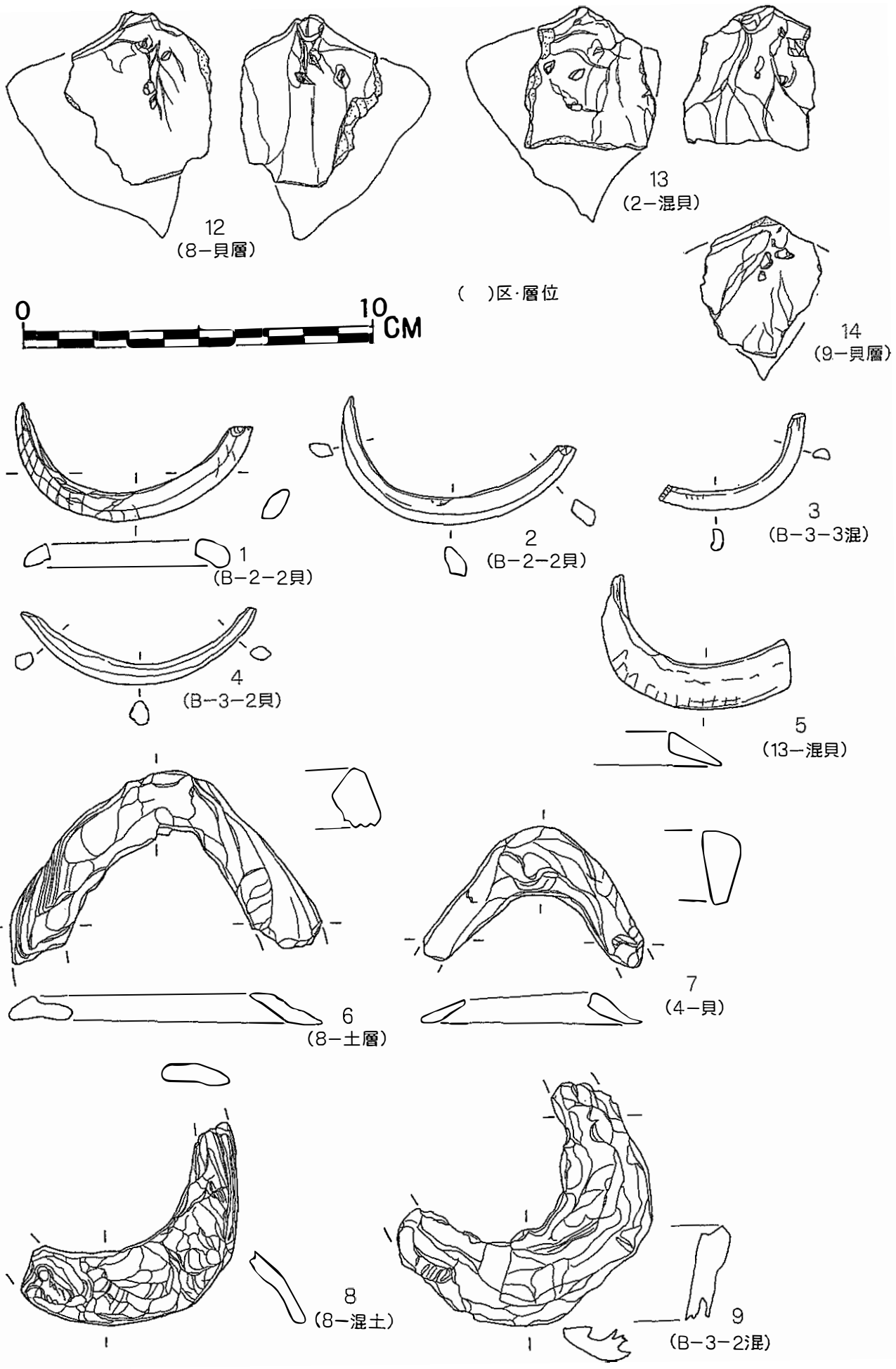

12
(8−貝層)
13
(2−混貝)
14
(9−貝層)
( )区·層位
0
10CM
1
(B−2−2貝)
2
(B−2−2貝)
3
(B−3−3混)
4
(B−3−2貝)
5
(13−混貝)
6
(8−土層)
7
(4−貝)
8
(8−混土)
9
(B−3−2混)

図 84

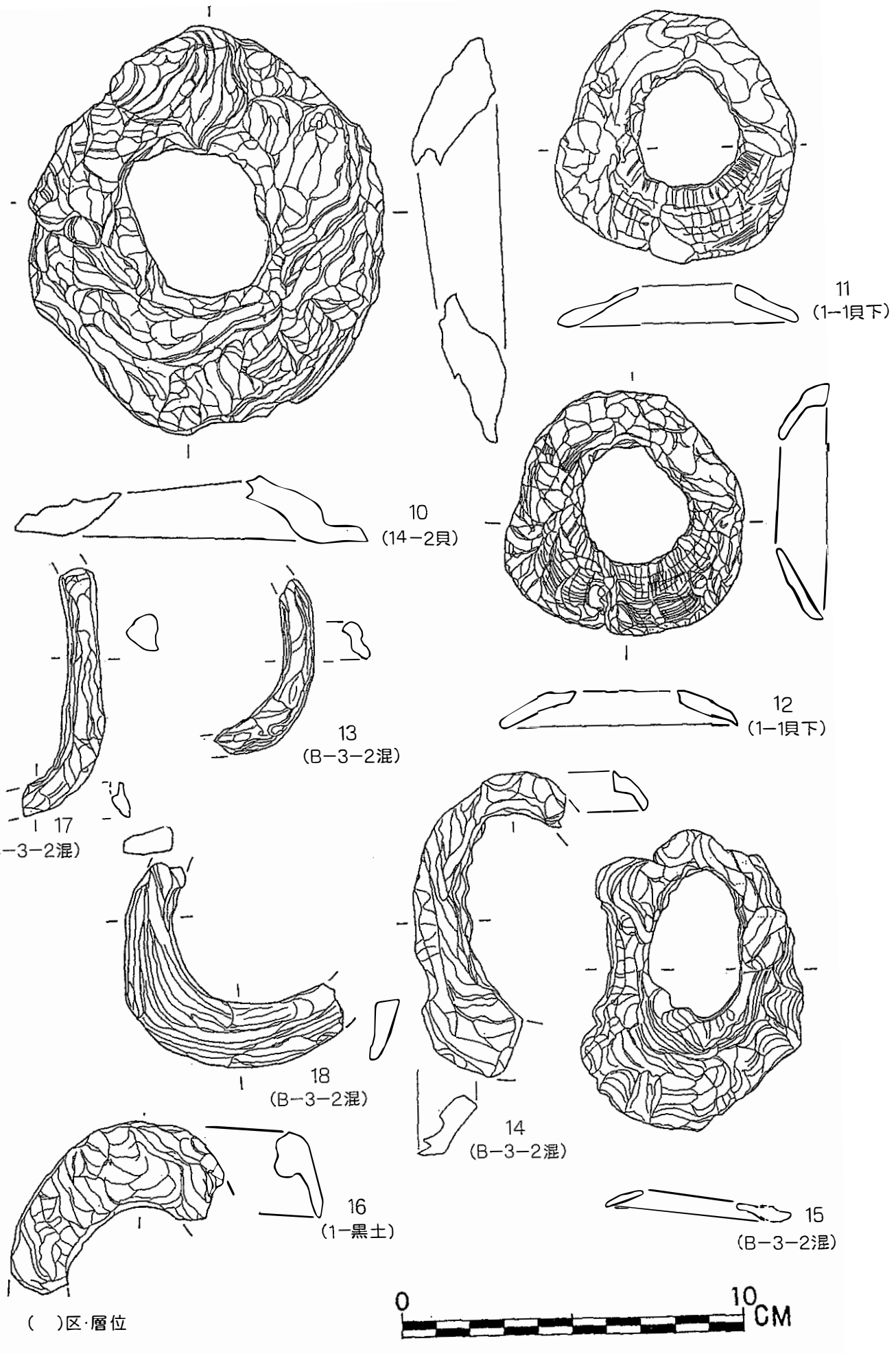
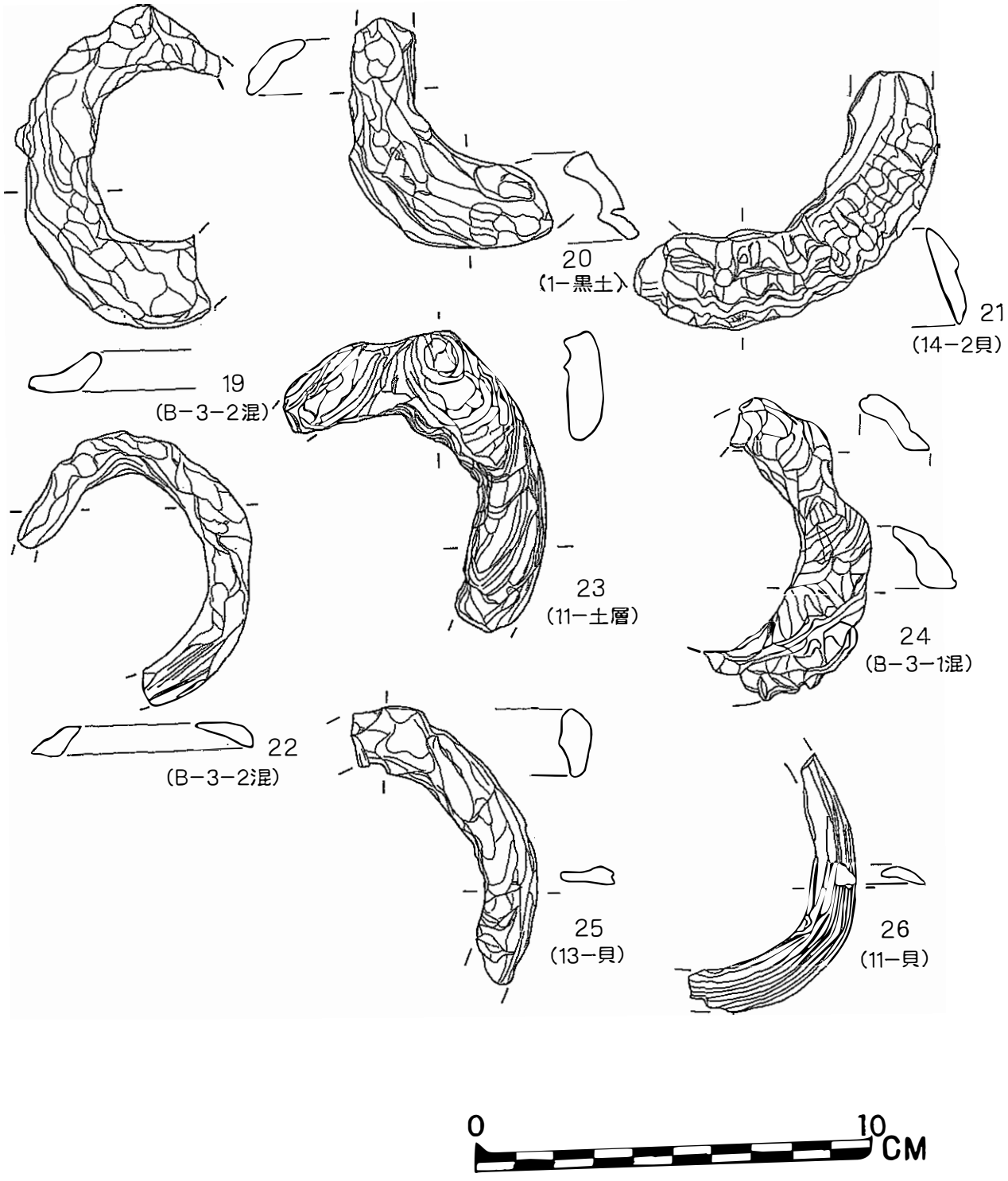

11
(1−1貝下)
10
(14−2貝)
12
(1−1貝下)
13
(B−3−2混)
17
(B−3−2混)
18
(B−3−2混)
14
(B−3−2混)
16
(1−黒土)
15
(B−3−2混)
( )区·層位
0
10
CM

図 85


19
(B−3−2混)
20
(1−黒土)
21
(14−2貝)
22
(B−3−2混)
23
(11−土層)
24
(B−3−1混)
25
(13−貝)
26
(11−貝)
0
10
CM

(　)区·層位

図 86

（5）自然遺物について

西の浜貝塚のＡトレンチの貝層は、貝の混入があまり密でない混貝的な貝層である。昭和４１年代の調査であり、自然遺物を特に主題とする調査ではなかった。調査者の眼に触れた大形の遺物を拾い挙げる程度であった。したがって、イノシシ・シカ、海獣類の骨格、それに鹿角・人骨といった大形遺物の収集が多い。しかし、整理を進めて見て、案外小形の魚骨・鳥骨等の遺存骨が採集されているのに驚いた。

今回の整理の結果、同定された動物遺体は、以下のように１０綱６８種類に分類された。昔の荒い調査方法としては分類種が多い。それは、その後、貝塚調査に縄文人の生活復元には、生業の復元が欠かせないため、二月田・青島・南境貝塚等の調査に、古生物専門家の協力があり、動物遺体の同定、特に、骨格部位の同定の技術、知識が向上し、種類を識別出来るようになったためである。現在、宮城県の貝塚調査で自然遺物の分析がなされない調査はない。

動物遺体の種名一覧表は次の通りである。

Ⅰ　軟体動物門
⑴　腹足綱　８種類
1　クボガイ
2　コシダカガンガラ
3　スガイ
4　ウミニナ
5　ツメタガイ
6　アカニシ
7　イボニシ
8　バイ
⑵　掘足綱　１種類
1　ツノガイ
⑶　二枚貝綱　17種類
1　カリガネエガイ
2　サルボウガイ
3　アカガイ
4　イガイ
5　アズマニシキ
6　マガキ
7　イワガキ
8　イタボガキ
9　ヤマトシジミ
10　ハマグリ
11　オキシジミガイ
12　オニアサリ
13　アサリ
14　シオフキガイ
15　マテガイ
16　オオノガイ
17　アリソガイ
Ⅱ　節足動物門
⑴　十脚目短尾綱　１種類
1　カニ類
Ⅲ　脊椎動物門
⑴　軟骨魚綱　２種類
1　サメ類
2　エイ類
⑵　硬骨魚綱　10種類
1　ボラ
2　マグロ
3　ブリ
4　スズキ
5　クロダイ
6　マダイ
7　タイ類
8　フグ類（ヒガンフグ）
9　マフグ（トラフグ）
10　コチ
⑶　両生綱　１種類
1　カエル
⑷　爬虫綱　１種類
1　ウミガメ科
⑸　鳥網　16種類
1　キジ
2　アビ
3　オオハム
4　カイツブリ
5　アホウドリ
6　ミズナギドリ科
7　ウミウ
8　ヒメウ
9　ウ類
10　マガモ
11　コガモ
12　カモ類
13　オオハクチョウ
14　ヒシクイ
15　ワシタカ科トビ
16　カモメ類
⑹　哺乳綱　11種類
1　ウサギ
2　タヌキ
3　キツネ
4　イヌ
5　オットセイ
6　イノシシ
7　シカ
8　クジラ類
9　イルカ
10　トド
11　ヒト

合計　６８種類

① 貝類

貝類は種名一覧表に示したように腹足綱８種、掘足綱１種、二枚貝綱17種の合計26種類である。採集遺物を見る限り、拾い集められた状態である。その大部分は鹹水産の貝類である。ただ、シジミが１種あり、地理的に近い鳴瀬・江合川から運び込まれた物であろう。他は、貝塚前面に広がる海浜（松島湾）から、食用として搬入され、破棄された物である。採集された貝類で頻度の高い貝類は、腹足綱（巻貝類）が多い。特に、スガイ・アカニシが多い。このように、巻貝類の頻度の高いことは、巻貝の生息地は、潮間帯の波荒い地域、岩礁周辺である。二枚貝のイタボガキ・イワガキ・マガキの採集もあり、採取地域は貝塚前面の海浜より、宮戸島寄りや、桂島周辺の潮流の早い岩礁地帯であろう。

それにしても、貝層のブロックサンプリングの採集がなされていない調査は、貝類の種名はわかるが、貝層の内容を十分に理解することが出来ない欠陥がある。

② 節足動物

十脚目短尾類の１種、カニ類の左鋏部分、(第1顎脚)の可動指、不動指部分である。種名は分からない。

③ 脊椎動物

（１） 魚綱

発掘時に掘りあげた魚の内臓骨の部位骨諸骨の、特徴的な部位によって、種の同定を実施した。その結果、軟骨魚綱２種、硬骨魚綱10種を検出した。

軟骨魚綱のサメ類は椎骨の出土があるが種名はわからない。エイ類は刺突具として使用された、エイ類の尾棘１点がある。長さ７.１㎝(C)である。

硬骨魚綱　ボラは鰓蓋骨Ｌ２Ｒ１の３点出土、マグロは椎骨である。Ａトレ85点、Ｂトレ７点、Ｃトレ５点、Ｄトレ８点合計１０５点である。Ａ３～５区に集中する。出土層位は大木１０式の中期である。この時期に見合う道具類は、離頭銛（古式離頭銛）とこれから形態発展した離頭銛（軸の発生）である。椎骨の大きさも高さ４.14㎝、幅４.４㎝を最高に、高さ３～２㎝前後、幅も３～２㎝で中形のマグロの様である。椎骨の数で機械的に算出しても４匹程度である。

ブリは歯骨でＬ２Ｒ４の６点である。破損しやすい部位であるが、長さ６～５㎝である。Ａ１区の混貝層に集中する。

出土頻度の高いのがスズキである。歯骨Ｌ４１Ｒ６２合計１０３点、高さ１.３～０.９㎝、長さ６～５㎝である。やや小形の遺体も存在する。鰓蓋骨はＬ７７Ｒ６０合計１３７点である。先端部の破損多く、計測できる遺体は多くない。しかし、刺突痕、押圧痕のある遺物がスズキ漁の証拠かと注目された。しかし、大部分は捕獲後のイヌ等の噛痕のようである。しかし、２・３の遺体に刺突漁の痕跡と考えられるものがある。これからも検証しなければと考えている。この他にも、椎骨、主上顎骨、前上顎骨、前鰓蓋骨、関節骨がある。関節骨が多く、Ｌ15Ｒ35合計50点である。長さ６～５㎝前後、幅は３～２㎝である。中形魚としては最も出土量の多い魚種である。

クロダイは歯骨Ｌ４Ｒ３の７点で、歯骨高1.35～1.1㎝、長さ5.25～3.9㎝であり、やや小形の遺体が含まれる。前上顎骨がやや多い出土でＬ９Ｒ10合計19点である。計測値では高さ3.83～3.21㎝、長さ4.14～ 3.2㎝前後である。クロダイは内湾に見られる沿岸魚であり、汽水域にも生息している。冬季にやや深い所に移動する他は、沿岸または湾内の底近くの砂泥底を遊泳し、棘皮類、貝類等を捕食する。春から夏に内湾沿岸の潮間帯の藻場に産卵する。

マダイは歯骨Ｌ９Ｒ11合計20点、歯骨高1.9～0.97㎝の範囲内である。歯骨長5.43～3.76㎝前後である。ただし、歯骨高0.6㎝、歯骨長2.77㎝と超小形のマダイの捕獲がある。

前上顎骨もＬ21Ｒ21合計42点の出土で、計測値長さ5.89～3.62cmの範囲である。したがって、体長は40cm以上が大部分である。特殊なものとして超小形の30cm以下の遺体もある。特に、椎骨の出土は他の部位に比較して少ない。

タイ類はクロダイ・マダイの区分の出来ないものである。額骨６点、上後頭骨９点、椎骨８点、尾部棒状骨１点、主上顎骨Ｌ15Ｒ20合計35点、角骨Ｌ６Ｒ５合計11点である。

フグ類　ヒガンフグで上顎歯骨ＬＲ各１点、下顎歯骨Ｌ１点出土がある。

マフグ　トラフグと考えられる。上部に貫通孔があり垂飾品として加工された遺物で、上顎歯骨Ｒ、歯骨長３.８６cmである。他は上顎歯骨Ｌで歯骨長５.６９cmである。Ｂ－Ⅱ－４混土出土である。

コチ　鰓蓋骨Ｒと歯骨ＬＲが出土している。習性は回遊性なく内湾の沿岸砂泥底に生息し、常に砂泥に体を埋めて隠身する習性がある。４～７月に接岸して産卵する。

（２）両生綱

カエルが１点のみである。

（３）爬虫綱

ウミガメ科のアオウミガメと考えられる。カメの遺存骨出土の頻度が高い。特に、Ａ１区、Ａ２区、ＢⅢ区に集中し、ブロック状の出土である。部位も指骨、肢骨、甲羅などが見られる。Ａ１区12点、Ａ２区23点、Ａ３区３点、Ａ４区３点、Ａ８区４点、Ａ11区６点、Ａ12区４点、Ａ15区３点、ＢⅢ区12点、Ｃ拡張５点のようである。特に、トレンチの南側に頻度が高い。層位を検討すると、第２貝層上の混貝層、時期は宮戸Ⅰｂ式から後期前葉頃である。Ｂトレンチでも４混から土層であり、後期前葉当たりの時期と考えられる。アオウミガメは日本近海ではもっとも普通の種類で、日本の南部砂地の海岸に夜間産卵する。日本の太平洋岸では、６～７月頃夜間に上陸し、砂中に深い穴（50cm）を前肢で掘り、直径35～45mmの球形の卵を100～170個程度産む、産卵後は後肢でその上に砂を覆い、口中の海水を噴き出して跡を隠し、再び海へ戻る。肉は食用になり、甲は亀甲細工の原料ともなる。

（４）鳥綱

鳥骨は特に長管骨は骨質が薄いため破損度は高い。また部位の特徴によって種を同定することは非常に難しい。しかし、合計16種の鳥類を検出した。

キジ　上腕骨Ｌ２Ｒ１合計３点、大腿骨Ｌ４Ｒ３合計７点、烏口骨Ｒ１点、脛骨Ｌ１Ｒ１合計２点の出土がある。キジは平地や山地の草原、雑木林に生息し、４～６月に地上に枯草などで産座を作り、抱卵、繁殖する留鳥で日本の鳥の代表的なものである。キジは人間の生活圏の近くに多く生息するため、捕獲される機会が多かったのだろう。

アビ　烏口骨Ｒ１点の出土である。冬季に日本に渡来する冬鳥、岸近くの河口部や湾内に群生する海鳥である。水泳が巧みで、長く潜水して魚類を主食としている。

オオハム　上腕骨Ｌ１点、尺骨Ｌ１点のみである。アビと同様冬季に日本に渡来する冬鳥で、沿岸や内海に群生し魚類を主食としている。これも魚群を知る目印となる。

カイツブリ　上腕骨Ｒ２点の出土。夏鳥で湖沼、河川にきわめて普通に見られる。

アホウドリ　これも上腕骨Ｒ１点の出土。大形の海洋鳥で夏期繁殖地から飛来する。常に海上にあって長い翼を張って海面上を低く帆翔し魚、イカ、浮遊動物を食としている。

ミズナギドリ科　部位不明の１点のみである。日本近海の無人島や人の少ない島にたくさん集まって巣をかける。繁殖期には斜面に穴を掘って卵を産む。普通は１巣１卵で卵は白い。魚の群れる海面に集まるので、漁師が魚群を見つける目印となり、カツオドリと呼んでいる地方もある。

ウミウ　上腕骨Ｌ４Ｒ５合計９点、大腿骨Ｒ２点、烏口骨Ｌ２Ｒ３合計５点、脛骨Ｌ３Ｒ

１合計４点、橈骨Ｒ１点、尺骨Ｒ１点とやや多く遺体が検出された。本州中部以南には冬鳥として渡来する。鵜飼に使用されるのは、ほとんどウミウである。巣は海に面した絶壁の岩棚上に枯草や海藻を敷いて巣とする。

ヒメウ　大腿骨Ｒ５点の出土がある。北海道と本州北部でも繁殖する。本州以南には冬鳥として渡来する。大きな群れとならず、単独か５～６羽が多く、海に面した岩壁をねぐらとしている。

ウ類　種名の判断できないものである。

マガモ　上腕骨Ｌ３Ｒ１合計４点、尺骨Ｌ３Ｒ１、橈骨Ｌ１Ｒ１も検出された。日本各地に普通に見られる大形カモである。主に穀類や水草等の植物質を食すので、肉の味がよいので狩猟の最適な獲物である。大部分はシベリヤから渡来する。

コガモ　大腿骨Ｌ１Ｒ１合計２点の検出がある。日本産のカモでは最も小さいが、肉の味がよいので狩猟家に喜ばれる獲物である。冬鳥としてシベリヤから渡来する。

カモ類　種名のわからないものである。上腕骨Ｌ８Ｒ７合計15点、脛骨Ｌ４Ｒ３、尺骨Ｌ11R６、橈骨Ｌ２Ｒ２、烏口骨Ｌ３Ｒ３、中手骨Ｌ５Ｒ１と多数の部位が確認されている。カモ類はガン・カモ科のなかでも種類が多い。ここでは、マガモ程度の大きさのものを一括した。マガモ、オナガガモ、ヨシガモ、ヒトリガモなどの陸ガモや、ビロードキンクロ、クロガモなどの海ガモが含まれている可能性が高い。大部分が冬季に日本に渡来する冬鳥で、西の浜貝塚前面の海域に多数見られたと思われる。

オオハクチョウ　中足骨Ｌ１点のみの検出である。オオハクチョウは日本に渡来するガン・カモ科最大の冬鳥で、海岸、湖沼に群生し、主に水草を食べる。

ヒシクイ　これも中足骨Ｒ１点だけである。大形のガンで日本に渡来するガンのうち最も数が多い。冬鳥として渡来し、昼間に田や干潟、池などで休み、夜間に田や池に飛来して、水草の茎や根､穀類を食す。ヒシクイの名は好んでヒシの根や茎を食べるために名づけられた。

ワシタカ科トビ　上腕骨？１点のみである。現在、普通に見られるタカで、冬鳥として渡来し、岩壁のある海岸、川沿いに生息し上空を旋回して獲物を狙う。

カモメ類　部位不明　一般に海に面した絶壁に集団した繁殖する。日本に冬鳥として渡来し、大形の卵２～３個を産む。カモメは漁師にとって魚の群の目印となるので、地域によって大切にしている。

（5）哺乳綱

ウサギ　大腿骨Ｒ２点が検出されている。小形哺乳類の代表である。

タヌキ　下顎骨Ｌ１Ｒ１計２点、寛骨１点がある。タヌキは雑食性の中形獣で、沢筋・池沼・河川・入江などの水辺に近い浅い山林に生息し、夜行性で日中は木の根元や土穴・岩窟で眠る。

キツネ　下顎骨Ｒ１点、両端は切断、下顎下に幅広い刻みがあり垂飾具として加工されたもの。キツネはタヌキより大形の中形獣で、疎林や丈の高い草原に棲む。夜行性、肉食性でミミズ、貝類、昆虫類などの動物質が主食である。専ら毛皮が利用されている。

イヌ　下顎骨Ｒ、肩甲骨、寛骨等の遺体が検出されている。縄文時代には、イヌは獣類のなかで唯一飼育された家畜である。狩猟犬として使用されたと考えられている。本貝塚には例がないが、犬骨一体が埋葬されている例が多い。手厚く埋葬されたものである。

アシカ　西の浜貝塚は海獣や爬虫類の遺体の出土が特に多い。調査時の記名をもとに検討した。現在、アシカと分類した遺体に、他のオットセイ・イルカ・トドの遺体が含まれている可能性が大きい。

大腿骨Ｌ１Ｒ１、橈骨Ｌ１Ｒ１、犬歯、椎骨２点、その他６点部位不明の遺体がある。冬

季に南下し、春季に北上する群れが捕獲の対象になったと思われる。

オットセイ・イルカ・トド

クジラ類　骨刀・篦状等加工品である。

イノシシ　陸棲の中形哺乳類で、シカと共の出土量が多い。西の浜貝塚も同様である。上顎骨Ｌ５Ｒ９計14点、下顎骨Ｌ４Ｒ７計11点、肩甲骨Ｌ４Ｒ10計14点、上腕骨Ｌ２Ｒ４計６点、橈骨Ｌ２Ｒ３計５点、中手骨Ｌ１点、寛骨Ｌ７Ｒ２計９点、大腿骨Ｌ１点、脛骨Ｒ５点、距骨Ｌ２Ｒ３計５点と遺体の出土が多い。特に、上、下顎骨の検討がなされ、顎骨の歯牙の萌出、交換や歯冠の磨耗等と、年令との関係を主として後臼歯の萌出によって段階を設定する方法が試みられ、狩猟時期の季節性の復元がなされた(1974 遊佐五郎)。

イノシシ上顎骨

L	M3M2M1P4P3P2P1 C I3I2I1		R	I1I2I3 C P1P2P3P4M1M2M3		段階
A-1-1貝下	0 0 0 0 ( )	Ⅱ-1	A-1-1貝下	( )0		Ⅳ-2
A-4-貝層下	( )0 0 0 ( )	Ⅱ-1	A-4-土層	( )( )0 0 0 0		Ⅱ-2
A-9-混貝	0 0 0 ( )	※ Ⅳ-2	A-4-貝層中	( )0 0 0 ( )		?
A-9-2貝	0 0 0 0 0 0 0 0 0	Ⅳ-2	A-9-混貝	( )0 0 0	※	Ⅳ-2
B-Ⅰ-4混	0 0 0 0	※ Ⅳ-2	A-9-1混貝	( )0 0 0 0 0 0 0 0		Ⅳ-2
			A-9-2貝	0 0 0 0 0 0 0 0 0		Ⅳ-2
			B-Ⅰ-4混	0 0 0 0	※	Ⅳ-2
			B-Ⅰ-4混	0 ( ) ( )		?
	※同一個体		A-7-1混貝	0 0 0		?

イノシシ下顎骨

L	M3M2M1P4P3P2P1C I3I2I1		R	I1I2I3C P1P2P3P4M1M2M3		段階
A-15-2貝	( ) ( )	Ⅳ-2	A-14-2	(m)m2m3		Ⅰ
B-Ⅲ-4混	m3(m2)(m1)( )	※ Ⅰ	B-Ⅲ-4混	( )( )( )( )( )0 中		Ⅳ-1
A-不明	( )(m3)(m2)(m1)( )	Ⅰ	B-Ⅲ-4混	(m)(m)m3	※	Ⅰ
A-11-混貝	未 0 0 0 0	Ⅱ-1	A-13-貝	( )( )( )(m)m2m3 0		Ⅱ-2
			A-13-混貝	( )m2m3 未		Ⅰ
			B-不明	( )( )0 0 0 未		Ⅱ-2
	※同一個体		A-9-混土	( )0 0 0 0 0 未		Ⅲ-2

イノシシの上顎・下顎骨合計２５点を見ると、特に、下顎骨に乳歯を持ち、第１後臼歯が未萌や萌芽の段階の幼体が多いことに注目される。生後１年目頃のものである。

シカ　大形の哺乳類で、イノシシと共に出土量が多い。上顎骨Ｌ２Ｒ３計５点、下顎骨Ｌ５Ｒ４計９点、第１頚椎２点、第２頚椎１点、肩甲骨Ｌ７Ｒ４計11点、上腕骨Ｌ２Ｒ３計５点、橈骨Ｌ３Ｒ２計５点、寛骨Ｌ２Ｒ２計４点、大腿骨Ｌ３、脛骨Ｌ４Ｒ２計６点、距骨Ｌ８Ｒ３計11点の検出がある。他にも部位を決めかねた遺体も多いので、その中に含まれている資料もあると考えられる。シカの場合は、角が生活用具の材料として、活用されるため出土が多い。鹿角には頭骨付きのもの、これは狩猟によって確保されたものと、角は生い変わる時の落角とがある。頭骨付き11点、明らかに角座のある落角５点、落角で切離し痕、縦割りの加工痕のある遺体123点、角先端部分７点等のように多数であり、図８１～８２に示したように、かなり小破片まで手が加えられている。

シカ上顎骨

L	M3M2M1P3P2P1	段階	R	P1P2P3M1M2M3	段階
A-9-1混貝	○○○○○	Ⅳ-2	A-11-貝層中	()○○○○	Ⅳ-2
A-12-混貝	中○○○○○	Ⅳ-1	B-Ⅲ-2混土	()○○○○○	Ⅳ-2
			A-14	○○○○○	Ⅳ-2

シカ下顎骨

L	M3M2M1P3P2P1	段階	R	P1P2P3M1M2M3	段階
A-1-1貝下	○○○○○○	Ⅳ-2	A-11-混貝	中	Ⅳ-1
A-1・2-1・2貝下	未○○()()	Ⅲ-2	B-Ⅱ-4混	中	Ⅳ-1
A-12-混貝	()○○○○○	Ⅳ-2	B-Ⅲ-土	()○	Ⅳ-2
B-Ⅲ-土層	()○○○○○	Ⅳ-2			

ヒト　調査中埋葬人骨として調査したのは、Ａ－11－２貝下の第１号人骨とＣ－１区の第２号人骨だけである。しかし、出土遺体は３７箇所と多い。ややまとまっての出土はＡ－３－２混貝の頭骨を含めて、下顎骨Ｌ、上肢骨、指骨の出土、Ａ－７－２貝下の指骨等の散乱状態のものである。単品の出土では、頭骨、大腿骨、椎骨がある。また、幼児骨・胎児骨の出土が８点もある。単品出土を含めて埋葬されたものか明らかでない。

第１号人骨は、頭骨の上部が欠けていたが、横臥屈葬で、下肢骨の保存状態は良好である。縄文中期大木10式に併行するもの。第２号人骨は仰臥屈葬で両腕を胸で交差、この部分から装身具の小玉が２個検出された。両足を立て、表土が浅かったためか、立てた足の上部が耕作時に削られていた。縄文晩期大洞Ａ式にあたる。

6　出土遺物の考察

土製品の縄文土器については、Ａトレンチ第３貝層中心の前期初頭の土器群から、中期大木１０式中心、続いて、後期初頭の宮戸Ⅰｂ式から、後期前葉、後期中葉宮戸Ⅱ式さらに、晩期末大洞Ａ式とほぼ層位的に検出された。しかし、Ｂトレンチの発掘後の遺物処理に欠陥があったようで、層位が逆転する結果もある。

（１）前期初頭の土器群について

層位的にＡトレンチの第４区の第３貝層中心に出土した。しかし、調査区全域から相当量の出土がある。縄文施文の特徴によって７類に分類した。

西の浜貝塚周辺では、早期末から前期初頭の土器群を出土する遺跡は、町内の貝殻塚貝塚をはじめ、塩釜市桂島貝塚、舟入島貝塚、七ヶ浜町左道貝塚、大木囲貝塚、鳴瀬町金山貝塚、里浜貝塚など多数存在する。

本標品は縄文施文は、斜行縄文で段落にループ末端施文・結束痕のある一群、羽状縄文で非結束痕・結束痕のある一群、綾絡文・撚糸圧痕施文の一群、ループ末端施文と組紐文施文する一群、それに正整撚糸の格子目状施文の一群である。本遺跡に近い鳴瀬町金山貝塚の出土遺物に近似する(鳴瀬町教委 1977)。しかも、柴田郡槻木町の上川名貝塚(加藤孝 1951)の縄文前期上川名Ⅱ式に類似した特徴を持つという。

詳細に見ると、上川名貝塚の上部貝層の「淡水産蜆貝層」から、羽状縄文・竹管文・撚糸文・竹管撚糸文の土器群が出土することが明らかにされた。しかし、層位的調査でなかった

ようで、そういう意味で一括遺物として扱えるか疑問視されている。事実、標式資料の拓図・資料を保管している東北大学から教示された資料には、回転組紐文は見当らないし、また、ループ文も見当らない。何か欠如していると考えたい。同じように、上川名貝塚からさらに南の角田市小坂の土浮貝塚の上川名Ⅱ式でも、拓図から組紐文は無く、出土土器の量表示が無いが、ループ施文土器も少なく４点のみである([illegible] 1994)。このように、本貝塚は撚糸文施文がやや少ないが、組紐文・ループ文があり、この傾向は金山貝塚と同じ傾向である。

ところで、上川名貝塚から北方、阿武隈川を越えた、名取市愛島宇賀崎貝塚があり、上川名Ⅱ式の土器群が多量に出土している。宇賀崎貝塚ではそれぞれの土器群の出土量比が示され、内容理解を助けている。他の遺跡でもこう在りたいものである。宇賀崎貝塚出土の羽状縄文土器群は、口縁部に装飾文様をもつものと、地文だけのものに分類される。口縁部に装飾文様をもつ土器群は、全体の１割程で少ないという。地文の在り方でも、結束・非結束合わせての羽状縄文が７０％弱を占め、結束のものが圧到的に多い。斜行縄文の約２３％が続き、組紐回転文、網目状撚糸文を含む撚糸文が少量づつ認められる。また、羽状縄文や斜行縄文の末端や片面にループをもつものが比較的多くふくまれており、注目されると述べている([illegible] 1980)。

金山貝塚と七ヶ浜町左道貝塚（[illegible] 1978・[illegible] 1991・[illegible] 2005）から宇賀崎貝塚と類似する土器群が出土し、しかも、口縁部に装飾を持つ土器が、両遺跡とも少量しか認められない特徴を示す。地文に結束や非結束の羽状縄文の施文が最も多く、斜行縄文が続き、ループ文・組紐回転文・撚糸文・編目状撚糸文が少量存在する内容である。

しかし、白鳥報文の資料は、七ヶ浜町在住の堀野宗俊氏の表採資料であり厳密な検討の場合問題がある。左道貝塚では、口縁部に装飾的文様を持つ土器は少量しか認められず、地文に結束・非結束の羽状縄文が最も多く、斜行縄文が次ぎ、ループ文・組紐回転文・撚糸文・網目状撚糸文等が少量づつ存在する。

本貝塚では、口縁部装飾は土面、口端の刺突・刻目程度であり、上川名貝塚のような口縁部装飾文様を持つものは、皆無である。本貝塚の出土量比は、地文で見ると小破片であるため問題があるが、斜行縄文が断然多く１７７点（ＲＬ・ＬＲ）で３９％強、斜行に末端ループを持つもの１０９点（大部分がＲＬ）２４.５％，次いで結束・非結束の羽状縄文８０点の１８.０１％となり、ループ文３２点（７.２％）・組紐文２０点（４.５％）・綾絡文（斜行ＲＬ）１０点（２.２５％）・撚糸文も同じ、竹管文２点（０.４５％）である。特に、斜行関係を合わせると（斜行・末端ループ文・綾絡文）２９６点（６６％強）となる。土浮・宇賀崎・左道・金山等とは出土土器の出土量比に著しい違いがあることに注目される。また、宇賀崎での末端ループ文の多いのに注目されたが、本貝塚も末端ループ文の量が２４.５％と全体の４分の１を占めることに注目される。

土浮貝塚では、装飾土器は少なく、地文として羽状縄文施文のものが圧倒的に多く、層位的に変化が認められる。特に、装飾土器は、下層では文様のバラエテイーがあるが、上層になると量的に少なくなり、文様も単純化する。このようなことから、上川名Ⅱ式の細分の可能性が示されている。上川名Ⅱ式の層位的な細分が示されたのは初めてのことである。

さて、塩釜市桂島貝塚([illegible] 1960)出土の一群に桂島式が提唱され、上川名Ⅱ式に後続する型式に位置付けられた。特徴はほとんどが地文に羽状縄文（３分の１が非結束）を持つ土器群で、口縁部文様帯を全くないものである。

西の浜貝塚との比較で、口縁部装飾文様を持たない土器群が皆無であることは同じであるが、西の浜では結束・非結束の羽状縄文や斜行縄文、組紐文、撚糸文、綾絡文等が認められ、桂島式と異なっており、やはり、上川名Ⅱ式に位置付けられると考えられる。

しかも、他の上川名Ⅱ式土器を出土する遺跡と比較すると、斜行縄文が多数を占め、地文組成に違いがある。少なくとも、地文組成からやや新しい時期のものとも考えられるが、今は上川名Ⅱ式に含めて置きたい。

現在、昭和４６年調査の左道貝塚(後藤彦 2005)、昭和４８年調査の貝殻塚貝塚、昭和４９年調査の桂島貝塚の整理を進めている。いずれ答えがでると考えている。

（2）縄文中期の土器群について

Ａトレンチ第２貝層中心の土器群は、大木１０式中心である。縄文中期の土器群は、トレンチ全体から出土したが、特に、第４区１２グリットから第５区にかけて、包含層も厚く一括遺物の出土量が特に多い地区である。

各区ともに「模式図」を示し、合計、実測図１３図、拓図２２図の資料を提示した。

本貝塚の主体である第２貝層中心の土器群は、大型の深鉢形土器を基本として、量は少ないが、浅鉢形土器、浅鉢注口（片口）土器、それに、広口壷形土器である。壷形土器はこの時期にないと考えており、整理中に確認し驚いた（図３９～４０）。量的に少ないが、小形の深鉢・浅鉢土器、注口（片口）土器も存在する。

特に、大形深鉢形土器で２５図－１９、３５図－１７は長胴で、口縁幅に対し器高が２倍を越す。復元図約８０を検討したところ、約３０個（約４０％）が口縁幅に対しし１．５倍以上の器高である。また、５０㎝前後のやや大形土器が１４点も存在するし、６０㎝を越す広口壷形土器の存在と共に、貯蔵機能を持つもので、超大形土器の存在をどう考えるか注目される。

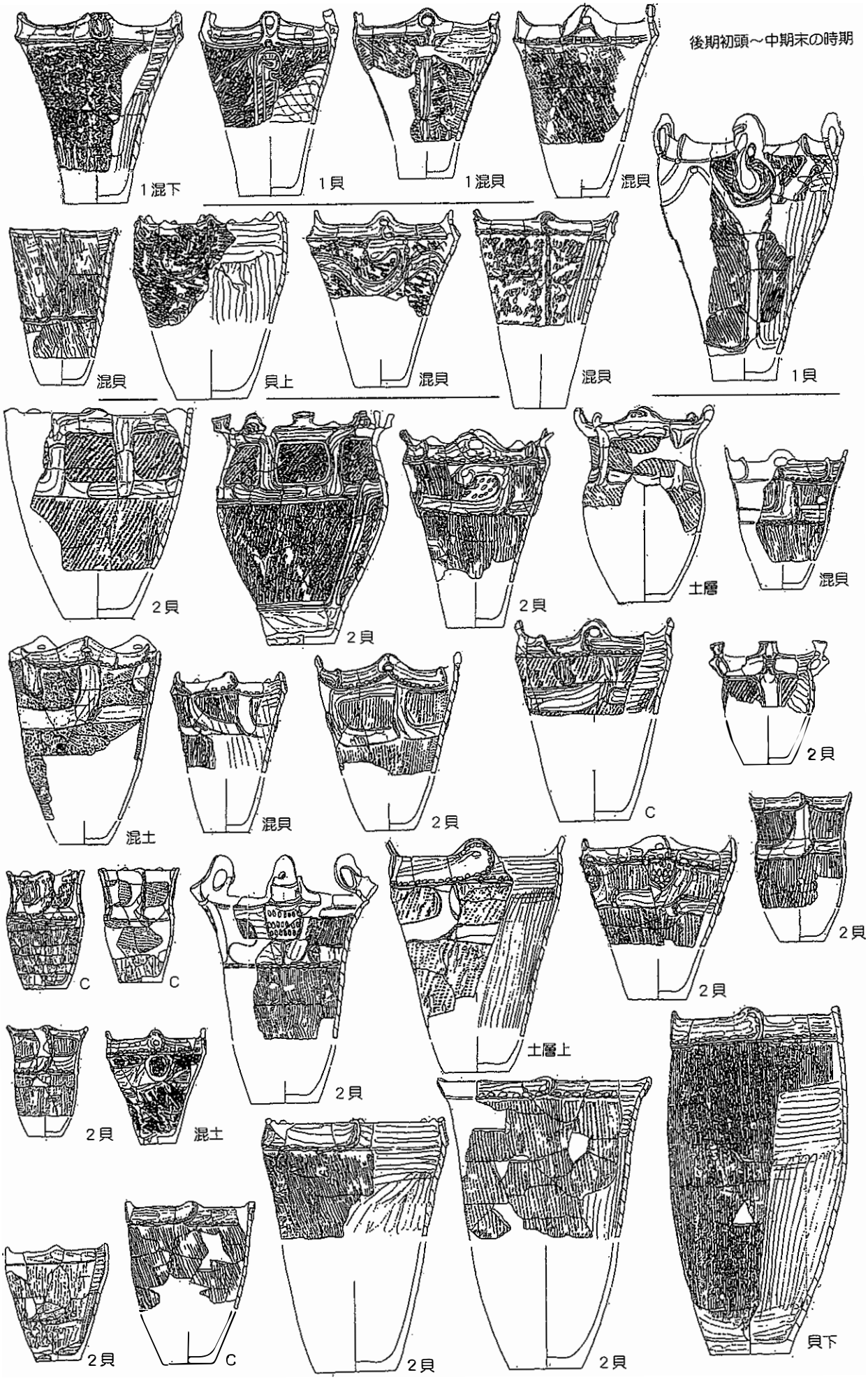
器形は口縁直立かやや外反するものが過半数を占める。続いて、逆字状に外反するもの、次いで、やや内反する器形である。口縁部様態は、平縁が４０％と多く、続いて、４個の突起を持つものが一般的である。大突起４個に小突起４個が配されたものを含めると、平縁より多く過半数になる。他に、僅かであるが３個、５個、６個の突起の配された土器も存在する。突起も単純な突起、環状突起、橋状把手と様々である。

何等かによって口縁部文様帯を構成する土器群が大多数である。隆帯と刺突列点文によるもの、隆帯、沈線文、列点文のみによって区画、地文の縄文等が施文されず無文のものが少々存在する。　口縁区画した隆帯、刺突列点、沈線下の頚部から胴部には、同じように隆帯、刺突列点、沈線で胴部文様帯を区画構成し、その間に隆帯、刺突列点文、沈線、鰭状の隆帯を付加し、磨消手法によって、逆Ｌ字、逆Ｃ字、Ｃ字（逆コ字）状の区画文様がヨコに連鎖する。また、刺突痕を内臓した文様区画（玉抱き区画）を抱え込むように、上記の文様が施文されるものも存在する。ヨコに連鎖する区画は、突起数と同じで４個が普通である。図３４－１３は突起と環状突起数８個で、区画も８個である。図３５－１７は口縁がやや内反した器形で突起がないため基準がないが、復元図から９個の区画が巡る特殊な土器も存在する。参考に口縁部様態の変化を見るために、図８７・８８を作成したが、大いに参考になる。

頚部から胴部文様帯は、胴部下部まで展開せず、隆帯、刺突列点文、沈線で区画されるのが特徴である。図３４－１３は特殊で、胴部区画帯から２本の隆起磨消区画が胴部下まで伸び、底部区画の隆帯に連なるものである。また図２４－１４は胴部区画隆帯が、器高の半分以下の下方に区画される。

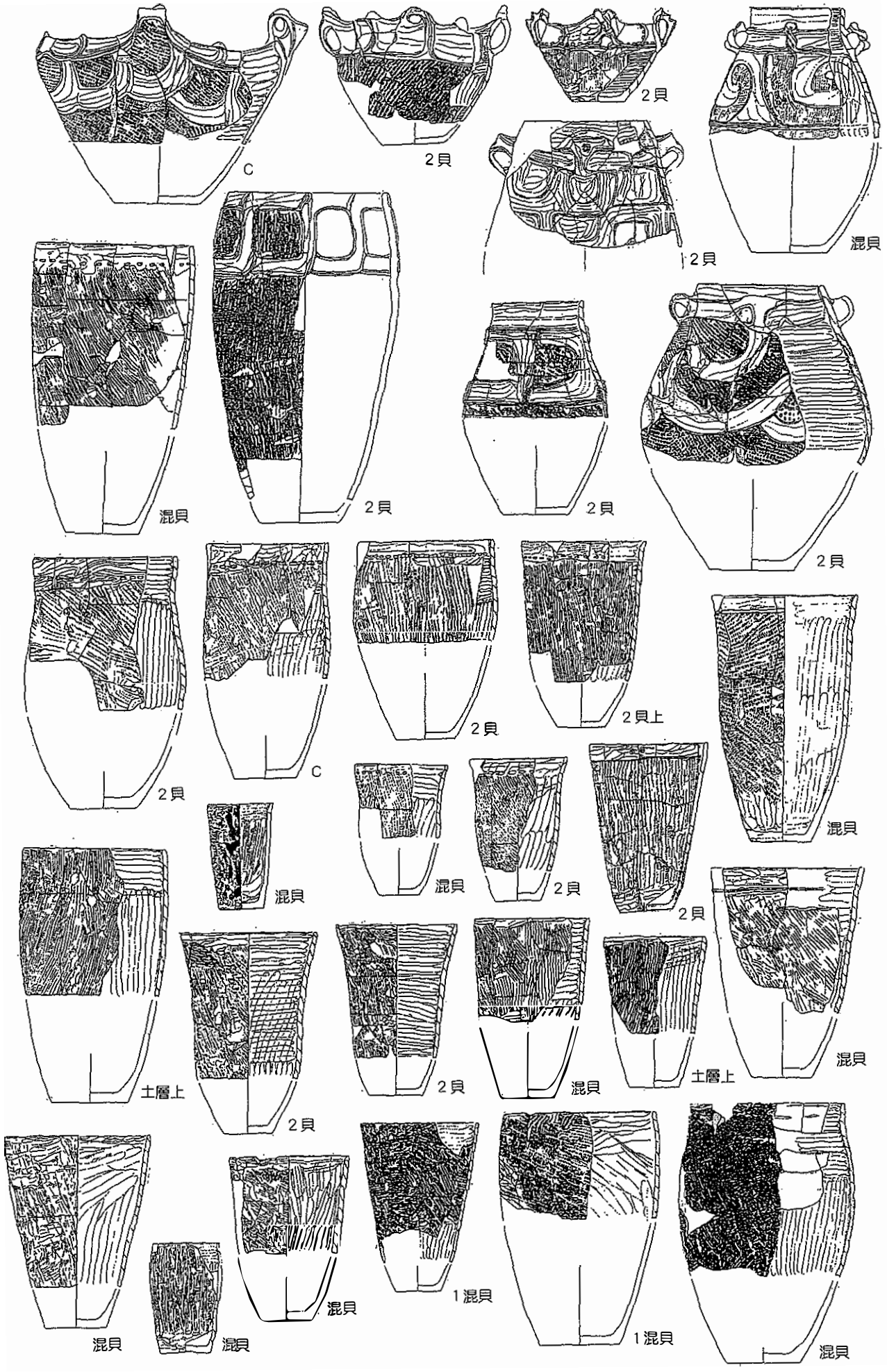
胴部様態から観察して、口縁部文様帯が口縁に刺突列点文だけ、隆帯だけ、沈線のもの土器が存在する。簡略されたものと見られる。地文として縄文、撚糸文があるが、撚糸文が多い。

底部は平底で無文、網代文、葉文がある。（図４７、４８）やや無文底が多いようである。図３８－３９のように高台付きが１点存在する。



口縁部様態の変化 1

図 87



口縁部様態の変化２

図 88

さて、第２貝層出土の土器位置付けについては、「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報－文化財報告１３集（昭和４２）」（後藤勝彦 1967）で、第４層出土土器として合計１９点の土器を図示し、大木１０式でもやや新しい時期と考えた。この資料が研究者に大いに利用されて、大木１０式土器の編年研究が進展するのである。

特に、丹羽茂氏の４段階説（丹羽茂 1982）、柳沢清一氏の５細分説（柳沢清一 1980）と華々しい論戦が展開される。その後、柳沢氏は、改めて丹羽氏の大木１０式の細別案に対して、どうして「アルファベット文土器」が、大木１０式なのか、土器論から論証すべきである。また、「大木１０式」の説明で、今までの論文の“類型期細別論”から、突然に“段階細別論”に変化し、「大木１０式古、新式期」の用語も消滅し、更に、細別法も大幅に変更されているが、その理由について説明がなされていないとの批判がなされた。

丹羽氏は柳沢氏への一種の反論として執筆した『大木式土器』で、机上の操作による土器型式の設定と、いたずらな細分は、研究を混乱させるだけでなく、何ら有益な成果をもたらさないとのべている。勿論、丹羽氏の論文は講座物という、執筆内容の限界があるが、説明不足は否めない。かって、丹羽氏が勝手に内容を変更していると後藤批判をしたのと同じになりかねない。

両氏の間に編年型式設定の根本的違い、細分し細分して究極の型式設定する基本的差であると考えられる。両者の論点が咬み合わないところもある。現時点でどちらがよいのかわからないが、第２貝層中心の土器群は大木１０式でも新しい時期であることは間違いないところである。

アルファベット文土器は南境貝塚からも出土している。南境貝塚７トレンチの第１５層混貝土層から第１６層にかけて出土。第５群土器として大形のＵ・Ｃ字状文が施文される一群である。概報時でも□□として新しい土器群の出現を示した。位置付けに苦慮したが、現時点で大木９式の懸垂文の変化として、大木１０式につなぐ土器と考えている。将来的に分離される可能性がある（後藤勝彦 2004･2005）。

南境貝塚第１４・１５層出土の大木１０式と比較し、南境貝塚執筆段階で、本貝塚出土土器は多少の出入りがあるが、広口壷形土器が検出されているだけの違いかと考えられるが、これも南境貝塚５～６トレンチの整理が進展しているので明確となろう。

（３）大木１０式以降の土器群

①　大木１０式に後続する土器群

Ａトレンチの第１区から第２区の第２貝層上部の混貝層、第３区から第５区の第２貝層上部の混貝層及び第１混貝層出土の土器群である。大木１０式から分離できる土器群と考えている遺物群である。突起・環状突起・橋状把手を配し、口縁逆く字状に内折、頚部に隆線を巡らして区画、２個の連鎖刻目施文の隆線、連鎖隆線による文様が、胴部下半まで展開する。第１８図－１がその典型である。それに、ボタン状凹部突起の配された土器群である。これらは、断片的に存在が知られていた。南境貝塚の整理が進行し、調査から３０数年経て断片的報告が出来、この一群が層位的に確認出来たことである（後藤勝彦 2004）。

８トレンチでも同じ成果があり（後藤勝彦 2005）、もっと良好な資料が検出されている。

編年的位置は、層位的に第２貝層上であり、大木１０式より新しく、宮戸Ｉｂ式より古い一群で、隆線、連鎖隆線施文から、柳沢氏が今村氏の西の浜４層土器の一部が、門前式に並行する意見に対し、「岩手・宮城に西の浜４層土器に後続する未命名の土器が分布する。その範囲に、ボタン状の貼付文に中継された隆起線上に刻目文、あるいは鎖状の刺突文を持つ一群の土器が成立…」と考えている（柳沢清一 1987）。後期初頭の門前Ｉ式周辺に並行するもので

あろうと考えられる。
　また、南境貝塚７トレンチの９～１１層でも１１層から１２層に沈線文施文であるが、ボタン状凹部（突起）が配され、そこから懸垂文が下垂し、宮戸Ｉｂ式に極めて近い土器群が存在することも注目したい。

②　宮戸Ｉｂ式に並行する土器群
　第１区・第２区の混貝層、第３区・第４区・第５区の第１貝層出土の土器群である。第３区から５区にかけて、口縁逆く字状に内折し、口縁無文で頚部に隆帯を巡らして区画、突起、環状突起下に隆帯やジクザク沈線文や、鍵文の懸垂文が施文、また内部に連鎖沈線文を内蔵した、倒卵形沈線文がヨコに展開する文様帯を持つものである。図４１－１・２がその典型である。南境貝塚７トレンチ９～１１層の土器群と並行する。

③　後期前葉で宮戸Ｉｂ式までを埋める新しい土器群
（1）Ａトレンチ１区の混貝層に沈線系の土器が僅かに検出されている。主体はＢトレンチの第４混貝層である。この層から宮戸Ｉｂ式から、図５２－１１～１８、図５５－８～１７のように、宮戸Ｉｂ式から退化した文様施文のものから、タテに数状の沈線で弧状、同心円文、重弧文、Ｓ字文が充填される土器群が存在する。南境貝塚７トレンチ６～８層の第１群土器に相当する。南境貝塚では３分類され数段階の土器群が確認されたが、本貝塚では第１群土器第２類、口頚部文様帯を形成しない一群、緩やかな波状口縁、口端に狭い無文帯、その下に沈線区画の土器群が、図５５－７の１点のみである。此等の系譜はよくわからないが、宮戸Ｉｂ式の流れの退化したものと考えられる。
（2）Ａトレンチの第１区から第２区は、西の浜貝塚調査として第１貝層がなく、層位誤認があった地区である。特に、第１区の東西断面の北壁・南壁で、壁面東寄りから第１貝層が始まるため、第２貝層を第１貝層と誤認したのである。
　第２貝層上の混貝層から数段階の土器群が出土したが、残念ながら層位的に区別することが出来なかった。幸い、同じ時期の南境貝塚調査でも問題になった、口縁外反し帯縄文の入組文と口縁外反し頚部無文帯と撚糸圧痕施文の土器群が出土し、南境貝塚と同じような成果を示す。Ｂトレンチの第４混貝層も同じ状態である。
　この未名命の土器群は、北東北の十腰内式系の影響の土器群で、かつて「南境式」と呼んだもので、関東での「堀ノ内２式」に並行させたものである(伊藤 1977)。
　Ｂトレンチ第４混貝層は、後期前葉から初頭まで、数段階の土器群を含むことになる。

④　後期中葉の宮戸Ⅱ式並行の土器群
　Ｂトレンチの２貝層、第３混貝層、第２混貝層出土の土器群である。出土量が極端に少ない。特徴は波状口縁で、頚部に帯縄文の沈線にＳ字状沈線による連結と入組文の施文、同じように土器内面に帯縄文の施文されるもので、文様帯は区画されて胴部に延びない。関東での「加曾利Ｂ式」に並行させたものである。

⑤　晩期の土器群
　Ｃ・Ｄトレンチとトレンチ第１区中心の出土の土器群である。
（1）晩期初頭の大洞Ｂ式並行の土器群、図６６－２９～３１、数点であるが検出。
（2）晩期中葉の大洞Ｃ式並行の土器群、図６６－２５～２８が検出。
（3）晩期後葉の大洞Ａ式並行の土器群、Ａトレンチ第１区に少量、主体はＣ・Ｄトレンチで

ある。特に、第２号人骨は晩期大洞Ａ式の時期であり、周辺に多い。器形は深鉢、浅鉢、椀形があり、文様は口頚部に工字形文、沈線文、内面口縁端に一本の沈線が巡らされるものである。新しい遺物の混入は整理の段階で驚いた。

Ｂトレンチ第２混貝層から、椀形の土器が検出されたが、層が急傾斜しており上部からの混入と考えている。

（４）土製品について

不明の土製品、臼形耳飾り、土玉、土偶、晩期後葉の小形４足土器など少ない。特記されることは、土器片製の円板状土製品の出土１５８点と多めであった。土器片の周囲を丁寧に打ち砕き、摩り込み整形した物で、基本的には円形であるが。楕円形、四辺形、台形、三角形の形態も存在することが確認されたことである。残念なことにその用途は明らかでない。

（５）石製品について

剥片石器として、石鏃、石錐、石匙、不定形類である。石鏃の形態分類でＡ類（凹基）、Ｂ類（平基）、Ｃ類（丸基）、Ｄ類（凸基）、Ｅ類（棒状基）とし、仙台湾沿岸遺跡の石鏃形態分類の結果、「縄文中期末から後期初頭の遺跡は、石鏃形態分類割合でＡ類（凹基）が圧倒的で５０％以上を占め、Ｂ・Ｃ・Ｄ類が遺跡によって多少の違いが見られるが、ほぼ同じような傾向である」という(鹿瀬 1986)。 本貝塚はＡ類とＤ類に集中し、割合は７７.５％を占め、Ｃ・Ｄ地区、Ａトレンチ１区、Ｂトレンチ出土が多く、後・晩期の層に当たり後期からＤ類（凸基）の頻度が多くなることを立証している。

棒状石器では、石斧、石棒、砥石、打石器、礫石器である。凹石に転用されたもの、磨痕、打痕のあるもの。

石斧で凹石に転用されたもの、擦切手法により切り出された、細形のノミ状の形態が存在する。

注目されることは、凝灰岩使用した遺物類がある。垂飾品、用途不明で中央部に凹部を造り出した遺物、両面に不明の刻線の遺物等がある。凝灰岩という性質からか、整形のしやすさから素材とされたものである。昭和３８年の桂島貝塚調査の出土遺物に凝灰岩製の不明遺物がある。長さ約２０㎝、幅約１０㎝で、石の中心部が凹部状に彫りこまれ、上部に突起を持つ形態のもので、当時は岩偶かなとも考えた代物である。やはり、両面に意味の解らない線刻がなされたものも出土した記憶がある。特に、図７５－３４の側縁に約２㎜幅状のノミ状の削痕がある。

図７５－３７は第２号人骨の胸に組んだ腕の上から出土した小玉である

（６）骨角製品について

漁撈具としての釣針、銛頭、骨鏃がある。釣針全体を知る遺物は少なく、曲がりの欠損釣針が多い。図７７－１が大形の釣針で、外側に鈎付きの唯一の完全品である。チモトから太く、長さ７㎝程、頑丈なU字状の曲がりであり、延縄漁での大形魚を対象とした用具とも考えられる。他の釣針の細身の８㎝前後の釣針は、曲がりがＶ字状の形態が多く、曲がりで欠損しており、弱々しくＵ字状の釣針と対象的である。４㎝前後の小形釣針がある。特殊な錨形の釣針も存在する。Ｕ字状の大形、Ｖ字状の大形、小形、錨形の存在は漁法や対象魚の魚種に関係するとも考えられる。

特殊なものとして、鹿角の叉状部分を利用したもの、頭部に釣針のチモトと同じ造りがあるもの、此等は吊り上げる機能を持ったものと考えた。

また、釣針の未製品があり、鹿角を縦割りにして、板状に扁平にし、それに切り込みを入れて整形していく過程を知ることができる。

離頭銛があり形態で分類される。開脚した三角形の中央部に索孔（貫通孔）を持つものである。古式離頭銛と呼び、縄文中期の銛である。次が、前者からの発展形態である。開脚した一方が消失し、逆刺の機能を果たす程度に変化、一方の脚が丸味を帯びて軸となったもの、時期が下ると考えている。次が数個の逆刺を左右に配置し、基部が完全に茎となる。軸部に索孔があり離頭銛の機能がある。全点Ｂトレンチ出土で、時期は後期中葉前後である。最後が未製品であるが燕尾形銛である。中期から後期への形態変遷を確認出来た。

離頭銛と共に固定銛が多用されている。基部にアスファルトの付着したものもある。特殊なものとして、アカエイの尾刺を利用したものがある。同じ骨鏃があるが、漁撈用具であるか不明で、狩猟用具かもしれない。基部にアスファルトのついたものも存在する。

用途が明らかでないが、鹿角を縦割りして棒状にし、整形し上下がＵ字状に削り込まれているもので、大、中、小に分類される。これらは、南境貝塚から大量に出土している。中手骨、中足骨を縦割りし、鳥骨の先端を尖らした骨針、同じような骨匕がある。

日常生活用具でない鯨骨を利用した骨刀がある。縄文後期でＢトレの第３混貝層出土である。鹿骨の骨幹を利用したもの、キツネの下顎骨、マフグの上顎を利用したもの、上部に貫通孔を持ったものなど、多用な素材を利用した装身具が利用されている。

鹿角の切断、半切、縦割りなど製品への過程を知る資料が多い。

図８３～８４は、スズキの鰓蓋骨で、刺突痕、噛み痕、押圧痕のあるものである。スズキの刺突漁を考えたが、大部分は犬の噛み痕である。しかし、図８３－３・４の押圧痕は刺突漁の証拠とも考えられる。南境貝塚と思うが、ボラの鰓蓋骨に貫通孔のある資料がある。ボラは軟らかいため完全な貫通孔であり、刺突漁が検証される。

（7）貝製品について

装身具としての貝輪（腕輪）である。サルボウ、イタボガキ製である。

（8）自然遺物について

昭和４１年の調査であり、自然遺物については、調査者の眼に触れた大形の遺物を拾い挙げる程度であり、自然遺物の解明を主題とする調査でもなかった。しかし、整理を開始して、案外小形の魚骨、鳥骨等の遺存骨が採集されているのに驚いた。

古い荒い調査方法であるが、昭和４０年代から貝塚に堆積する人工遺物だけでなく、縄文人の生活復元には、生業の復元が欠かせないため、自然遺物の分析が開始される。二月田貝塚、青島貝塚、南境貝塚等の調査に、古生物専門家の早稲田大学の金子浩昌氏の参加があり、動物遺体の同定、特に、骨格部位の同定の技術と知識が向上し、種類を識別出来るようになったことである。本貝塚の自然遺物の整理は、平成年代に入ってからであり、古い調査としては、自然遺物の分類数が多いのである。

古い話になるが、昭和３０年宮戸島里浜寺下囲調査のことである、この年は台囲を含め３箇所の調査が実施された。寺下囲担当が故人になった小野力氏であった。１ｍ幅のトレンチで、寺下囲式と命名された弥生式土器の出土した地点である。私の記憶では上層は古墳時代の層であったと思う。この調査の担当小野氏は、遺物採集では発掘の基本である、いかなる遺物も採集し、鉄則を忠実に実行していた。これが、寺下囲の鉄製銛の発見に連なるのである。遺物採集の姿勢が非常に重要であることを筆者等に示していた。

今回の整理の結果、同定された動物遺体は、多少未分類の遺物があるが、１０綱６８種類

である。予想に反し驚いている。

軟体動物　貝類　腹足綱８種、掘足綱１種、二枚貝綱１７種の２６種である。採集頻度の高い貝類は、腹足綱（巻貝類）である。特に、スガイ、アカニシが多い。巻貝の生息地は、潮間帯の波荒い地域、岩礁周辺である。二枚貝イタボカキ、イワガキ、マガキの採集もあり、縄文人の採取地域を考えることが出来る。

それにしても、貝層のブロック採集がないことは、貝の種名はわかるが、貝層の内容を十分に理解できない欠陥がある。

節足動物　カニの鋏部分が出土、鋏部分の硬い部分のために遺存したものであろう。

脊椎動物　魚綱　１２種類検出。軟骨魚綱はサメ類とエイ類の２種だけである。エイ類は刺突具として使用したものである。硬骨魚綱は仙台湾諸貝塚出土の代表魚、マグロの椎骨が１０５点の出土がある。出土層は第２貝層中心で、Ａ３～５区に集中し、後期から中期の層にあたる。椎骨の大きさから中形のマグロであろう。機械的に計算すると４匹程度の捕獲である。用具は銛で離頭銛が使用され、銛猟だと考えられる。

出土頻度の多いのがスズキであり、左右の歯骨、左右の鰓蓋骨が特に多く、個体数を考えると６０匹以上で、５０㎝以上の大形魚である。やや小形の遺体も存在するが偶然であろう。中形魚として最も出土量の多い魚種である。

内湾沿岸魚の代表、クロダイ、マダイがやや多い。歯骨、前上顎骨が特徴的に採集されている。マダイがやや多く、体長４０㎝以上が大部分である。特に、椎骨の出土が他の部位に比較して少ない、食法の違いか。

フグ類も検出されている。ヒガンフグ、マフグがある。マフグは上顎歯骨の上部に貫通孔があり、垂飾品としたものである。

内湾沿岸砂泥底に生息するコチが検出され、貝塚全面の海域が猟場であろう。

爬虫綱　本貝塚の特徴にカメの遺存骨の出土が多いことである。特に、ブロック状の出土で、トレンチ南側に集中する。層位は第２貝層上の混貝層、Ｂトレでも第４混土中心であり、後期前葉頃の時期である。アオウミガメと考えられ、食用のための捕獲かと考えられるが、よくわからない。

鳥綱　鳥骨は骨質が薄いために破損度は高い。また部位の特徴によって種類を同定も非常に困難な中での１６種の検出である。

キジの遺存骨がやや多いのは、人間の生活圏近くに生息するために、捕獲される機会が多かったためである。他は量が少ないが、冬期に渡来する冬鳥、ガンカモ科中心である。特種なものとして、ワシタカ科のトビ上腕骨？と、部位不明のカモメ類がある。

哺乳綱　陸棲の中形哺乳類のシカ、イノシシの出土量が多いことは、他の貝塚と同じ傾向である。肉量が多いことだけでなく、特に、シカの鹿角は生業用具の釣針、銛等の製作素材として、欠かせないものである。頭骨付きの鹿角、角座のある落角なども利用されている。

特に、上顎骨、下顎骨の歯牙の萌出、歯冠の磨耗と特に後臼歯の萌出によって、年令を推定し、段階を設定する方法が遊佐五郎氏によって試みられ、狩猟時期の季節性の復元がなされた（遊佐 1974）。イノシシの特に、下顎骨に乳歯を持ち、第１後臼歯が未萌や萌芽の段階の幼体が多いことに注目される。生後１年目頃のものである。狩猟時期は秋から春先の冬期間である。シカは量が少ないが、４段階の成獣が大部分である。狩猟では獲物が幼体だから、雌雄の区別がなかったと考えられる。小獣類のウサギ、タヌキ、キツネ等は、特に、狩猟期はなく手当たり次第の猟であったようである。

埋葬人骨２体、第１号人骨は中期で、第２号人骨は晩期である。本貝塚でも胎児骨の出土が多い。富崎貝塚で小児骨、胎児骨の検出が多く驚いたが（篠・小井川 2003）、本貝塚でも同じ傾

向である。

7 まとめ

難しい調査区の設定、調査体勢の不備、層位の誤認などの種々問題があったが、層位的に出土遺物の採集があり、整理が出来たことである。

（1）最下層の第３貝層を第４区の１２グリットで確認し、トレンチ全面、各層から出土する縄文前期初頭の繊維土器の出土層が確実になり、第３貝層から周辺の土層である。

本貝塚の遺物は、斜行縄文が断然多く、次いで、斜行縄文に末端ループを持つもの、続いて結束・非結束の羽状縄文となり、ループ文、組紐文、綾絡文、撚糸文で最後が竹管文という量的組成である。口縁部装飾は土面、口端の刺突・刻目程度であり、どちらかというと口縁部文様帯を持たない、簡素化された一群ということになる。施文文様から上川名Ⅱ式に位置付けられる。しかし、他の上川名Ⅱ式土器を出土する遺跡と比較すると、地文組成に違いが見られる。

現在、左道貝塚([illegible]藤[illegible]彦 2005)、貝殻塚貝塚、桂島貝塚([illegible]藤[illegible]彦 2006)の整理が進行しており、現在では上川名Ⅱ式の仲間と考えている。

（2）Ａトレンチの繊維土器出土の第３貝層の上層、第２貝層、第１貝層、その上層の混貝層から、ほぼ層位的に中期大木１０式土器の新しい型式、未命名だが大木１０式より新しく、宮戸Ⅰｂ式より古い土器の一群、また、宮戸Ⅰｂ式に並行する土器群、続いて、南境貝塚７トレンチ６～８層出土の第１群土器の第１類～第３類に並行する数段階の土器群、続いて、南境貝塚４～５層出土の土器群に並行する、波状口縁で磨消手法と帯縄文によって、入組文や幾何学文様がヨコに展開する一群と続く。表土近く、及び、Ｃ・Ｄトレンチの拡張部に晩期大洞Ａ式等の晩期の土器群が層位的に堆積することが明確になった。

南境貝塚４～５層出土土器並行の土器群は、Ｂトレンチの第４混貝層も同じ様相である。北東北の十腰内式系の影響で、関東での堀ノ内２式に並行させたものである。

（3）Ｂトレンチの第４混貝層が、宮戸Ⅰｂ式と南境貝塚４～５層並行土器群である。Ｂトレンチの２貝層、第３混貝層、第２混貝層出土土器は、層によって出土量が極端に違う。しかし、後期宮戸Ⅱ式に相当する。しかも１貝層、第１混貝層は土器の出土がなく、時期が不明である。２貝層、第２土層も堆積層が薄いためか土器以外の遺物も少ない。

特に、第３土層記名の土器群があるが、遺物の時期は宮戸Ⅱ式であり、第４混貝層より下層に当たり、これを認めると層位の逆転となる。遺物処理の手違いとも考えられる。

西の浜貝塚の層位は、Ｂトレンチにやや問題があるが、層位的に遺物が処理されている。

（4）土製品は出土遺物は少ない。特に、土器片製の円板状土製品、その用途は不明だが、形態が円形だけでなく、楕円形、四辺形、台形、三角形等の各種が存在することが明かになった。

（5）石製品では、剥片石器の石鏃の形態分類で、Ａ類（凹基）が圧倒的、次いで、Ｄ類（凸基）である。後期からＤ類の頻度が多くなることを示した。棒状石器では、他の用途に転用された石器が多く、注目されたことは、凝灰岩を使用した遺物が目に付く、垂飾品や用途不明で両面に線刻の施された遺物である。凝灰岩という性質から、加工しやすい素材のためであろう。

（6）骨角製品では、漁撈用具が鹿角を使用して製作され、釣針でも大形形態では、延縄漁の用具と考えられるものも存在し、漁法との関係を示すものがある。

銛猟の用具、離頭銛が中期から後期への形態変遷が明らかになり、最後に、燕尾形銛頭へと変化することが、再確認された。離頭銛と共に固定銛も多用されている。

装身具に鹿角の骨幹を利用したもの、キツネの下顎骨、マフグの上顎を利用したものがある。特殊なものに、鯨骨製の骨刀がある、反りがあり長さ４２.２㎝であり、実用品でなく何らかの儀式用と考えられる。

スズキの鰓蓋骨に刺突痕、押圧痕のあるもの、大部分は犬の噛み痕であるが、何点かはスズキの刺突漁の証拠であり、刺突漁が検証されたことである。

（7）自然遺物については、古い調査でもあり、調査者の眼にふれた大形の遺物を拾い挙げる調査であり、期待はしていなっかたが、整理の結果１０綱６８種類の動物遺体が、同定され驚いた。軟体動物２６種、節足動物１種、脊椎動物４１種（種名一覧表参照）である。

昭和４０年代以降は、人工遺物だけでなく、生業の復元の調査が欠かせないことから、自然遺物担当者の参加があり、遺体の同定、特に、骨格部位の同定の知識と技術が向上し、種類を識別出来るようになったことである。

魚類は仙台湾貝塚の特徴、マグロが多い。内湾沿岸魚の代表スズキ、クロダイ、マダイがあり、頻度が高い。古い調査のためか大形魚が多い。特に、椎骨の出土が他の部位に比して少ないことである。遺体の処理方法、食法の違いかもしれない。

本貝塚で注目されるのは、爬虫類の遺存骨アオウミガメと考えられるが多いことである。それも後期前葉頃である。

鳥類は人間の生活圏に近く生息するキジが多い。他は量が少ないが冬期に飛来する冬鳥のガンカモ科中心である。

哺乳類は中形哺乳類のシカ、イノシシが多いのは、他の貝塚と同じ傾向である。特に、シカ、イノシシの上顎、下顎の歯牙の萌出、後臼歯の萌出と歯冠の磨耗によって、年令を推定し、段階を設定する方法で狩猟時期の復元がなされた(遊佐五郎 1974)。 秋から春先の冬期間である。特に、イノシシの下顎骨に乳歯を持ち、第１後臼歯が未萌や萌出の段階の幼体が多いことに、注目される。生後１年目頃のものであり、狩では獲物が幼体、雄・雌の区別がなかったと考えられる。小獣類も同じであった。

8　おわりに

西の浜貝塚が新産都市の制定によって、仙台湾地区が指定され、予定地内の遺跡の保護のため、破壊の恐れある遺跡として取れ上げられて、昭和４１年に緊急調査された。それから３８年間も経過し、概報がまとめられ断片的成果を公表して来たが、やっと昭和４１年調査分についての報告が出来上がった。昭和４２年も継続調査がなされたが、著者、体調を崩して継続調査に参加出来ず、故加藤孝先生にお願いせざるをえなかったし、南境貝塚の調査を継続しなければならなかったためでもある。

昭和４２年分の整理は調査・整理責任者であった加藤孝・阿部正光両氏も故人になり、学院大学で整理が継続されている。学院大学保管の遺物は、調査面積が広く、遺物の量も多いため大変であろう。これの完成を期待している。

西の浜貝塚の整理は、二足草鞋の時期は出来ず、県の役人時代も同じである。本格的に整理を開始したのは、平成２年の退職後からである。それから１５年である。やっと片方の肩の荷がおりたのである。もう一方荷は部分的に軽くなっても、永久に背負い続けることであろう。

この整理を通して、遺物の処理の曖昧さ、人任せは禁物であることを実感した。

この古い調査の西の浜貝塚の報告書が、遅れている宮城県内の編年研究に、寄与することは望外の喜びである。若き学徒の奮起を促し筆を置きたい。

引用･参考文献

加藤　孝　1951『宮城県上川名貝塚の研究』「宮城学院女子大学研究論集」

加藤　孝　1959『宮城県宮城郡古代製塩遺構』 日本考古学年報12

加藤　孝　1960『宮城県宮城郡西ノ浜遺跡』 日本考古学年報13

林　謙作　1960『宮城県桂島貝塚出土の前期縄文土器群』 考古学雑誌第46巻第3号

宮城教育大学日本史研究会考古学ﾊﾟｰﾄ 1967『宮城県松島町西ノ浜貝塚の研究』「歴史第2号」宮城教育大学日本史研究会

後藤勝彦　1967『新産業都市指定区域 埋蔵文化財緊急発掘調査等報告書-西ノ浜貝塚-』 宮城県文化財調査報告書第13集

遊佐五郎　1974『狩猟活動の季節性について』 宮城史学第3号

伊東信雄　1977『山内博士東北縄文土器編年の成立過程』 考古学研究第24巻第3･4号

鳴瀬町教育委員会　1977『亀岡遺跡･金山貝塚』 鳴瀬町文化財調査報告第1集

白鳥良一　1978『宮城県七ヶ浜町左道貝塚の縄文前期土器について』 宮城史学第6号

阿部　恵　1980『宇賀崎貝塚』 宮城県文化財調査報告書第67集

柳沢清一　1980『大木10式土器論』「古代探叢」滝口宏先生古希記念考古学論集､他に多数の論文あり｡

丹羽　茂　1982『大木式土器』 縄文文化の研究4

加藤　孝　1983『東北の製塩遺跡の研究-宮城県松島湾の古代遺跡』「古代叢論」

後藤勝彦　1986『宮城県石巻市南境貝塚出土の石鏃について-石器の編年学的研究』 宮城史学第11号

柳沢清一　1987『東北縄文中期･後期編年の諸問題 その1 中期末葉の細別編年(上)』 古代84集

松 島 町　1989『松島町史資料編1 考古資料』 松島町町史編纂委員会

七ヶ浜町教育委員会　1991『左道遺跡』 七ヶ浜町文化財調査報告書第7集

角田市教育委員会　1994『土浮貝塚-平成5年度調査概報-』 角田市文化財調査報告書第13集

後藤勝彦　2001『宮城県松島町西の浜貝塚出土製塩土器の一考察』 宮城史学特別号(第20･21･22号)大塚徳郎先生米寿記念

後藤勝彦　2004『南境貝塚調査の層位的成果Ⅰ-ｶﾄﾚﾝﾁの場合-陸前地方縄文中期から後期の編年学的研究』 宮城考古学第6号

後藤勝彦　2005『宮城県宮城郡七ヶ浜町左道貝塚の調査-陸前地方前期縄文土器の編年学的研究1-』 宮城考古学第7号

後藤勝彦　2005『南境貝塚調査の層位的成果Ⅱ-8ﾄﾚﾝﾁの場合-陸前地方縄文時代中期から後期の編年学的研究』 宮城史学第24号

後藤勝彦　1968『埋蔵文化財第3次緊急発掘調査概報-南境貝塚-』 宮城県文化財調査報告書第15集

後藤勝彦　1969『埋蔵文化財第4次緊急発掘調査概報-南境貝塚-』 宮城県文化財調査報告書第20集

後藤･小井川　2003『富崎貝塚-北上川中流域の淡水産貝塚の研究-』 石越町文化財調査報告書第1集

後藤勝彦　2006『南境貝塚妙見地区の調査-陸前地方縄文早期末前期初頭の編年学的研究-』 宮城考古学第8号

後藤勝彦　2006『宮城県塩釜市桂島貝塚の調査-陸前地方前期縄文土器の編年学的研究(3)-』 宮城史学第25号

後藤勝彦　2006『宮城県河北町南境貝塚北境久保地区の早期末前期初頭の土器群
-陸前地方早期末前期初頭の編年学的研究(2)- 』 秋田考古学第50号

松島町教育委員会　2008『西の浜貝塚－陸前地方縄文文化の編年学的研究－昭和41年度－』 松島町文化財調査報告書第1集

松島町教育委員会　2008『貝殻塚貝塚－陸前地方縄文前期の編年学的研究4－』 松島町文化財調査報告書第2集

特に、図版作成について、山田ケイ、磯田京子、兼平宏子諸氏の全面的な協力があったことを付記して、感謝申し上げる。

9 観察表

図版番号	出土地区	種別	口径(推)cm	底径cm	器高(現高)cm	外面文様	内面文様	底部調整1
10-1	A－1－貝	土器★	(31.2)	(混貝)	15.0	外反、沈段による幾何学文、RL	ヨコ整形	
〃-2	A－1－	〃 ★	(25.8)	(混貝)	13.9	口縁外反、頸部無文、RL	上ヨコ、下タテ整形	
〃-3	A-3-1貝下	〃 ★	(31.0)	(混貝)	18.5	波状口縁6、無文ヨコ整形	ヨコ	
〃-4	A－4－2貝	〃	(22.4)		13.5	突起4、口頸部刺突文、逆C字状磨消帯		
〃-5	A－4－混貝	〃	(22.1)		17.8	ヨコ外反、口縁部無文ヨコ、LR	上ヨコ、以下タテ整形	
〃-6	〃－8－混貝	〃	(22.5)		25.0	平縁、LR(施文)	ヨコ整形	
〃-7	〃－7－混貝・1混貝	〃	(26.6)		24.3	環状突起4、口縁無文下隆帯区画、LR	上ヨコ、下タテ	
〃-8	〃－9－混貝	〃	2.5～11.5	9～8	9.0	注口土器、突起1、無文整形		菜文底
〃-9	〃-8-1混貝下	〃	(30.5)		28.7	突起4、頸部隆起区画無文、LR、突起から綾絡文	上ヨコ、下タテ整形	
18-10	〃－9－貝層(1貝)	〃	(33.2)		44.8	橋状突起4、小4、口縁無文で隆起区画、突起下に連鎖文隆帯下垂、LRタテ	上ヨコ、下タテ整形	
〃-11	〃－8－混貝	〃	(26.5)		24.8	平縁、口縁部無文、沈線区画、口縁から刺突文下垂、胴部で沈線区画、LR、下部無文整形		
〃-12	〃－7－混貝	〃	14.8	7.8	17.2	平縁、LR	上ヨコ、以下タテ整形	無文底
〃-13	〃-〃-混貝下	〃	(6.6)	4.4	11.5	平縁、頸部沈線、胴部沈線区画、L字文様帯連続		無文底
〃-14	〃-8-土層上	〃	(34.0)		35.4	環状把手4、頸部刺突隆帯で区劃、下に逆C字状の磨消帯4、復節RL	上ヨコ、以下タテ整形	
〃-15	〃-8-2貝下・2貝	〃	(31.2)		38.8	突起4、頸部に隆帯沈線区劃、逆C字状の磨消帯4	上ヨコ、下タテ整形	
〃-16	〃-8-1混貝 〃-9-1混貝上	〃	(22.1)		26.0	平縁、RL	上ヨコ、下タテ整形	
23-1	〃-10-貝層(1貝)	〃	(26.0)		25.5	橋状把手4、口縁内反、頸部隆帯区劃、口縁無文、把手から蕨状文4区画、RL無節	上ヨコ	
〃-2	〃-12-混貝	〃	8.4	4.6	7.0	小突起3、無文		無文底
〃-3	〃-12-混貝	〃	12.4	8.4	20.1	平縁、口端無文、LR	上ヨコ、下タテ整形	無文底
〃-4	〃-10-混貝	〃	(26.2)		19.6	環状突起4、口縁内反、頸部隆帯区劃、口縁部無文、突起下に逆C字状磨消区劃4、隆帯に連鎖文、LR無節		

図版番号	出土地区	種別	口径(推)cm	底径cm	器高(現高)cm	外面文様	内面文様	底部調整２
23-５	A-10-混貝	土器	(25.5)		25.0	環状突起４、口縁内反、頸部に刺突の隆帯区劃、LR		
〃-６	〃-11-混貝	〃	(12.2)	9.5	20.5	平縁、口端無文、タテに刷毛目文	上ヨコ、下タテ整形	無文底
〃-７	〃-10-1貝上	〃	(26.0)		20.5	ボタン付き突起６、突起から沈線連絡C字状文、LR	〃　〃	
〃-８	〃-11-混貝	〃	(21.9)		19.0	環状突起４、小４、頸部刺突隆帯区画、口縁部無文、突起下に刺突隆帯の逆L字区画４、タテ撚糸文		
〃-９	〃-12-混土	〃	18.5	6.6	21.0	環状突起４、口縁内反、頸部に刺突隆帯区画、突起下に沈線で囲んだ円文を持ち逆L字区劃４、LR無節		
〃-10	〃-11-混貝	〃	(16.6)		13.9	平縁、口縁無文、刺突列区画、LR撚糸文	上ヨコ、下タテ整形	
24-11	〃-〃-〃	〃	(20.0)		18.7	突起４、口縁内反、頸部刺突隆帯区画、口縁部無文、突起下にL字状区画８、たて撚糸文	上ヨコ、下タテ整形	
〃-12	〃-12-混貝	〃	(22.0)		20.5	平縁、頸部・胴部沈線区画、間に逆L字状区画４、タテ撚糸文		
〃-13	〃-11-１貝	〃	(33.6)		22.0	平縁、口端無文、口縁やや内反、RL複節、タテ無文帯	上ヨコ、下タテ整形	
〃-14	〃-10-混貝	〃	(20.4)		24.4	小突起４、口端無文ヨコ、突起から胴部へ隆帯下垂、ヨコ隆帯と連結区画、LR撚糸文		
〃-15	〃-12-混貝	〃	27.6	11.25	46.8	平縁、頸部沈線区画、下にLR	上ヨコ、下タテ整形	無文底
〃-16	〃-10-土貝上	〃	(19.0)		18.0	平縁、口端無文、タテ撚糸文	〃　〃	
〃-17	〃-〃-〃	〃	(27.2)		27.6	〃　〃　〃	〃　〃	
25-18	〃-12-混土	〃	(23.2)		S4.8	大波状口縁、環状突起４、頸部刺突隆帯区画、突起下に逆L字状区画４、LR		
〃-19	〃-11-1貝下	〃	30.8	15.2	63.2	口縁やや内反、突起４、頸部刺突隆帯、口縁部無文、胴部下無文、タテ撚糸文	上ヨコ、下タテ最下部ヨコ	無文底
〃-20	〃-10-混貝	〃	(41.2)		20.0	平縁、口端無文、LR	上ヨコ、下タテ整形	
〃-21	〃-11-３貝	〃	(32.0)		27.3	口端刻目、LR、段落にループ文、７段、尖底、繊維土器		
33-１	A-13-１貝	〃	(32.0)		18.0	突起４、口縁内反、口縁沈線区画、口縁無文、突起間に綾絡文、三角形の磨消、LR撚糸文		
〃-２	〃-14-混貝	〃	(21.2)	9.2	6.8	突起４、口縁部無文		底部高台、切込み４
〃-３	〃-13～15-２貝・混貝	〃	(27.6)		21.2	突起４、頸部刺突隆帯区画、突起に鍔状隆帯、突起下刺突隆帯垂、RL	上ヨコ、下タテ整形	
〃-４	〃-15-２貝	〃	(27.5)		34.5	突起４、注口、頸部隆帯区画、口縁内反無文、頸部下連鎖刺突区画、間逆L字状磨消区画４、タテ撚糸文		

図版番号	出土地区	種別	口径(推)cm	底径cm	器高(現高)cm	外面文様	内面文様	底部調整３
33-5	A-14-混貝	土器	(14.3)		13.6	平縁、頸部隆帯区画、隆帯口縁に４、口縁部無文、LR	口縁端RL、上ヨコ、下タテ整形	
〃-6	〃-15-混貝	〃	(30.0)		34.4	平縁、口縁部刺突列区画、口縁部無文、LR撚糸文		
〃-7	〃-13-混貝	〃	(21.6)		18.8	平縁、口端無文、LR撚糸文	上ヨコ、下タテ整形	
〃-8	〃-〃-〃	〃	(27.6)		28.0	〃 〃 LR	〃 〃	
34-9	〃-〃-〃	〃	(28.8)		26.8	平縁、頸部隆帯区画、口縁部無文、LR撚糸文	〃 〃	
〃-10	〃-15-〃・混土	〃	(29.2)		32.4	平縁、羽状縄文	上ヨコ、下タテ整形	
〃-11	〃 〃-2貝	〃	(10.8)	(2.4)	5.0	平縁、無文	ヨコ整形	丸底となるか
〃-12	〃-14-2貝	〃	10.2	5.2	16.2	橋状突起１、小突起、口縁無文、LR	上ヨコ、下タテ整形	？
〃-13	〃 〃-2貝・土層	〃	34.8	12.4	36.0	臼形突起４、頸部・胴部隆帯区画、ロ字状磨消区画８、底部隆帯区画、胴部から２本の磨消帯下垂、RL		
〃-14	〃-13-2貝上	〃	(23.8)		26.6	平縁、口縁下刺突列区画、口縁部無文、タテ撚糸文	上ヨコ、下タテ整形	
35-15	〃-13-2貝	〃	(19.4)		21.5	平縁、口縁やや外反、口縁下刺突区画、口縁無文、LR撚糸文	上ヨコ、下タテ整形	
〃-16	〃-〃-〃	〃	22.6	9.8	32.5	平縁、口縁下沈線区画、口縁無文、補習孔、底部付近ヨコ整形		無文底
〃-17	〃-14-2貝 〃 15-2貝 〃-13-2貝下	〃	(30.0)		57.4	平縁、口縁下隆帯区画、胴部状隆帯、間逆L字状磨消区劃連続		
〃-18	〃-13-2貝	〃	(22.6)		14.2	橋状突起４、頸部隆帯、口縁外反、無文、突起から隆帯下垂、∩状	上ヨコ、下タテ整形	
〃-19	〃-〃-〃	〃	18.4	8.2	21.2	小突起４、口縁下沈線区画、口縁無文、タテ撚糸文	上ヨコ、下タテ	無文底
〃-20	〃-14-2貝	〃	(40.8)		30.0	小突起４、頸部刺突隆帯区画、突起に鰭状隆帯、タテ撚糸文	上ヨコ、下タテ整形	
36-21	〃-15-2貝	〃	(13.7)		16.8	小突起４、頸部沈線区画、頸部下に刺突隆帯区画、間刺突隆帯の逆L字状磨消４、タテ撚糸文		
〃-22	〃-〃-〃	〃	(29.1)		28.0	環状突起４、口縁内反、頸部刺突隆帯区画、胴部同じ、間逆L字磨消４、タテ撚糸文		
〃-23	〃-14-土層	〃	(25.2)		18.4	コブ状突起４、小突起４、口縁無文、長方形の縄文帯をタテヨコ磨消帯で囲む、推定５、RL		
〃-24	〃-15-2貝	〃	(27.6)		29.2	平縁、頸部刺突列区画、口縁無文、LR撚糸文	上ヨコ、下タテ整形	
〃-25	〃-14-2貝	〃	(25.2)		27.5	平縁、口縁無文、LR撚糸文	〃 〃	

図版番号	出土地区	種別	口径(推)cm	底径cm	器高(現高)cm	外面文様	内面文様	底部調整4
36-26	A-15-2貝	土器	(12.8)		17.0	波状突起4、胴部刺突隆帯区画、突起から刺突隆帯の逆L字磨消4、タテ撚糸文		
37-27	A-13-2貝	〃	(32.8)		32.4	小突起4、突起から頸部に隆帯、間逆L字磨消4、タテ撚糸文	上ヨコ、下タテ整形	
〃-28	〃-15-2貝	〃	(26.1)		26.7	環状突起4、小突起4、頸部刺突隆帯区画、下に逆L字磨消4、剥離多い、タテ撚糸文		
〃-29	〃-〃-〃	〃	20.4	9.8	17.5	橋状突起4、注口、頸部刺突隆帯区画、口縁無文	ヨコ整形	無文底 浅鉢
〃-30	A-14-2貝 A-13-土層	〃	(26.0)		19.6	平縁、口縁下刺突列区画、タテ撚糸文	上ヨコ、下タテ整形	
〃-31	〃-15-2貝	〃	(34.8)		22.0	橋状突起4、小突起4、頸部隆帯区画、口縁無文、RL	上ヨコ、下タテ整形	浅鉢
〃-32	〃-14-2貝	〃	(21.0)	8.8	20.0	環状突起4、小突起4、刺突隆帯頸部区画、タテ撚糸文、底近ヨコ整形		無文底
〃-33	〃-15-2貝	〃	(6.4)		11.0	平縁、口縁内反、頸部沈線区画、口縁無文、LR複節、底近くヨコ		
〃-34	〃-15-2貝	〃	(12.2)	7.7	7.8	橋状突起4、小4、頸部刺突隆帯区画、無文、タテヨコ整形、朱彩	ヨコ整形	蒻文底 浅鉢
〃-35	〃-〃-〃	〃	(20.1)	6.0	12.0	環状突起1、頸部隆帯区画、口縁部無文、LR	上ヨコ、下タテ整形	無文底 浅鉢
38-36	〃-14-2貝	〃	(19.2)		22.0	突起4、頸部刺突隆帯区画、突起上に餡状隆帯、口縁部無文、下逆L字上磨消区画4、タテ撚糸文		
〃-37	〃-13一15-2貝?	〃	(17.7)		18.5	突起4、頸部刺突隆帯区画、突起に餡状隆帯、LR撚糸文		
〃-38	〃-14-2貝	〃	(23.0)		21.0	〃、〃　〃　口縁部無文、下に逆L字状磨消区画4、タテ撚糸文		
〃-39	〃-14-2貝下	〃	(12.6)	(7.1)	12.5	突起4、頸部刺突隆帯区画、突起に餡状隆帯、下に逆L字状磨消区画、底部近く隆帯区画、タテ撚糸文		高台 4貫通孔
〃-40	〃-13-2貝	〃	(14.2)		16.0	平縁、頸部沈線区画、口縁無文、口端から刺突隆帯下垂、間にコ字状の磨消区画5、タテ撚糸文		
〃-41	〃-14-2貝	〃	(28.8)		20.8	環状突起4、頸部刺突隆帯区画、突起に餡状隆帯、下に逆L字と円形刺突区画4、タテ撚糸文		
〃-42	〃-13-2貝	〃	(27.6)		23.2	環状突起4、小4、頸部刺突隆帯区画、口縁部無文、下に逆コ字状磨消帯6、タテ撚糸文		
〃-43	〃-15-2貝 (混貝)〃★	〃	(15.3)	8.0	24.0	橋状把手4、口端刺突列、LR、底部近くヨコ無文		無文底
39-44	〃-〃-〃	〃	(14.5)	7.0	13.5	突起4、LR無節		無文底
〃-45	〃-14-2貝	〃	(22.6)		22.4	突起4、頸部沈線区画、下に逆L字状磨消区画4、LR		
〃-46	〃-13-2貝	〃	(35.6)		30.8	突起6、頸部沈線区画、頸部下にも区画、口縁無文、コ字状磨消区画6		

図版番号	出土地区	種別	口径(推)cm	底径cm	器高(現高)cm	外面文様	内面文様	底部調整5
39-47	A-13-2貝	土器	(40.0)		22.4	突起4、頚部刺突隆帯区画、突起に鰭状隆帯、口縁無文、LR撚糸文	上ヨコ、下？	
〃-48	〃-15-混貝	〃	14.0	胴28.0	22.0	平縁、頚部隆帯区画、橋状把手4、胴部に刺突隆帯区画、間にC字状磨消区画4、タテ撚糸文	上ヨコ、下タテ整形	壷形土器
40-1	C-拡	〃	(20.8)	胴28.0	16.4	口縁内反無文、小突起4、頚部隆帯区画、下に逆L字形磨消4、LR撚糸文		壷形
〃-2	A-2-2貝	〃	10.4	6.4	21.2一19.8	頚部・胴部に沈線区画、間にC字状磨消ヨコ連鎖		無文底 胴18.7 壷形
〃-3	C-拡	〃	7.7	7.2	12.9	頚部・胴部に沈線区画、間に逆L字状磨消ヨコ連鎖		無文底 胴15.0 壷形
〃-4	A-15-2貝	〃	(14.0)	胴28.0	22.0	口縁無文、頚部・胴部隆帯区画、間にコ字状磨消4、LR		壷形
〃-5	〃-14-2貝	〃	(23.6)	胴38.0	24.0	平縁、口縁部無文、橋状把手4、頚部隆帯区画、下に隆線囲み磨消展開、朱彩		壷形
〃-6	〃-13-2貝・土層	〃	(23.4)	胴43.2	33.8	平縁、口縁無文、橋状把手4、下にヨコS字形磨消区画4、LR複節、朱彩	上ヨコ整形	壷形
50-1	B-2混	〃	(43.6)		23.5	大波状5、口縁無文、頚部ヨコ沈線その間沈線連絡下タテ、無文	上ヨコ整形	
〃-2	〃-〃	〃	17.3	7.0	18.5一19.1	平縁、口縁ヨコ無文、ナナメ擦痕		葉文底
〃-3	〃-3混	〃	27.8	12一15	29.8一25.0	不定口縁3、口縁外反、頚部無文、RL	上ヨコ、下タテ整形	葉文底
〃-4	〃-2貝	〃	(43.4)	14.0	21.1	口縁小刻目、縄文ヨコ沈潜連絡、RL、補習孔		網代文まわり無文整形
〃-5	〃-2混	土器	(10.5)		10.2	椀形、頚部工字文、下ヨコ無文	内ヨコ	
〃-6	〃-2貝	〃	(45.0)		23.8	波状突起6、口端無文、頚部5本沈線帯縄文、下入組文、下5本沈線無文、RL	上ヨコ、下タテ整形	
〃-7	〃-2黒土	〃	17.8	7.8	20.0	平縁、口縁無文、外反、RL、底近くヨコ無文	上ヨコ、下タテ、その下ヨコ	網代文
〃-8	〃-〃	〃	(18.4)		14.0	平縁、口縁・無文外反、RL	上ヨコ、下タテ整形	
51-9	〃-4混	〃	(29.7)		26.0	小波状、口縁無文、沈線区画、口縁から綾絡文、間沈線区画、下ヨコ無文	上ヨコ、下タテ整形	
〃-10	〃-〃	〃	(15.0)		17.2	小突起4、口縁外反、頚部屈折、LR撚糸文	上ヨコ、下タテ整形	
〃-11	〃-〃	〃	(13.0)		16.8	平縁、頚部で屈折・沈線区画、下倒卵形状文、LR撚糸文		
〃-12	〃-〃	〃	(30.1)		26.5	平縁、口縁外反、頚部無文帯、RL	上ヨコ、下タテ整形	
〃-13	B	〃	(31.3)		25.4	小波状4、口縁外反、頚部無文帯、RL	〃 〃	

図版番号	出土地区	種別	口径(推)cm	底径cm	器高(現高)cm	外面文様	内面文様	底部調整6
51-14	B	土器	(22.0)		13.0	口縁やや外反、無文、LR	上ヨコ、ナナメ、下タテ	
〃-15	〃	〃	(27.6)		17.0	小突起4、口端無文、LR	上ヨコ、下ナナメ・タテ	
〃-16	〃	〃	(26.8)		16.7	平縁、外反、口端整形、RL	上ヨコ、下タテ	
〃-17	B-黒土?	〃	(28.0)		21.0	平縁、外反、口端整形、RL	〃 〃	
63-1	C - 拡	〃	(14.9)		6.2	平縁、工字文、下無文	口端沈線	浅鉢
〃-2	〃 - 〃	〃	14.5	7.6	22.4	小波状6、口縁刺突列、突起に刺突隆帯、胴部刺突列区画、逆L字形磨消区画6、タテ撚糸文		葉文底
〃-3	〃 - 〃	〃	14.8	8.0	21.6	小突起、突起から胴部に刺突隆帯、口縁含めてコ字状磨消区画、LR、底近くタテ無文		無文底
〃-4	〃 - 〃	〃	(28.0)		17.9	環状突起4、小4、口縁無文、頸部刺突隆帯区画、突起に鰭状刺突隆帯、下逆L字形磨消区画、RL複節	上ヨコ、下タテ整形	
〃-5	〃 - 〃	〃	(32.0)		38.2	橋状突起4、口縁無文、頸部隆帯区画、RL		
〃-6	〃 - 〃	〃	(16.5)		9.2	環状突起5、頸部沈線区画、RL複節		浅鉢?
〃-7	C - 2 - 拡	〃	22.5	10.9	26.5	小突起6、頸部隆帯区画、突起に鰭状隆帯、LR		無文底
〃-8	〃 - 拡	〃	(18.9)		9.8	平縁、外反、口縁無文、頸部刺突隆帯区画、下逆L字形磨消区画、タテ撚糸文		
64-9	〃 - 〃	〃	(24.1)		20.0	突起4、口縁無文、頸部刺突隆帯、突起に鰭状隆帯、LR撚糸文		
〃-10	〃 - 〃	〃	(42.5)		25.5	口縁無文、頸部隆帯区画、口縁に鰭状隆帯、下沈線逆L字形磨消区画、LR	上ヨコ	注口
〃-11	〃 - 〃	〃	(23.4)		26.0	平縁、口縁無文、頸部刺突列区画、LR撚糸文	上ヨコ、下タテ	
〃-12	〃 - 〃	〃	(36.0)		28.3	突起4、口縁無文、口縁含めコ字状磨消区画4、RL複節		
〃-13	B-1ーC-拡	〃	28.5		20.5	突起4、口端無文、、タテに刷毛目文		

図版番号	出土地区	拓 図	特 徴	図版番号	出土地区	拓 図	特 徴
5-1	A-11-3貝	口縁	繊維、斜行縄文、RL、土面刺突	5-3	A-12-土貝	口縁	繊維、斜行縄文、RL、末端ループ
〃-2	〃-11混貝	〃	繊維、口端刻目、斜行縄文、RL	〃-4	〃-12-混貝	〃	〃、 〃、 〃 〃

図版番号	出土地区	拓図	特徴	図版番号	出土地区	拓図	特徴 7
5-5	A-12-混貝	口縁	繊維、斜行縄文、RL、末端ループ	6-3	A-2黒 土下	口縁	繊維、斜行縄文、RL、土面、内擦痕
〃-6	〃 〃 〃	〃	〃、 〃 、〃 〃	〃-4	〃 〃 〃	〃	〃、 〃、 〃、 〃、 〃
〃-7	〃 〃 〃	〃	〃、 〃 、〃 〃	〃-5	〃-1-黒土下	〃	〃、 〃、LR、 〃、内ヨコ擦痕
〃-8	〃-11ー12-混土	〃	〃、 〃 、〃 〃	〃-6	〃 〃 〃	〃	〃、 〃、 〃、 〃、 〃
〃-9	〃-12-混貝	〃	〃、 〃 、〃 〃	〃-7	〃-3-2混貝	〃	〃、 〃、 RL、 〃、 〃
〃-10	〃-〃-2貝	〃	〃、 〃 、〃 〃	〃-8	〃-1-黒土下	〃	〃、 〃、 LR、口端刻目、〃
〃-11	〃-11ー12-混土	〃	〃、 〃 、〃 〃	〃-9	〃-8-黒土	〃	〃、 〃、 RL、 〃、
〃-12	〃-4-土層	〃	〃、 〃 、〃 〃	〃-10	〃-456-土層	〃	〃、 〃、 〃、土面刻目、〃
〃-13	〃-12-混土	体部	〃、 〃 、〃 、〃	〃-11	〃 〃 〃	〃	〃、 〃、 〃、 〃
〃-14	〃-〃-混貝	〃	〃、 〃 、〃 、〃	〃-12	〃-1-1貝下	体部	〃、 〃、 LR
〃-15	〃 〃 〃	〃	〃、 〃 、〃 、〃	〃-13	〃-7-土層	〃	〃、 〃、 RL、内ヨコ擦痕
〃-16	〃-11ー12-混土	〃	〃、 〃 、〃 、〃	〃-14	〃-456-土層	〃	〃、 〃、 〃、 〃
〃-17	〃-12-混土	〃	〃、 〃 、〃 、〃	〃-15	〃 〃 〃	〃	〃、 〃、 〃、 〃、結束痕
〃-18	〃-7-土層	〃	〃、 〃 、〃 、〃、内無文	〃-16	〃-3-2混貝	〃	〃、 〃、 LR
〃-19	〃-〃-混土	〃	〃、 〃 、〃 、〃	〃-17	〃-7-土層	〃	〃、 〃、 〃、内擦痕、結束痕
〃-20	〃-〃-混土	〃	〃、 〃 、〃 、〃	〃-18	〃-123-混貝	〃	〃、 〃、 RL、内タテ擦痕
〃-21	〃-11ー12-混土	〃	〃、 〃 、〃 、〃	〃-19	〃-456-土層	〃	〃、 〃、 LR複節、内擦痕、結束痕
〃-22	〃-12-混貝	〃	〃、 〃 、〃 、〃	〃-20	〃-3-混貝	〃	〃、 〃、 RL、結束痕
〃-23	〃-7-土層	〃	〃、 〃 、〃 、〃、内タテ擦痕	〃-21	〃-1-黒土下	〃	〃、 〃、 〃、 内擦痕、〃
6-1	A-12-土貝	口縁	〃、 〃 、〃	〃-22	〃-456-土層	〃	〃、 〃、 〃、 〃
〃-2	〃-12-混貝	〃	〃、 〃 、〃	〃-23	〃-1-1貝下	〃	〃、 〃、 〃、 〃

図版番号	出土地区	拓	図	特　　徴	図版番号	出土地区	拓	図	特　　徴　8
6-24	A-123-混貝		体部	繊維、斜行縄文、RL、内撚痕、結束痕	7-20	A-1-黒土下		体部	繊維、斜行縄文、RL、綾絡文、内撚痕
〃-25	〃-12-土層		〃	〃、　〃、　〃、付加条	〃-21	〃-2-黒土下		〃	〃、　〃、　〃、　〃、内撚痕
7-1	〃-12-土層	口縁		〃、羽状縄文、結束、土面刻目	〃-22	〃　〃　〃		〃	〃、　〃、　〃、　〃、　〃
〃-2	〃-456-土層		体部	〃、　〃、　〃	〃-23	〃-1-黒土下		〃	〃、　、　、　〃、　〃
〃-3	〃　〃　〃		〃	〃、　〃、　〃、内撚痕	〃-24	〃-1黒 土下		〃	〃、　〃、　〃、　〃、　〃
〃-4	〃-7-土層		〃	〃、　〃、　〃、内撚痕・剥離	〃-25	〃　〃　〃		〃	〃、　〃、　LR、撚糸圧痕文、内撚痕
〃-5	〃-456-土層		〃	〃、　〃、　〃、内撚痕	8-1	〃-12-混貝	口縁		〃、　口端無文、ループ文
〃-6	〃-7-土層		〃	〃、　〃、　〃、　〃	〃-2	〃　12-土層	〃		〃、　〃、　〃、結束痕、(段落)
〃-7	〃-456-土層		〃	〃、　〃、　〃　〃	〃-3	D-土層	〃		〃、　土面刺突、〃
〃-8	〃-4-土層	口縁		〃、　〃、　〃、内撚痕	〃-4	C-拡	〃		〃、　口端無文、〃
〃-9	〃-8-黒土	〃		〃、　〃、　〃、　、内ヨコ撚痕	〃-5	A-3-2混貝		体部	〃、　、　〃、
〃-10	〃-7-土層	〃		〃、　〃、　非結束?、　、〃	〃-6	〃-1-1黒土下		〃	〃、　ループ文、内撚痕
〃-11	〃-1-黒土下	〃		〃、　〃、　結束、口端刻目、〃	〃-7	〃　〃		〃	〃、　〃、　〃、結束痕、(段落)
〃-12	〃-14-2貝	〃		〃、　〃、　非結束、土面刻目	〃-8	〃-1-1黒土下		〃	〃、　〃、　〃、末端ループ文？、結束痕(段落)
〃-13	D-土層	〃		〃、　〃、　〃、　〃	〃-9	〃　〃　〃		〃	〃、　口端無文、ループ文、内撚痕程度
〃-14	A-123-2混貝		体部	〃、　〃、　〃、内撚痕	〃-10	〃-1-1貝下		〃	〃、　ループ文
〃-15	〃-12-混貝		〃	〃、　〃、　〃	〃-11	〃-8-黒土		〃	〃、　〃、　内撚痕
〃-16	〃-1-黒土下		〃	〃、　〃、　〃、内撚痕	〃-12	〃-7-土層		〃	〃、　〃、　内撚痕・凹凸
〃-17	〃-2-黒土下		〃	〃、　〃、　〃、内ヨコ撚痕	〃-13	〃-11-3貝		〃	〃、　ループ？
〃-18	〃-12-混貝		〃	〃、　〃、　〃	〃-14	〃-8-黒土	口縁		〃、　口端無文、ループ文、内撚痕
〃-19	〃-7-土層		〃	〃、　〃、　〃、内撚痕	〃-15	〃　〃　〃		体部	〃、　ループ文

図版番号	出土地区	拓図		特徴	図版番号	出土地区	拓図		特徴 9
8-16	C-拡	口縁		繊維、口端刻目、組紐文	11-4	A-1ー4-表土・黒土	口縁		口縁外反・無文、頸部沈線区劃、内口端沈線、(大洞A)
〃-17	A-123-2混	〃		〃、口端無文、〃、内擦痕	〃-5	〃-1	〃		突起、三叉文、頸部沈線、(大洞B)
〃-18	〃-12-混貝	〃		〃、土面刻目、〃	〃-6	〃-2-1貝下★	〃	(混貝)	頸部に5本沈線帯縄文、土面沈線、(宮戸Ⅱ式)
〃-19	〃 〃 〃	〃		〃、土面刻目、〃	〃-7	〃-2-2貝直上★	〃	(混貝)	口縁無文、頸部沈線、沈線文
〃-20	〃 〃 〃		体部	〃、組紐文	〃-8	〃-3-2貝★	(混貝)	体部	沈線文
〃-21	〃 〃 〃		〃	〃、〃	〃-9	〃-1-1貝下★	口縁	(混貝)	沈線重弧文？(大洞B式)
〃-22	〃 〃-貝層		〃	〃、〃	〃-10	〃-3-2貝下★	(混貝)	体部	タテ沈線文
〃-23	〃-11ー12-混土		〃	〃、〃	〃-11	〃 〃 〃★	(〃)	〃	〃、
〃-24	A-12-混貝		〃	〃、〃	〃-12	〃-1-1貝★	口縁	(混貝)	小波状、外反、帯縄文入組文、凹穴文、LR縄文
〃-25	〃 〃 〃		〃	〃、〃	〃-13	〃-3-黒土★	〃	(〃)	外反、帯縄文入組文、LR縄文
〃-26	〃-11ー12-混土		〃	〃、〃	〃-14	〃-1-1貝★	〃	(〃)	小波状、外反、帯縄文入組文、LR縄文、凹穴文
〃-27	〃-12-混貝		〃	〃、〃	〃-15	〃-3-1貝下★	〃	(〃)	〃、〃、〃、〃
〃-28	〃 〃 〃		〃	〃、〃	〃-16	A-3-1貝中★	〃	(〃)	小波状、外反、頸部文様帯、入組文、LR縄文
〃-29	〃-3-混貝		〃	〃、〃	〃-17	〃-1-1貝★	〃	(〃)	〃、〃、〃、〃、〃、凹穴文
〃-30	〃-7-土層		〃	〃、格子目状撚糸文、内ヨコ擦痕	〃-18	〃-2-2貝★	〃	(〃)	〃、〃、〃、〃、RL縄文
〃-31	〃-456-土層		〃	〃、〃、〃	〃-19	〃-1 ★	〃	(〃)	〃、〃、〃、〃、〃
〃-32	〃-1-1貝下		〃	〃、〃	〃-20	〃-2-2貝★	〃	(〃)	外反、入組文、LR縄文
〃-33	〃-4-土層		〃	〃、〃、内擦痕	〃-21	〃-1-2貝★	〃	(〃)	小波状、口端無文、頸部文様帯入組文、RL縄文
11-1	A-1ー4_表土・黒土	口縁		口縁部文様帯、工字文、LR斜行縄文、内口端沈線	〃-22	〃-2-2貝★	〃	(〃)	外反、帯縄文、LR縄文
〃-2	〃 〃 〃	〃		〃、〃、〃、〃	〃-23	〃-1-黒土	〃		〃、〃、RL縄文
〃-3	〃 〃 〃	〃		口縁外反・無文、羽状縄文、内口端沈線	〃-24	〃-1-1貝下★	〃	(混貝)	〃、〃、〃

図版番号	出土地区	拓図		特徴	図版番号	出土地区	拓図		特徴 10
11-25	A-1-1貝下★	口縁	(混貝)	外反、頸部文様帯入組文、LR縄文	12-46	A-3-1貝下★		体部	外反、帯縄文、凹穴文、RL、(混入)
〃-26	〃-1-2-1貝下★	〃	(〃)	〃、 帯縄文、LR縄文	〃-47	〃-3-2貝上★		〃	帯縄文、LR、(〃)
〃-27	〃-2-1貝下★	〃	(〃)	帯縄文、凹穴文、LR縄文	〃-48	〃-2-2貝 ★		〃	頸部文様帯入組文、LR、(〃)
〃-28	〃 〃 〃 ★	〃	(〃)	小波状、帯縄文入組文、LR縄文	〃-49	〃-3-2貝上★		〃	頸部下沈区劃、RL、(〃)
〃-29	〃 - 1 ★	〃	(〃)	外反、口端無文、帯縄文、LR	〃-50	〃-1ー2-1・2貝下★		〃	頸部文様入組文、凹穴文、LR、(〃)
〃-30	〃-2-2貝 ★	〃	(〃)	〃、 帯縄文、LR	〃-51	〃-1-1貝下★		〃	〃、 RL、(〃)
〃-31	〃-1ー2-1・2貝下★	〃	(〃)	〃、 〃、 LR、凹穴文	〃-52	〃-1-1貝下★	口縁		小波状、外反、頸部に擦消帯、LR、補修孔、(〃)
〃-32	〃-3-表土	〃		〃、 〃、 〃、 〃	〃-53	〃-1-2貝 ★	〃		外反、頸部無文帯、LR、(〃)
〃-33	〃-3-1貝下★	〃	(混貝)	〃、 〃、 RL	〃-54	〃-3-貝中★	〃		〃、 〃、 LR、(〃)
〃-34	〃-2-黒土	〃		〃、 〃、 LR	〃-55	〃-1-黒土	〃		〃、 〃、 〃
〃-35	〃-1-1貝★	〃	(混貝)	〃、 〃、 RL	〃-56	〃-1-1貝下★	〃		〃、 〃、 LR、(混貝)
〃-36	〃-2-黒土	〃		〃、 〃、 LR	〃-57	〃 - 1	〃		〃、 〃、 〃
〃-37	〃-1-1貝★	〃	(混貝)	波状、外反、帯縄文、LR	〃-58	〃-1ー2-1・2貝下★	〃		〃、 〃、 RL(混貝)
〃-38	〃 - 1 ★	〃	(〃)	波状、外反、刺突文、頸部沈線、鋸歯文、LR	〃-59	〃-1-1貝下★	〃		〃、 〃、 LR、(〃)
12-39	〃-2-2貝★	〃	(〃)	口端無文、帯縄文、LR	〃-60	〃-1ー2-2貝★	〃		〃、 〃、 〃、 (〃)
〃-40	〃-2-2貝上★	〃	(〃)	外反、帯縄文、LR	〃-61	〃-1-1貝下★	〃		〃、 〃、 〃、 (〃)
〃-41	A-1-1貝下★	〃		外反、帯縄文、LR、(混入)	〃-62	〃-2-貝下★	〃		〃、 〃、 〃、 (〃)
〃-42	〃-1-2貝下土★	〃		〃、 口端無文、帯縄文、LR、(〃)	〃-63	〃-2-1貝下★	〃		〃、 〃、 〃、 (〃)
〃-43	〃-1-1貝下★	〃		口端無文、広い帯縄文、RL撚糸文、(〃)	〃-64	〃-3-2貝★	〃		〃、 〃、 補修孔、(〃)
〃-44	〃-3-1貝中★		体部	外反、入組文、LR、(〃)	〃-65	〃-1-2貝★	〃		〃、 〃、 〃、 (〃) ★印は層位修正し()で修正層位を示した。
〃-45	〃-1ー2-2貝★		〃	帯縄文、凹穴文、LR、(〃)	〃-66	〃-2-1貝下★	〃		外反、頸部無文帯、LR、(混貝)

図版番号	出土地区	拓図		特徴	図版番号	出土地区	拓図		特徴 11
12-67	A-2-2貝★	口縁		外反、頸部無文帯、LR(混貝)	14-88	A-3-黒土		底部	無文底、5.1cm
〃-68	〃-1~3-1貝下		体部	頸部ヨコ沈線、沈線渦巻文、タテ撚糸文	〃-89	〃-3-1貝下		〃	〃、 3.5cm
〃-69	〃-1-1貝下	口縁		口縁無文、頸部沈線、下に連鎖文下垂、RL	〃-90	A-3-黒土		〃	無文平底、7.9cm
〃-70	〃-〃-〃		体部	倒卵形文、タテ撚糸文	〃-91	〃-3-1貝中		〃	無文平底、11.0cm、現高11.1cm、1cm、LR
〃-71	〃-3-1貝下		〃	外反、頸部下に渦巻等の沈線文、タテ撚糸文	〃-92	〃-〃-〃		〃	網代文平底、12.2cm、現高6.6cm、羽状?
〃-72	〃-3-1貝下	口縁		やや内反、口端無文、頸部に沈線下放射状沈線、撚糸文	〃-93	〃-1-2貝下土★		〃	〃、 16.6cm、(混貝)
13-73	〃-3-2混貝		体部	橋状突起、隆帯連鎖刻目、Y字状磨消、RL	〃-94	〃-3-黒土		〃	〃、 12.0cm、現高6.0cm、RL
〃-74	〃-3-1貝中	口縁		波状口縁、口縁無文、波状に渦巻文、頸部隆帯下に、	〃-95	〃-2-2貝★		〃	〃、 周り磨消、10.3cm(混貝)
〃-75	〃-3-1貝下	〃		外反、突起に隆帯、頸部隆帯区劃、タテ撚糸文	〃-96	〃-1-1貝下★		〃	〃、 6.0cm、(〃)
〃-76	〃-3-1貝中		体部	沈線文、撚糸文	〃-97	〃-1-2混貝★		〃	薬文平底、5.6cm、RL、(〃)
〃-77	〃-2-1貝下	口縁		内反、突起、突起頸部に砂突隆帯区劃、下渦巻き文、撚糸文	〃-98	〃-3-1貝下		〃	〃、 12.5cm
〃-78	〃-〃-〃	〃		口縁無文、沈線区劃、下に連鎖隆帯下垂、RL	〃-99	〃-3-1貝下		〃	〃、 4.8cm
〃-79	〃-3-2貝	〃		〃、 〃、 LR 78と同じ	〃-100	〃-1-2貝		〃	〃、 12.0cm
〃-80	〃-〃-〃	〃		〃、 〃、 撚糸文	〃-101	〃-3-1貝中		〃	〃、 7.4cm、現高6.9cm、RL
〃-81	〃-3-混貝	〃		〃、 〃、 下連鎖隆帯下垂、RL、78と同じ	16-1	A-4-貝層中	口縁		橋状突起、突起土面渦巻、連鎖隆帯下垂、RL
〃-82	〃-2-1貝下		体部	沈線間に刺突文、鋸歯状文、RL撚糸文	〃-2	〃-4-混貝		体部	橋状突起、頸部隆体区劃、下連鎖隆帯下垂、RL
〃-83	〃-〃-〃	口縁		波状突起、頸部刺突隆帯、突起へ、LR	〃-3	〃-4-貝層中	口縁		突起、S状隆帯
〃-84	〃-3-2混貝	〃		やや外反、頸部下刺突隆帯区劃、コ字状の磨消区劃、タテ撚糸文	〃-4	〃-〃-〃	〃		環状突起、突起部隆帯
〃-85	〃-〃-〃	〃		平縁、口縁無文、やや外反、頸部刺突隆帯区劃、下に逆L字状磨消区劃、RL撚糸文	〃-5	〃-〃-〃	〃		突起、貫通孔、口端無文沈線区劃、下放射状沈線、撚糸文
〃-86	〃-〃-〃	〃		85と同じ	〃-6	〃-4-混貝	〃		環状突起、内反、頸部隆帯区劃
14-87	A-1-1貝下		底部	無文底、10.6cm	〃-7	〃-〃-〃		体部	胴部連鎖隆帯区劃、上から隆帯交差、撚糸文

図版番号	出土地区	拓図		特徴	図版番号	出土地区	拓図		特徴 12
16-8	A－4－混貝		体部	胴部連鎖隆帯区劃、上から隆帯交差、RL撚糸文	19-4	A－8－混土	口縁		突起、口縁無文、頸部沈線、ボタン状突起から沈線、タテ撚糸文
〃-9	〃 〃－土層★		〃	ボタン状凹部、Y字状磨消、隆帯、RL、(混貝)	〃-5	〃－9－混貝	〃		橋状突起、口縁無文、頸部隆帯区劃、下連鎖隆帯の鉤文展開、ボタン状突起が配される。
〃-10	〃-456-土層★			連鎖隆帯、RL(〃)	〃-6	〃-8-1混貝	〃		鉤状口縁、突起、頸部隆帯から連鎖ボタン状突起隆帯下垂
〃-11	〃-4-土層★	口縁	(混貝)	平縁、口端無文ヨコ、下連鎖放射状沈線、タテ撚糸文	〃-7	〃－8－1貝		体部	連鎖隆帯頸部下に下垂胴部区劃、ボタン状突起、LR
〃-12	〃－4－混貝	〃		〃、 〃、 下放射入組沈線、〃	〃-8	〃-7-1貝下		〃	頸部沈線区劃、連鎖隆帯下垂、RL
〃-13	〃-4-貝層中★	〃		平縁、口縁無文、下鉤状文、LR、(混貝)	〃-9	〃-8-1混貝		〃	外反、頸部沈線区劃、ボタン状突起中心鋸歯文、RL
16-14	A-4-貝層中		体部	口縁無文、頸部沈線区劃、下放射状沈線、RL	〃-10	〃－8－混土		〃	ボタン状突起中心に磨消下に、LR
〃-15	〃 〃 〃		〃	沈線の円文、2列の刺突列、RL撚糸文	〃-11	〃－7－混貝		〃	ボタン状突起、下に連鎖文、頸部隆帯区劃
〃-16	〃－4－混貝	口縁		波状、外反、頸部文様帯、帯縄文入組文、RL	19-12	A－7－混貝		〃	ボタン状突起中心に沈線、タテ撚糸文
〃-17	〃 〃 〃	〃		外反、頸部文様帯、円文、入組文、凹穴、撚糸圧痕	〃-13	〃-7-混貝黒土	口縁		平縁、外反、口縁無文、頸部沈線区劃、下放射状沈線、撚糸文
〃-18	〃 〃 〃	〃		波状突起、口縁無文、円文中心に文様	〃-14	〃 － 9	〃		外反、口縁無文、下綾絡文・放射状文、タテ撚糸文
〃-19	〃 〃 〃		体部	外反、入組文、LR	〃-15	〃－7－混土	〃		口縁無文、頸部沈線、下沈線文、タテ撚糸文
〃-20	〃 〃 〃		〃	入組文、LR	〃-16	〃 〃 〃	〃		外反、口縁無文、頸部沈線、下綾絡文下垂、ボタン状突起、RL
〃-21	〃 〃 〃	口縁		平縁、外反、頸部無文帯、LR	〃-17	〃-8-2貝下★		体部	内反、上無文、下鋸歯状沈線、RL、(1貝下)
〃-22	〃 〃 〃	〃		〃、 〃、 〃、 〃	〃-18	〃－7－混貝		〃	沈線による懸垂状磨消、撚糸文
〃-23	〃 〃 〃	〃		〃、 〃、 〃、 〃	〃-19	〃-9-1混貝		〃	沈線による1字状磨消、RL撚糸文、
〃-24	〃 〃 〃	〃		〃、 〃、 〃、 〃	〃-20	〃－9－混貝		〃	沈線連鎖文、放射状沈線(倒卵形？)
〃-25	〃 〃-土層★	〃		〃、 〃、 〃、 〃、(混土)	〃-21	〃-9-1混貝		〃	沈線間磨消、ワラビ状沈線、RL撚糸文
19-1	A－8－混貝	〃		内反、口縁無文、頸部隆帯区劃、隆帯円文中心連鎖隆帯、沈線Y字状磨消文、ボタン状突起、RL	〃-22	〃－7－混貝		〃	頸部から胴部にタテワラビ状磨消、胴部沈線区劃、RL
〃-2	〃-9-1混土	〃		く字状口縁、環状突起、頸部隆帯区劃、下連鎖文の隆帯文、RL	20-23	〃－7－混貝	口縁		波状？、口縁無文、口縁2列隆帯区劃、タテ撚糸文
〃-3	〃－8－1貝	〃		突起、口縁無文、頸部隆帯区劃、ボタン状突起中心に文様展開	〃-24	〃 〃 〃	〃		口縁無文隆帯区劃、口縁に刻目隆帯、下逆L字磨消、RL

図版番号	出土地区	拓図	特徴	図版番号	出土地区	拓図	特徴 13
20-25	A－7－混貝	口縁	内反、口縁隆帯区画、RL撚糸文	21-46	A－8－混土	〃	口縁無文、頸部刺突隆帯区画、口縁に鰭状隆帯、撚糸文
〃-26	〃－9－1混下	〃	外反、口縁無文、隆帯文施文、LR	〃-47	〃－7－2貝下	〃	〃、　突起から刺突隆帯下垂、RL
〃-27	〃－9－混貝	〃	小波状、口縁部無文、口縁含めコ字状磨消、RL	〃-48	〃－7－混貝	〃	小突起、口縁無文、頸部刺突隆帯区画、刺突隆帯含み逆L字状磨消か、RL撚糸文
〃-28	〃－7－貝層★	〃	波状、口縁無文、下隆帯区画、RL、（2貝上）	〃-49	〃－8－1混土	〃	小突起、口縁無文、頸部刺突隆帯区画、突起に鰭状8隆帯、撚糸文
〃-29	〃　〃　〃　★	〃	外反、口縁無文、頸部隆帯区画、LR撚糸文、（2貝上）	〃-50	〃－7－2貝下	〃	口縁無文、頸部刺突隆帯区画、RL撚糸文
〃-30	〃－8－1混下	〃	外反、口縁無文、口縁に2刻目隆帯、タテ磨消と連鎖隆帯、LR	26-1	A－12－混貝	〃	環状突起、口縁無文、頸部隆帯区画突起へ刺突隆帯、LR
〃-31	〃－7－混貝	〃	口縁無文2重隆帯区画、タテ撚糸文	〃-2	〃　〃　〃	〃	〃、　〃、　〃、　〃
〃-32	〃－8－1貝	〃	小突起、口縁無文、頸部隆帯区画、斜め隆帯、RL	〃-3	〃－〃－貝層	〃	突起、口縁無文、頸部隆帯区画、ボタン状突起から倒卵形隆帯区画、RL
〃-33	〃－8－黒土	〃	口縁無文、頸部隆帯区画、口縁・下斜めに刻目隆帯、撚糸文	〃-4	〃　〃　〃	〃	口縁無文、頸部連鎖隆帯区画、ボタン状突起中心に隆帯文様、RL
〃-34	〃-8-2土層上	〃	く字状外反、口縁無文、頸部隆帯区画、斜め連鎖刻目、RL	〃-5	〃　〃　〃	〃	口縁無文、頸部連鎖隆帯区画、下沈線、タテ撚糸文
〃-35	〃－8－1混上	〃	〃、　〃、　頸部・胴部隆帯区画、間逆L字磨消、LR	〃-6	〃－11－貝層	〃	口縁無文、頸部沈線区画、ボタン状突起、RL撚糸文
〃-36	〃－9－1混土	〃	突起、口縁無文、頸部隆帯区画、放射連鎖隆帯、撚糸文	〃-7	〃－12－貝層	〃	突起、口縁無文、頸部沈線区画、突起にボタン状突起、下沈線、タテ撚糸文
〃-37	〃－8－1混下	体部	胴部隆帯区画、斜めに2刻目隆帯、タテ撚糸文	〃-8	A－12－貝層	〃	突起、口縁無文、頸部沈線区画、突起ボタン状突起、下沈線文様、RL撚糸文
〃-38	〃－7－貝層	口縁	小波状、口縁無文、頸部隆帯区画、下連鎖刻目隆帯、RL	〃-9	〃-10-貝層上	〃	突起、口端無文、ボタン状突起中心に沈線文、RL
21-39	〃－8－2貝	〃	平縁、口縁無文、頸部刺突列区画、RL撚糸文	〃-10	〃－〃－混貝	〃	〃、　〃、　頸部隆帯区画、突起に凹部逆C字鰭状隆帯、RL撚糸文
〃-40	〃　〃　〃	〃	〃、　〃、　〃、　〃	〃-11	〃－12－混貝	〃	環状突起、口縁無文、突起へ鰭状隆帯
〃-41	〃－9－土層	〃	〃、　〃、　〃、　〃	〃-12	〃－11－混貝	〃	口縁逆く字状、無文、頸部隆帯区画、頸部・口端にボタン状突起、タテ撚糸文
〃-42	〃－8－混土	〃	〃、　〃、　〃、　〃	〃-13	〃　〃　〃	〃	口縁無文、頸部隆帯区画、隆帯と口端にボタン状突起、C字状鰭状隆帯
〃-43	〃-8-1混貝下	〃	突起、頸部刺突隆帯区画、口縁から逆L字形磨消、撚糸文	〃-14	〃－12－混貝	〃	環状突起、口縁無文、突起へ鰭状隆帯
〃-44	〃-8-2貝下	〃	小突起、頸部・胴部刺突隆帯区画、突起まで鰭状隆帯、間刺突囲含め磨消区画、タテ撚糸文	〃-15	〃－10－混貝	〃	口縁無文、頸部隆帯、隆帯上にボタン状突起2個ヨコ配置、LR
〃-45	〃－8－混土	〃	口縁無文、頸部刺突隆帯区画、口縁に鰭状隆帯、撚糸文	〃-16	〃－11－混貝	体部	口縁無文、頸部隆帯区画、隆帯にボタン状突起

図版番号	出土地区	拓図	特徴	図版番号	出土地区	拓図	特徴 14
26-17	A-10-混貝	口縁	環状突起、無文、突起部凹部から太い沈線	27-38	A-10-混貝	体部	2列ヨコ刺突列、下無文
〃-18	〃-7-混貝	体部	下部隆体区画、上ボタン状突起連鎖？、LR	〃-39	〃-12-混貝	底部	網代文平底、9.2cm、現高9.3cm、タテ整形
〃-19	〃-11-混貝	〃	ボタン状突起中心に隆帯文	〃-40	〃-11-混貝	〃	〃、 11.5cm
〃-20	〃-10-混貝	〃	連鎖隆帯文下垂、ボタン状突起配置、RL	〃-41	〃-11-ピット	〃	〃、 8.0cm、現高9.0、タテ撚糸文
〃-21	〃 〃 〃	口縁	橋状把手、口縁無文、凹部で連結したS字状沈線	〃-42	〃-11-混貝	〃	〃、 8.5cm
〃-22	〃-11-ピット	〃	突起、口縁無文、頸部沈線区画、突起下の凹部に刺突を含んだ沈線文、LR	〃-43	〃 〃 〃	〃	〃、 周囲磨消、10.0cm
〃-23	〃-11-混貝	〃	突起、口端頸部沈線区画、突起に刻目の鰭状隆帯、LR	〃-44	〃-12-混貝	〃	葉文平底4.2cm
〃-24	〃-11-貝層	〃	口縁無文、頸部沈線区画、頸部から綾絡文・放射沈線、RL	〃-45	〃-10-土層	〃	〃、 11.7cm、現高6.3cm、RL撚糸文
〃-25	〃-10-貝層	〃	〃、 〃、 〃、 RL撚糸文	〃-46	〃-10-土層上	〃	〃、 12.1cm
〃-26	〃-11-混貝	〃	波状、口縁無文、沈線倒卵形文様、タテ刷毛目文	28-47	〃-11-混貝	口縁	内反、口縁無文、頸部2本沈線区画、下連鎖磨消円文、RL、(1-4混と接合)
〃-27	〃 〃 〃	〃	外反、口縁無文、頸部沈線区画、下放射・刺突を持った沈線	〃-48	〃-8-混貝	〃	口端無文、胴部沈線区画、口端から連鎖刺突文、両側に弧状文、交点に凹部文、LR
〃-28	〃-11-黒土	〃	波状、口縁無文、頸部沈線区画、下綾絡文・沈線文、RL	〃-49	〃-8-混土	〃	28-48と同じ
27-29	〃-11-ピット	〃	口縁無文、頸部沈線区画、下放射線、タテ撚糸文	〃-50	〃-12-混貝	〃	口縁無文、沈線と磨消の文様、RL
〃-30	〃-10-貝層	体部	放射状線文、タテ撚糸文	〃-51	〃-11-貝層	体部	胴部に磨消区画、上から刺突文、LR
〃-31	〃 〃 〃	〃	沈線の逆L字状の区画、LR	〃-52	〃-11-貝層下	底部	無文平底、8.1cm
〃-32	〃 〃 〃	〃	上倒卵形沈線文様、胴部下部沈線区画、タテ撚糸文	〃-53	〃 〃 〃	〃	〃、 9.0cm、現高3.3cm、ヨコ整形
〃-33	〃-10-混貝	〃	タテジクザク文、RL	〃-54	〃-〃-混貝	〃	無文平底、12.1cm
〃-34	〃-12-貝層	〃	〃、 タテ撚糸文	〃-55	〃-10-土層上	〃	〃、 真中ヨコ、5.3cm
〃-35	〃-11-土層上	〃	〃、 LR	〃-56	〃-10-貝層	〃	〃、 7.7cm、現高5.4cm、タテ撚糸文、ヨコ整形
〃-36	〃-10-貝層	〃	逆L字状磨消区画、c字状磨消、タテ撚糸文	〃-57	〃-11-貝層	〃	網代文平底、6.8cm、現高4.5cm、ヨコ整形
〃-37	〃-13-混貝	〃	3列ヨコ刺突列	29-58	〃-10-土層上	口縁	橋状突起、口縁無文、頸部隆帯区画、頸部からY字状磨消、綾絡文、LR

図版番号	出土地区	拓図	特徴	図版番号	出土地区	拓図	特徴 15
29-59	A-11-混貝	口縁	小突起、口縁無文、頸部隆帯区画、突起へ鰭状隆帯、下逆C(L)字形磨消区画、RL	30-80	A-11-ピット	体部	2個刻目施文のY字状磨消文、RL
〃-60	〃-12-混貝	〃	小突起、口縁無文、頸部に円状磨消区画、タテ撚糸文	〃-81	〃-10-土層上	〃	胴部隆帯区画、刻目・円文を含む逆L字状磨消、RL
〃-61	〃-12-2貝	〃	橋状突起、口縁無文、突起に凹部連結した隆帯、下に磨消区画文、RL	〃-82	〃-11-混貝	〃	胴部隆帯区画、2個刻目施文の逆L字状磨消区画、LR
〃-62	〃-11-混貝 12-混貝	体部	磨消の大きな区画、下に円文を包んだ磨消区画の連鎖、ジクザク文、RL	31--83	〃-11-混貝	口縁	小突起、口縁無文、頸部刺突隆帯区画、突起下に連鎖突刺突文、RL
〃-63	〃-12-混貝	〃	橋状突起、磨磨消区画大きく下垂、RL	〃-84	〃-12-混貝	〃	口縁無文、頸部刺突隆帯区画、突起に鰭状隆帯、RL
〃-64	〃 〃 〃	〃	磨消区画、の下部、RL、(61〜65同一個体)	〃-85	〃-11-混貝	〃	口縁無文、頸部刺突隆帯区画、RL
〃-65	〃 〃 〃	〃	磨消区画、RL	〃-86	〃-12-混貝	〃	〃、 頸部刺突列区画、LR
30-66	〃-10-土層上	〃	胴部L字磨消区画、RL撚糸文	〃-87	〃 〃 〃	〃	内反、突起、口縁無文、頸部刺突区画、突起刺突、RL
〃-67	〃 〃 〃	〃	胴部逆L字磨消区画、RL	〃-88	〃 〃 〃	〃	突起、口縁無文、頸部刺突隆帯区画、突起下から磨消下垂、タテ撚糸文
〃-68	〃-10-混貝	口縁	口縁無文、隆起帯区画、口縁に2個刻目隆帯、タテ撚糸文	〃-89	〃 〃 〃	〃	小突起、口縁無文、頸部刺突列区画、タテ撚糸文
〃-69	〃-11-混貝	〃	口端無文、沈線区画、2個刻目隆帯口縁から下垂、RL	〃-90	〃-12-混土	〃	突起口縁無文、頸部刺突隆帯区画、突起へ鰭状隆帯
〃-70	〃-8-1混貝下	〃	内反、口縁無文、隆帯区画、2個刻目隆帯磨消区画、LR	〃-91	〃-11-混貝	〃	口縁無文、頸部刺突列区画、頸部下に逆L字状磨消区画、刻目鰭状隆帯下部に、胴部沈線区画、LR
〃-71	〃-10-混貝	〃	内反、〃、 〃、 刻目隆帯磨消区画、LR複節	〃-92	〃-12-混貝	〃	口縁無文、頸部刺突隆帯区画、撚糸文
〃-72	〃 〃 〃	〃	口縁無文、隆帯区画、2個刻目隆帯下垂、RL	〃-93	〃-11-混貝	〃	環状突起、小突起、口縁無文、頸部隆帯区分、LR
〃-73	〃-11-混貝	〃	小突起、口端無文、隆帯区画、突起から2個刻目隆帯下垂、RL	〃-94	〃 〃 〃	〃	突起、口縁無文、突起から磨消帯下垂、垂、RL
〃-74	〃-10-混貝	〃	小突起、口端無文、突起から2個刻目隆帯下垂、両側にコ字状磨消区画、LR	〃-95	〃 〃 〃	〃	突起、〃、 頸部隆帯区画、突起に鰭状隆帯、下磨区画下垂
〃-75	〃-11-混貝	〃	小突起、頸部刺突隆帯区画、突起に2個刻目隆帯	〃-96	〃-10-混貝	〃	小突起、口端無文、突起から隆帯下垂胴部隆帯区画、タテ撚糸文
〃-76	〃-12-2貝	〃	口端無文、刺突列含む鋸歯沈線、2個刻目隆帯口端から下垂、RL複節	〃-97	〃-11-混貝	〃	口縁無文、頸部隆帯区画、無文帯下に沈線区画、RL
〃-77	〃-10-混貝	〃	口縁無文、沈線区画、刻目隆帯と磨消下垂、RL	〃-98	〃-12-混貝	〃	内反、口縁無文、頸部隆帯区画、RL、LR
〃-78	〃-12-混貝	〃	口縁無文、2個刻目隆帯と磨消下垂、RL	〃-99	〃-10-混貝	〃	内反、〃、 2本隆帯区画、下無文帯で隆帯区画、タテ撚糸文
〃-79	〃-12-貝層	体部	2個刻目施文のY字状磨消文、RL	〃-100	〃-11-混貝	〃	内反、口縁無文、頸部隆帯沈線区画、RL

図版番号	出土地区	拓図		特徴	図版番号	出土地区	拓図		特徴 16
31-101	A-11-混貝	口縁		内反、口縁無文、橋状把手、2本隆帯区画、タテ撚糸文	41-21	A-14-貝層		体部	胴部下部文様、倒卵形文、綾絡文、RL撚糸文
41-1	A-14-貝層	〃		環状突起、口縁無文、下倒卵形文、刷毛目文	〃-22	A-13-混貝		〃	胴部沈線文、磨消X字状文、LR
〃-2	〃 〃 〃	〃		〃、 〃、 〃	42-23	〃-14-2貝	口縁		橋状突起、口縁無文、頸部隆帯区画、突起下2個刻目の隆帯の逆L字状磨消区画、LR
〃-3	〃 〃 〃	〃		突起、口縁無文、下倒卵形文	〃-24	〃 〃 〃	〃		環状突起、外反、突起下ボタン状突起、頸部隆帯区画、LR
〃-4	〃-13-混貝	〃		口縁無文、下放射沈線、刷毛目文	〃-25	〃-13-混貝	〃		突起、外反、口縁無文、頸部隆帯区画、突起下ボタン状
〃-5	〃-15-貝層	〃		外反、小突起、口縁無文、倒卵形文、LR	〃-26	〃-15-混貝	〃		小突起、口縁無文頸部沈線区画、突起ボタン状突起から連鎖隆帯下垂、RL
〃-6	〃 〃 〃	〃		波状、口縁無文、沈線文、タテ撚糸文	〃-27	〃 〃 〃	〃		突起、内反、頸部隆帯区画、ボタン状突起と頸部凹部連絡、下放射沈線
〃-7	〃-13-貝層	〃		波状、外反、頸部沈線区画、下放射沈線文、タテ撚糸文	〃-28	〃-13-混貝	〃		突起、口縁無文、ボタン状凹部と刺突隆帯の下垂
〃-8	〃-15-貝層	〃		口縁無文、頸部沈線区画、逆L字文磨消、撚糸文	〃-29	〃-14-貝層		体部	上無文、沈線区画、ボタン状凹部から放射沈線文、RL
〃-9	〃-14-貝層	〃		〃、 〃、 下放射状文	〃-30	〃-15-混貝		〃	ボタン状凹部から連鎖隆帯文
〃-10	〃-13-貝下土		体部	放射沈線と磨消、撚糸文	〃-31	〃-13-1混貝	口縁		く字状外反、口縁無文、頸部隆帯区画、凹部あり刺突隆帯放射、LR
〃-11	〃-14-混貝	口縁		突起、口縁無文、頸部沈線区画下放射状文、補修穴、撚糸文	〃-32	〃-15-貝層		体部	ボタン状凹部から連鎖刺突隆帯、RL
〃-12	〃-14-貝層		体部	沈線文区画、LR	〃-33	〃-14-貝層		〃	頸部沈線区画、ボタン凹部から隆帯放射、LR撚糸文
〃-13	〃-13-貝層		〃	タテ沈線文、RL撚糸文	〃-34	〃-13-混貝	口縁		突起、突起にボタン状凹部
〃-14	〃 〃 〃		〃	外反、胴部文様、頸部沈線区画、下放射状沈線、撚糸文	〃-35	〃 〃 〃	〃		口縁無文、頸部連鎖刺突隆帯区画、ボタン凹部配置
〃-15	〃-13-混貝		〃	胴部文様、磨消円文、RL撚糸文	〃-36	〃 〃 〃		体部	2刻目施文Y字磨消文下垂、RL
〃-16	〃-13-貝層		〃	胴部放射状磨消文、RL撚糸文	〃-37	〃-14-貝層	口縁		小突起、頸部に2本沈線区画、ボタン状凹部から下に文様、タテ撚糸文
〃-17	〃-14-貝層		〃	胴部放射沈線、RL撚糸文	〃-38	〃-13-1貝層	〃		口縁無文、頸部連鎖刺突隆帯区画、下磨消文下垂、RL
〃-18	〃 〃 〃		〃	胴部卵形文様、RL撚糸文	43-39	〃-15-2貝	〃		〃、 頸部刺突隆帯区画、沈線と磨消の区画、LR
〃-19	〃 〃 〃		〃	頸部沈線、下懸垂文、RL	〃-40	〃-14-混貝	〃		〃、 頸部隆帯区画、口縁に鍔状隆帯、く字状外反、RL
〃-20	〃-13-貝層		〃	胴部倒卵形文様、RL撚糸文	〃-41	〃-15-混貝	〃		突起、口縁無文、頸部隆帯区画、RL

図版番号	出土地区	拓図	特徴	図版番号	出土地区	拓図	特徴 17
43-42	A-14-2貝	口縁	突起、口縁無文、頚部隆体区画、突起に鰭状隆帯、RL撚糸文	45-63	A-14-土層	口縁	コブシ状突起、小突起、口縁無文、沈線区画、逆L字状(コ字状)磨消区画、RL
〃-43	〃-14-混貝	〃	突起、口縁無文、頚部隆帯区画、突起へ鰭状隆帯、下沈線と磨消文様、LR	〃-64	〃-15-2貝	〃	小突起、口縁無文、沈線区画、逆L字状磨消区画、撚糸文
〃-44	〃-15-2貝	〃	口縁無文、口縁鰭状隆帯、頚部隆帯区画、刺突隆帯放射状、RL撚糸文	〃-65	〃 〃 〃	〃	突起、口縁無文、沈線区画、逆L字状磨消区画、撚糸文
〃-45	〃-14-2貝	〃	突起、突起へ鰭状隆帯、口縁無文、突起から磨消隆帯下垂	〃-66	〃-14-2貝	〃	突起、口縁無文、〃、 〃、 〃
〃-46	〃-13-土層	〃	突起、口縁無文、頚部隆帯区画、突起へ鰭状隆帯、下逆L字磨消区画、RL	〃-67	〃-13-2貝	〃	環状突起、口縁無文、突起に鰭状隆帯、頚部刺突隆帯区画、撚糸文、内頚部に隆帯
〃-47	〃 〃 〃	〃	46と同じ	〃-68	〃-15-混貝	〃	小突起、口縁無文、突起に刺突列、頚部刺突列、コ字状磨消、RL撚糸文
〃-48	〃-15-土層	〃	突起、口縁無文、頚部沈線区画、突起から磨消文下垂、RL	〃-69	〃-15-2貝	〃	口縁無文、刺突列隆帯と磨消下垂、RL撚糸文
〃-49	〃-13-2貝	体部	胴部隆帯区画、逆L字状磨消区画、タテ撚糸文	〃-70	〃-14-2貝	〃	〃、 頚部沈線区画、口縁から刻目隆帯下垂、撚糸文
44-50	〃-15-混貝	口縁	口縁無文、口縁へ鰭状隆帯、L字状頚部沈線区画、LR	〃-71	〃-15-2貝	〃	〃、 頚部刺突列区画、下逆L字状磨消？、RL撚糸文
〃-51	〃-15-2貝	〃	〃、 〃、 〃、 〃	46-72	〃-15-2貝	〃	突起、口縁無文、突起に鰭状隆帯、頚部刺突隆帯区画、撚糸文
〃-52	〃-14-2貝	〃	突起、口縁無文、口縁へ鰭状隆帯、頚部刺突隆帯区画、逆L字状磨消区画、RL	〃-73	〃-14-2貝	〃	突起、口縁無文、突起に鰭状隆帯、〃、RL
〃-53	〃-13-2貝下	〃	突起、口縁無文、口縁へ鰭状隆帯、頚部刺突隆帯区画、下逆L字状磨消区画、タテ撚糸文	〃-74	〃 〃 〃	〃	〃、 〃、 〃、 〃、RL撚糸文
〃-54	〃-14-2貝	〃	突起、口縁無文、口縁へ鰭状隆帯、頚部刺突隆帯区画、下逆L字状磨消区画、タテ撚糸文	〃-75	〃 〃 〃	〃	〃、 〃、 〃、 〃、 〃、 〃
〃-55	〃-13-貝	〃	環状突起、口縁無文、突起へ鰭状隆帯、頚部刺突隆帯区画、口端刺突列、タテ撚糸文	〃-76	〃-15-2貝	〃	〃、 〃、 〃、 〃、 〃、 〃
〃-56	〃-14-2貝	〃	突起、口縁無文、突起へ鰭状隆帯、頚部刺突隆帯区画、逆L字磨消か、タテ撚糸文	〃-77	〃 〃 〃	〃	〃、 〃、 頚部刺突隆帯区画、RL撚糸文
〃-57	〃-15-2貝	〃	小突起、口縁無文、突起に鰭状隆帯、頚部・胴部刺突隆帯区画、逆L字状磨消区画、タテ撚糸文	〃-78	〃-14-2貝	〃	口縁無文、頚部刺突列区画、タテ撚糸文
〃-58	〃-14-2貝	〃	環状突起、口縁無文、突起に鰭状隆帯、頚部刺突隆帯区画、逆L字状磨消区画、LR	〃-79	〃-15-2貝	〃	〃、 〃、 RL撚糸文
〃-59	〃-15-2貝	〃	突起、口縁無文、突起に鰭状隆帯、頚部刺突隆帯区画、RL撚糸文、内部頚部に隆帯	〃-80	〃 〃 〃	〃	〃、 〃、 〃
〃-60	〃-14-2貝	〃	コブシ状突起、口縁無文、頚部刺突隆帯区画、口端刺突列、下磨消区画、タテ撚糸文	〃-81	〃 〃 〃	〃	〃、 頚部刺突隆帯区画、RL撚糸文
〃-61	〃-13-1混貝	〃	口縁無文、口縁へ鰭状隆帯、頚部刺突隆帯区画、逆L字状磨消区画、タテ撚糸文	〃-82	〃-12・13-2貝	〃	〃、 頚部沈線区画、タテ撚糸文
45-62	〃-15-2貝	〃	突起、口縁無文、沈線区画、逆L字状磨消区画、RL	〃-83	〃-13-2貝	〃	〃、 〃、 RL撚糸文

図版番号	出土地区	拓図		特徴	図版番号	出土地区	拓図		特徴 18
46-84	A-13-2貝		体部	胴部刺突列3列	48-105	A-14-2貝		底部	〃、 7.0cm、現高6.1cm、ヨコ
〃-85	A-15-2貝	口縁		突起、外反、口縁無文、隆帯区画、刺突列4列	52-1	B-1-4混	口縁		口端縄文、帯状入組文、凹穴、LR
47-86	〃-13-2貝		底部	無文平底、13.3cm、現高11.4cm、タテ撚糸文	〃-2	〃 〃 〃	〃		〃、 〃、 〃、 〃
〃-87	〃 〃 〃		〃	〃、 9.6cm	〃-3	〃 〃 〃	〃		外反、口端縄文、入組文、RL
〃-88	〃 〃 〃		〃	〃、10.6cm、現高12.0cm、タテ撚糸文	〃-4	〃 〃 〃	〃		〃、 口端撚糸文、頚部無文・撚糸区画、LR
〃-89	〃-13-貝層		〃	〃、12.1cm、現高4.5cm、ヨコ整形	52-5	B-1-4混貝	〃		波状、口縁沈線区画、下沈線、RL
〃-90	〃-15-貝層		〃	〃、 12.4cm、現高4.2cm、〃	〃-6	〃 〃 〃	〃		4と同じ
〃-91	〃-13-2貝		〃	〃、 10.5cm、現高4.8cm、〃	〃-7	〃 〃 〃	〃		外反、口縁無文、頚部沈線区画、沈線の放射に円文、渦巻文、RL撚糸文
〃-92	〃-14-2貝		〃	〃、 13.0cm、現高4.5cm、〃	〃-8	〃 〃 〃	〃		口縁無文、頚部沈線区画、沈線磨消文、タテ撚糸文
〃-93	〃-13-2貝		〃	網代文平底、13.0cm、現高3.6cm、ヨコ整形	〃-9	〃 〃 〃		体部	上2本沈線区画、RL
〃-94	〃-13・14-2貝		〃	〃、 10.4cm、現高5.7cm、〃	〃-10	〃 〃 〃		〃	〃、 LR
48-95	〃-13-2貝		〃	〃、 14.8cm、ヨコ整形	〃-11	〃 〃 〃	口縁		口端く字状、口縁無文、頚部隆帯区画、下5～6本の沈線文、RL撚糸文、(タテ沈線文)
〃-96	〃-14-混貝		〃	〃、10.3cm、現高3.9cm、ヨコ整形	〃-12	〃 〃 〃		体部	下に5～6本の円文等の沈線文、LR撚糸文
〃-97	〃-14-混土		〃	〃、 12.2cm、現高5.1cm、〃	〃-13	〃 〃 〃	口縁		突起、口縁無文、突起に鰭状隆帯、頚部隆帯区画、下に5～6本の沈線で凹部中心の同心円文・タテ沈線文、LR(タテ沈線文)
〃-98	〃-14-混貝		〃	〃、 8.6cm、ヨコ整形	〃-14	〃 〃 〃	〃	体部	放射状沈線文、LR
〃-99	〃-13-2貝		〃	〃、12.4cm、現高6.0cm、RL撚糸文、ヨコ	〃-15	〃 〃 〃	口縁		口端隆帯、2個の凹穴から下垂放射沈線、LR
〃-100	〃-12-2貝		〃	〃、 12.5cm、現高11.1cm、〃、〃	〃-16	〃 〃 〃	〃		突起、口縁無文、頚部沈線区画、突起へ鰭状沈線、下に刺突文を含む放射沈線文、RL撚糸文
〃-101	〃-14-混貝		〃	〃、11.0cm、現高4.2cm、ヨコ整形	〃-17	〃 〃 〃	〃		外反、口縁無文、頚部沈線区画、頚部凹穴から下に放射沈線文、RL撚糸文
〃-102	〃 〃 〃		〃	〃、 7.6cm、現高6.6cm、ヨコ整形	〃-18	〃 〃 〃	〃		突起、外反、口縁無文、頚部凹穴から円文・放射沈線文、下無文、RL撚糸文、(17・18同一)
〃-103	〃-14-2貝		〃	葉文平底、9.1cm、現高11.4cm、撚糸文、ヨコ	〃-19	〃 〃 〃		体部	沈線文、タテ撚糸文
〃-104	〃-13-2貝		〃	〃、 8.6cm、現高11.4cm、〃、〃	〃-20	〃 〃 〃		〃	磨消と沈線文による卵形沈線文、RL撚糸文

図版番号	出土地区	拓図	特徴	図版番号	出土地区	拓図	特徴 19
52-21	B-1-4混貝	体部	タテ磨消と沈線組合せた文様、LR撚糸文	54-42	B－1－4混	口縁	突起、口端無文、タテ撚糸文
〃-22	〃 〃 〃	〃	頸部に凹穴と長方形の3線の区画、タテ隆帯から3本沈線円弧文、放射状文、RL	〃-43	〃 〃 〃	〃	口端無文、タテ撚糸文
53-23	B－1－4混	口縁	波状、口縁無文、頸部沈線区画、したに連鎖文の倒卵形文、RL、(宮戸Ⅰb)	〃-44	〃 〃 〃	〃	環状突起、口端無文、RL撚糸文、突起裏凹部、無文
〃-24	〃 〃 〃	〃	波状、外反、口縁無文、頸部沈線区画、下倒卵形文放射文、RL撚糸文、(宮戸Ⅰb)	〃-45	〃 〃 〃	底部	無文平底、13.5cm、現高5.4cm、撚糸文・ヨコ
〃-25	〃 〃 〃	〃	口縁無文、頸部沈線区画、下に懸垂文、RL撚糸文、(宮戸Ⅰb)	〃-46	〃 〃 〃	〃	〃、 8.1cm、ヨコ
〃-26	B－1－4混	〃	突起、無文、突起下に円文、内も同じ、(宮戸Ⅰb)	〃-47	〃 〃 〃	〃	〃、8.4cm、現高7.5cm、沈線下垂、RL
〃-27	〃 〃 〃	〃	口端無文、土面に刻目、頸部沈線区画、下に卵形沈線、補修孔、RL撚糸文、(宮戸Ⅰb)	〃-48	〃 〃 〃	〃	〃、 6.8cm、ヨコ
〃-28	〃 〃 〃	〃	突起?、口縁無文、突起下に倒卵形文、LR、(宮戸Ⅰb)	〃-49	B－1－4混	〃	無文平底、10.8cm、現高4.8cm、LR、ヨコ
〃-29	〃 〃 〃	〃	外反、口縁無文、頸部沈線区画、下に円弧状沈線文、撚糸文(宮戸Ⅰb)	〃-50	〃 〃 〃	〃	網代文平底、10.9cm、現高4.0cm、ヨコ
〃-30	〃 〃 〃	〃	波状?、〃、 〃、 RL(宮戸Ⅰb)	55-1	B－2－4混	口縁	波状、外反、口端縄文、帯状入組文、LR
〃-31	〃 〃 〃	〃	突起、突起土面凹穴、口縁無文、頸部沈線区画、ボタン凹部下に沈線円文?、撚糸文、(B-2-4混9と同じ)	〃-2	〃 〃 〃	〃	〃、 〃、 〃、 〃、 〃
〃-32	〃 〃 〃	〃	甕形、外反、口縁無文、頸部沈線区画、下磨消に区画文、内口端肥厚、LR	〃-3	〃 〃 〃	〃	口端縄文、帯縄文入組文、LR
〃-33	〃 〃 〃	〃	貫通孔突起、突起土面に凹部、口端無文、頸部沈線、突起からタテ放射沈線、LR	〃-4	〃 〃 〃	〃	外反、口端縄文、頸部無文、LR
〃-34	〃 〃 〃	〃	突起、土面凹部、ボタン凹部中心に連鎖刺突と磨消文	〃-5	〃 〃 〃	体部	ヨコ円形沈線文、LR
〃-35	〃 〃 〃	〃	突起、外反、口縁無文、頸部隆帯区画、突起凹部、連鎖刺突と磨消の倒卵形文、RL	〃-6	〃 〃 〃	口縁	外反、口縁無文、RL撚糸文
〃-36	〃 〃 〃	〃	口縁無文、頸部沈線区画、下に2ー3本沈線下垂	〃-7	〃 〃 〃	〃	突起、口端無文、頸部沈線、凹部からタテ放射沈線文、RL撚糸文、
〃-37	〃 〃 〃	〃	口縁無文、頸部沈線区画、下に複列の綾絡文	〃-8	〃 〃 〃	体部	頸部隆帯、上沈線区画、タテ隆帯、下沈線のΠ文、円弧文LR
〃-38	〃 〃 〃	〃	37と同じ	〃-9	〃 〃 〃	口縁	突起、突起土面凹部、口縁無文、頸部沈線、2個のボタン状凹部下に円弧文撚糸文、(B-1-4混31と同じ)
54-39	〃 〃 〃	〃	口縁無文、頸部沈線、下に磨消の逆C字C字の連鎖文、RL	〃-10	〃 〃 〃	〃	突起、口端縄文、頸部長方形磨消区画下無文、2個の凹部隆帯突起へ、RL
〃-40	〃 〃 〃	〃	環状突起、口縁無文、頸部沈線、下ヨコ沈線文、RL撚糸文	〃-11	〃 〃 〃	体部	タテ磨消と太い沈線文、タテ撚糸文
〃-41	〃 〃 〃	体部	磨消のコ字状区画文、LR複節	〃-12	〃 〃 〃	口縁	内反、口端無文、頸部に同心円・弧線施文帯、頸部下に区画、LR

図版番号	出土地区	拓図		特徴	図版番号	出土地区	拓図		特徴 20
55-13	B－2－4混		体部	上同心円の凹部から太い放射状沈線文、RL	56-34	B－Ⅱ－4混		体部	タテに磨消と沈線文、RL撚糸文
〃-14	〃 〃 〃		〃	3本組の放射沈線文、LR	〃-35	〃 〃 〃		〃	タテ沈線文、RL撚糸文
〃-15	〃 〃 〃	口縁		波状、外反、頂部同心弧線文、頸部無文、2個の凹部から頂部に隆帯、2個凹部から下放射沈線文、LR	〃-36	〃 〃 〃		〃	〃、 〃
〃-16	〃 〃 〃	〃		波状?、口縁無文、ヨコ縄文帯2条の区画、LR撚糸文	〃-37	〃 〃 〃		〃	タテに磨消と沈線文、RL撚糸文、(34と同じ)
〃-17	〃 〃 〃		体部	刺突文を含む鋸歯状文、ジグザグ沈線文、RL	〃-38	〃 〃-2貝		〃	連鎖刺突文、隆帯囲みY字磨消、RL
〃-18	〃 〃 〃		〃	3本のタテ沈線文、LR	〃-39	〃 〃-4混	口縁		口縁無文、RL撚糸文
〃-19	〃 〃 〃	口縁		波状、口縁無文、頸部沈潜、頂部連鎖文と懸垂文、撚糸文(宮戸Ⅰb)	〃-40	〃 〃 〃	〃		口端無文、〃
〃-20	〃 〃 〃	〃		口端沈線、頸部無文、下弧線文、LR撚糸文	〃-41	〃 〃 〃		底部	網代文平底、8.8cm、ヨコ整形
〃-21	B－Ⅱ－4混	〃		口縁無文、頸部沈線、下放射沈線文	〃-42	〃 〃 〃		〃	無文平底、5.8cm、タテ整形
〃-22	〃 〃 〃	〃		〃、 〃、 円文と放射沈線文	〃-43	〃 〃 〃		〃	〃、 5.6cm、現高3.3cm
〃-23	〃 〃 〃	〃		口縁無文、頸部沈線、2個の凹部から磨消放射沈線、撚糸文	〃-44	〃 〃 〃		〃	葉文平底、10.1cm
〃-24	〃 〃 〃	〃		波状、口縁無文、頸部沈線、下磨消放射沈線文、RL	〃-45	〃 〃 〃		〃	〃、 12.3cm、ヨコ整形
〃-25	〃 〃 〃	〃		口縁無文、頸部沈線、タテ連鎖文、RL	57-1	B－Ⅲ－4混	口縁		波状?、口端縄文、凹穴を持つ帯縄文入組文、LR
56-26	〃 〃 〃	〃		突起、口縁無文、頸部沈線、下C字状磨消、タテ撚糸文	〃-2	〃 〃 〃	〃		口端縄文、凹穴持つ帯縄文入組文、LR
〃-27	〃 〃 〃	〃		内反、口端無文、頸部隆帯と沈線区画、下放射文、撚糸文	〃-3	〃 〃 〃	〃		〃、 〃、 〃
〃-28	〃 〃 〃		体部	ヨコ2本沈線区画?、タテ二重連弧文、LR	〃-4	〃 〃 〃	〃		外反、頸部無文、LR
〃-29	〃 〃 〃		〃	3本沈線の鋸歯文、撚糸文	〃-5	〃 〃 〃	〃		〃、 〃、 〃
〃-30	〃 〃 〃	口縁		口縁無文、頸部刺突列区画、下放射沈線、RL撚糸文	〃-6	〃 〃 〃	〃		〃、 〃、 〃
〃-31	〃 〃 〃	〃		突起、突起へ点列、口縁無文、頸部刺突列区画、RL撚糸文	〃-7	〃 〃 〃	〃		内反、口縁同心円と放射沈線、土面刻目、LR
〃-32	〃 〃 〃	〃		突起2分、口縁無文、頸部刺突列区画、RL撚糸文	〃-8	〃 〃 〃	〃		突起、土面円文、表無文、裏突起に凹部、下ヨコ沈線
〃-33	〃 〃 〃		体部	口縁無文、頸部刺突列区画、下放射沈線、RL撚糸文	〃-9	〃 〃 〃	〃		小突起、表裏円刻文

図版番号	出土地区	拓図		特徴	図版番号	出土地区	拓図		特徴 21
57-10	B－Ⅲ－4混	口縁		口縁無文、頸部沈線、下放射沈線文、タテ撚糸	58-7	B－3土？		体部	外反り、上ヨコ沈線区画、下入組文、LR
〃-11	〃 〃 〃	〃		小突起、口端沈線、表裏円刻文	〃-8	〃 〃		〃	外反、〃、 〃、 〃
〃-12	〃 〃 〃	〃		口縁無文、頸部沈線、下放射沈線、タテ撚糸文	〃-9	〃 〃		〃	外反、ヨコ縄文帯、RL
〃-13	〃 〃 〃	〃		口縁無文、〃、 下円文、放射沈線文、RL撚糸文	〃-10	〃 〃		〃	〃、 上ヨコ沈線、下入組状に沈線文、LR
〃-14	〃 〃 〃	〃		突起、口縁無文、頸部沈線、頂部下に円文放射沈線、RL	〃-11	〃 〃		〃	上縄文帯と磨消交互、下2重沈線区画、LR、(宮Ⅱか)
〃-15	〃 〃 〃	〃		突起、〃、 〃、 放射弧線文、懸垂文、RL	〃-12	〃 〃	口縁		口縁無文、帯縄文区画、下無文帯、補修孔、LR(宮戸Ⅱ)
〃-16	〃 〃 〃	〃		環状突起、〃、 頸部隆帯タテ2本組沈線と磨消U・∩文、タテ沈線文、RL	〃-13	〃 〃	〃		〃、 〃、 LR、(〃)
〃-17	〃 〃 〃		体部	3本放射沈線と弧線文、RL撚糸文	〃-14	〃 〃	〃		〃、 〃、 〃、(〃)
〃-18	〃 〃 〃		〃	連鎖鋸歯文、タテ撚糸文	〃-15	〃 〃	〃		口端無文、ヨコ沈線区画、下S字沈線、タテ撚糸文、(〃)
〃-19	〃 〃 〃		〃	口縁無文、頸部隆帯、ボタン状凹部、下に沈線文、LR	〃-16	〃 〃		体部	ヨコ沈線区画、下にS字沈線、LR、(〃)
〃-20	〃 〃 〃		底部	無文板状圧痕、10.1cm、ヨコ	〃-17	〃 〃		〃	ヨコ沈線とS字連絡沈線、(〃)
〃-21	〃 〃 〃		〃	網代文平底、7.1cm、現高3.9cm、ヨコ	〃-18	〃 〃		〃	〃、 下無文帯、羽状縄文、(〃)
〃-22	〃 〃 〃		〃	無文平底、5.3cm、ヨコ	〃-19	〃 〃	口縁		波状、口縁無文、ヨコ沈線とS字連続沈線、下無文帯、LR(〃)
〃-23	〃 〃 〃		〃	網代文平底、9.9cm、ヨコ	〃-20	〃 〃	〃		口縁無文、頸部沈線、下磨消放射沈線、LR、(〃)
〃-24	〃 〃 〃		〃	菜文平底、13.0cm、現高81cm、RL、ヨコ	〃-21	〃 〃	〃		20と同じ、(宮戸Ⅱ)
58-1	B－3土？		〃	波状、外反、口端縄文、帯縄文入組文LR	〃-22	〃 〃	〃		大波状、口縁無文、頸部沈線、下沈線連弧文と磨消、LR(〃)
〃-2	〃－〃	口縁		波状、口端縄文、帯縄文入組文、LR	〃-23	〃 〃	〃		〃、 〃、 〃下放射沈線、LR
〃-3	〃 〃		体部	ヨコタテ沈線文、RL撚糸文	〃-24	〃 〃	〃		口端無文、頸部5条の縄文帯、下無文帯、LR撚糸文(〃)
〃-4	〃 〃	口縁		突起、外反、RL	〃-25	〃 〃	〃		口縁無文、頸部沈線、下放射状沈線、円分、LR、(〃)
〃-5	〃 〃		体部	外反、上ヨコ沈線区画、下入組文、LR	〃-26	〃 〃		底部	無文平底、13.7cm、ヨコ
〃-6	〃 〃		〃	〃、 〃、 〃	〃-27	〃 〃		〃	菜文平底、7.0cm、現高2.7cm、RL、ヨコ

図版番号	出土地区	拓図		特徴
58-28	B - 3 土 ?		底部	葉文平底、10.2cm、ヨコ
〃-29	〃 〃		〃	〃、 10.4cm、ヨコ
B-3土の遺物は後期宮戸II式である。3土は西壁では最下層のあたる。遺物から3土でなく2土層であろう。3土層とすると、4混土層の遺物より新しくなり、層位が逆転する。				
59-1	B - 不明	口縁		突起、口端縄文、帯縄文入組文、頸部下に区画、LR
〃-2	〃 〃	〃		〃、 〃、 〃、 〃、 〃
〃-3	〃 〃	〃		外反、〃、 〃、 、 〃、
〃-4	〃 〃		体部	上太い沈線楕円形文、中磨消帯、LR
〃-5	〃 〃		〃	胴部区画、上沈線、LR
〃-6	〃 〃		〃	上2本のヨコ沈線、RL撚糸文
〃-7	〃 〃	口縁		外反、口縁縄文、頸部無文、LR
〃-8	B- -4混	〃		小突起、外反、LR
〃-9	〃 〃	〃		〃、 〃、 〃
〃-10	B - 不明	〃		外反、頸部無文、LR
〃-11	〃- -2土	〃		〃、 〃、 〃
〃-12	〃 - 不明	〃		〃、 頸部無文、RL撚糸文
〃-13	〃 〃	〃		突起2分、口縁無文、頸部隆帯区画、ボタン状凹部から隆帯
〃-14	〃 〃	〃		環状突起、突起土面円形凹部、貫通孔2個、突起両側に弧線文3本、凹部から隆帯弧線下垂
〃-15	〃 〃	〃		ｺﾌﾞｼ状突起、貫通孔、頸部沈線区画、下放射沈線、LR撚糸文
60-16	B- -2混	〃		外反、口縁無文、貫通孔、頸部沈線、下倒卵形文、RL撚糸文
〃-17	〃 - 不明	〃		環状突起か、口縁無文、連鎖沈線と放射状磨消、RL、(宮戸Ⅰb)
〃-18	〃 〃		体部	ヨコ沈線、放射状磨消、LR
60-19	B- -4混	口縁		突起、口縁無文、タテ沈線間に綾絡文、RL
〃-20	B - 不明		体部	磨消放射文、タテ沈線、LR撚糸文
〃-21	〃 〃		〃	沈線弧線文、RL撚糸文
〃-22	〃 〃		底部	綱代文平底、12.3cm、現高6.3cm、LR、ヨコ
〃-23	〃 〃		〃	無文平底、9.5cm、現高6.9cm、LR、ヨコ
〃-24	〃 〃		〃	葉文平底、12.4cm、現高9.9cm、RL、隆帯区画
〃-25	〃 〃		〃	〃、 6.7cm、ヨコ
61-26	〃 〃		体部	タテ太い沈線、重弧文放射文、LR
〃-27	〃 〃		〃	タテ沈線、弧線文・放射文、RL
〃-28	〃 〃		〃	タテ5本沈線、RL撚糸文、
〃-29	〃 〃		〃	タテ沈線文、弧線文、LR、
〃-30	〃 〃		〃	タテ太い沈線、磨消文、LR
〃-31	B- -2混	口縁		波状、口縁無文、頸部縄文帯、下磨消入組、LR、(宮戸II)
〃-32	〃 - 〃	〃		口縁無文、頸部沈線、下磨消連続弧線文、LR、(B-3土、20-21と同じ)(〃)
〃-33	〃 - 〃	〃		口縁無文、頸部6条沈線、S字連絡沈線、下無文、LR、(〃)
〃-34	〃 -2貝	〃		波状、口端無文5条縄文帯、頸部入組文、下6条沈線区画LR、(〃、実測図)
65-1	C - 拡	〃		口端無文、太い沈線区画、土面刺突列、裏面口端沈線、LR
〃-2	〃 〃	〃		1と同じ
〃-3	C	〃		外反、1と同じ
〃-4	C - 拡	〃		口端無文、刺突列、沈線区画、土面刺突列、RL
〃-5	〃 〃	〃		〃、 2本沈線区画、土面細い刻目、裏2本沈線

図版番号	出土地区	拓　図	特　　徴	図版番号	出土地区	拓　図	特　　徴　23
65-6	C - 拡	口縁	口端刻目、下沈線区画、土面に沈線、LR	66-27	C -	口縁	土面刻目、口端沈線、頸部入組文、裏口端段落
〃-7	〃　〃	〃	外反、突起、突起沈線、頸部2本沈線、裏突起沈線、沈線	〃-28	C - 拡	〃	口端縄文、頸部2本沈線、下帯縄文・ヨコ刺突列、RL
〃-8	D-表土下層	〃	〃、　土面刻目、頸部2本沈線、裏沈線、LR	〃-29	〃　〃	〃	口縁刻み・無文、三叉状文、下沈線区画
〃-9	D -	〃	小突起、口端無文、沈線区画、下工字文と区画、裏沈線	〃-30	C -	〃	小波状、口縁無文、頸部玉抱き三叉文、下沈線区画、LR
65-10	C - 拡	〃	口端沈線、下工字文、下沈線区画、無文、裏沈線	〃-31	C - 拡	〃	口縁三叉文、下沈線入組
〃-11	〃　〃	〃	10と同じ	〃-32	〃　〃	〃	突起、口縁無文、突起下隆帯、下鋸歯状沈線
〃-12	〃　〃	〃	口端沈線、下工字文、沈線区画、無文、裏沈線	〃-33	C - 拡	〃	口縁無文、連鎖刺突弧状隆帯
〃-13	〃　〃	〃	口端無文、頸部3本沈線、凹部あり下無文	〃-34	C -	〃	突起、口縁無文、ボタン状凹部結ぶ弧状隆帯、頸部隆帯刺突列 タテ撚糸文
〃-14	D	〃	〃、　沈線区画、下工字文、区画、無文、裏沈線	〃-35	C - 拡	〃	小突起、口縁無文、頸部刺突隆帯、突起へ鰭状隆帯、RL撚糸
〃-15	C - 拡	〃	〃、　沈線4条区画、下無文、裏沈線	〃-36	〃　〃	〃	口縁無文、頸部隆帯、下磨消三角状区画、タテ撚糸文
〃-16	〃　〃	〃	2分突起、口端沈線、外反、頸部工字文、下区画沈線、LR、裏沈線	〃-37	〃　〃	〃	小突起、口縁無文、頸部刺突隆帯、突起鰭状隆帯、LR撚糸文
〃-17	D -	〃	突起、口端沈線、突起山形沈線、下3条沈線区画、LR、裏沈線、	〃-38	〃　〃	〃	〃、〃、〃　〃、タテ撚糸文
〃-18	C - 拡	〃	突起、土面凹部と沈線、口端無文、下工字文無文、裏沈線	〃-39	〃　〃	〃	〃、　〃、　〃　　〃、RL撚糸文
〃-19	〃　〃	〃	土面細い刻目、口端沈線、頸部突起持つ縄文帯、下沈線区画、LR、裏沈線	〃-40	C -	〃	〃、　〃、　〃　　〃、　RL
〃-20	D-表土下層	〃	2分突起、土面凹部と沈線、口端沈線、下工字文、LR、裏沈線	〃-41	C - 拡	〃	〃、〃、〃　〃、　RL撚糸文
〃-21	C - 拡	〃	口端無文、下入組沈線と沈線区画、裏沈線	〃-42	〃　〃	〃	〃、〃、〃　〃、　タテ撚糸文
〃-22	D-表土下層	〃	口端無文、頸部隆帯8本下沈線区画	67-43	〃　〃	〃	口端撚糸タテ刺突痕、下連弧文
〃-23	C - 拡	〃	内反、口縁無文、突起に鰭状沈線、頸部沈線区画、LR	〃-44	〃　〃	〃	口縁無文、頸部刺突隆帯、逆L字磨消区画、下刺突隆帯区画、タテ撚糸文
〃-24	〃　〃	〃	外反、口縁無文、LR、(時期下るか)	〃-45	〃　〃	〃	小突起、口縁無文、頸部隆帯、突起へ逆L字磨消、RL複節
66-25	〃　〃	〃	口端沈線、頸部縄文帯、土面沈線、裏口端段落、LR	〃-46	〃　〃	〃	口縁無文、頸部刺突隆帯、逆L字磨消、撚糸文
〃-26	〃　〃	〃	〃、　〃、　下沈線区画、土面沈線、裏段落	〃-47	〃　〃	〃	小突起、口縁無文、頸部刺突隆帯、L字(U)磨消、撚糸文

図版番号	出土地区	拓図	特徴
67-48	C - 拡	口縁	口縁無文、口縁櫛状隆帯、頸部隆帯、下隆帯区画、RL
〃-49	〃 〃	〃	小突起、口縁無文、頸部下刺突隆帯、突起から連鎖隆帯下垂、タテ撚糸文
〃-50	〃 〃	〃	突起、口縁無文、頸部沈線区画、突起隆帯から逆L字磨消区画、撚糸文
〃-51	〃 〃	体部	胴部2条隆帯区画、櫛状隆帯で連絡、撚糸文
〃-52	〃 〃	〃	胴部隆帯区画、隆帯と磨消の入組、LR複節

図版番号	出土地区	種別	特徴
68-1	A-14-2貝	不明土製品	口5.13cm、底5.06cm、高1.16cm、湾曲し上面4孔、右上欠、上面ヨコ整形
〃-2	〃 -11- 混	〃	口5.3cm、高1.3～1.2cm、円盤状、間隔狭い4孔、上面ヨコ整形
〃-3	〃-1-1貝下	臼形耳飾	口2.3cm、底3.7cm、高2.3cm、右側欠中央貫通孔、2重の刺突列
〃-4	表採	小玉	口2.6cm、高2.45cm、上欠、中央に貫通孔、上9本刻線、ヨコに1本、タテ4本刻線
〃-5	D -	小形土器	口7.9cm、底5.7cm、高4.0cm、台付、工字文
〃-6	A-11-混貝	粘土塊	長6.3cm、幅3.9cm、厚1.9～1.15cm
〃-7	B-Ⅲ-1混	土偶	長7.8cm、幅6.7cm、厚1.9cm、頭部・両腕・左脚欠、表中心刺突列、妊娠状腹部
〃-8	A-3-貝層	土偶	長4.8cm、幅4.44cm、厚1.3cm、上下欠損、表3列刺突列、裏刺突痕
69-1	A-2-貝直上	土器片製円板	縦3.72cm、横4.06cm、重19g、円形
〃-2	A - 4 - 混	〃	縦4.02cm、横4.05cm、重20g、円形
〃-3	A-456-土層	〃	縦4.12cm、横4.27cm、重15g、円形
〃-4	〃-8-混貝	〃	縦3.67cm、横3.47cm、重17g、四辺形
〃-5	〃 - 9 -	〃	縦3.74cm、横4.18cm、重19g、円形
〃-6	〃-9-混貝	〃	縦4.7cm、横5.27cm、重30g、三角形
〃-7	〃-10-混貝	〃	縦4.8cm、横4.86cm、重24g、円形

図版番号	出土地区	種別	特徴 24
69-8	A-11-混貝	土器片製円板	縦2.7cm、横2.65cm、重8g、円形
〃-9	〃 〃 〃	〃	縦3.71cm、横4.6cm、重19g、楕円形
〃-10	〃 〃-貝層	〃	縦2.87cm、横3.02cm、重10g、台形
〃-11	〃-12-貝層	〃	縦3.24cm、横3.2cm、重13g、三角形
〃-12	〃-12-混貝	〃	縦4.36cm、横4.36cm、重21g、円形
〃-13	〃-13-貝層	〃	縦3.78cm、横5.16cm、重21g、楕円形
〃-14	〃-13-土層	〃	縦3.6cm、横3.38cm、重10g、円形
〃-15	〃 〃-貝層	〃	縦3.92cm、横4.05cm、重20g、楕円形
〃-16	〃-14-2貝	〃	縦4.12cm、横5.5cm、重28g、楕円形
〃-17	C - 拡	〃	縦3.24cm、横3.41cm、重11g、円形
〃-18	〃 〃	〃	縦4.09cm、横4.46cm、重22g、四辺形
〃-19	D-1-混貝	〃	縦3.2cm、横3.33cm、重11g、円形
〃-20	〃- 土層	〃	縦5.08cm、横5.64cm、重31g、円形
〃-21	D-1-混貝	〃	縦4.8cm、横4.58cm、重21g、〃
〃-22	D -	〃	縦3.8cm、横3.82cm、重14g、〃
〃-23	B-Ⅱ-4混貝	〃	縦3.94cm、横4.5cm、重16g、三角形
〃-24	〃 〃 〃	〃	縦4.29cm、横3.8cm、重17g、〃
70-25	〃- 表土	〃	縦3.96cm、横4.33cm、重19g、円形
〃-26	〃-Ⅱ-4混	〃	縦3.32cm、横3.64cm、重19g、〃
〃-27	A-4-土層	〃	縦5.49cm、横5.66cm、重39g、四辺形
〃-28	〃-10-貝層	〃	縦4.81cm、横5.36cm、重30g、〃

図版番号	出土地区	種別	特　　徴
70-29	A-10-土層上	土器片製円板	縦5.13cm、横6.12cm、重38g、〃
〃-30	〃-11-混貝	〃	縦4.82cm、横3.78cm、重22g、台形
〃-31	〃-〃-貝層中	〃	縦6.48cm、横6.1cm、重50g、円形(底)
〃-32	〃-12-貝層	〃	縦3.24cm、横3.2cm、重13g、三角形
〃-33	〃-2-1貝下	〃	縦5.27cm、横4.93cm、重31g、円形
〃-34	C　-　拡	〃	縦2.57cm、横2.54cm、重7g、〃
〃-35	A-7-2混土	〃	縦3.4cm、横3.22cm、重9g、円形
〃-36	C - 拡	〃	縦4.3cm、横4.29cm、重19g、〃
〃-37	A-9-1混貝上	〃	縦4.0cm、横5.05cm、重32g、円(楕円)底
〃-38	〃-13-混貝	〃	縦3.39cm、横3.71cm、重12g、円形(台)
〃-39	〃-10-混貝	〃	縦3.66cm、横4.68cm、重19g、楕円形
〃-40	〃-11-混貝	〃	縦4.07cm、横3.31cm、重12g、〃
〃-41	〃-12-混貝	〃	縦4.98cm、横4.2cm、重30g、〃
〃-42	〃-14-混貝	〃	縦3.6cm、横4.05cm、重14g、円形(四辺形)
〃-43	〃　〃-2貝	〃	縦4.06cm、横3.84cm、重18g、円形
〃-44	〃-14-混貝	〃	縦5.1cm, 横4.93cm、重40g、四辺形
〃-45	〃-14-土層	〃	縦4.72cm、横4.72cm、重39g、〃
71-1	A-4-混貝	石器-石鏃	長3.1cm、幅1.57cm、厚0.34cm、凸基
〃-2	〃-3-1貝下	〃	長3.14cm、幅1.28cm、厚0.38cm、先端欠凸基
〃-3	C-6-表土	〃	長2.5cm、幅1.16cm、厚0.21cm、基部欠凸基
〃-4	A-3-貝?	〃	長2.4cm、幅1.17cm、厚0.4cm、凸基
71-5	A-1-表土	石器-石鏃	長2.6cm、幅1.56cm、厚0.34cm、基部欠凸基
〃-6	C-7-表土	〃	長2.62cm、幅1.23cm、厚0.4cm、先端欠凸基
〃-7	A-12-貝?	〃	長2.4cm、幅1.15cm、厚0.25cm、凸基
〃-8	〃-13-貝	〃	長2.15cm、幅1.3cm、厚0.4cm、先端欠凸基
〃-9	C-1-表土	〃	長2.84cm、幅1.6cm、厚0.4cm、凸基
〃-10	〃-3-黒土	〃	長2.2cm、幅1.03cm、厚0.47cm、先端基部欠凸基
71-11	表　　採	〃	長2.17cm、幅1.1cm、厚0.34cm、基部欠凸基
〃-12	〃	〃	長2.02cm、幅1.2cm、厚0.3cm、凸基
〃-13	A-7-貝層	〃	長1.98cm、幅1.22cm、厚0.44cm、凸基
〃-14	C-ﾋﾟｯﾄ	〃	長2.23cm、幅0.95cm、厚0.51cm、凸基
〃-15	〃-2	〃	長3.01cm、幅1.47cm、厚0.47cm、〃
〃-16	A-9-	〃	長2.56cm、幅1.22cm、厚0.58cm、〃
〃-17	C-拡	〃	長3.0cm、幅1.35cm、厚0.6cm、〃
〃-18	D-6-	〃	長2.2cm、幅1.02cm、厚0.4cm、〃
〃-19	A-1-	〃	長2.01cm、幅1.51cm、厚0.4cm、〃
〃-20	C-6-表土	〃	長3.9cm、幅0.95cm、厚0.53cm、棒状基
〃-21	C-3-	〃	長4.5cm、幅1.08cm、厚0.82cm、棒状基
〃-22	B-Ⅱ-2土	〃	長3.8cm、幅1.81cm、厚0.89cm、凸基
〃-23	A-2-混貝	〃	長3.8cm、幅1.65cm、厚0.61cm、凸基
〃-24	C-拡-人骨辺	〃	長3.31〃cm、幅2.51cm、厚0.86cm、丸基
〃-25	A-11-混貝	〃	長2.98cm、幅1.45cm、厚0.46cm、丸基

図版番号	出土地区	種別	特　　徴	図版番号	出土地区	種別	特　　徴　26
71-26	A-13-混貝	石器-石鏃	長2.8cm、幅1.45cm、厚0.4cm、丸基	71-47	A-1-黒土	石器-石鏃	長1.54cm、幅1.6cm、厚0.27cm、先端基欠凹基
〃-27	C - 拡	〃	長2.98cm、幅1.34cm、厚0.83cm、棒か凸か	〃-48	B-Ⅱ-4混	〃	長2.41cm、幅1.81cm、厚0.59cm、凹基
〃-28	A-10-混土	〃	長2.02cm、幅1.47cm、厚0.4cm、凹基	〃-49	A - 4 - 貝	〃	長1.24cm、幅1.89cm、厚0.56cm、先欠凹基、砂岩製
〃-29	C-2-黒土	〃	長1.71cm、幅1.59cm、厚0.39cm、凹基?	〃-50	〃-15-混貝	石器-石錐	長4.4cm、幅1.5cm、厚0.42cm
〃-30	B-Ⅰ-4混	〃	長2.78cm、幅2.0cm、厚0.51cm、凹基	〃-51	〃-2-1貝下	〃	長3.85cm、幅3.85cm、厚1.09cm、先端欠
〃-31	A-12-貝	〃	長1.66cm、幅1.19cm、厚0.3cm、凹基	〃-52	C-3-表土	〃	長2.1cm、幅2.93cm、厚0.67cm、〃
〃-32	〃-13-混貝	〃	長1.43cm、幅1.22cm、厚0.31cm、凹基	〃-53	A-11-貝下	〃	長4.0cm、幅1.4cm、厚0.52cm
〃-33	〃-3-	〃	長1.24cm、幅1.71cm、厚0.25cm、〃	〃-54	B-　-貝?	〃	長3.2cm、幅0.71cm、厚0.47cm、上部欠
〃-34	〃-15-貝	〃	長1.61cm、幅1.64cm、厚0.32cm、〃	〃-55	A-7-黒土	〃	長3.19cm、幅0.7cm、厚0.47cm、上部欠
〃-35	〃-11-混貝	〃	長2.0cm、幅1.87cm、厚0.25cm、〃	〃-56	B-Ⅲ-1混	〃	長2.9cm、幅1.52cm、厚0.66cm、先端欠
〃-36	B-Ⅰ-4混	〃	長1.8cm、幅1.4cm、厚0.3cm、凹基	72-1	C-4-表土	石器-石匙	長3.93cm、幅6.7cm、厚1.21cm、(横形)
〃-37	A-5-表土	〃	長1.94cm、幅1.14cm、厚0.19cm、凹基	〃-2	B-Ⅱ-4混	〃	長4.1cm、幅6.21cm、厚0.93cm、〃
〃-38	C - 拡	〃	長2.02cm、幅1.53cm、厚0.27cm、〃	〃-3	A-15-混貝	〃	長5.6cm、幅1.59cm、厚0.4cm、(タテ形)
〃-39	〃　〃	〃	長1.65cm、幅1.7cm、厚0.33cm、先端欠凹基	〃-4	〃-11-混貝	〃	長6.9cm、幅2.82cm、厚0.6cm、〃
〃-40	〃　〃	〃	長1.74cm、幅1.45cm、厚0.26cm、凹基、	〃-5	〃-12-混貝	〃	長5.16cm、幅2.14cm、厚0.52cm、〃
〃-41	A - 8 - 貝	〃	長1.84cm、幅1.58cm、厚0.29cm、〃	〃-6	表　　採	〃	長7.52cm、幅2.27cm、厚0.55cm、〃
〃-42	〃 - 2 - 貝	〃	長2.7cm、幅1.96cm、厚0.26cm、〃	〃-7	A-4-貝層	〃	長7.48cm、幅2.8cm、厚0.8cm、〃
〃-43	〃 - 1 - 貝	〃	長2.18cm、幅1.85cm、厚0.28cm、〃	〃-8	B-Ⅲ-4混	〃	長5.4cm、幅2.1cm、厚0.5cm、タテ
〃-44	B-Ⅰ-4混	〃	長1.76cm、幅1.34cm、厚0.28cm、基左欠凹基	〃-9	A-10-混貝	〃	長6.4cm、幅2.54cm、厚0.73cm、〃
〃-45	C - 拡	〃	長1.62cm、幅1.42cm、厚0.49cm、〃 長1.16cm、幅1.26cm、厚0.31cm、先端欠凹基	〃-10	C-拡-人骨辺	〃	長6.82cm、幅2.32cm、厚1.1cm、〃
〃-46	〃　〃	〃	長1.16cm、幅1.26cm、厚0.31cm、〃	〃-11	A-4-混土	〃	長5.35cm、幅2.4cm、厚0.94cm、〃

図版番号	出土地区	種別	特　　徴	図版番号	出土地区	種別	特　　徴　27
72-12	〃-4-混貝	石器-剥片石器	長6.22cm、幅4.25cm、厚0.99cm、上部欠	73-15	A-7-貝層	石器-石棒	長9.5cm、幅3.14cm、厚1.5cm、下端欠
〃-13	〃-7-貝層	〃	長8.5cm、幅2.0cm、厚0.52cm	〃-16	C-8-	〃	長11.4cm、幅4.18cm、厚3.94cm、上下欠、錐形痕
〃-14	A-10-	〃	長5.4cm、幅2.7cm、厚0.98cm	74-17	A-3-1貝層	石器-砥石	長23.4cm、幅16.75cm、厚3.0一0.18cm、砂岩、タテ擦込み中央部に穴
〃-15	C　-　拡	〃	長5.2cm、幅2.6cm、厚0.81cm	〃-18	表　　採	石器-打石器	長12.0cm、幅7.77cm、厚6.8cm、上下打痕変形、両側面打痕と擦痕
〃-16	A-2-貝	〃	長4.8cm、幅2.76cm、厚1.2cm、右欠	〃-19	A-9-貝層	〃	長5.63cm、幅2.5cm、厚2.5cm、上下打痕変形
〃-17	〃-1-黒土	〃	長2.69cm、幅2.21cm、厚0.9cm	〃-20	A-2-1貝下	石器-凹石	長11.9cm、幅7.65cm、厚4.4一3.95cm、上下部打痕変形、中央に2個の凹穴
〃-18	〃-3-黒土	〃	長3.81cm、幅2.79cm、厚1.12cm	〃-21	B-Ⅲ-1混土	〃	長11.09cm、幅7.5cm、厚4.27cm、上下部打痕、下部焼けか、両面中央黒色
73-1	A-14-貝層	石器-石斧	長15.1cm、幅5.8cm、厚2.9cm	〃-22	D-1-混貝	石器-礫石器	長9.52cm、幅5.5cm、厚1.92一2.09cm、円盤状(小判形)
〃-2	C-5-表土	〃	長12.0cm、幅4.82cm、厚2.6cm、先端欠	75-23	A-3-2混	〃	長5.15cm、幅4.24cm、厚2.49cm、両平坦面擦痕
〃-3	A-11-混貝	〃	長9.22cm、幅5.44cm、厚2.4cm、上部欠	〃-24	〃-8-1混	〃	長5.02cm、幅4.28cm、厚3.6cm、両側面・先端擦痕と打痕
〃-4	〃-14-2貝	〃	長7.51cm、幅2.36cm、厚0.5cm	〃-25	〃-〃-1貝下	〃	長8.47cm、幅5.44cm、厚1.26一1.1cm
〃-5	〃-7-黒土	〃	長8.2cm、幅4.38cm、厚2.36cm、上部欠	〃-26	〃-3-2混	〃	長5.2cm、幅4.3cm、厚2.58cm、平坦面あり
〃-6	〃-13-混土	〃	長6.71cm、幅4.5cm、厚2.05cm、〃	〃-27	〃-4-貝層	〃	長6.7cm、幅5.09cm、厚0.93cm、下部欠、
〃-7	B-Ⅲ-4混	〃	長6.73cm、幅4.7cm、厚2.52cm、上部欠凹部打痕	〃-28	〃-3-1貝下	〃	長9.58cm、幅7.0cm、厚2.65cm、下部欠、上部両側面打痕
〃-8	A-2-2貝	〃	長5.0cm、幅4.2cm、厚2.51cm、先端欠上部打痕	〃-29	〃-11-1号人骨辺	〃	長9.55cm、幅4.7cm、厚1.18cm、平坦・小判形、両側整形、1号人骨東1m鎮石か
〃-9	C-　-貝層	〃	長5.3cm、幅4.0cm、厚2.61cm、先端欠上端打痕	〃-30	〃-3-黒土	凝灰岩製	長6.2cm、幅3.16cm、厚0.8cm、中央凹部、舟底状
〃-10	B-1-3土層	〃	長3.75cm、幅4.1cm、厚2.1cm、先端欠	〃-31	B-Ⅲ-4混	〃-垂飾具	長10.33cm、幅3.6cm、厚2.05cm、上部貫通孔、刻線、擦痕
〃-11	A-2-混土	〃	長3.2cm、幅2.9cm、厚2.11cm、先端欠	〃-32	B-	〃	長5.62cm、幅3.82cm、厚1.92cm、下部欠、上部貫通孔
〃-12	C-　-貝	〃	長5.4cm、幅4.0cm、厚2.66cm、先端欠上端打痕	〃-33	〃-Ⅱ-4混	〃-凹石	長6.46cm、幅5.8cm、厚1.9一1.65cm上部欠、上面中央打痕の凹部、両面整形痕
〃-13	A-1-黒土	〃	長4.04cm、幅2.42cm、厚1.07cm、上部欠、擦切	〃-34	A-2-1貝下	〃	長11.05cm、幅6.81cm、厚3.32cm、下部欠、左側面ﾊ状の削り痕、約2mm幅
〃-14	B-Ⅲ-3混	〃	長6.4cm、幅3.9cm、厚2.35cm、先端欠	〃-35	〃-2-1貝下	〃	長3.52cm、幅3.42cm、厚0.78cm、下部欠、下部に凹部

図版番号	出土地区	種別	特　　徴	図版番号	出土地区	種別	特　　徴　28
75-36	A-13-貝層	凝灰岩製-凹石	長7.02cm、幅6.35cm、厚1.76一0.63cm、中央部凹部、舟底	77-13	A-　-表土	骨角製品-釣針	長3.82cm、幅1.5cm、厚0.3cm、鉤なし、完形
〃-37	C-拡-2号人骨	垂飾具-小玉	①長1.0cm、幅1.1cm、厚0.6cm、②長0,93cm、幅0.9cm、厚0.5一0.7cm、2号人骨胸部出土	〃-14	A-13-混貝	〃	長4.3cm、幅1.55cm、厚0.3一0.25cm、完形
76-38	C-拡-2号人骨付近	〃	長6.0cm、幅3.73cm、厚1.55cm、不明の線刻、裏面削痕、平板状	〃-15	〃-7-混貝	〃	長4.77cm、幅?、厚0.62cm、ちもと・鉤欠
〃-39	A-13-2貝	〃	長8.27cm、幅8.55cm、厚1.46cm、不明線刻、裏面削痕、平板状	〃-16	表　　採	〃	長4.4cm、幅1.5cm、厚0.45cm、鉤欠
〃-40	C　-　拡	〃	長6.06cm、幅3.0cm、厚071cm、不明線刻、裏面削痕、平板状	〃-17	A-1-1貝下★	〃　(混貝)	長7.3cm、幅1.7cm、厚0.6cm、ちもと・鉤欠
〃-41	A-2-貝層	〃	長4.35cm、幅6.44cm、厚1.45cm、不明線刻、平板状、下部欠	〃-18	〃-4-混貝	〃	長4.76cm、幅1.7cm、厚0.66cm、〃
〃-42	〃-〃-貝層下	〃	長6.32cm、幅4.2cm、厚1.28cm、平板状、右側欠	〃-19	〃-2-混貝	〃	長4.65cm、幅?、厚1.3一0.4cm、〃
〃-43	〃-1-貝下	〃	長5.36cm、幅4.34cm、厚2.18cm、上部欠	〃-20	〃-4-混貝	〃	長6.7cm、幅?、厚0.52cm、ﾁﾓﾄ、鉤欠
〃-44	〃-2-貝層下	〃	長5.48cm、幅3.46cm、厚2.18cm、上部欠か	〃-21	D-1-貝層	〃	長4.3cm、幅?、厚0.77一0.8cm、ﾁﾓﾄ鉤欠
77-1	B-Ⅱ-2土	骨角製品-釣針	長6.6cm、幅3.79cm、厚1.02cm、外鉤、完形	〃-22	A-2-2貝	〃	長3.4cm、幅?、厚0.5cm、ﾁﾓﾄ・鉤欠
〃-2	A-4-混貝	〃	長8.1cm、幅2.2cm、厚0.5cm、鉤欠	〃-23	〃-4-貝層	〃	長2.42cm、幅?、厚0.62cm、ﾄﾓﾄ・鉤欠
〃-3	〃-13-黒土	〃	長7.8cm、幅2.0cm、厚0.56cm、〃	〃-24	C-拡	〃	長4.5cm、幅1.81cm、厚0.62cm、錨形、左鉤欠、上部貫通孔
〃-4	〃-2-貝層下	〃	長7.75cm、幅1.4cm、厚0.55一0.5cm、鉤欠	〃-25	〃-2-黒土	〃	長5.0cm、幅1.76cm、厚0.7一0.5cm、錨片方、基部アスファルト、上部貫通孔
〃-5	〃-8-貝層	〃	長6.62cm、幅2.5cm、厚0.6cm、鉤欠、	〃-26	B-Ⅱ-2貝	釣具	長5.9cm、幅5.52cm、厚2.0一0.75cm、ﾁﾓﾄ部分欠、鉤部切込み、未製品か
〃-6	〃-7-混土	〃	長6.9cm、幅1.3cm、厚0.5一0.4cm、鉤欠	〃-27	〃　〃-2土層	〃	長9.6cm、幅2.2cm、厚1.6cm、先端部欠、
〃-7	〃-12-混貝	〃	長5.66cm、幅2.0cm、厚0.59cm、鉤欠	78-28	A-4-混貝	釣針未製品	長7.6cm、幅2.6cm、厚0.7一0.5cm
〃-8	〃-8-混貝	〃	長5.2cm、幅?、厚0.5cm、鉤欠	〃-29	〃-2-黒土	〃	長5.5cm、幅1.88cm、厚0.52cm、上部左側欠、平板状中央部を削る
〃-9	〃-2-1貝中★	〃　(混貝)	長6.2cm、幅?、厚1.1一0.68cm、鉤欠	〃-30	B-Ⅱ-2土層	〃	長7.75cm、幅?、厚0.6cm、先端欠
〃-10	〃-13-貝層中	〃	長5.5cm、幅?、厚0.59一0.48cm、鉤欠	〃-31	A-4-混貝	〃	長3.1cm、幅1.5cm、厚0.2cm、上部欠
〃-11	〃-2-1貝下★	〃　(混貝)	長5.12cm、幅?、厚0.46一0.43cm、鉤欠	〃-32	〃-8-貝(上)	古式離頭銛	長4.71cm、幅1.97cm、厚0.4cm、右脚欠、開脚上に貫通孔
〃-12	〃-3-1貝	〃	長3.7cm、幅1.1cm、厚0.4一0.22cm、鉤なし、完形、	〃-33	〃-8-混土	〃	長5.7cm、幅2.3cm、厚0.43cm、先端・右脚欠

図版番号	出土地区	種別	特　　徴	図版番号	出土地区	種別	特　　徴　29
78-34	A-15-貝層	古式離頭銛	長6.7cm、幅2.25cm、厚0.4cm、右脚欠	78-55	A-14-2貝	骨鏃	長5.12cm、幅0.61cm、厚0.32cm、〃
〃-35	B-Ⅲ-2混	〃	長9.35cm、幅2.2cm、厚0.8一0.6cm、完形	〃-56	〃-10-混貝	〃	長2.9cm、幅0.62cm、厚0.48cm、アスファルト
〃-36	〃-Ⅱ-2土	〃	長4.22cm、幅2.5cm、厚0.7cm、上下端欠、鉤段違いに左右1個	〃-57	〃-15-	〃	長4.3cm、幅0.62cm、厚0.5cm、〃
〃-37	〃-　-黒土	離頭銛燕尾	長4.5cm、幅?、厚?、上端·左側欠損	〃-58	〃-10-混貝	〃	長3.36cm、幅0.78cm、厚0.56cm
〃-38	A-15-	〃	長6.4cm、幅1.2cm、厚0.56一0.5cm、右破損、中間に貫通孔	〃-59	B-Ⅰ-4混	〃	長5.05cm、幅0.61cm、厚0.5cm、先端欠
〃-39	〃-14-貝層	〃	長6.0cm、幅1.0cm、厚0.5cm、中間右欠損、中間に貫通孔	〃-60	A-14-混貝	〃	長4.4cm、幅0.85cm、厚0.6cm、下端欠
78-40	B-Ⅲ-2混	〃	長5.72cm、幅2.06cm、厚0.7一0.52cm、左右鉤、上鉤の下に貫通孔、鳥が飛行する形	79-61	C-拡	棒状角器	長16.18cm、幅0.9cm、厚0.8cm、完形
〃-41	〃　〃　〃	〃	長5.9cm、幅1.31cm、厚0.7一0.6cm、左右鉤、下鉤位置に貫通孔、飛行形	〃-62	A-13-貝層	〃	長12.25cm、幅0.9一0.8cm、厚0.88cm下端欠
〃-42	〃　〃-1貝	燕尾形未製品	長3.6cm、幅1.2cm、厚0.82cm、中間より下切込	〃-63	〃-14-	〃	長11.84cm、幅1.02一0.8cm、厚0.87cm下端欠
〃-43	A-13-混貝	単純刺突具 銛	長8.2cm、幅1.11cm、厚0.76cm、屈折部アスファルト	〃-64	表　　採	〃	長3.5cm、幅0.77cm、厚0.6cm、下端欠
〃-44	〃-3-	〃	長9.3cm、幅0.8cm、厚0.68cm	〃-65	A-11-1貝下	〃	長5.2cm、幅0.86cm、厚0.78cm、下端欠
〃-45	B-Ⅲ-2土	〃	長11.1cm、幅0.72cm、厚0.6cm、基部アスファルト	〃-66	〃-14-混貝	〃	長10.0cm、幅0.7一0.67cm、厚0.6cm、完形
〃-46	C-拡	アカエイ尾刺	長7.1cm、幅0.6cm、厚0.2cm、先端欠	〃-67	〃-11-	(混貝)〃	長5.85cm、幅0.8一0.7cm、厚0.7cm、下端欠
〃-47	A-1-1貝下	刺突具	長7.4cm、幅0.9cm、厚0.6cm、上部欠	〃-68	〃-12-貝層下土層	(〃)〃	長2.85cm、幅0.84cm、厚0.6cm、下端欠
〃-48	〃-3-黒色	〃	長7.88cm、幅0.99cm、厚0.4cm、上部欠	〃-68'	〃-3-1貝★	〃	長4.2cm、幅0.8cm、厚0.48cm、下部欠
〃-49	〃-4-混土	〃	長7.46cm、幅0.7cm、厚0.5cm、上部欠	〃-69	〃-1-1貝下★	〃	長6.1cm、幅1.08cm、厚0.9cm、上部欠
〃-50	B-Ⅰ-4混	〃	長8.9cm、幅1.06cm、厚0.6cm、上部欠、	〃-70	〃-13-貝層中	〃	長8.0cm、幅0.9cm、厚0.7cm、上部欠
〃-51	A-1-黒土	〃	長7.9cm、幅0.88cm、厚0.4cm、〃	〃-71	〃-2-1貝	骨針	長17.2cm、幅1.58一0.5cm、厚0.6一0.4cm、先端欠
〃-52	〃-2-1貝下	〃	長6.13cm、幅0.69cm、厚0.5cm、〃	〃-72	B-Ⅲ-土層	〃	長14.25cm、幅1.0cm、厚0.42一0.1cm上部欠、鳥骨製
〃-53	B-Ⅱ-2土	〃	長9.4cm、幅1.15cm、厚0.6cm、上部·先端欠	〃-73	A-8-1貝	〃	長9.48cm、幅1.01一0.52cm、厚0.6cm
〃-54	A-14-2貝	〃	長6.0cm、幅0.67cm、厚0.54cm、上部欠	〃-74	〃-15-貝層中	〃	長8.33cm、幅1.0一0.5cm、厚0.7一0.4cm、上部欠

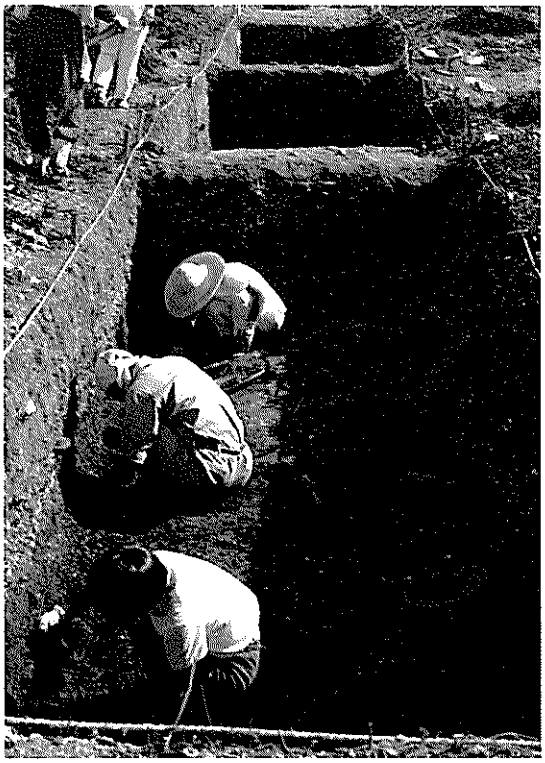
図版番号	出土地区	種別	特　　徴
79-75	C－拡	骨針	長4.9cm、幅0.96cm、厚0.5cm、上部欠
〃-76	A－3－1貝	〃？	長5.35cm、幅1.05ー0.63cm、厚0.48cm、上部欠
〃-77	〃－4－貝層	〃	長4.93cm、幅0.96ー0.7cm、厚0.6cm、上欠
〃 78	〃－4－混貝	〃	長19.6cm、幅0.66ー0.4cm、厚0.4ー0.43cm、先端欠
〃-79	〃-14-混貝	〃	長17.2cm、幅0.8ー0.62cm、厚0.6cm、先端
〃-80	B-Ⅲ-土層	骨篦状	長15.3cm、幅1.6ー0.8cm、厚0.9ー0.6cm
80-81	表　　採	骨匕	長16.2cm、幅3.15ー2.04cm、厚0.9ー0.98cm、先端欠
〃-82	A-4-貝層中	〃	長11.1cm、幅2.4ー2.1cm、厚1.04ー0.8cm、先端欠
〃-83	〃　〃　〃	〃	長10.73cm、幅1.6ー1.1cm、厚1.02ー0.9cm、先端欠、未製品か、細身
〃-84	B－Ⅱ－4混	篦状骨器	長8.62cm、幅1.8cm、厚0.7cm、完形
〃-85	A-1-1貝下	〃	長4.67cm、幅1.3cm、厚0.4cm、完形、擦痕整形
〃-86	〃-12-貝層	〃	長4.53cm、幅1.5cm、厚0.4cm、完形、
〃-87	〃-3-2貝上	〃	長4.0cm、幅1.05cm、厚0.2cm、完形、板状
〃-88	〃-8-1貝下	骨針?	長8.1cm、幅1.9ー0.7cm、厚1.12cm、先端欠、上貫通孔
〃-89	〃-7-混貝黒土	〃	長6.2cm、幅1.07ー0.82cm、厚0.4cm、先端欠、上貫通孔、
〃-90	〃－4－混貝	垂飾品	長7.1cm、幅2.2ー1.0cm、厚0.7cm、先端部欠、上端も欠
〃-91	〃-1-1貝下	〃	長2.3cm、幅0.89cm、厚0.8cm、完形、鳥骨製
〃-92	B－Ⅰ－2貝	〃	長8.72cm、幅1.7ー0.5cm、厚1.0cm、上欠、螺旋状刻み、上貫通孔
〃-93	A－9－混土	〃	長5.8cm、幅3.4cm、厚3.42ー1.1cm、上貫通孔、鹿骨製
〃-94	〃-13-	〃	長8.5cm、幅2.5ー1.8cm、厚1.6cm、先端欠、上貫通孔、鹿角製
〃-95	〃－9－2貝	〃	長3.86cm、幅4.2cm、厚1.2ー0.4cm、完形、トラフグ上顎歯骨製、上貫通孔
80-96	A－4－混土	垂飾品	長1.52cm、幅3.65cm、厚0.4cm、両端切断、キツネ下顎骨製、顎下部に抉り
81-97	〃－3－1貝	〃	長3.2cm、幅1.12cm、厚1.1cm、鳥骨製、螺旋状刻線
〃-98	C － 拡	〃	長4.8cm、幅1.0ー0.45cm、厚0.35cm、針状形態、上下に貫通孔
〃-99	A-13-混貝	篦状骨器	長19.5cm、幅2.82ー2.0cm、厚0.7ー0.65cm、上部左右に貫通孔、全体扁平篦状、鯨骨製
〃-100	B－Ⅲ－3混	骨刀	長42.4cm、幅3.85ー3.3cm、厚2.6ー2.1cm、反り握り部分太く、下部凹部、握り端鍵状突出、鯨骨製
〃-101	A－3－1貝	刺突具	長10.66cm、幅1.05ー0.52cm、厚0.5cm
〃-102	B－Ⅲ－2貝	叉状鹿角	長13.5cm、幅5.45cm、厚1.3ー0.9cm、基部に擦痕の切断
〃-103	〃　〃-3混	〃	長22.7cm、幅4.7cm、厚2.4ー1.3cm、基部に擦痕の切断
〃-104	A-11-混貝	鹿角半裁	長7.1cm、幅3.5cm、厚1.7cm、両端擦痕切断
〃-105	B－Ⅱ－4混	〃	長8.0cm、幅3.4cm、厚1.9cm、〃
82-106	A－15－2貝	鹿角	長11.0cm、幅7.4cm、厚3.05cm、叉状部分、刻線途中まで、下擦痕の切断
〃-107	〃－1－	〃	長12.7cm、幅2.2ー0.7cm、厚1.03、擦痕
〃-108	〃－2－貝層	〃	長5.55cm、幅1.7ー1.1cm、厚1.4cm、両端切断痕、
〃-109	〃　〃－黒土	〃	長7.02cm、幅1.9cm、厚0.9cm、両端切断痕、半裁
〃-110	〃－8－貝層	〃	長5.7cm、幅2.2ー1.9cm、厚1.0cm、両端切断
〃-111	〃-10-混貝	〃	長5.9cm、幅1.52ー0.9cm、厚1.2cm、両端切断痕
〃-112	〃-1-1貝下	〃	長2.8cm、幅1.0ー0.56cm、厚0.9cm、下端切断痕
〃-113	〃－表土	〃	長5.2cm、幅2.58ー0.5cm、厚0.6cm、下端切断痕
〃-114	〃-2-貝層下	〃	長7.9cm、幅1.56ー0.52cm、厚0.85cm、下端切断痕
〃-115	〃-3-1貝下	〃	長4.42cm、幅1.4ー0.8cm、厚1.03cm、下端切断痕
〃-116	〃－9－混土	〃	長4.9cm、幅1.06ー0.4cm、厚1.0cm、下端基部斜め削り、切断痕

図版番号	出土地区	種別	特　　徴	図版番号	出土地区	種別	特　　徴　31
82-117	A-14-	鹿角	長7.9cm、幅1.5一0.6cm、厚1.0cm、下端切断痕	84-13	A-11-混貝	魚骨-鰓蓋骨	縦4.0cm、横3.7cm、左右・下端欠、表裏中央部に押圧痕、L
〃-118	〃-2-1貝	〃	長8.4cm、幅1.8一1.2cm、厚1.5cm、両端切断痕	〃-14	〃-9-貝層	〃	縦4.0cm、横3.4cm、左右・下端欠、表上部に押圧痕、L
〃-119	〃-3-1貝下	〃	長7.7cm、幅2.1一1.2cm、厚1.3cm、下端切断痕4分1割り	〃-1	B-Ⅱ-2貝	貝製品-貝輪	長0.8cm、幅6.7cm、厚0.7cm、ｻﾙﾎﾞｰ
〃-120	B-Ⅱ-2土	〃	長6.2cm、幅2.22一1.45cm、厚0.8一0.6cm、下端切断痕、タテ割り、扁平	〃-2	〃　〃　〃	〃	長0.6cm、幅6.7cm、厚0.8cm、〃
〃-121	A-1-表土	〃	長5.2cm、幅2.0一1.5cm、厚0.6cm、タテ割り、扁平	〃-3	〃-Ⅲ-3混	〃	長0.5cm、幅4.6cm、厚0.3cm、〃
〃-122	〃-4-混貝	〃	長6.2cm、幅1.1一0.88cm、厚0.8cm、下端打痕、タテ割り	〃-4	〃　〃-2貝	〃	長0.6cm、幅6.7cm、厚0.5cm、〃
〃-123	B-Ⅰ-2土	〃	長5.5cm、幅1.2一1.0cm、厚0.53cm、下端打痕、タテ割り、扁平	〃-5	A-13-混貝	〃	長1.3cm、幅5.5cm、厚0.5一0.1cm、〃？
〃-124	A-12-貝層	〃	長5.44cm、幅1.7一0.96cm、厚1.26cm、両端切断痕	〃-6	〃-8-土層	〃	長5.4cm、幅8.7cm、厚0.65一0.4cm、下部欠、イタボガキ
〃-125	〃-4-貝層	〃	長8.12cm、幅1.7一1.0cm、厚1.06cm、下端切断痕	〃-7	〃-4-貝	〃	長4.9cm、幅6.2cm、厚0.5一0.2cm、下部欠、イタボガキ
83-1	B-Ⅲ-4混	魚骨-鰓蓋骨	縦5.5cm、横6.3cm、完形に近いが先端・右端欠、上に刺突痕、R(カミ)	〃-8	〃-8-混土	〃	長5.7cm、幅5.8cm、厚0.4一0.35cm、上部欠、イタボガキ
〃-2	A-8-混貝	〃	縦3.6cm、横3.5cm、先端・右端欠、やや右より押圧痕、R	〃-9	B-Ⅲ-2混	〃	長6.9cm、幅7.1cm、厚0.9一0.7cm、上部欠、イタボガキ
〃-3	〃-1-	〃	縦4.35cm、横3.7cm、〃、中心部に押圧痕、R	85-10	A-14-2貝	〃	長12.0cm、幅10.4cm、厚1.3一0.6cm、未製品、イタボガキ
〃-4	〃-10-貝層	〃	縦5.8cm、横4.9cm、完形に近い、先・右端欠、やや中央部に押圧痕、R	〃-11	〃-1-1貝下	〃	長7.2cm、幅6.9cm、厚0.5一0.16cm、未製品、イタボガキ
〃-5	B-Ⅲ-土	〃	縦3.6cm、横3.4cm、先・右端欠、上部刺突痕、R	〃-12	〃　〃　〃	〃	長7.2cm、幅6.7cm、厚0.4一0.3cm、未製品、イタボガキ
〃-6	A-2-混貝	〃	縦4.8cm、横4.9cm、両端・下端欠、上左より刺突痕、R(カミ)	〃-13	B-Ⅲ-2混	〃	長7.4cm、幅2.4cm、厚0.9一0.2cm、左側欠、イタボガキ
〃-7	〃-7-混貝	〃	縦2.25cm、横2.8cm、両・下端欠、上右より刺突痕、R(カミ)	〃-14	B-Ⅲ-2混	〃	長8.8cm、幅6.0cm、厚0.6一0.3cm、右側欠、イタボガキ
〃-8	D-	〃	縦3.8cm、横3.43cm、先・左端欠、中央上部に多数の押圧痕、L	〃-15	〃　〃　〃	〃	長8.6cm、幅6.3一5.3cm、厚0.4一0.2cm、左端欠損、未製品、イタボガキ
〃-9	表　　採	〃	縦6.1cm、横6.7cm、右・下端欠、中央上部に多数の押圧痕、L	〃-16	A-1-黒土	〃	長5.0cm、幅6.1cm、厚1.0一0.27cm、下部欠損、イタボガキ
〃-10	B-Ⅲ-4混	〃	縦3.7cm、横3.6cm、左・下端欠、中央やや左よりに刺突、(カミ)L	〃-17	B-Ⅲ-2混	〃	長7.4cm、幅2.4cm、厚0.9一0.2cm、上部と左側欠損、イタボガキ
〃-11	A-2-	〃	縦4.8cm、横3.4cm、左右・下端欠、裏面上部に刺突、(カミ)L	〃-18	〃　〃　〃	〃	長8.6cm、幅6.0cm、厚0.6一0.3cm、上部と右側欠損、イタボガキ
84-12	〃-8-貝層	〃	縦4.9cm、横4.1cm、左・下端欠、表中央上部に刺突痕、裏上部に刺突痕、L	86-19	〃　〃　〃	〃	長8.1cm、幅6.0cm、厚0.3一0.2cm、左側欠損、イタボガキ

図版番号	出土地区	種別	特　　徴	図版番号	出土地区	種別	特　　徴　32
86-20	A-1-黒土	貝製品-貝輪	長5.8cm、幅5.1cm、厚0.75ー0.33cm、上部と右側欠損、イタボガキ				
〃-21	〃-14-2貝	〃	長6.4cm、幅7.4cm、厚0.6ー0.36cm、上部と左側欠損、イタボガキ				
〃-22	B-Ⅲ-2混	〃	長7.0cm、幅5.9cm、厚0.5ー0.1cm、左下端欠損、イタボガキ				
〃-23	A-11-土層	〃	長7.6cm、幅6.6cm、厚0.8ー0.5cm、左側下端欠損、イタボガキ				
〃-24	B-Ⅲ-1混	〃	長8.5cm、幅4.1cm、厚0.9ー0.2cm、左側欠、イタボガキ				
〃-25	A-13-貝	〃	長7.0cm、幅4.9cm、厚0.85ー0.2cm、左側と下端欠損、イタボガキ				
〃-26	〃-11-貝	〃	長6.4cm、幅4.2cm、厚0.3ー0.12cm、上部と左側欠損、イタボガキ				

貝塚遠景(東から)▶

調査風景(13～15区)▶



▲ 土器の出土状況(13～15区)

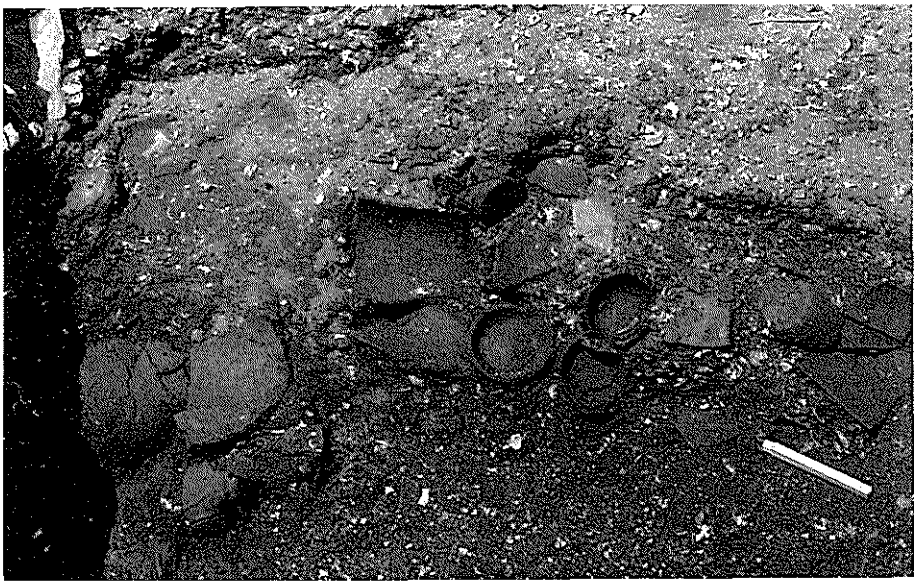
トレンチ北側
◀ 土器出土状況
（15区2貝層）

◀ 土器出土状況
（10～12区）

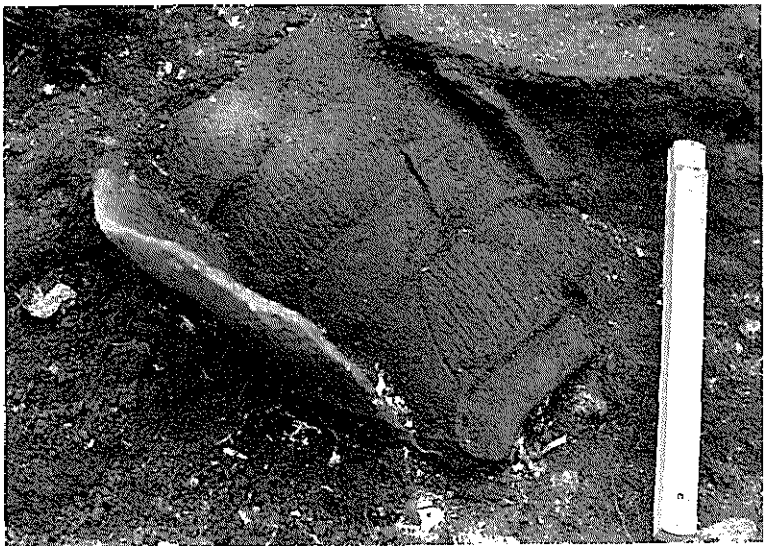
◀ 土器出土状況

▲ B-B-1混 土偶出土

土器の出土状況（10～12区）▶



土器出土状況 ▶
（13区）

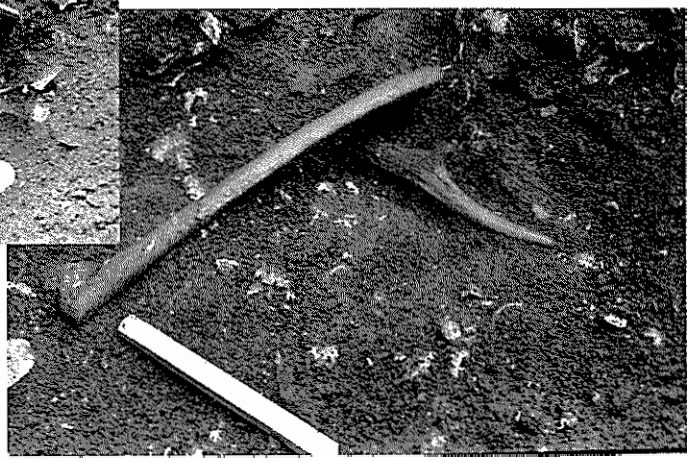


14-2貝出土土器 ▶

◀ 1号人骨 出土状況
（Aトレ・11区）

◀ 2号人骨出土状況（C拡張部）

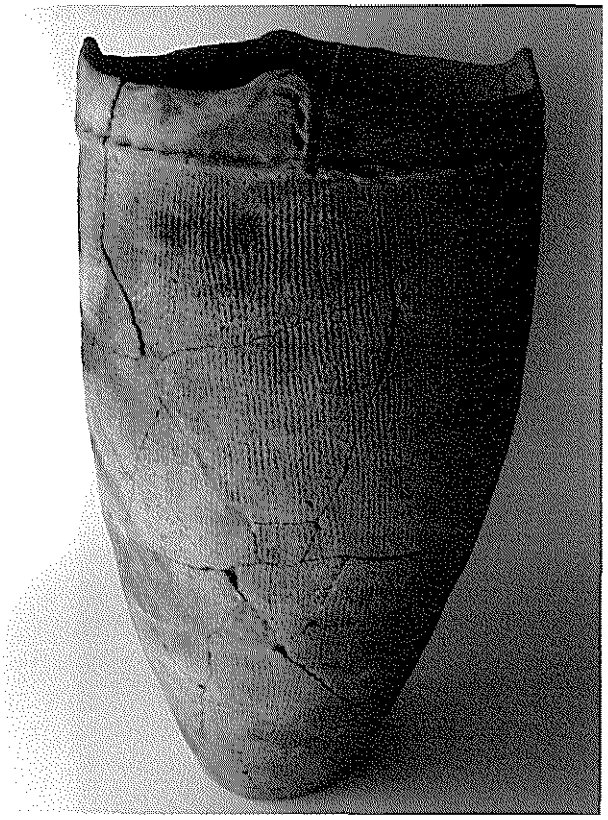
▲ Bトレ土器出土状況



B-3-3混出土 ▶
骨刀（42.4cm）

B-2-2土出土 ▶
釣針(長6.6cm)

▼ 14-2貝出土土器(口径34.8,器高36cm)



11-貝下出土(口径30.8,器高63.2cm) ▶

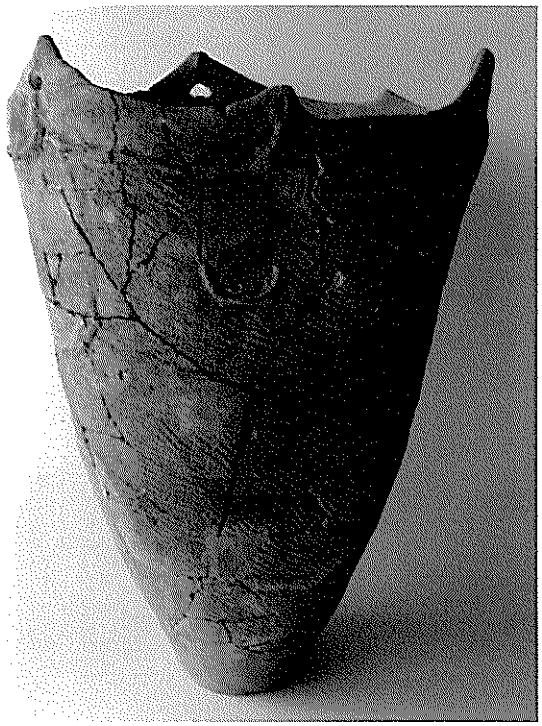
◀ 12-混貝出土(口径27.6,器高46.8cm)

▲ 15-2貝出土(口径20.4,器高17.5cm)

▲ 15-2貝出土(現高28.0cm)

▲ 13-2貝出土(口径22.6,器高32.5cm)

▲ 4-2貝出土(現高18.5cm)



▲ 12-混土出土(現高34.8cm)

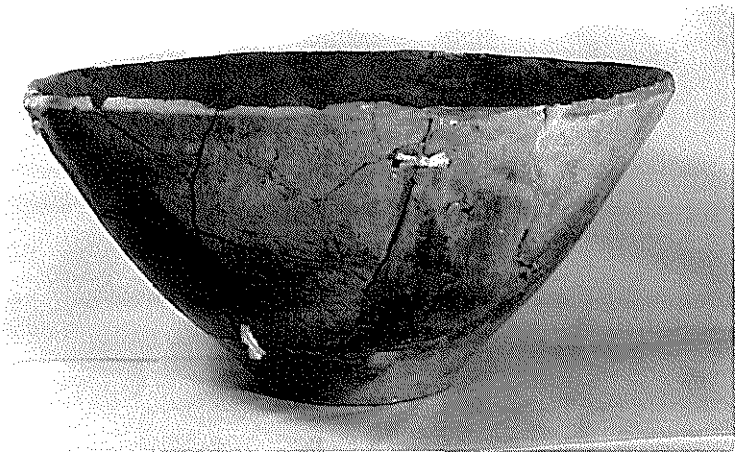
▲ 12-混土出土(口径18.5,器高21.0cm)

◀ 11-混貝出土
(器高20.5cm)

◀ 13-2貝出土
(器高16.0cm)

▲ Bトレ3混出土(口径27.8,器高29.8～25.0cm)

▲ Bトレ4混出土(器高16.8cm)



▲ Bトレ2貝出土(推口43.4,器高21.1cm)

報告書抄録

ふりがな	にしのはまかいづか
書名	西の浜貝塚
副書名	
シリーズ名	松島町文化財調査報告書
シリーズ番号	第1集
編著者名	後藤　勝彦
編集機関	宮城県宮城郡松島町教育委員会
所在地	〒981-0215　宮城県宮城郡松島町高城字町10番地
発行年月日	西暦2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くにしせき 国史跡 にしのはまかいづか 西の浜貝塚	みやぎけん 宮城県 みやぎぐん 宮城郡 まつしままち 松島町 いそざき 磯崎字 にしのはま 西の浜	17	2	38度22分52秒	141度4分56秒	1966.08.12 ～ 1966.08.26	１９９㎡	住宅地の開発計画に係る調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西の浜貝塚	貝塚 製塩	縄文前～晩・弥生・古墳・平安	埋葬人骨	縄文土器、土偶等土製品、石製品、骨角製品、自然遺物、埋葬人骨	

要約	国史跡　西の浜貝塚の昭和41年8月12日から8月26日まで行われた発掘調査の調査報告書である。ABCDトレンチを設定し、縄文土器、土偶等土製品、石製品、骨角製品、自然遺物、埋葬人骨等が出土している。